

かいぼら
氷上郡柏原町所在

—丹波の森公苑整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

三原遺跡・畑田遺跡



2004年3月

兵庫県教育委員会

かいぼら
氷上郡柏原町所在

—丹波の森公苑整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

三原遺跡・畑田遺跡



2004年3月

兵庫県教育委員会



柏原町中心街遠景
(北西から・平成6年撮影)



三原・畑田遺跡遠景 1
(北から・平成6年撮影)



三原・畑田遺跡遠景 2
(北から・平成7年撮影)



三原遺跡全景 1
(北から・平成 6 年撮影)



三原遺跡全景 2
(南から・平成 6 年撮影)



三原遺跡全景 3
(南から・平成 7 年撮影)



三原遺跡A地区全景
(東から)



三原遺跡B地区全景1
(北から)



三原遺跡B地区全景2
(西から)



三原遺跡 A-2 地区全景
(西から)



三原遺跡 E 地区全景 1
(北西から)



三原遺跡 E 地区全景 2
(南から)



畑田遺跡遠景
(東から・平成7年撮影)



畑田遺跡近景
(北から)



畑田遺跡全景
(南西から)



三原遺跡A地区SK-1
出土土器集合写真



三原1号墳出土土器
集合写真



三原1号墳出土玉類

例 言

1. 本書は兵庫県永土郡柏原町柏原に所在する三原（みはら）遺跡および畑田（はたけだ）遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査は丹波の森公園整備事業に伴い、平成5～7年度にわたって実施した。
2. 発掘調査は兵庫県土地開発公社、整理作業は兵庫県県民政策部（県民生活部）の委託を受け、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 本発掘調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の植定淳介・岸本一宏・山下史朗・山田清朝・三原慎吾・矢野（高井）治巳・岡 昌秀・池田征弘・松岡千寿・高木芳史が担当した。
4. 本発掘調査にあたっては、兵庫県教育委員会と株式会社新井組が工事請負契約を締結して実施した。
5. 本書で使用した写真のうち、遺構写真は調査担当者が撮影したものであるが、遺跡の航空写真のうち、平成6年度分は日本工事測量株式会社、平成7年度分はアジア航運株式会社、平成15年度撮影の遺物写真はイーストマン株式会社にそれぞれ委託して撮影したものである。
6. 本書の編集は、八木和子・高山留里の補助を得て岸本が行なった。執筆は主として調査担当者が行ない、分担については目次に記した。ただし、第3章第1・3～5節の「遺物」および「小結」は池田、「遺構」は松岡が執筆し、第3章第10節のうち「遺構」は高木（現：須磨友が丘高校教諭）、その他は岸本が執筆した。
7. 本報告で使用した遺物・写真・図面は、すべて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および魚住分館で保管している。
8. 三原遺跡E地区現地調査の際、竈について杉井 健氏に御教示をいただいた。また、調査報告書作成に際し、徳原多喜雄氏に資料収集の御協力をいただいた。記して謝意を表する。

凡 例

1. 本書に使用した方位は第V系国土座標を基準とし、水準は東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。また、各遺構図の方位は座標北をさす。
2. 遺構の名称は、竈・住居跡をSH、掘立柱建物跡をSB、楯列・塀をSA、土塚（土坑）をSK、井戸をSE、墓・不明遺構をSX、溝・河道状遺構をSD、流路状遺構をSR、柱穴をPと略称している。
3. 遺跡の土層色調名および遺物の色調名は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修）によるものである。また、土層堆積物の粒度区分については『新版地学ハンドブック』（大久保雅弘・藤田至則編著、築地書館株式会社発行）にもとづき、調査担当者が触感により経験的に判断したものである。
4. 遺物実測図については、須臾器の断面は黒塗りにし、陶器は砂目、瓦器は網掛け、木製品の断面内の線は年輪をあらわす。土師器・金属器・石製品・玉類の断面は白抜きにしている。
5. 遺物番号は本文・図版・写真図版とも一致し、土器類は通し番号のみ、金属器はF、木製品はW、玉類はJ、石製品はSを冠しそれぞれ通し番号としている。

本文目次

第1章 調査の経過と概要

第1節 発掘調査

1. 分布調査 _____ 池田 (1)

2. 確認調査

①平成5年度の調査 _____ 池田 (1)

②平成6年度の調査 _____ 池田 (1)

3. 本発掘調査

①平成6年度の調査 _____ 池田 (2)

②平成7年度の調査 _____ 岸本 (4)

第2節 整理作業 _____ 岸本 (6)

第2章 遺跡をめぐる環境

第1節 地理的環境 _____ 岸本 (7)

第2節 歴史的環境 _____ 岸本 (8)

第3章 調査の結果

第1節 A地区の遺構と遺物 _____ 松岡・池田 (14)

第2節 A-2地区の遺構と遺物 _____ 岸本 (16)

第3節 B地区の遺構と遺物 _____ 松岡・池田 (21)

第4節 C地区の遺構と遺物 _____ 松岡・池田 (26)

第5節 D地区の遺構と遺物 _____ 松岡・池田 (27)

第6節 D-2地区の遺構と遺物 _____ 池田 (28)

第7節 E地区の遺構と遺物 _____ 岸本 (30)

第8節 E-2地区の遺構と遺物 _____ 池田 (45)

第9節 F地区の遺構と遺物 _____ 池田 (46)

第10節 畑田遺跡の遺構と遺物 _____ 高木・岸本 (47)

第4章 まとめ

第1節 三原遺跡E地区堅穴住居跡の検討 _____ 岸本 (50)

第2節 三原遺跡の変遷 _____ 岸本 (52)

巻頭写真図版目次

巻頭図版 1 上	柏原町中心街遠景（北西から・平成 6 年撮影）	巻頭図版 4 上	三原遺跡 A - 2 地区全景（西から）
中	三原・畑田遺跡遠景 1（北から・平成 6 年撮影）	中	三原遺跡 E 地区全景 1（北西から）
下	三原・畑田遺跡遠景 2（北から・平成 7 年撮影）	下	三原遺跡 E 地区全景 2（南から）
巻頭図版 2 上	三原遺跡全景 1（北から・平成 6 年撮影）	巻頭図版 5 上	畑田遺跡遠景（東から・平成 7 年撮影）
中	三原遺跡全景 2（南から・平成 6 年撮影）	中	畑田遺跡近景（北から）
下	三原遺跡全景 3（南から・平成 7 年撮影）	下	畑田遺跡全景（南西から）
巻頭図版 3 上	三原遺跡 A 地区全景（東から）	巻頭図版 6 上	三原遺跡 A 地区 SK - 1 出土土器集合写真
中	三原遺跡 B 地区全景 1（北から）	中	三原 1 号墳出土土器集合写真
下	三原遺跡 B 地区全景 2（西から）	下	三原 1 号墳出土玉類

挿 図 目 次

第 1 図	畑田遺跡確認調査グリッド配置および全面調査範囲図	5
第 2 図	柏原町域の遺跡	9
第 3 図	三原古墳群の分布調査結果	11
第 4 図	E 地区北西銅壁土層断面模式図	30
第 5 図	E - 2 地区 SK - 1 出土骨	45
第 6 図	三原遺跡 E 地区竪穴住居跡分布図	51
第 7 図	三原遺跡の変遷	53

表 目 次

第 1 表	確認調査一覧表	3
第 2 表	柏原町域の遺跡名表	10
第 3 表	A 地区 SK - 1 出土土器の口縁部個体度数	15

図 版 目 次

三原・畑田遺跡			
図版 1	遺跡周辺地形図（嵐場整備前）	図版 2	事業計画線および本発掘調査箇所

三原遺跡

図版3 旧地形復元図

図版4 確認調査位置図（地形図は開場整備後）

図版5 本発掘調査区位置図（地形図は開場整備前）

図版6 確認調査平面図1

三原遺跡 A地区

図版12 A地区全体・断面図

三原遺跡 A-2地区

図版13 A-2地区全体図

図版14 SD-1・SX-1平面・断面図

三原遺跡 B地区

図版17 B地区全体平面図

図版18 1号墳墳丘平面・土層断面図

図版19 1号墳石室内埋土土層断面図

図版20 1号墳石室実測図

図版21 1号墳石室内遺物出土状況図

三原遺跡 C・D地区

図版26 C地区全体平面図

図版27 SE-1実測図・D地区全体平面図

三原遺跡 D-2地区

図版29 D-2地区全体図・SD-1土層断面図

三原遺跡 E地区

図版30 E地区全体図

図版31 SH-1平面・断面図

図版32 SII-2平面・断面図

図版33 SII-3平面・断面図

図版34 SH-4平面・断面図

図版35 SH-5・6平面・断面図

図版36 SH-7平面・断面図

図版37 SII-8平面・断面図

図版38 SH-9・13平面・断面図

図版39 SH-10平面・断面図

図版40 SII-11・12平面・断面図

図版41 SH-14平面・断面図

三原遺跡 E-2地区

図版54 E-2地区全体平面図

図版7 確認調査平面図2

図版8 確認調査平面図3（F地区含む）

図版9 確認調査平面図4（F地区含む）

図版10 確認調査平面図5（F地区含む）

図版11 確認調査上層断面図

図版15 SB-1・SE-1平面・断面図

図版16 SB-2平面・断面図

図版22 1号墳墳丘下堅穴住居跡位置図

図版23 堅穴住居跡（SH-1）平面・断面図

図版24 SB-1平面・断面図

図版25 SB-2平面・断面図

図版28 SH-1平面・断面図

図版42 SII-15平面・断面図

図版43 SH-16・17平面図

図版44 SH-16断面・SR-1内石組実測図

図版45 SK-1・6平面・断面図

図版46 SB-5平面・断面図

図版47 SB-6平面・断面図

図版48 SB-1・SA-1平面・断面図

図版49 SB-2平面・断面図

図版50 SB-3・SA-2平面・断面図

図版51 SB-4平面・断面図

図版52 SK-3平面・断面図

図版53 SD-1・5平面・断面図

畑田遺跡

図版55 畑田遺跡全体図

図版56 SA-1~3平面・断面図

三原遺跡 A・A-2地区

図版57 A地区柱穴・SK-1出土土器(1)

図版59 A-2地区出土土器(2)

図版58 A地区SK-1出土土器(2)、A-2地区出土土器(1)

三原遺跡 B地区

図版60 1号墳石室内・柱穴・土坑出土土器

図版63 1号墳石室内出土鉄器

図版61 1号墳墳丘周辺出土土器

図版64 1号墳石室内出土玉類

図版62 1号墳墳丘周辺・柱穴・土坑出土土器

三原遺跡 C地区

図版65 柱穴・SE-1出土遺物(1)

図版66 SE-1出土遺物(2)

三原遺跡 D・D-2地区

図版67 D地区SH-1・SD-1出土土器、D-2地区SK-1・SD-1出土土器(1)

図版68 D-2地区SD-1出土土器(2)

図版69 D-2地区SD-1出土木製品

三原遺跡 E地区

図版70 堅穴住居跡出土土器(1)

図版74 堅穴住居跡出土土器(4)、SR-1・土壘出土土器

図版71 堅穴住居跡出土土器(2)

図版75 掘立柱建物跡等・SK-3出土土器(1)

図版72 堅穴住居跡出土土器(3)

図版76 SK-3出土土器(2)・木製品

図版73 堅穴住居跡出土石製品

図版77 溝・柱穴出土土器

三原遺跡 E・E-2地区

図版78 E地区包含層、E-2地区SK-1等出土遺物

畑田遺跡

図版79 畑田遺跡出土遺物

写真図版目次

三原遺跡 A地区

- 写真図版1 ①北半部全景(西から)
②SK-1・2(西から)
③SK-2埋土土層断面(西から)

- 写真図版1 ④SK-1埋土土層断面(西から)
⑤SK-4埋土土層断面(南から)
⑥SK-3埋土土層断面(西から)

三原遺跡 A-2地区

- 写真図版2 ①全景(北から)
②全景(南から)
③SD-1埋土土層断面(南から)

写真図版3 ③SB-2全景(東から)

写真図版4 ①SX-1全景(西から)

- 写真図版3 ①SB-1全景(北から)
②SE-1全景(南東から)

②SX-1全景(北から)

③SD-1内の掘状遺構(南から)

三原遺跡 B地区

写真図版5 ①全景1(東から)

②全景2(拡大・東から)

- 写真図版 5** ③SB-1・2 (西から)
- 写真図版 6** ①1号墳石室全景 (北上から)
②1号墳石室全景 (東上から)
③1号墳石室全景 (南から)
- 写真図版 7** ①1号墳玄室内遺物出土状況(東から)
②1号墳玄室内遺物出土状況(西から)
③1号墳玄室内遺物出土状況(東から)
④1号墳玄室内遺物出土状況(東から)
⑤1号墳羨道内遺物出土状況(北から)
- 写真図版 8** ①1号墳石室 (北上から)
②1号墳石室全景 (北から)
③1号墳墳丘および石室 (北から)
- 三原遺跡 C地区**
- 写真図版13** ①全景 (南から)
②SE-1 (北から)
- 三原遺跡 D地区**
- 写真図版14** ①SH-1 (東から)
②SH-1 (東から)
- 三原遺跡 D-2地区**
- 写真図版15** ①全景 (東から)
②SB-1 (北から)
- 三原遺跡 E地区**
- 写真図版16** ①南東部全景 (西から)
②北西部全景 (南西から)
③南西部の遺構 (南西から)
- 写真図版17** ①北西半全景 (北東から)
②南東半全景 (北東から)
③南半全景 (東から)
- 写真図版18** ①SH-1・2、SK-1 (北東から)
②SH-1竈 (北東から)
③SH-3 (南東から)
- 写真図版19** ①SH-3遺物出土状況 (南東から)
②SH-3遺物出土細部 (南東から)
③SH-3竈 (南東から)
- 写真図版20** ①SH-4遺物出土状況 (北東から)
②SH-4遺物出土細部 (南東から)
③SH-4 (北東から)
- 写真図版21** ①SH-5・6 (北東から)
- 写真図版 9** ①1号墳全景 (北から)
②1号墳墳丘西半土層断面(北から)
③1号墳墳丘東半土層断面(北から)
- 写真図版10** ①1号墳玄室埋土土層断面(北から)
②1号墳石室東壁 (西から)
③1号墳石室西壁 (東から)
- 写真図版11** ①古墳下層の堅穴住居跡 (北から)
②1号墳(攪乱底の集積石) (東から)
③1号墳墳丘東側上層断面(北から)
- 写真図版12** ①1号墳墳丘西側土層断面(南から)
②1号墳墳丘南側土層断面(東から)
③1号墳墳丘北側土層断面(東から)
- 写真図版13** ③SE-1埋土土層断面 (北から)
④SK-1埋土土層断面 (北から)
- 写真図版14** ③SH-1 (東から)
- 写真図版15** ③SD-1埋土土層断面(南西から)
- 写真図版21** ②SH-8・16 (東から)
③SH-8埋土土層断面(南東から)
- 写真図版22** ①SH-8竈検出状況 (南東から)
②SH-8竈 (南東から)
③SH-10 (北西から)
- 写真図版23** ①SH-11・12 (南東から)
②SH-11竈焚口補強石(南東から)
③SH-11竈内遺物出土状況 (南東から)
- 写真図版24** ①SH-11竈 (南東から)
②SH-11下層竈 (南東から)
③SH-13付近 (北東から)
- 写真図版25** ①SH-14・15、SB-4・6 (北から)
②SH-14竈 (北から)
③SH-16・17 (北西から)

- 写真図版26 ①SB-1、SA-1（北から）
②SB-2（北から）
③南西部遺構群（北東から）
- 写真図版27 ①SR-1石組（南東から）
②SR-1東岸土器出土状況（西から）
③SR-1石組断面（北西から）
④SD-1土器出土状況（東から）
- 写真図版28 ①SK-3上層礫出土状況（北から）
②SK-3断ち割り断面（北から）
③SK-3木製品出土状況（北東から）
- 写真図版29 ①SH-1竈内下層土器出土状況（北東から）
②SH-6南西主柱穴内土器出土状況（北から）
③SII-11竈焚口補強石（南東から）
④SB-6内p3柱根（西から）
⑤P-1025土器出土状況（南から）
⑥P-16土器出土状況（北西から）
⑦調査状況（北から）
⑧積雪状況（北から）
- 畑田遺跡**
- 写真図版30 ①全景1（南東から）
②全景2（北西から）
③中央部（北西から）
- 写真図版31 ①SA-2・3（北東から）
②SA-3付近（北西から）
③柱穴群南部（南東から）
- 三原遺跡・畑田遺跡**
- 写真図版32 ①A-2地区調査前全景（北西から）
②A-2地区SB-2内P-12断ち割り断面（南西から）
③A-2地区SE-2（北西から）
④A-2地区SD-1土器出土状況（北から）
⑤畑田遺跡調査前全景（南西から）
- 写真図版32 ⑥畑田遺跡SA-3内P-205断ち割り断面（南西から）
⑦畑田遺跡SA-3内P-145断ち割り断面（北東から）
⑧畑田遺跡P-53土器出土状況（南東から）
- 三原遺跡 A地区**
- 写真図版33 SK-1出土土器（1）
- 写真図版34 SK-1出土土器（2）
- 三原遺跡 A-2地区**
- 写真図版35 SX-1・SD-1出土土器
- 写真図版36下 SB-2・包含層他出土土器
- 写真図版36上 SD-1出土土器
- 写真図版37 SB-2・包含層他出土土器
- 三原遺跡 B地区**
- 写真図版38 1号墳石室内出土土器
- 写真図版41 1号墳墳丘周辺出土土器（2）
- 写真図版39上 1号墳石室閉塞部分出土土器
- 写真図版42 1号墳墳丘周辺出土土器（3）、柱穴・土坑出土土器
- 下 SII-1・SK-5出土土器
- 写真図版40 1号墳墳丘周辺出土土器（1）
- 写真図版43 1号墳石室内出土土器
- 三原遺跡 C地区**
- 写真図版44 柱穴・SE-1出土遺物
- 三原遺跡 D・D-2地区**
- 写真図版45上 D地区SH-1・SD-1出土土器
- 写真図版46 D-2地区SD-1出土土器（2）
- 下 D-2地区SD-1出土土器（1）
- 写真図版47 D-2地区SD-1出土木製品

三原遺跡 E地区

- 写真図版48 SH-1~3出土土器
写真図版49 SH-4出土土器(1)
写真図版50 SH-4出土土器(2)
写真図版51上 SH-II-4~6出土土器
下 SH-8・9出土土器
写真図版52 SH-6~10出土土器
写真図版53 SH-11・14出土土器
写真図版54上 SH-10・11出土土器
下 SH-II-11出土土器
写真図版55上 SH-11出土竈筒強石
下 SH-11出土竈筒強石・支脚石
写真図版56上 SH-1・11・14出土石製品
下 SH-13・14・16・柱穴出土土器
写真図版57上 SH-16・SR-1出土土器

三原遺跡 E-2地区、畑田遺跡

- 写真図版65上 E-2地区SK-1出土遺物

畑田遺跡

- 写真図版66上 横列・柱穴・包含層出土土器
下 柱穴・包含層出土土器

- 写真図版57下 SR-1出土甕
写真図版58上 SR-1・SK-1出土土器(外面)
下 SR-1・SK-1出土土器(内面)
写真図版59 SR-1・SK-1・3出土土器
写真図版60 SK-3出土遺物
写真図版61上 SK-4・6・7・SB-2・3・
5・SA-2出土土器
下 SK-3出土土器
写真図版62上 SD-1・2出土土器
下 柱穴出土土器
写真図版63 SD-1・柱穴・包含層出土遺物
写真図版64上 包含層出土土器(1)
下 包含層出土土器(2)

- 下 畑田遺跡溝・柱穴・包含層出土土器

- 写真図版67上 柱穴・包含層等出土遺物
下 包含層出土遺物

第1章 調査の経過と概要

第1節 発掘調査

1. 分布調査

分布調査（遺跡調査番号920373）は計画対象範囲64.6haについて踏査を行なった。平成5年2月16日・17日、3月10日・30日に実施し、調査担当者は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所企画調整班池田正男、広野誠であった。

調査の結果、周囲の丘陵部に古墳および古墳状隆起（北中古墳群・三原古墳群・室谷古墳）を、三原池周辺で遺物の散布地を確認した。圃場整備が既に行なわれている田地部分については、埋蔵文化財の包蔵の有無を確認することができなかった。

2. 確認調査

①平成5年度の調査

分布調査で確認された散布地を中心として、調査区（2m×2mのグリッド）を24箇所設定した（遺跡調査番号930229）。遺跡のひろがりを確認するため田地部分にも一部調査区を設定した。調査は平成6年3月28・29日に実施し、調査担当者は企画調整班池田正男、調査第2班深江英恵・仁尾一人であった。

調査の結果、三原池北側の散布地では比較的ひろい範囲で遺構・遺物の存在を確認することができた。ただし、造成による地形の改変の大きい場所が多く、遺跡のひろがりをも十分にとらえることはできなかった。

②平成6年度の調査

前年度の調査では遺跡のひろがりをも十分にとらえることができなかったことから、田地部分を含む調査対象地全域に調査区を設定し、調査区の形状をグリッドから幅1mのトレンチに変更した。調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が担当し、5回に分けて行なわれた。25～54トレンチについては平成6年4月14日～20日に実施し、調査担当者は調査第3班山田清朝・高井治巳であった（遺跡調査番号940061）。55～82トレンチについては平成6年6月13日～17日に実施し、調査担当者は調査第3班山田清朝・高井治巳であった（遺跡調査番号940216）。83～102トレンチについては平成6年9月30日～10月13日に実施し、調査担当者は調査第3班山下史朗・松岡千寿・池田征弘であった（遺跡調査番号940275）。103～106トレンチについては平成6年10月19日～11月4日に実施し、調査担当者は調査第3班山下史朗（遺跡調査番号940276）。107～110トレンチ（調査時の坪№1～4を改称）については平成7年2月7日に実施し、調査担当者は調査第3班山下史朗であった（遺跡調査番号940312）。

調査の結果、予想どおり造成による削平部分が大きいものの、広範囲に遺構・遺物の存在を確認することができた。本来は谷の中の大部分が遺跡であったと考えられる。

A地区

西側に谷が入り、36・37トレンチで遺構が、29～31トレンチで包含層が確認された。

B地区

41トレンチで横穴式石室が確認された。B地区全面調査区の南側では溝が検出されたが、近現代の耕作痕と考えられる。また、この周辺では古墳時代～中世にかけての遺物が比較的多く出土していること

から、当該時期の遺跡が存在していた可能性が高いが、地形の変更が大きく遺跡のひろがりを確認することができなかった。

C地区

全体的に開平部分が大きく、遺構の存在を確認したのは50・51・87・88トレンチのみで、遺構の残存状況はよくない。全面調査にいたらなかった50・51トレンチ部分（図版6）はピットや土坑などの検出遺構の数が多く、比較的遺構が良好に残存しているようである。51トレンチで須恵器壺と土師器の破片が出土している。

D地区

97トレンチで旧河道と住居跡、63・64トレンチで旧河道と柱穴などを確認したのみである。

E地区

101・103～106トレンチで土坑・柱穴など数多くの遺構を確認した。

F地区

ほとんど本調査にいたらなかったが、多くの地点で遺構・遺物が検出されている（図版7～11）。特に南部の75トレンチ周辺で比較的遺構が多く検出され、66トレンチでは壑穴住居跡の周壁溝の可能性のある弧状の溝が検出されている。出土遺物は奈良時代の土器が多く、13・14世紀頃の中世の土器・陶磁器も含まれている。北部の70トレンチ以北では溝などがわずかに検出されるのみで、遺構の密度は薄いと考えられる。

3. 本発掘調査

①平成6年度の調査

平成6年度の本発掘調査はA地区、B地区、C地区、D地区、D-2地区、F地区の6箇所です事に
より掘削を受ける部分について実施した。A地区は研修棟駐車場、B地区はホール、C地区・D地区・
D-2地区は池、F地区は排水路の予定地である。調査は4回に分けて行ない、D-2地区より開始し、
A・B地区、C・D地区、F地区の順で行なった。調査は重機により表土を掘削し、ほぼその直下で遺
構面を検出した。B地区の一部を除けば、包含層が残存している場所はほとんど認められなかった。

A・B地区

調査は平成6年8月19日～10月28日に実施し、調査面積は2622m²であった。遺跡調査番号は940232で
ある。担当者は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所調査第3班山下史朗・松岡千寿・池田征弘であ
った。A地区より調査を開始し、B地区に調査を進めた。B地区は部分的ではあるが古墳の上下に遺構
が存在し、都合3面の遺構面が存在していた。最終的には墳丘の除去を行ない、石室掘形や墳丘下層の
遺構の検出に努めた。

C・D地区

調査は平成6年10月19日～11月4日に実施し、調査面積は1,403m²であった。遺跡調査番号は940276
である。担当者は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所調査第3班山下史朗であった。直前に行な
った確認調査（遺跡調査番号940275）に引き続いて調査を行ない、D地区はトレンチをひろげる形で調査
を行なった。

D-2地区

D-2地区は三原西遺跡として調査を行なったが、三原遺跡内の一部であることが明らかとなったこ

とから、今回三原遺跡D-2地区と改称した。

調査は平成6年7月6日～7月19日に実施し、調査面積は800㎡であった。遺跡調査番号は940219である。担当者は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所調査第3班山田清朝・三原慎吾・高井治巳であった。

F地区

調査は平成6年12月21日に実施し、調査面積は272㎡であった。遺跡調査番号は940312である。担当者は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所調査第3班山下史剛であった。

第1表 確認調査一覧表

番号	遺構	遺物	時期	備考	番号	遺構	遺物	時期	備考
1	なし	土師器	中世		56	なし	なし		
2	なし	なし			57	なし	なし		
3	なし	なし			58	なし	なし		
4	なし	なし			59	なし	なし		
5	谷状盛り込み	なし			60	柱穴	なし		F地区一部全面
6	井状盛り込み	なし			61	遺構	土師器		F地区一部全面
7	なし	なし			62	なし	なし		D-2地区本調査
8	なし	なし		B地区本調査	63	溝	なし		D-2地区本調査
9	竈	須恵器・土師器	中世	B地区本調査	64	溝・柱穴・貯河溝	なし		D-2地区本調査
10	ピット、埋蔵あり込み	須恵器・土師器	中世		65	なし	須恵器	奈良	
11	溝、包含層	須恵器	奈良・中世		66	貯蔵・溝・柱穴・竈	須恵器・陶器	奈良・中世	F地区一部全面
12	溝、包含層	須恵器	古墳後期・中世		67	溝	須恵器	古墳	F地区一部全面
13	溝	土師器	古墳		68	ピット・溝・貯河溝	なし		F地区一部全面
14	溝	須恵器・土師器			69	ピット	なし		F地区一部全面
15	ピット	須恵器・土師器	古墳		70	旧水路	須恵器	奈良・中世	F地区一部全面
16	なし	なし			71	ピット	須恵器		F地区一部全面
17	なし	須恵器・土師器			72	なし	なし		F地区一部全面
18	なし	なし			73	旧水路・谷	須恵器		F地区一部全面
19	溝	須恵器・陶器	古墳・中世		74	溝・旧水路・谷	須恵器・土師器	奈良	
20	なし	なし			75	ピット・溝	須恵器・土師器	奈良・中世	
21	なし	須恵器・土師器	中世		76	ピット	須恵器	奈良・中世	
22	なし	須恵器	古墳		77	ピット・溝	須恵器	奈良	
23	なし	須恵器・土師器			78	なし	なし		
24	なし	なし			79	ピット・谷	須恵器・土師器	奈良	
25	なし	なし			80	井	須恵器・土師器	奈良・中世	
26	なし	なし			81	井・貯河溝	なし		
27	なし	なし			82	井・貯河溝	なし		
28	なし	なし			83	なし	なし		
29	包含層	須恵器・土師器	奈良・中世	A-2地区本調査	84	なし	なし		
30	包含層	須恵器・土師器	奈良・中世	A-2地区本調査	85	なし	なし		
31	包含層	須恵器・土師器	奈良・中世	A-2地区本調査	86	なし	須恵器・土師器	奈良	
32	井	なし		A-2地区本調査	87	柱穴	須恵器	奈良・中世	C地区本調査
33	井	須恵器	奈良		88	溝・柱穴	須恵器	奈良・中世	C地区本調査
34	井	なし			89	なし	なし		
35	井	須恵器	奈良		90	なし	なし		
36	柱穴・谷・包含層	須恵器・土師器	奈良		91	なし	なし		
37	柱穴・谷・包含層	須恵器・土師器	奈良	A地区本調査	92	なし	なし		
38	谷	須恵器			93	なし	なし		
39	なし	須恵器	古墳後期・中世	B地区本調査	94	なし	なし		
40	溝	須恵器・土師器	古墳後期・中世		95	なし	なし		
41	溝状穴・柱穴・溝	須恵器・土師器	古墳後期・中世	D地区本調査	96	なし	なし		
42	なし	須恵器	古墳後期	D地区本調査	97	柱穴	須恵器	古墳～奈良	D地区本調査
43	溝	須恵器	古墳後期	F地区本調査	98	なし	なし		
44	溝	なし			99	なし	なし		
45	川	なし			100	なし	なし		
46	なし	須恵器	古墳		101	柱穴	須恵器・土師器	奈良・中世	F地区本調査
47	なし	須恵器	中世		102	なし	なし		
48	なし	なし			103	土坑・柱穴	土師器・陶器	古墳・中世	B地区本調査
49	なし	須恵器	古墳		104	柱穴	須恵器・土師器	奈良・古墳	B地区本調査
50	柱穴	なし			105	柱穴	なし		B地区本調査
51	柱穴	須恵器・土師器			106	土坑	須恵器	奈良	B地区本調査
52	なし	なし			107	なし	なし		
53	なし	なし			108	なし	なし		
54	土坑	須恵器	古墳	B地区本調査	109	なし	なし		
55	なし	なし			110	なし	なし		

②平成7年度の調査

三原遺跡・畑田遺跡の本発掘調査

平成7年度の本発掘調査は、三原遺跡のほかに畑田遺跡についても実施した。両遺跡とも、兵庫県土地開発公社からの依頼にもとづき、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が発掘調査を実施し、担当者は調査第2班の岸本一宏・高木芳史であった。

三原遺跡についてはA-2地区とE地区で、E地区については体育館建設予定地、畑田遺跡は丹波の森公園の駐車場および道路建設予定地にあたる。調査事務所が設定した遺跡調査番号は950231である。

調査は平成7年8月4日から平成8年1月31日まで実施し、A-2地区から調査に着手した。当初、三原遺跡に限って実施する予定であったが、9月に実施した畑田遺跡確認調査の結果協議にもとづき、急速調査を実施することとなった。調査はA-2地区→E地区の順で行う予定であったが、畑田遺跡の本調査については三原遺跡と併行して実施せざるを得なくなった。なお、畑田遺跡の確認調査結果については、本項末に概要を記載した。確認調査の担当者は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所調査第3班の山上雅弘・原部 寛であった。

三原遺跡A-2地区

三原遺跡A-2地区の機械による表土掘削は8月18日から実施し、10月6日に調査を終了した。調査面積は1,950㎡、機械掘削土量は841㎡、人力掘削土量は216㎡であった。

A-2地区は確認調査の結果どおり、遺構量が少なく圃場整備によってかなり削平を受けており、水田間の段差や溝・暗渠も存在した。検出した遺構は奈良～平安時代末と思われる小流路跡のほか、中世の掘立柱建物跡2棟・溝・土壌などであるが、小流路内には予想に反して古墳時代と思われる箱式石棺状の遺構が存在していた。なお、ヘリコプターによる航空写真撮影を平成7年9月30日に実施した。

三原遺跡E地区

E地区の本発掘調査は9月30日に着手し、航空写真撮影は平成8年1月18日に実施し、1月31日に調査を終了した。調査面積は2,487㎡、機械掘削土量は2,382㎡、人力掘削土量は463㎡であった。

E地区でも、A-2地区同様、遺構の密度は疎らで量も多くなく、すでに圃場整備によりかなり削平を受けていることが確認調査の結果から予想された。しかし、調査が進むにつれ、遺構密度が高く、数多くの竪穴住居跡が認められ、予想に反して遺構の残存状況は良好なものが多いことが判明し、調査の進行にあたっては多忙を極めた。重ねて、圃場整備時やそれ以前の水田区画溝や段差・暗渠が調査区内に多く存在し、また、遺構は古墳時代後期の竪穴住居跡のほかに、奈良時代の掘立柱建物跡・井戸・溝、その他柱穴が多数認められた。それらの遺構は一部を除き、同一面で検出できたため、人力による遺物包含層掘削は一回で終了し、複数面の調査は行っていない。ただし、遺物包含層は礫混じりの粘質土で、圃場整備の際の重機によると思われる加圧によってかなり硬く締まっていたため、掘削には難澁を強いられた。包含層掘削の後は遺構検出を行ない、検出した遺構については適宜上層観察用の畦を残しながら、人力による掘削を行なった。

畑田遺跡

畑田遺跡の本発掘調査は、機械掘削開始が平成7年9月28日で、調査は11月中旬に終了した。調査は三原遺跡と重複して実施したため担当者を分割し、畑田遺跡については主として高木芳史が調査を担当した。調査面積は516㎡、機械掘削土量は104㎡、人力掘削土量は127㎡であった。また、ヘリコプターによる航空写真撮影は平成7年11月14日に実施した。なお、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が設

定した、畑田遺跡の調査番号は950282である。

畑田遺跡は丹波の森公苑の進入路部分にあたり、平成7年9月に実施した確認調査の結果を受けて実施した本発掘調査である。県道を挟んだ北側は、氷上郡教育委員会が平成3・4年に調査を実施している。検出した遺構は室町時代（14・15世紀）の柱穴多数と溝・土壌などである。

以上、平成7年度調査の総面積は4,953㎡、機械掘削土量は3,327㎡、人力掘削土量は806㎡であった。

畑田遺跡の確認調査

畑田遺跡については、柏原町駅南用地整備事業が実施されることになったため、平成7年9月12日付兵上公第1332号の依頼により、確認調査を実施することとなった。

調査は平成7年9月18日から実施し、20日までの3日間を費やした。調査の方法は、2m四方の坪を20箇所、2×4mと2×8mのトレンチを各1箇所設けて実施した。掘削は重機を用いて行ない、人力によって面精査・断面清掃を実施した。

確認調査を実施した箇所は大きく3地区に分類される。それらは下記の3地区である。

- ① 北側道路沿いの地区で、坪1～5・7・8・19・21、トレンチ6・20の範囲
- ② 調査区中央の地区で、坪9～13および17・18・22の範囲
- ③ 調査区の南側、柏原川の川沿い周辺地区で、坪14～16の範囲

①地区は、氷上郡教育委員会が平成3・4年度に調査を実施した地区の南隣接地で、畑田遺跡の南の端にあたる。西側に柏原川が北流するが、遺跡はこの河川東側の微高地に位置する。微高地の北端は奥村川まで続いているが、南側については明確ではない。

調査の結果、当地点では遺構面と思われる黄色シルトないし褐色礫混じりシルトが北東から南西方向に緩やかに傾斜し、全域に遺物包含層がひろがっていることが判明した。

坪4・21、トレンチ6・20では、柱穴・溝・土壌などの遺構も見つかった。

②地区は①地区の南に隣接する地区であるが、黄色シルトないし褐色礫混じりシルトの堆積が部分的で薄く、遺物包含層の希薄な地点である。当地点周辺は微高地の傾斜面ないし柏原川の旧河川敷に近い部分と思われる。

遺物は近世遺物が若干出土した。

③地区では、耕作土直下から砂層ないし礫層とシルト層の互層が厚く堆積しており、表土1m前後からは湧水が激しかった。黄色シルトないし褐色礫混じりシルトの堆積は全くなく、遺物包含層も認められなかった。ただし、坪15には上流からの堆積物に混入したと思われる、磨滅した遺物が若干出土した。

以上の結果により、遺構・遺物ともに検出し、遺物包含層も認められた①地区について、本発掘調査が必要であるとの判断にいたった。



第1図 畑田遺跡確認調査グリッド
配置および全面調査範囲図

第2節 整理作業

三原遺跡・畑田遺跡の出土品整理作業は、平成14年度から2箇年にわたって、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。平成14年度の作業は、出土品の水洗い、ネーミング、接合・補強と、金属器以外の出土品についての実測・拓本および土器の一部について復元作業を行なった。平成15年度は、金属器の実測、前年度に引き続き土器の残り全部についての復元、出土品全般についての写真撮影、写真整理、図面補正、遺構・遺物のトレース、写真・図面などのレイアウトおよび木製品・金属器の保存処理の各作業を実施し、本報告書の印刷を行ない、刊行した。

各作業の内容は以下のとおりである。

出土時の土器・木器等には土・泥などが付着した状態であるため、それらを洗浄する作業が水洗いである。また、出土品の接合作業などの際には破片を混交させて作業を行なうため、接合作業終了後にも出土遺跡や出土遺構・出土位置および出土層位などを特定できないと、遺構の時期や性格などが判断できなくなる。そこで、それらを防ぐために、遺物が出土した遺構などの情報が特定できるよう、出土品の破片ごとに番号を記入する作業が必要である。また、別に台帳を作成しておき、その番号ごとに詳細な情報を記入しておくことによって、番号を照会すれば情報を取り出すことができる。このような作業がネーミングである。接合は、破片で出土した同じ個体の出土品を接着剤で接合する作業であるが、別々の場所から出土した破片が接合することもあり、その意味を考える際の重要な要素となる。また、すべてが完形品に接合できるわけではなく、ごく一部分しか接合できないために不安定な形になるものもある。これらを次の実測作業に耐える強度にするため、一部分をモルタルで補強する作業も必要となる。以上のような作業が接合・補強である。実測・拓本は、出土品の形・大きさ・紋様・製作手法などの特徴を観察して、図化・記録する作業であり、紋様などの特徴を拓本で表現することもある。復元作業は、実測まで終了した出土品の中から、完全な形に近いものや特徴的なものを選び出し、不足している部分をモルタルなどで充填したのち、元の形に復元する作業であり、次の写真撮影や展示などの関係から、補填した部分に絵の具を使って彩色する。写真撮影は出土品を横位置や真上から撮影し、形・質・特徴などを視覚として記録するための作業であり、専門業者に委託して実施している。また、出来上がった写真を公開・活用するために、ネガとプリントの1枚毎に番号を付けて、撮影内容を記した台帳を作成する写真整理がある。また、発掘時に作成した遺構図面を補正し、分割作成した図面をつなぎ合わせてトレース下図を作成する作業が図面補正で、遺構図や出土品実測図などを写写するのがトレース作業である。また、報告書印刷の前に写真やトレース図を配置し、印刷する上での指示を記入するなどの作業がレイアウトである。印刷した報告書は、調査成果の公開や学術資料として活用するために、図書館や都道府県・市町村教育委員会などに配布する。保存処理は、出土した木製品・金属器の劣化・腐敗などを防ぐために樹脂を含浸させる作業であり、三原遺跡出土の金属器の場合、錆落しも行なった。

なお、出土品整理作業の担当者は以下のとおりである。

職員	岸本 一宏	松岡 千寿	池田 征弘			
	深江 英憲 (作業進行担当)	中村 弘 (木製品保存処理担当)				
	岡本 一秀 (金属器保存処理担当)					
嘱託員	八木 和了	島田 留里	香川フジ子	西口 由紀	島村 順子	木村 淑子
	前田千栄子	鈴木まき子	中西 睦子	宮野 正子	早川 有紀	

第2章 遺跡をめぐる環境

第1節 地理的環境

遺跡は兵庫県水上郡柏原町に所在する。水上郡は兵庫県の中央東端部に位置し、山南町・柏原町・水上町・春日町・市島町・青垣町の6町からなる。現在の行政区画では、東は京都府と境を接するが、旧くは兵庫景隆山市、京都府の3市（亀岡・綾部・福知山）・3郡（天田・北桑田・船井）とともに旧丹波国に含まれ、また、西は朝来郡、南西は多可郡といった、旧但馬国、播磨国とも境を接している。

水上郡の西部は800～900m級、東半部は500～600m級の山々に囲まれ、西部には加古川（佐治川）が南流し、東部では竹田川が北流している。両河川の流域部は盆地状の地形をなし、水上低地（盆地）と呼ばれているが、この盆地を最も特徴づけているのは、水上町石生に存在する、標高わずか100m前後の谷中分水界である。この分水界を境に北は竹田川となり、京都府福知山市で由良川と合流し日本海に注ぎ、南は加古川（佐治川）となって瀬戸内海に注ぐ。この水上低地には明瞭な段丘面がなく、全体が沖積面で覆われ、高位面は地下に隠されている。これは、水上低地が豪雨時には溢水状態になりやすく、さらに堆積が続いたためと考えられている。

遺跡が所在する柏原町はこの水上低地の南東端に位置する。柏原町域の北西部は水上低地の一部を含んでいるが、南～東部は300～500m級の山々に囲まれ、柏原川を中心としてその小支流による開析谷が発達している。また、山塊裾部の開析谷には各所で扇状地が発達していることにより、きわめて複雑な地形を形成している。柏原川はその中心を南東から北西方向に流れ、水上低地へ流れ込んだ後、南流する加古川（佐治川）と鋭角に合流する。柏原川の上流は鐘ヶ坂や奥野々坂に源を発するが、鐘ヶ坂は篠山市とをつなぐ幹線道となっており、古代山陰道ルートと推定されている。

地質的には、この柏原川を挟んだ東岸と西岸で大きく異なる。東岸から北東側の広域では、中生代ジュラ紀（約2億年前）に形成された丹波帯地層群と呼ばれ、頁岩や砂岩類・砂岩類・チャート類・緑色岩類の地層群が北西～南東方向に縞状にのびる。一方、西岸のうち、下小倉～小南～拳田～水上町稲畑をつないだ線から北東側に張り出した山塊は、超丹波帯地層群と呼ばれ、粘板岩、頁岩、頁岩・砂岩互層、泥在岩の地層群に砂岩や砂岩優勢層が線状に入る。超丹波帯は丹波帯よりも古く、古生代ペルム期（約2億5千万年前）に形成され、これらが丹波帯地層群の上に衝上断層（スラスト）で乗り上げた構造を示す。さらに南西側の山塊は、有馬層群の玉瀬溶結凝灰岩と称され、中生代白亜紀新世（約1億年前）に形成された流紋岩質多結晶溶結凝灰岩や流紋岩で構成されている。なお、山塊南側には同じく有馬層群ではあるが、塊野溶結凝灰岩（平木溶結凝灰岩）と呼ばれ、上部に灰色～灰白色の黒雲母を含む流紋岩ガラス質結晶溶結凝灰岩層の北端部がのびている。この層は緻密堅硬で柱状節理や板状節理が発達するが、特に板状節理が強く発達し、赤褐色に風化して薄片状に割れやすい部分は、「丹波鉄平石」として柏原町石戸でかつて採掘されていた。

一方、谷部には部分的に砂礫および礫の堆積が1万年前以降の新生代第四紀完新世に形成され、柏原川流域の低地はそのまま水上低地に続き、砂礫・砂・シルト・粘土で構成される沖積層となっている。

畑田遺跡は扇状地形と思われる柏原町市街地の南西部、柏原川のすぐ東側に位置し、ここは柏原川が南西方向にやや迂回しているため、扇状地端と思われる。一方、三原遺跡は、畑田遺跡から柏原川を挟んだ南西側に位置し、通称「三原谷」と呼ばれる南北方向の小文谷北端の扇状地上に立地する。

第2節 歴史的環境

三原遺跡が所在する柏原町は水上低地の南東部を占め、数多くの遺跡が存在しているが、大半が古墳であり、また、遺跡も含めて詳細が明らかになったものは数少ない。

旧石器時代の遺跡は未発見のようであるが、縄紋時代の遺跡では、柏原の柏原川に面した丘陵上にある向山遺跡で縄紋時代中期の船元Ⅱ式の深鉢片が出土している。また、今回報告する三原遺跡では定角式の磨製石斧1点が出土した。

弥生時代中期後半の遺跡では、柏原の大井田遺跡で土器溜りを含む土壇9基のほか、自然流路が調査され、土器・木製品が出土している。遺跡は柏原川に程近く、集落跡と判断される。柏原町内ではほかにも中期の遺跡は未発見であるが、西側の水上町域の稲畑遺跡で遺構・遺物が検出されている。

弥生時代後期の遺跡は、柏原町東部大井田遺跡のすぐ西側、南多田・切戸遺跡で土器が収集されている。また、遺跡の南東、柏原川対岸の丘陵尾根上には向山遺跡が存在している。向山遺跡は弥生時代中期後半の木槨墓を主体とした墳墓群で、平成8年に調査された。墳墓は台状墓と称される形態で、尾根後線上を主として削り出しによって段状に加工し、墳丘としたもので、3基存在し、墳丘間を溝で区画したものもある。2号墓の区画内には土器棺1基、木棺3基の埋葬施設が検出され、木棺の墓壇埋土中や棺槽で甕・甕・高杯などの破砕土器供献が認められた。また、土器の一部には複合口縁部に擬凹線文が施され、但馬や丹波北部の影響を受けたと思われる土器も存在しているようである。このような形態の墳墓や墓壇内破砕土器供献の例は、但馬・丹波から丹波北部にかけて分布しており、向山墳墓群もそのつながりとしてとらえられるであろう。柏原町東部では他に弥生時代の遺跡は未発見であるが、西部では大新屋遺跡で弥生時代後期末～古墳時代初頭の径約7.5mの円形住居跡が2棟検出されており、北山・西地遺跡では平成10年の調査により弥生時代後期～古墳時代前期の土壘群が14基検出され、その形状や埋土の状況から粘土探掘の可能性があると考えられている。北山・西地遺跡土器には甕・甕・高杯のほか棒状の木片も見つかっており、付近に集落の存在を彷彿させ、大新屋遺跡が想定される。また、大新屋遺跡では古墳時代前期の土器溜りも検出されていることから、遺跡は古墳時代前期まで連続していることが窺える。

古墳時代前期の大規模な古墳は柏原町域では未発見であるが、すぐ北の水上町石生には直径約42mの親王塚古墳（親王塚北野1号墳）が存在する。明治年間に発掘され、内部主体は不明であるが、三角縁三神三獣鏡が出土した。1991年には墳丘の大部分が削平された。親王塚古墳の東側の丘陵斜面には約60基の親王塚北野古墳群が存在しているが、詳細な時期は不明である。その南側丘陵上では、銅鏃・鉄剣・鉄鏃を副葬した滝山箱式石棺が発見されており、棺内には40歳くらいの男性人骨が遺存していた。また、谷を挟んだ西側の丘陵尾根上には横田山箱式石棺があり、鉄剣・鍔・鏃を副葬した成年男子の人骨が遺存していた。また、ほかにも2基存在していたらしい。これらは古墳時代前～中期の所産と考えられる。

柏原町域では古墳は約200基存在しているが、内部主体は壘穴式石室・箱式石棺・木棺・横穴式石室とさまざまである。しかし、詳細に見ると横穴式石室以外のものは柏原川西部に集中するようである。これらの古墳には、西から、堂刈坂3号墳・山根2号墳・拳田古墳（拳田A1号墳）・清蔵谷古墳などが挙げられる。堂刈坂古墳群は標高約160m程度の丘陵尾根上に位置し、5基で構成されるようである。3号墳は1960年頃の送電線鉄塔工事により発見された。径15m程度の円墳らしく、甲冑・方格規矩鏡・勾玉・直刀2が出土したとされる。内部主体の構造は不明であるが、人骨が出土していることから、滝山・横



第2図 萩市域の遺跡

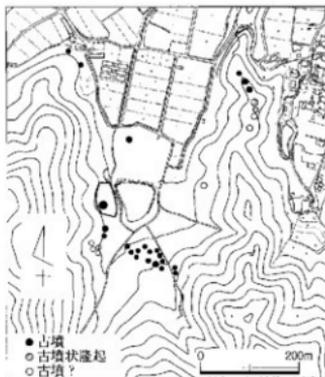
田山のように密閉度の高い箱式石棺が想定される。大新塚にある山根2号墳は丘陵南斜面に営まれた円墳で、割石と河原石を使用した、全長3.2m、幅53cm、高さ58cmの竪穴式石室で、副葬品には銀鍍・鉄剣・鉄斧があり、付近には勾玉や管玉を納めた箱式石棺も存在していたようである。また、一帯は横穴式石室を内部主体とする広義の大新屋古墳群である。挙田古墳は1972年に調査され、その後土取り工事によって消滅した。調査の結果、方形区画をもつ径10数mの円墳と考えられているが、円筒埴輪の配置や葺石との関係から、墳頂部端と墳裾に円筒埴輪を二重にめぐらせた前方後円墳の可能性も捨てきれないと思われる。埴輪は4段タガの円筒埴輪をはじめ、朝顔形埴輪、人物・動物形埴輪があり、須恵質のものが含まれる。内部主体は盗掘によると思われる擾乱のため全く遺存していなかったが、石材が認められないことから、木棺塚であったと推定されている。古墳の時期は出土須恵器から6世紀前半と思われる。装飾付須恵器も出土している。なお、前方後円墳と考えられているものは、挙田B古墳群とおさんの森古墳群で計2基存在しているようである。おさんの森古墳群では、前方後円墳と考えられている1号墳のほか、径30m以上的大型円墳とされる2号墳、径20m以上の円墳である3号墳を含め、5基の古墳が丘陵尾根稜線上に立地している。これらは後期前半までに築造された古墳群と考えられ、柏原町域では最大規模の古墳を含んでいる。一方、下町沖田集落の南東部尾根上には清藏谷古墳が存在する。平成5年に発掘調査が行なわれ、流紋岩の板石（鉄平石）を使用した内法長約2.2mの箱式石棺で、鉄刀・鉄鏃・鏡が出土し、古墳時代中期末～後期初頭と推測されている。また、山裾からは5世紀後半と考えられる円筒埴輪片が採集されている。なお、古墳南西側の清藏谷遺跡では、TK-23型式の須恵器を出土した方形竪穴住居跡1棟が調査されている。

以上述べた古墳以外には、山の端古墳群では丘陵稜線上に低墳丘の箱式石棺群が存在したという伝承があり、弁才天古墳群は丘陵尾根上でテラス状の外形を示すものもあることから、但馬や丹後、北丹波のボウ山古墳・墳墓群などにみられるような台状墓や階段状古墳の可能性も残しており、横穴式石室以外の埋葬施設を想定すべきであろう。したがって、古墳時代後期後半までは降らない時期が想定される。

以上のことから、柏原町域西部の古墳群のうち、丘陵上・尾根稜線上に立地する古墳は、副葬品の内容から、横穴式石室築造を遡る時期の所産と考えられ、それらには母坪古墳群（3基）、山の端古墳群、弁才天古墳群（5基）、萱刈坂古墳群（5基）、山根2号墳、挙田A古墳群（3基）、挙田B古墳群（2基）、おさんの森古墳群（5基）、清藏谷古墳の合計9群25基以上がある。一方、柏原川東岸では昭和池南古墳

1	葛原遺跡	17	大新屋遺跡	33	大塚神社古墳群	49	新町城跡	65	下小倉・馬場ノ辻遺跡
2	徳島城跡	18	人形塚古墳	34	新有地古墳群	50	徳田古墳群	66	下小倉・東中地遺跡
3	堀野城跡	19	池田徳古墳	35	新有地池古墳	51	見長遺跡	67	下小倉・短道寺
4	萱刈坂古墳群	20	挙田遺跡	36	船原・木町遺跡	52	見長1古墳群	68	下小倉古墳群
5	弁才天古墳群	21	挙田A古墳群	37	本町城跡	53	見長大塚神社古墳	69	大新谷北遺跡
6	北山・西地遺跡	22	挙田B古墳群	38	畑田遺跡	54	法蓮寺遺跡	70	金水塚寺
7	山の端古墳群	23	おさんの森古墳群	39	石田大塚神社古墳	55	法蓮寺古墳群	71	今石古墳
8	稲妻古墳群	24	神田古墳群	40	八幡山古墳	56	円成寺城跡	72	北中遺跡
9	高見城跡	25	清藏谷遺跡	41	八幡山城跡	57	円成寺古墳群	73	北中古墳群
10	東郷野城跡	26	清藏谷古塚	42	柏原高古墳	58	円成寺城跡	74	三原遺跡（二原西遺跡）
11	山の神城跡	27	小倉山城跡	43	桑の目古墳群	59	上小倉・藤原城跡	75	三原古墳群
12	山の神地古墳群	28	向山遺跡	44	美村城跡	60	1小倉古墳	76	室谷古墳群
13	ヒツ塚古墳群	29	南多田・切戸遺跡	45	東高古墳群	61	人形谷城跡		
14	山根古墳群	30	人形田遺跡	46	東高遺跡	62	中山古墳群		
15	大新屋門古墳	31	東多田古墳群	47	柏原藤原寺	63	大塚寺遺跡		
16	大新屋北古墳	32	明照寺古墳	48	智町城跡	64	下小倉・大塚寺遺跡		

第2表 柏原町域の遺跡名表（番号は第2図に対応）



第3図 三原古墳群の分布調査結果

約60基確認されている。なお、新井神社に滑石製子持勾玉が伝えられている。また、古墳群東側の拳田遺跡では古墳時代末頃の方形竪穴住居跡が園場整備に伴う調査で確認されている。西部地域南東寄りでは、神田古墳群（8基）が丘陵上および山腹・山麓に存在している。横穴式石室を内部主体とし、丘陵頂部に存在する5号墳からは径17.1cmの六獣形鏡が出土し、1号墳でも銅鏡が出土したとされる。また、付近の素白山と呼ばれる丘陵から、明治維新前に朱詰の人骨・刀剣などが出土したらしい。柏原川西岸南部の横穴式石室墳には三原古墳群を代表とする三原谷の古墳群が存在し、今回発見した1基も含めて少なくとも19基が認められる。

それに対して、柏原川東岸、南多田から下小倉にかけての山麓や谷中には多数の横穴式石室墳が築造されており、北から南多田西古墳群（2基）、明願寺古墳、大歳神社古墳群（15基）、昭和池古墳群（8基）、八幡山古墳、石田大歳神社古墳、柏原高校内古墳（2基）、藤の目古墳群（4基）、東奥古墳群（6基）、深田（新町）古墳群（5基）、見長上古墳群（3基）、見長大歳神社古墳、法蓮寺古墳群（16基）、今石古墳、下小倉古墳群（2基）、大部谷古墳群（3基以上）といった10群程度の古墳群と独立墳をあわせて約70基の横穴式石室墳が分布している。それまで古墳が希薄であった柏原川東岸地域に、大新屋古墳群に匹敵するとも劣らない数の古墳が築かれるようになり、古墳分布の中心が大新屋地域と柏原地域に分かれて集中するようになる。

横穴式石室墳のうち、調査が実施されたものはわずかであるため、その時期を限定することは非常に難しいが、今回報告の三原1号墳では石室内出土の須恵器はTK-217型式であるが、墳丘出土のものにはMT-85型式頃の須恵器も含んでいることから、6世紀後半には築造された可能性が考えられる。昭和46年に調査された東奥1号墳は、直径20mほどの円墳で、全長8.24mの無袖横穴式石室であった。出土須恵器から7世紀前半の築造と考えられる。昭和池8号墳も7世紀前半と考えられている。一方、全長13.5mという長大な横穴式石室墳である藤の目4号墳に次いで、全長10.6mの横穴式石室をもつ見長大歳神社古墳は、6世紀第4四半期に位置付けられている。なお、この石室は支室の長さ3.86mにくらべて、6.71m長の非常に長い羨道を有することが特徴である。

以上のことから、柏原川東岸に古墳が築造されるようになったのは6世紀後半以降と考えられるが、このことは、前段階の清蔵谷古墳と清蔵谷遺跡も含め、大新屋古墳群と拳田遺跡や今回調査した三原古

が箱式石棺、円成寺古墳群（2基）、中山古墳群（2基）、上小倉古墳の合計6基が横穴式石室以外の埋葬施設である可能性が濃厚であるが、東岸全体の中では少ない。

このように、現段階の状況のみをかぎり、古墳時代前期～後期前半までの古墳は主として柏原町域の西部に集中し、丘陵頂部や尾根稜線上に立地し、箱式石棺や木棺などといった、向山墳墓群にみられるような伝統的墓制を採用していることが読み取れる。

一方、横穴式石室を内部主体とする古墳は、それ以前の古墳が集中していた西部地域では、北西部に築造されなくなり、大新屋集落南西部の谷中に集中して七ツ塚・山根・山の神池の各古墳群を含む広義の大新屋古墳群が築造されている。大新屋古墳群は大半が横穴式石室墳で、

墳群と三原遺跡の成果にみられるような、集落に近接した位置に古墳を築造している可能性が高いことを前提にすれば、柏原川東岸地域における居住地などへの転換が古墳時代後期になって積極的に行なわれたことが顕著されるのである。そのことを裏付けるように、古墳時代の住居跡が上小倉・樋詰遺跡や見長遺跡で発見されており、上小倉・樋詰遺跡では7世紀前半の青野型とされる方形堅穴住居跡が調査されている。また、柏原本町・東美・法蓮寺の各遺跡が古墳時代集落跡になりうる可能性が指摘でき、現南多田集落部分にも存在する可能性も考えられよう。

総じて、柏原町域における横穴式石室を内部主体とする6世紀後半以降の古墳は、集落に近い谷中や山麓に築造されているのに対し、それ以前の箱式石棺や木棺・堅穴式石室といった埋葬施設をもった古墳・弥生墳丘墓は丘陵頂部や尾根稜線上に築造されていることが観察され、明瞭に分離できる。拳田古墳の報告書で、阿久津久氏がこの地域の古墳のあり方を大きく2つに分けられたが、今回は立地の差に加え、箱式石棺・木棺などを主体部とする古墳も群集するものが多いことと、それらの古墳と横穴式石室墳に時期差を認め、分布域に変化がみられることを指摘した。

飛鳥・奈良の遺跡では、遺跡数が非常に少なく、不明な点が多い。遺構が確認された柏原陣屋跡下層遺跡では、奈良時代の礎石建物の柱穴や溝が検出され、門跡と想定されている。さらに、柏原藩の旧城下町にあたる陣屋西方一帯の現市街地部分は、奈良～平安時代にいたる瓦片・灰恵器の散布地であり、本町遺跡・新町遺跡として周知されている。一方、駅家の候補地であった石生の一角にある石生・杉ノ本遺跡は、古墳時代の集落跡であって、奈良時代の遺構は検出されていない。また、別の候補であった市辺遺跡は調査の結果、都市的性格が考えられている。周辺遺跡が明らかになってきた中で、ほかに有力な候補地が無い今、古代山陰道に面した位置からも、柏原陣屋跡、柏原・本町遺跡といった柏原市街地に単角駅家の候補地を求めるのが最も妥当な判断であろう。なお、下小倉にある波尼遺跡では土塚や溝から多量の瓦が出土し、瓦窯跡に伴う灰原関連遺構と考えられているが、柏原陣屋跡出土瓦との類似性が指摘されている。

平安時代中頃の遺跡は、わずかに畑田遺跡で掘立柱建物跡2棟と多くの柱穴・溝が検出されているのみで、富寿神堂が出土している。続く平安時代末～鎌倉時代の遺構は、三原遺跡でも確認しているが、前述の畑田遺跡・大新屋遺跡・拳田遺跡で掘立柱建物跡等の遺構が検出されている。大新屋・拳田遺跡では8棟以上のほか、鍛冶炉・土器溜り・溝・土塀など、畑田遺跡では鎌倉時代の柱穴・土塀・竪下部、室町時代の掘立柱建物跡2棟・多数の柱穴・水田跡・石組井戸などが検出されており、今回報告分でも室町時代の遺構を検出している。中世墳墓群では、向山遺跡の弥生墳墓の北側で、鎌倉時代末～室町時代初め頃の火葬墓が13基検出され、蔵骨器などが出土している。一方、下小倉・上小倉遺跡群では掘立柱建物跡などが数多く検出されており、中世小椋荘の荘園経営に関連するものと考えられている。周辺には、中世寺院の金水院寺や室町時代初頭に比定されている宝鏡印塔など多くの中世の遺跡や、近世初頭の大部谷焼窯跡が存在している。

城郭関係では、高見城山頂および尾根稜線部に存在する連郭式中世山城である高見城が著名である。高見城は14世紀初頭に仁木頼章によって築城され、16世紀後半に赤井氏が拠って、明智光秀による丹波攻めで廃絶したとされている。城山頂部の南約300mの曲輪からは、発掘調査により16世紀後半の遺物と焼土が出土し、建物が焼失したと考えられている。また、東鴨野城は出城と考えられている。一方、北側は徳壺城を最前線として高見城にいたる連絡ルートとされたと考えられ、多くの曲輪群が展開している。他の城郭としては、小南山頂に小規模な曲輪遺構が、また、柏原市街地周辺にも八輪山・奥村・新

町など、大部谷の独立丘陵には城郭遺構の曲輪とされる平坦面がそれぞれ確認されている。

その後、江戸時代の柏原藩邸である柏原陣屋が造営され、現在、国指定史跡となっている。

地理的・歴史的環境 参考文献

- 『兵庫の地質』 兵庫県 1996年
- 『フラス山・ボラス山』 水上郡教育委員会 1995年
- 榎本誠一『兵庫県の出土古銭』 学生社 2002年
- 『水上郡埋蔵文化財分布調査報告書(3) 兵庫県水上郡柏原町』 水上郡教育委員会 1996年
- 『柏原町東奥第1号墳・芋田古墳発掘調査報告書』 兵庫県教育委員会 1973年
- 『水上郡埋蔵文化財調査概要報告書 I』 水上郡教育委員会 1997年
- 『水上郡埋蔵文化財調査概要報告書 II』 水上郡教育委員会 1999年
- 『水上郡埋蔵文化財調査概要報告書 III』 水上郡教育委員会 2000年
- 『水上郡埋蔵文化財調査概要報告書 IV』 水上郡教育委員会 2002年
- 『水上郡埋蔵文化財調査概要報告書 V』 水上郡教育委員会 2003年
- 『平成11年度年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2000年
- 『古墳にコーン！十器にDOKI！DOKI！～柏原の遺跡たんけん～』 柏原町歴史民俗資料館 2001年
- 水口富夫『古代山陰道の遺跡』『山陰道』歴史の道調査報告書 第3集 兵庫県教育委員会 1993年
- 石野博信『丹波・水上町横田山古墳の調査』『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集 兵庫県教育委員会 1974年
- 『柏原陣屋跡(奈良時代遺構の調査)』兵庫県文化財調査報告 第118冊 兵庫県教育委員会 1993年
- 『鶴内・稲畑』水上町埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊 水上町教育委員会・大手前女子大学水上町遺跡調査団 1989年
- 奈良大学文学部考古学研究室『兵庫県見長大成神社古墳の石室測量調査報告』『文化財学報』第14集 奈良大学文学部文化財学科 1996年
- 『丹波志』永戸貞著・古川茂正編 名著出版 1974年
- 榎本誠一『鏡王塚古墳』『兵庫県史』考古資料編 1992年
- 松井學堂編『柏原町志』1935年
- 榎本誠一・瀬戸谷皓『日本の古代遺跡2 兵庫北部』保育社 1982年
- そのほか、各遺跡については、水上郡教育委員会の発掘調査実報報告書を参照した。

第3章 調査の結果

第1節 A地区の遺構と遺物

1. 遺構 (図版12、巻頭写真図版3、写真図版1)

A地区は、調査区に圃場整備時の大きな段差がみられ、北半は南半より1.5~2.0m低い。南側半の範囲では、遺構が全く検出されなかった。これは、本来遺構面が南側ほどより高かったため、削平をうけた結果と考えられる。検出された遺構は、土坑、溝、柱穴等である。

①土坑

土坑は5基が検出された。SK-1からは、多量の土器が出土しているが、それ以外は、出土遺物が僅少なため、所属時期は明らかではない。

SK-1 (写真図版1)

調査区のほぼ中央に位置する長大な土坑である。長さ10.0m、幅1.0~2.5m、深さ0.32m。確認トレンチにより掘削されたため、東端部の形状が不明であるが、北に向かってほぼ直角に加曲していたものと推定できる。断面形は船底状を呈する。土坑内部は、礫混じりの細砂と焼土・炭によって充填されていた。出土遺物は奈良時代の須恵器・土師器である。

SK-2 (写真図版1)

調査区ほぼ中央に位置する不整形な土坑である。確認トレンチの掘削により全体の形状は明らかではないが、SK-1・3と重複して検出した。長さ4.4m、幅1.8m、深さ0.2mを測り、底は平坦で、内部は礫混じりの細砂によって充填されていた。遺物は出土していない。

SK-3 (写真図版1)

SK-1の西側に位置する楕円形の土坑である。確認トレンチにより一部が掘削されている。断面形は深い船底状を呈し、内部はシルトによって充填されていた。長さ2.6m、幅1.2m、深さ0.36mを測る。遺物は出土していない。

SK-4 (写真図版1)

SK-2の西側に位置する、不整形の土坑である。確認トレンチにより、北・南両端が掘削されているため、規模は明らかではない。長さ2.1m、幅1.0m、深さ0.24mを測る。遺物は出土していない。

SK-5

調査区北半に位置する、楕円形の土坑である。長さ1.8m、幅1.2m、深さ0.16mを測る。柱穴の群集に接する位置にあることから、建物との関連が想起される。

②溝

溝は2条検出した。SD-1と2は、直線的に同一延長軸上に位置すること、幅の規模が類似していること等から、本来同一の溝であった可能性が高い。ともに幅0.6m、深さ0.4m前後を測り、溝内はシルト混じりの砂によって充填されていた。何らかの地割りを反映する可能性があろう。

③柱穴

調査区南半の高位部で32基、北半の低位部で52基の柱穴を検出した。円形ないし不整形の柱穴を主体とし、直径は10~40cmを測る。掘立柱建物跡を復元することはできなかった。

2. 遺物

遺情面の多くは削平を受けていたため、包含層から出土した遺物はあまりなく、柱穴や土坑から遺物が出土している。特にSK-1からは多量の土器が出土している。

P-9 出土土器 (図版57-1・2、写真図版33)

1・2は須恵器杯Bである。口縁部はやや反する。口径は14.4cm前後である。

SK-1 出土土器 (図版57-58-3~34、巻頭写真図版6、写真図版33・34)

土器は焼土などとともにまとまって出土している。出土個体数は須恵器杯Bが多く、須恵器後碗がそれに次ぐ。それぞれに伴う蓋もほぼ同数で、蓋付きで使用されていたと考えられる。土師器では製塩土器の多いことが注目される。3~5は須恵器杯Aである。底部外面は回転ヘラ切りの後ナダが施されている。口径は13.3cm~12.55cmである。6~10は須恵器杯Bである。口径13.3~14.05cmのもの(6~9)と口径20cmのもの(10)の2種類に分かれる。底部外面は回転ヘラ切り未調整のもの(6・8)と回転ヘラ切りの後ナダが施されるもの(7・9)がある。11は須恵器皿Aである。口径は16.7cmである。底部から体部にかけてやや丸みをもっている。底部外面は回転ヘラ切りの後ナダが施されている。12は須恵器皿Bである。底部外面は回転ヘラ切りの後ナダが施されている。13~15は須恵器後碗である。体部外面下位と底部外面は回転ヘラケズリが施されている。14・15は比較的高い高台をもち、13・14の口縁部内面は沈線状に窪んでいる。16~20は須恵器杯B蓋である。16の頂部外面は回転ヘラケズリが施されるが、17~20の頂部外面は回転ヘラ切りの後ナダが施されている。口径は20.5cmのもの(16)、13.8~15.0cmのもの(17~19)、10.55cmのもの(20)の3種類に分かれる。17~19は6~9の杯Bに、16は10の杯Bに対応するものと考えられ、20に対応する須恵器杯Bは出土していない。18は天井部内面にヘラ記号をもっている。21・22は須恵器後碗蓋である。環状のつまみをもつ。口径は18.2~20.35cmで、13~15の後碗に対応する。杯B蓋と同様に頂部外面は回転ヘラ切り後ナダが施されている。23~25は須恵器壺である。口縁部が外反しながら開き、端部が外側に突出するもの(23)、口縁部が外反しながら開き端部が上方に屈曲するもの(24)、口縁部がやや内湾しながら上方へのびるもの(25)などがある。26は須恵器壺である。広口壺の口縁部である。27は土師器高杯である。表面は摩滅している。28は土師器壺である。口縁部は外反し、端部は尖り気味となる。表面は摩滅している。29は土師器鍋である。口縁端部に面をもつ。体部内面は横方向のヘラナダが施されている。30~34および写真図版34下段は製塩土器である。厚手で、砂粒を多く含んでいる。内外面ともナダが施されているが、粘土紐の接合痕を多く残している。底部は32のように尖底と考えられる。34のみ内面に布目を残している。

3. 小結

遺跡は削平のためその様相は判然とはしなかった。土坑(SK-1)や柱穴から奈良時代の上器が出土していることから、A地区には奈良時代の建物などが存在していたものと考えられる。SK-1から出土した上器は須恵器後碗や製塩土器を伴う8世紀後半のまとまった資料と考えられる。

第3表 SK-1 出土土器の口縁部個体度数

器形	須恵器									土師器				合計	
	杯A	杯B	後碗	杯B蓋	後碗蓋	皿A	皿B	壺	壺	高杯	壺	鍋	製塩土器		
個体度数	21	123	42	123	17	15	5	9	19	10	9	15	3	27	438
比率	4.8	28.1	9.6	28.1	3.9	3.4	1.1	2.1	4.3	2.3	2.1	3.4	0.7	6.2	

※口縁部が残存している部分について15度角1ポイントとして数えた。

第2節 A-2地区の遺構と遺物

A-2地区は三原谷中のほぼ中央、東寄りの位置にあり、A地区の北側にあたる。旧地形復元図によると、扇状地性微高地の東端にあたり、A-2地区東側には埋没小谷が入り込んでいる。小谷はその幅を徐々にひろげながらほぼ北方向に続いている。

1. 遺構 (図版13、巻頭写真図版4、写真図版2)

圃場整備による遺構面の削平が著しく、耕土直下で大半の遺構を検出した。調査区内には水田3面分の東西方向の段差が2箇所と、水田に伴う暗渠が各所で東西方向に走っている。また、調査区南端には、圃場整備時に掘削されたと思われる、幅3m以上で東西方向の溝状擾乱を検出した。

検出した遺構には古墳時代後期・平安時代末・近世以降のものがある。遺構ベース土は黄灰色ないし黄褐色系で粘質の極細粒砂～細粒砂であるが、水田の北端部は低くなっており、削平をあまり受けていないため、そこには遺構面上に遺物包含層である灰色～灰褐色の極細粒砂～細粒砂が堆積していた。

検出した遺構のうち、古墳時代のものには、石棺墓(SX-1)、奈良時代～平安時代の遺構には流路、平安時代末の遺構には掘立柱建物・井戸・土塙・流路など、近世以降の遺構には井戸がある。

以下、時代別に遺構について述べることにする。

①古墳時代の遺構

石棺墓(SX-1) (図版14、写真図版4)

後述する流路内の南端中央で検出した箱式石棺である。検出した部分では南北方向に長く、東と南の側壁および底石が遺存していた。東側石は2点、南側石は1点遺存し、石棺底には一辺15～25cm程度で厚さ5cm程度の板石を敷きつめていた。側壁最頂部から敷石までの高さは22cmである。敷石の目地通りは悪い。側壁や敷石の状況および全体の遺存状況から、南北方向に主軸をもつ箱式石棺と推定できるが、残存している内法が、南北約80cm、東西約50cmと小さいため、主軸方向の確定ができず、東西方向の石棺の一部が残存したものとも考えられる。底石遺存範囲が石棺の底全体であるならば、南北主軸の非常に小規模なものとなる。なお、側石の外側にも小角礫が敷在していた。その検出レベルは側壁際の礫は側壁下面の高さに近く、外側の礫へと徐々にそのレベルが上がっていることから、墓室内裏込め石の可能性はある。なお、石棺内壁上から須恵器の破片が出土したが、原位置を保ったものではなく、棺内から土器以外の遺物は出土しなかった。

また、石組脇から古墳時代の須恵器片が出土しており、この石棺に伴うものの可能性がある。しかし、石棺南側の擾乱内や流路の下流からも古墳時代の土器を若干数検出しているため、すべてが石棺に伴うものかどうかは不明である。今回の調査範囲は、谷部から扇状地へ展開する部分に位置するが、さらに南側の谷奥には古墳群が存在することや、すぐ南西のB地区では横穴式石室墳や古墳時代の竈穴住居跡が調査されている。したがって、古墳時代の土器はこれらの遺構からの流入や包含層に含まれていたものである可能性も有している。いずれにせよ、検出された箱式石棺は、これらの上流に位置する古墳群と一連で関係するものにとらえない。

土塙3(SK-3) (図版13、写真図版3)

平安時代流路の北部西岸で検出した隅丸方形に近い小さな土塙である。東西56cm、南北46cmで、検出面からの深さは約20cm、底は隅円形を呈し、長径36cm、短径24cmを測る。塙上は10YR4.5/1褐色灰色の板

細粒砂～細粒砂で、埋土中には古墳時代の須恵器壺片、底付近で礫を出土した。壺は流路出土のものと同接合した。土壌の時期は厳密には決定し難いが、一応、古墳時代と考えておく。

②平安時代末の遺構

掘立柱建物跡1 (SB-1) (図版15、写真図版3)

ほぼ東西、E10° S方向に棟をもつ、3間×4間と思われる掘立柱柱建物跡である。建物が調査区東側にのびる可能性があったため、柱穴推定部分を掘削したが、遺構は存在しなかった。総柱芯間は桁行11.76m、梁行7.2mの規模である。水田の段にまたがるかたちで検出されており、削平の著しい北側では、遺構の残存状況が悪く確認できない柱穴も多く、検出できた柱穴でも深さ10cm程度であった。しかし、良好な遺存状況を示す南端柱列では深さ36cmの柱穴も存在した。桁各柱芯間では2.64～3.36m、梁各柱芯間では2.4m以外は不明である。柱穴の規模は直径20～30cmの範囲におさまるもので、掘形は円形を呈する。1箇所の柱穴掘形から平安時代末頃の須恵器碗の細片が出土しており、本建物跡もその時期と考えている。なお、東端に接するかたちで井戸 (SE-1) が存在する。

井戸1 (SE-1) (図版15、写真図版3)

井戸内肩部を掘り過ぎたのと同時に、上部は削平を受けていると思われるため、正確な外形規模は不明である。現状平面はやや楕円形を呈し、長径1.6mを測るが、推定長径は約1.2mである。短径は断面により1.1mであることがわかり、検出面からの深さは0.9mを測る。底面はほぼ水平で、平面形ではやや角張る。壁の断面形はややオーバーハング気味である。埋土はほぼ水平に堆積しており、特に人為的に埋められた様子は窺えない。埋土中から遺物が出土していないため、遺構の時期については確定できないが、その位置関係からSB-1に伴うものと考えられ、同時期のものと推定される。

掘立柱建物跡2 (SB-2) (図版16、写真図版3)

調査区内やや北寄りの西端で検出した、庇を東側にもつ総柱建物跡である。流路とは約3mの距離をおいて西側に位置し、調査区西端いっぱいまでひろがる。現状では調査区端に接するかたちで東西2間分が検出できたが、SB-1や一般的な建物の規模から、さらに1間分、西側調査区外にのびている可能性が高いと思われる。建物の様は南北方向、N14° Eである。現状での柱芯間による身舎規模は、南北桁行が11.7m、東西梁行が5.0mで、これに1.7m間隔の庇が取り付く。水田構築時の削平により残存状況が不良な柱穴や、検出できなかった柱穴も存在するが、桁方向の各柱芯間では2.6～3.16m、梁方向各柱芯間では2.28～2.72m、庇の桁方向柱芯間では2.96mを測る。柱穴の規模は直径20～30cmの範囲におさまるもので、掘形は円形を呈する。庇を構成する柱穴は比較的小型で、直径15～20cm程度である。P-4の掘形やP-2・4・5の柱痕から土器片、P-2・9の掘形やP-1・3・6・8の柱痕から細片の土器が出土しており、いずれも平安時代末頃のものであるため、建物跡の時期を示しているものと思われる。なお、P-12では柱根 (写真図版32) が遺存していた。

土壌1 (SK-1) (図版13)

SB-1の南約10mの位置で、溝状を呈する。南北60cm、東西18cmで、検出面からの深さは8cmである。埋土は2.5Y6/2黄灰色の極細粒砂～細粒砂で、埋土から須恵器碗の細片が出土した。

本土壌の西側に溝状遺構が2条存在する。遺物は出土していないが埋土は非常によく似ており、同一時期の可能性が高い。そのほかには明確な遺構は存在せず、性格等は不明である。

土壌2 (SK-2) (図版16)

SB-2の内部にあり、方形に近い円形を呈する。径は60cmで、断面形は半円に近く、検出面からの

深さは22cmである。埋土は7.5YR4/1褐灰色の極細粒砂～細粒砂で炭が混じっていた。建物に関係する遺構の可能性が考えられるが、具体的に挙げられない。埋土中から平安時代末の須恵器碗片が出土している。

流路（SD-1）（図版14、写真図版2・32）

調査区内西寄りをほぼ南北方向で北へ流れる流路である。昭和57年頃の圃場整備時に削平を受けているため、ほとんど底の部分しか残存していない。検出面からの深さは6～67cmで、幅3～7m、長さ約42mにわたって検出した。深さに差が多いが、平均は20cm程度の深さである。中央部では幅ひろく若干「く」字形に曲がっている。幅ひろく検出できた部分は削平の程度が少ない部分である。したがって、当初の幅はもう少しひろかったと想定される。流路の埋土は、上層に10YR6/1褐灰色ないし10YR6/2灰黄褐色のシルト質極細粒砂が堆積しており、この土層は遺構面の一部を覆っていた遺物包含層によく似ている。上層からは主として平安時代末の土器が出土した。また、上流では検出時に包含層として取り上げたもののうち、本流路に伴うと思われる古墳時代・奈良時代・平安時代末の土器がある。一方、下層は上流で10YR4/2灰黄褐色のシルト質極細粒砂、下流では10YR6/4にぶい黄褐色の極細粒砂が堆積していた。下層から出土した土器は古墳時代および奈良時代を主体としている。

以上のように、流路埋土からは各時代の土器が出土しており、本流路の時期を確定することは難しい。ただし、下層出土の土器が古墳時代・奈良時代を主体とし、上層では平安時代末の土器が主体となっているが、古墳時代・奈良時代の土器はA地区・B地区といった斜面上方や包含層に含まれていたものが流入した可能性がある。また、掘立柱建物跡と流路の位置関係においても関連性があるようにみえる。以上のことから、本流路の時期を平安時代末ととらえておきたい。また、平安時代末のある時点では、流路としての機能を果たさなくなったようである。ただし、A地区のSK-1が溝状遺構であるならば、そこにつながってゆく可能性があることから、奈良時代に開削された可能性も捨てきれない。

なお、今回検出した部分の前寄りの流路底部分で、流路内を東西に横断するかたちで長さ約2m、幅約1mにわたって大小の角礫の集積（写真図版4）が検出された。これらの礫は明確に組み上げられた様子が採取できず、つくりは極めて雑なものである。ただし、ほかにこのような礫が認められないことや、東西に長い遺存状況から推定すると、堰としての石組が想定される。しかし、検出されたものがどの程度当初の姿を残しているかどうかの判断ができず、堰としての機能をどの程度果たしていたのか、また堰の目的についても不明である。

③近世以降の遺構

井戸2（SE-2）（図版13、写真図版32）

調査区北部にある円形土壌で、直径は1.7m、現存値で深さ40cmを測る。埋土が2.5Y5/1黄灰色の細粒砂で、耕土状の土であったことおよび形状から井戸と判断した。埋土中から須恵器こね鉢片のほか、近世～近代の陶磁器が出土した。

2. 遺物

①遺構出土の遺物

石棺蓋（SX-1）出土土器（図版58～35～38、写真図版35）

35は須恵器蓋の口縁部破片である。口径14cm、口縁部と天井部の境の外表面は突帯状に鋭く尖る。口縁部は丸く、内面に小さな段を有する。36は須恵器杯身で、口径12.7cm、器高3.7cmを測る。立ち上がり

部は短く直線的にやや内傾する。受け部はやや上方にのび、丸みをもつ。底部外面にヘラ記号を掻くが、破片のため全体は窺えない。TK-43型式期と思われる。37は須恵器高杯脚部で、低脚一段で四方向の長方形透しを穿つ。脚端部はあまり肥厚せず下方に尖る。TK-47-MT-15型式期であろうか。38は須恵器平瓶ないし壺の体部で、径は17.1cm、残存高は10.1cmを測る。体部中央には鈍い稜があり、その部分に幅の狭いヘラ削りを施している。

以上のSX-1出土土器は破片で、時期もばらつきがあり、石棺墓に直接伴うものとは考えにくい。

流路(SD-1)出土遺物(図版58・59-39~46、写真図版35・36)

出土遺物には、40~42の流路出土のもの、南端部の攪乱付近から出土したため流路の可能性が高いと判断した43~46の2者がある。また、石棺墓きわから出土した土器は両者に含まれている。なお、包含層出土土器のうち、52・55~58・60・62・66は流路上層埋土からの出土と判断できるものである。39は土師器の甕と思われる破片で、口径24.1cmを測る。口縁端部はやや尖り、体部外面には縦方向のハケ目が残る。古墳時代の所産であろう。40は須恵器大甕の口縁部破片で、端部は欠失する。口縁部外面にはふい突帯間に波状文を2段に「字」に描いている。この土器は流路とSK-2出土破片が接合した。41は石棺墓から出土した須恵器杯で、立ち上がり部は長く直線的に内傾してのび、端部はやや厚みを増し、凹面をもつ。口径10.4cm、器高5.5cmで、口径に対して器高が深く、薄手のつくりであることから、TK-47型式の特徴を示している。42は端反りの白磁碗細片である。残存部全面に施釉され、内面には1条の沈線が認められる。白磁碗V類に分類される。43は須恵器の高杯長脚部で、口縁部を欠失するが、無蓋高杯のようである。石棺脇付近から出土した。脚柱部に2条のふい沈線を施し、脚端部は下方に折り返したようになっている。脚部径は10.1cm、TK-10型式あたりの時期であろうか。44は須恵器の平瓶ないし壺と思われる体部の破片である。厚手のつくりであるが、底部は平らで薄い。45は土師器甕の口縁部であるが、摩滅のため調整は不明である。口径は17.5cmで、端部は丸い。46は籬羽口の破片であり、直径6cm程度に復元できる。孔径は2cm程度である。端部は削られて表面は残していない。

掘立柱建物跡2(SB-2)出土土器(図版59-47~51、写真図版36・37)

47~50は須恵器碗である。47はP-5柱痕から出土した。口径14.8cm、器高6.1cmと深手で体部も丸く、ロクロ目も比較的顕著であるが、回転糸切りの高台は低くつぶれたようになっている。12世紀後半頃の所産であろうか。48はP-2柱痕および掘形から出土した。比較的低い体部とやや低い高台部をもつ。器壁は厚めで見込みは窪む。12世紀中頃以降のものと思われる。口径14.8cm、器高5.7cmを測る。49はP-2・5の柱痕出土のものが接合した。口縁部を欠失するが、体部のロクロ目は顕著に認められる。回転糸切りの高台はつぶれたようになっている。50はP-4柱痕出土である。回転糸切りの小さな高台の周囲には横ナデが施されている。内面の見込み部は窪んでおり、小型の碗であるが、古い様相を呈し、11世紀代まで遡る可能性がある。51はP-4柱痕と掘形出土の破片が接合した。土師器碗のようであるが、底部しか遺存していない。また、摩滅のため調整等は不明である。底径は6.1cmで、他の須恵器と時期を隔てることはないと思われる。

包含層出土土器(図版59-52~69、写真図版36・37)

52~69は包含層から出土した土器であるが、前述のように一部流路埋土と考えられるものを含んでいる。

52は須恵器甕である。天井部は丸く、口縁部との境は段をなす。口縁端部は面をもつがやや鈍い。ロクロ回転は左方向である。口径11.6cm、器高4.3cmを測る。53は須恵器杯あるいは高杯で、底部を欠失す

る。立ち上がり部は直線的に内上方にのび、端部は内傾する面をもつ。口径は10.8cm。54は須恵器高杯であるが、脚部を欠失する。立ち上がり部は内上方に長くのびるが、屈曲し、端部は拡張され、面をもつ。平らな底部から大きく湾曲して受部にいたる。口径は9.5cmと小さい。底部外面に透孔の痕跡があるが、数は不明である。52～54の3点はTK-47～MT-15取時期におさまるものと判断されよう。55は高杯脚部で、透孔をもたず、2条の沈線を施す。脚部端部はほとんど肥厚せず、下方に若干引きのぼす。MT-85型式併行期項と判断される。脚部径は8.6cmを測る。56は須恵器平瓶の口縁部である。口径5.7cmで、口縁下に1条の沈線を引く。57は甗の体部で、底部外面は不定方向の手持ちへう削りを施す。腹径は9.9cmを測り、飛鳥時代頃の所産であろう。58は須恵器壺の口縁部で、口径13.3cmを測る。口縁端部はほとんど拡張せず、凹面をなす。口縁部外面にはカキ目を施す。体部外面は平行タキのちカキ目、内面は青海波文をナダ消している。59・60は杯B蓋で、ともにつまみの中央部は窪んでいる。天井部はやや丸みもち、端部は下方にのびる。60の天井部と口縁部の境は鈍く丸みがあるが、59は明瞭な稜をもつ。ともに飛鳥V期～平城宮Ⅱの間と思われる。59は口径18cm、器高3.8cm、60は口径18.3cm、器高3.3cmを測る。

61～63は須恵器の碗で、61・62は小皿、63は大型品である。いずれも口径に比べて器高が高く、体部に丸みもち、深めの感がある。口縁部はやや外反し、ロクロ目はやや顕著で、高台部は回転糸切りである。61の高台部は7mmと高く、外側面を再調整している。口径11.1cm、器高5.5cm、高台径4.4cmを測る。62は口径10.9cm、器高4.5cmとやや浅いが、高台高は6mmで側面にナダを加える。高台径は4.9cmを測る。63の口径は16.1cm、器高6.8cmで、高台径は5.7cmである。高台高は3mm程度で、側面調整は施していない。61・62は63に比べて古く、63は12世紀中葉を越えないものと思われる。64は須恵器壺の口縁部で、端部付近は大きく外反して水平方向にのび、端部は若干肥厚し上方に少し引きのぼす。口径30.0cmを測る。体部外面は平行タキか。全体的に灰白色を呈するが、外面に自然釉が付着している。碗と同時期のもの可能性が高い。65・66は玉縁状口縁部を有するⅣ型の白磁碗口縁部破片である。口径はともに16.5cmで、65の玉縁はやや薄い。67は端反り口縁端部のⅣ型白磁碗である。体部外面下半は削り調整を加え、内面下部には1条の沈線を引き、全面に施釉する。口径は16.9cm、残存高は5.1cmである。68は瓦器碗で、底部を欠失する。口径15.8cmで、直線的な体部から口縁部にかけて大きく内湾する。口縁端部は丸く、内面に浅い沈線を施し、内外面とも横方向の暗文をやや密に施す。以上の特徴から、椀葉型と判断される。体部外面下半にも暗文を施すことから、12世紀代におさまるものであろう。なお、本遺跡では瓦器碗の出土量は極めて少ない。69は須恵器大型壺口縁部で、細片であるが口径は48cmを測る。外面にはカキ目のち、三段に施文する。上・中段には右下がりの櫛刺突文、下段は波状文を施している。古墳時代末頃の所産であろう。

3. 小結

A-2地区の古墳時代後期の遺構としては、箱式石棺墓と判断した遺構1基のみで、住居跡等は認められなかった。削平により消滅した可能性もあるが、位置的にはすぐ東側に丘陵根拠が存在することから、住居は営まれなかったものと判断したい。流路は南北方向にのびるものであるが、詳細な時期も含めた検討が必要である。平安時代末の掘立柱建物跡や井戸など、その性格が明確となった遺構は、三原遺跡の中でも本地区のみである。ただし、他の地区においても柱穴等が検出されているため、当該時期の建物等がひろい範囲にひろがっていたことは容易に推測できるところである。

第3節 B地区の遺構と遺物

1. 遺構 (図版17・写真図版5～12)

B地区では、三原谷とよばれる南北方向の緩斜面を利用して円墳1基(三原1号墳)が造営されている。調査区内における斜面の最高点は標高127.25m、最低点は124.75mで、比高差約2.5mを測る。検出された遺構は、横穴式石室の円墳のほか、古墳墳丘直下で検出された竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡2棟、土坑、多数の柱穴等である。これらの大部分は、調査区の北側である標高125.5m～126.8mの間に位置しており、特に柱穴群は一定の範囲内に帯状に分布している。

①竪穴住居跡(SH-1)(図版22・23・写真図版11)

古墳の墳丘直下で検出された、隅丸方形の住居跡である。東西方向5.9m、南北方向5.8m、検出面から床面までの深度は0.45m前後を測る。床面南西隅のみに幅0.15mの周溝溝をとどめる。主柱穴は4基で、0.4～0.5mの円形を呈する。床面中央と西壁寄りに、焼土が認められたため、竈などの存在が考えられる。主柱穴から古墳時代の須恵器杯蓋(86)が出土した。

この住居跡は、古墳の掘形検出時に見つかったもので、住居跡の掘り込みとその上に造営された横穴式石室の玄室部分の掘形がほぼ重なっていることから、この竪穴住居跡は、鹿嶋後継墓前に、古墳の横穴式石室の掘形として使用されていることが明らかになった。

②三原1号墳(図版18～21・写真図版6～12)

横穴式石室を主体とする円墳である。墳丘は、開墾のために削平されていたうえに、周溝部分も完全に埋没していたため、本来の墳丘の形状を大きく損なっていた。このため、調査前にはその存在が全く知られておらず、確認調査によって奥壁がみつかり、初めて存在が明らかになった。

古墳の規模は、墳丘直径約15m、現存した墳頂の標高は126.4mで、墳丘の最大比高差は1.4mを測る。石室は北方向に開口する左片袖の横穴式石室である。主軸方位はN9°Eで、石室は、天井石と側石の一部を失っているが、基底石がろうじて残存していたため、規模と形状は復元できた。

規模は、玄室が、長さ3.6m、幅1.9m、羨道が、長さ3m、幅1.3mを測る。4室内部は、天井石や側壁に使用された石材がほとんど転落していないことから、石室が自然崩落する前に故意に破壊され、石材は持ち出されたものと考えられる。

奥壁は右側基底石だけが残存しており、幅1.2m、高さ1.0m、幅0.45mの大型の石材を使用していた。側壁は、ほとんどが基底石のみで、残存高は1.52mを測る。右側壁基底石は8イが残存し、玄室部分には比較的大型の石、羨道部には小型の石材を使用していた。左側壁基底石は7石が残存し、袖石は立石ではないものの、玄門部での羨道幅は玄室のそれよりも56cm狭く、明瞭な袖部をなしている。玄室の床面には径10cm程度の礫を敷石とし、敷石は玄室部分に限られていることから、玄室と羨道部分の境を意識していたと考えられる。なお、羨道部分には閉塞石が認められた。

墓坑規模は、幅3.6m、奥壁中央部で深さ0.95m、前述した竪穴住居の掘り込みを利用して、この墓坑を作っている。

以上のことから、石室の構築方法は、すでに存在していた竪穴住居の掘り込みに合わせて玄室左側壁の基底石をおき、反対側もそれに合わせて右壁の基底石を据える。古墳の床面は、竪穴住居の床面を整地し、底上げを行なって雑敷にし、外側の墓坑を埋め戻している。

出土遺物は、いずれも、敷石の直上から出土した。玄室での出土状況は、玄室左半部で、耳環2点と、

ヒスイ製の勾玉1点、水晶製の切子玉2点などの装身具、袖部付近で、大刀1振などが出土している。

大刀は、玄室の北側に側壁に沿って、また、土器についても、残りのよい土器に関しては、側壁に沿って出土していることから、埋葬時の位置を保っていると考えられる。しかしながら、羨道部分や閉塞石の外側、また石室前庭部分では、玄室内埋葬のものと考えられる土器がまとまって出土しており、これらは、追葬時の片付けもしくは、盗掘された際の混乱と考えられる。

古墳の周溝周辺からは、古墳・奈良時代の土器が多量に出土しており、奈良時代には周溝が埋没したと考えられる。

③掘立柱建物跡

古墳の東側一帯で柱穴群を検出した。柱間2m前後で、東西方向に計画的に配置された2棟が確認できた。柱穴の分布状況から推定して、ほかにも建物跡が存在していた可能性が高い。

SB-1 (図版24・写真図版5)

東西に長軸をもつ、2間(5m)×5間(11m)の掘立柱建物跡である。柱穴は不整形ないし楕円形で、最大のものは長径30cmを測る。深さは10~25cmである。柱穴中心で測定した柱間距離は、多くの場合2.0~2.2mであるが、建物跡西側の2間分は、2.8m、1.9mと変動的な柱間となっており、建物の構造上の特徴となっている。P-38・39より奈良時代の土器器葉片が出土している。

SB-2 (図版25・写真図版5)

SB-1の西側に位置する2間(5m)×3間(9.05m)の掘立柱建物跡である。SB-1とSB-2は同一方向を示すため、この2棟は同一方向に計画的に配置されたものと考えられる。柱穴は不整形ないしは不整形楕円形を呈し、最大のもので長径30cmを測る。残存する深さは15cm前後である。柱穴中心で測定した柱間距離は、2.0~2.6mを測るが、西側の1間のみが4.5mと、約2倍の距離をおいている。上述のように、西側の柱間距離の相違は、SB-1にもみられる傾向である。なお、P-35・36より平安時代の須恵器碗が出土している。

④上坑

SK-1

調査区の西側に位置し、長軸2.2m、短軸1.0m、深さ0.31mの楕円形を呈する上坑である。遺物は出土していない。

SK-2

調査区の西でSK-1のすぐ東側に位置し、長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.22mの楕円形を呈する上坑である。ここから緑釉陶器(J29)が出土している。

SK-3

調査区の北西に位置する。東西方向を軸とし、長軸1.3m、短軸0.5m、深さ0.14mの楕円形の上坑である。土師器の短頸壺が出土した。

SK-4

調査区中央、SB-2のすぐ西側に、SB-2と南北軸を同じくして位置する。長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.39mの楕円形を呈する。遺物は出土していない。

SK-5

調査区の中央北側に位置する径0.8m、深さ0.5mの円形の上坑である。古墳時代の土師器壺・須恵器杯・杯蓋が出土している。

SK-6

調査区の東側に位置し、長軸1.3m、短軸0.9m、深さ0.19mの不定形の土坑である。遺物は出土していない。

⑤柱穴

古墳南側で、柱穴群を検出している。建物は復元できなかつたが、奈良・平安時代の遺物が出土している。

2. 遺物

B地区より出土した土器は古墳時代、奈良時代、平安時代以降の大きく3つの時期に分かれる。古墳時代の土器は三原1号墳横穴式石室内や周溝埋土を含む墳丘周辺の包含層、堅穴住居跡（SH-1）、土坑などから出土している。奈良時代の土器は墳丘周辺の包含層や古墳東側の柱穴などからわずかに出土している。平安時代以降の土器は周溝埋没後に設けられた柱穴や土坑などからわずかに出土している。金属器、玉類はいずれも横穴式石室内から出土している。

①古墳時代の出土土器

三原1号墳横穴式石室出土土器（図版60-70-85、巻頭写真図版6、写真図版38・39）

石室内に残存していた土器は少ない。70-73は玄室内から出土した土器である。70-71は須恵器杯身である。口径は11.2cm程度と小さく、底部外面は回転ヘラ切り未調整である。72-73は土師器甕である。調整は体部外面から底部外面にかけては手持ちヘラケズリ、底部内面から体部内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。

74-81は羨道部から出土した土器である。74-75は須恵器杯蓋である。口径は13.7cm前後で、天井部外面は回転ヘラ切り未調整である。77-79は須恵器杯身である。口径は11.4-11.8cmで、天井部外面は回転ヘラ切り未調整である。76は須恵器有蓋高杯蓋である。肩部の沈線は鋭くない。天井部外面は回転ヘラケズリが施されている。80は須恵器有蓋高杯である。脚部は長脚の3方2段透かしである。杯部の底部外面は回転ヘラケズリが施されている。81は須恵器壺である。肩部に2条の凹線と矢羽根状に列点文が施されている。体部外面は回転ヘラケズリ、底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。

82-85は閉塞石近辺から出土した土器である。82は須恵器有蓋高杯蓋である。天井部にボタン状のつまみ、肩部に凹線をもつ。天井部外面は回転ヘラケズリが施されている。83は須恵器短頸壺である。肩部に沈線をもつ。体部外面下半から底部外面にかけて手持ちヘラケズリが施されている。84は須恵器直口壺である。口縁部外面には2条の凹線、肩部には2条の沈線と矢羽根状の列点文が施されている。凹線はなだらかである。体部外面上半は回転ヘラケズリ、体部外面下半から底部外面にかけて手持ちヘラケズリが施されている。85は土師器高杯である。J16と同様の器形のものと思われる。脚柱部外面は縦方向のヘラケズリ、脚柱部内面は横方向のヘラケズリ、脚柱部はヨコナデが施されている。

SH-1出土土器（図版60-86、写真図版39）

86は須恵器杯蓋である。横穴式石室直下の堅穴住居跡の主柱穴から出土した。肩部の稜はシャープで、端部には明瞭な面をもっている。

SK-5出土土器（図版60-87-90、写真図版39）

87-88は須恵器杯蓋である。87は口縁端部に内傾する面をもち、天井部外面に回転ヘラケズリが施されている。88は口縁端部に面をもたない。天井部外面は回転ヘラケズリが施されているが、天井部中央

はヘラ切り痕が削り残されている。89は須恵器杯身である。底部外面は回転ヘラケズリが施されているが、底部中央はヘラ切り痕が削り残されている。90は土師器甕である。口縁部は外反し、端部は尖り気味となる。体部内外面ともナデ、口縁部はヨコナデが施されている。

墳丘周辺包含層出土土器 (図版61・62-91~106・113~117、写真図版40~42)

三原1号墳の周溝を含む墳丘周辺からは古墳時代の土器が多量に出土しているが、良好な個体は多くない。特に横穴式石室の前庭部や墳裾部に多く、追葬時に掻き出された遺物と考えられる。

91~93は須恵器杯蓋である。口縁部と天井部の境に稜をもたず、口縁端部は丸くおさまられている。天井部外面は回転ヘラケズリが施されているが、92・93の中央部は削り残されている。91は口径13.4cm、器高3.2cm、92は口径12.7cm、器高4.2cm、93は口径14.7cm、器高4.3cmを測る。94~97は須恵器杯身である。94は口縁部が上方に立ち上がり、端部に内傾する面をもっている。口径は11.3cm程度と考えられる。95は口縁部が比較的高く立ち上がるが、端部には面をもっていない。底部内面には同心円当てで具痕を残している。口径13.35cm、器高4.55cmを測る。96・97は底部が丸みを持ち、口縁部が短く立ち上がる。96は底部外面にヘラケズリが施されているが、中央部は削り残されている。96の底部内面には同心円当てで具痕を残している。97は底部外面にヘラケズリが施されていない。96は口径11.4cm、97は口径12.1cmを測る。98~100は須恵器有蓋高杯である。98は天井部と体部の境に稜線を持ち、口縁端部に内傾する面をもっている。口縁部は1/5程度しか残存していないが、口径11.9cm、器高5.2cmを測る。99は天井部と体部の境に凹線を持ち、口縁端部は丸みをもっている。口径14.5cm、器高5.2cmを測る。100は天井部と体部の境に稜線や凹線をもたず、口縁端部は丸みをもっている。つまみは剥離している。口径14.75cmを測る。101は須恵器有蓋高杯である。口縁部は外反しながら短く立ち上がる。脚部は長脚で2方2段透かしである。口径13.4cm、器高18.0cmを測る。102~104は須恵器無蓋高杯である。102は杯部下半から底部にかけて5条の沈線と2条の列点文が施されている。脚部は長脚で2段3方透かしであるが、上段の透かしは線状である。口径13.6cm、器高18.1cmを測る。103は杯部の体部と底部の境に沈線が施されている。脚部は低く、2方1段透かしである。口径12.9cm、器高11.6cmを測る。104は外面に沈線などの装飾が加えられない。口径は12.95cmを測る。105は須恵器甕である。頸部と体部中にカキ目、底部は手持ちヘラケズリが施されている。106は器形不明の須恵器である。非常に小型の鉢状の器形で、底部に脚を有するか、別の個体に付着していたものかもしれない。口径は7.4cmを測る。113・114は須恵器甕である。口縁部は外側に丸く折り返されている。体部外面には平行タキキが施され、体部内面には同心円当てで具痕が残存している。113は頸部に「×」印のヘラ記号が施されている。口径15.7cm、器高27.2cmを測る。114は口縁部が垂んでいる。口径20.4cm、器高38.5cmを測る。115は須恵器横瓶である。口縁部は甕と同様に丸く折り返されたような形である。体部は片側に円盤充填がなされ、体部外面は平行タキキ後カキ目が施されている。体部内面は同心円当てで具痕が残存している。口径12.05cm、器高27.85cm、腹径34.75cm×24.6cmを測る。116は土師器高杯である。脚柱部は外面に縦方向のヘラケズリ、内面に横方向のヘラケズリが施されている。口径14.0cmを測る。117は土師器長頸甕である。底部は平坦である。外面は摩滅している。

②奈良時代の出土土器

P-22出土土器 (写真図版42)

124は須恵器杯B蓋である。口縁部内面にかえりをもたない。

墳丘周辺包含層出土土器 (図版61-107~112・図版62-118、写真図版41)

107は須恵器杯B蓋である。口縁部内面にかえりをもたない。大井部外面は回転ヘラ切り後粗い回転ナゲが施されている。口径14.3cm、器高2.5cmを測る。108は須恵器杯である。底部外面は回転ヘラ切り未調整である。口径9.7cm、器高3.3cmを測る。109は須恵器椀である。口縁部は垂直に上方へのび、端部は丸みをもっている。底部外面は回転ヘラ切り未調整である。口径9.8cm、器高5.25cmを測る。110～112は須恵器杯Bである。111・112の底部外面は回転ヘラケズリが施され、110の底部外面は摩滅している。110は口径18.0cm、器高5.45cm、111は口径15.2cm、器高5.65cm、112は口径15.1cm、器高4.9cmを測る。118は製塩土器である。外面は摩滅している。

③平安時代以降の出土土器

柱穴出土土器 (図版62-119～123・125～128、写真図版42)

P-6からは土師器小皿(127)が出土している。成形は手づくねで、口縁部は内湾しながら上方に立ち上がる。P-10からは土師器皿(119)が出土している。口縁部は「て」の字状を呈している。口径10.0cm、器高1.7cmを測る。126は黒色土器椀である。底部にやや外側にふんばった輪高台をもっている。P-13からは須恵器椀(120)が出土している。体部はやや丸みもち、底部は回転ヘラ切りである。口径11.0cm、器高4.3cmを測る。P-28からは須恵器こね鉢(122)、土師器鍋(123)が出土している。122の須恵器こね鉢は端部が断面方形であるが、端面はやや外傾している。123の土師器鍋は口縁部がくの字に外反し、端面に面をもっている。体部外面は平行タタキである。P-43からは須恵器椀(125)、瓦器椀(128)が出土している。128の瓦器椀は、底部に低い三角高台をもっている。P-47からは須恵器椀(121)が出土している。体部はやや直線的に開き、外面に火傷を残している。底部は回転糸切りである。口径15.0cm、器高4.7cmを測る。

SK-2 出土土器 (写真図版42)

129は体部の破片のみであるが緑釉陶器輪花椀と考えられる。焼成は須恵質で、釉色は濃緑色である。近江産の可能性が高い。

SK-3 出土土器 (図版62-130、写真図版42)

130は土師器短頸壺である。口縁部はわずかに短く外反する。底部は摩滅しているため不明瞭であるが、回転台を利用して製作された土師器と考えられる。口径6.55cm、器高5.4cmを測る。

④金属器 (図版63-F1～F19、巻頭カラー図版6、写真図版43)

金属器はすべて三原1号墳横穴式石室内から出土した。

F1は耳環である。本体は銅で、表面に銀が貼られている。縦2.2cm、横2.25cm、厚0.4cmを測る。F2は大刀である。全長79.5cm、刃長68cm、茎長11cmを測る。刃部は幅3.25cm、厚0.95cmを測り、背側がやや膨らんでいる。胴部は不均等両側で、鍔が残存している。鍔は楕円形の円環で、長径3.8cm、短径3.25cm、幅1.65cm、厚0.95cmを測る。目釘孔は茎尻に近い部分で1個開けられている。茎尻は栗尻である。F3～7は刀子である。最も残りのよいF3で全長14.2cm、刃長8.7cm、茎長5.5cmを測る。胴部は大刀と同じく不均等両側で、茎尻も栗尻と考えられる。装具はF3で比較的鹿角がよく残存している。わずかに鹿角が付着するF5から見ると茎部分を薄い板で挟み、木質の素材で巻き、削り抜いた鹿の角に差し込んでいると思われる。F4・6・7でも木質の付着が認められる。F8～15は鉄鏃である。F8～F10は長頸鏃で、鏃身平面形は長三角形である。鏃身長長いF8・9と短いF10に分かれる。F8は鏃身長3.0cm、鏃身幅1.05cm、頸部長8.4cm、F9は鏃身長3.1cm、鏃身幅1.0cm、頸部長8.0cm、F10は鏃身長2.3cm、鏃身幅1.0cmを測る。F11は鏃身のみで、平面形は三角形である。鏃身長3.3cm、

縦身幅3.05cmを測る。F12～15は頸部から茎部にかけての部位で、F12・13は線状間をもっている。F8・9・12・14の茎部には木質や繊維質の付着が認められる。F16・17は鍔金具である。F16は凸字形の緑金と鍔本体との接合部で構成されている。緑金は全長7.55cm、円環部は幅4.5cmを測る。F17は接合部の緑金に巻き付く部分である。F18・19は用途不明の鉄製品である。F18は細長く薄い板状の製品であるが、片側に向かって細くなっている。F19は片側が折り曲げられている。

⑤玉類 (図版64-J1～J10、巻頭写真図版6)

玉類はすべて三原1号墳横穴式石室内から出土した。

J1は硬玉製勾玉である。胴曲部の外側がやや角張っている。長2.8cm、幅2.05cm、厚0.7cmを測る。孔は片側穿孔である。石材は白色を呈する部分が多く、筋状に透明な緑色の筋が入る。J2・3は水晶製切子玉である。平面形は六角形で、孔は片側穿孔である。J2は長1.6cm、最大径1.34cm、J3は長1.28cm、最大径1.4cmを測る。J4～9はガラス製丸玉である。青色を呈し、気泡が認められる。直径7.8～10.5mm、厚6.5～8.2mmを測る。J10は土製丸玉である。ガラス玉とはほぼ同大で、直径8.5mm、厚6.9mmを測る。

3. 小結

B地区では大きく分けると古墳時代、奈良時代、平安時代の3時期の遺構・遺物が確認された。

古墳時代に属するのは三原1号墳、竪穴住居跡、土坑である。三原1号墳は横穴式石室を内部主体とする直径約15mの円墳である。玄室内に残存していた須恵器蓋杯(70・71)はTK-217型式期である。ただし、墳丘周辺からはTK-47～TK-209型式期の須恵器が出土している。古いものは竪穴住居跡(TK-47型式期)・土坑(SK-5:MT-85型式期)に関わる可能性もあることから、初葬の時期は少なくともTK-209型式、遅ってもMT-85型式期の可能性が高い。また、横穴式石室は竪穴住居跡の窪みを利用して築かれていることも注目される。

奈良時代については掘立柱建物跡1棟(SB-1)と柱穴がわずかに検出され、三原1号墳墳丘周辺の包含層から奈良時代の須恵器が出土している。8世紀前半頃を中心とするものと考えられる。

平安時代については掘立柱建物跡1棟(SB-2)と柱穴・土坑が比較的多く検出されている。時期的には10世紀頃から12世紀頃までにわたると考えられる。

第4節 C地区の遺構と遺物

I. 遺構 (図版26・写真図版13)

C地区は、圃場整備による遺構面の削平が著しかったため、遺構の残りはよくなかったが、低位の北半部では、遺構の残存状況が比較的良好であった。検出された遺構は、井戸、土坑、柱穴等である。

SE-1 (図版27・写真図版13)

長軸2.35m、短軸1.75m、深さ1.25mの隅丸方形の掘形の中に、一辺1mの四隅に柱をおき横板を渡した井戸枠が残存していた。隅柱は面取り加工のみで横板の両側に例り込みがあり、隅柱にはめ込んでいた。奈良時代の須恵器、曲物や馬の歯が出土した。

SK-1

SE-1の西側に位置する円形の土坑である。直径1m、深さ0.13mである。遺物は出土していない。

柱穴

建物は復元できなかったが、柱穴群を検出している。

2. 遺物

P-6 出土土器 (図版65-131、写真図版44)

131は須恵器輪である。見込みにわずかな窪みをもっている。底部は回転糸切りである。

SE-1 出土土器 (図版65-132、写真図版44)

132は須恵器杯Bである。底部外面は回転ヘラ切り後ナデである。口径に比して器高が低く、口径15.95cm、器高4.0cmを測る。

SE-1 出土木製品 (図版65・66-W1~W8、写真図版44)

W1は曲物である。底板のみ残存している。底板の側面には9箇所木釘の跡が認められる。直径14cm、厚1.0cmを測る。W2は曲物蓋である。蓋板の約半分と側板が残存している。高さ17.5cmを測る。蓋板の径は19cm程度と考えられ、厚さは0.5cmを測る。蓋板と側板の結束は榫皮により4箇所程度で綴じられていると考えられ、側板の綴方は1列外4段綴じである。W3~W8はSE-1の井戸枠材である。W3~6は底部の枠材である。両端に支柱をはめ込むための削り込みがあり、上から見ると横に長い凸字形を呈している。W7は支柱である。図化は1本のみしか行なわなかったが、4本とも井戸の内側に面する角のみ面取りが施されている。上部は腐食により痩せている。W8は横板として利用された井戸側材で、最も残存状況のよいものを図化している。

3. 小結

明瞭な遺構はほぼ井戸のみである。井戸の型式は横板を用いた珍しいもので、出土須恵器から8世紀前半頃のものと考えられる。また、須恵器輪の出土から12世紀頃の遺構の存在した可能性も高い。

第5節 D地区の遺構と遺物

1. 遺構 (図版27・写真図版14)

D地区では、調査区の東側で河道を検出し、その西側肩部で古墳時代後期末の竪穴住居跡を検出した。しかし、この住居跡は、河道によって一部が削り取られている。

竪穴住居跡 (SH-1) (図版28・写真図版14)

方形の住居跡である。長辺約5.5m、短辺約5.35m、検出面から床面までの残存深度は0.3m前後を測る。この竪穴住居跡は、東側の旧河道によって一部が削り取られているため、全体の規模は不明である。主柱穴は4基で、0.22~0.45mの円形を呈し、柱間は約3m、床面中央と南東壁寄りに、焼土が認められたため、竈などの存在が考えられる。この住居跡からは、土師器壺が出土しており、古墳時代後期末と考えられる。また、この住居跡は2回以上の建て替えが認められたが、古い住居跡は、新しい住居跡によって壊されており、残存状況はよくない。

河道 (SD-1)

調査区の南から北に流れる河道跡である。幅3m、深さ0.45mで、東側の肩は後世に削平されていた。この河道は、蛇行しながら前述した竪穴住居跡を浸食している。この河道からは、古墳時代後期~奈良

時代の土器が出土している。

2. 遺物

S H-1 出土土器 (図版67-133、写真図版45)

133は土器器蓋である。口縁部は外反しながら開き、端部は尖り気味となる。体部外面はタテハケで、内部内面はヘラケズリである。口縁部の残存状況はよくないが、口径18.3cmを測る。

S D-1 出土土器 (図版67-134~140、写真図版45)

土器は竈穴住居跡に近い箇所では比較的まとまって出土している。

134・135は須恵器杯身である。受部は外反しながら開き、口縁部は短く外反しながら立ち上がる。底部外面は回転ヘラ切り未調整である。法量は非常に小さく、134が口径10.6cm、135が口径9.6cmを測る。136・137は須恵器杯である。底部外面は回転ヘラ切り未調整である。136は器高が低く、口径9.9cm、器高2.6cmを測る。137は底部が丸く、口径9.65cm、器高4.15cmを測る。138は須恵器杯Aである。口縁部は比較的内縁である。回転ヘラ切り未調整である。口径は小さく、口径10.7cm、器高3.7cmを測る。139は須恵器高杯である。脚部は低脚で、底径7.85cmを測る。140は須恵器短頸壺である。器壁は薄く、頸部から口縁部にかけての屈曲はなだらかである。残存状況はよくないが、口径8.0cmを測る。

3. 小結

南から北へ流れる河道からは7世紀前半の土器が比較的まとまって出土している。この河道に壊されている竈穴住居跡はその直前のものと考えられる。

第6節 D-2地区の遺構と遺物

D-2地区は三原谷中の北部、やや西寄りの位置にあり、D地区の北側にあたる。調査地は谷中にひろがる扇状地状の微高地の西端と埋没した旧河道にあたる。

1. 遺構 (図版29、写真図版15)

調査地発掘時の削平により遺構の残存状況はあまりよくない。基本的には耕土直下で遺構は検出された。

遺構は奈良時代に埋没した旧河道(S D-1)とその西側で旧河道が埋没した後に形成されたと考えられる集落に関わる遺構(掘立柱建物跡、土坑、溝)などが検出されているが、旧河道を除けば出土した遺物は非常に少なく、時期を特定することは難しい。

掘立柱建物跡(S B-1) (写真図版15)

旧河道の北側で検出され、旧河道を切って検出された。方位はN25° Eに棟軸方向をとり、桁行4間、梁行3間もしくは4間からなる掘立柱建物である。東側桁行方向で6.0m、北側梁行方向で4.0mを測る。柱穴掘形の平面形は円形である。柱穴から遺物は出土しておらず、時期の特定は難しい。

旧河道(S D-1)

調査区の南東部において、東西方向に大きくカーブしている。断面は逆台形を呈し、検出面における幅約6.5m、検出面からの深さ約1.5mを測る。ただし、その規模は一定ではなく、下流側ほど深くかつ幅がひろがる傾向にある。また、一部の河道斜面には杭が打ち込まれており、人為的に手を加えられて

いた。河道内の地積は、下層に若干のシルト層が認められるものの、大半は中礫を多く含む砂礫が堆積し、その上層に砂じりのシルトが堆積していた。遺物は上層から多量に出土している。

2. 遺物

SK-1 出土土器 (図版67-141)

141は龍泉窯系青磁の連弁文碗である。連弁に錆は認められない。

SD-1 出土遺物 (図版67・68-142~167、図版69-W9~11、写真図版45~47)

旧河道上層から出土した遺物は古墳時代後期のものが混じるが、多くは7世紀後半にまとまっている。

142~146は須恵器杯Aである。口縁部が外反気味の胴体が多く認められる。底部外面は回転ヘラ切りで、145以外は粗いナデが施されている。口径12cm台前半、器高6cm台後半のものが多く、やや小型の144は口径10.9cm、器高3.4cmを測る。147・148は須恵器杯である。底部外面は回転ヘラ切り木調整である。147は口径は小さく、器高は低い。内面には漆が付着している。口径11.7cm、器高3.0cmを測る。148は底部に丸みをもっている。口径10.45cm、器高3.85cmを測る。149~153は須恵器杯Bである。口径13.6~13.75cm、器高4.85~3.85cmとややばらつきがあるものの、全体的にやや大きめである。底部外面は回転ヘラ切りで、149、150、152は粗いナデが施されている。153の内面には漆が付着している。154~156は須恵器杯B蓋である。口縁部内面にかえりをもっている。155・156は天井部外面に宝珠つまみをもっている。口径は14.5~10.3cmを測る。157は須恵器低脚高杯の脚部である。158は須恵器埴瓶である。口縁部は内側に折れて上方にのびている。口径は6.55cmを測る。159は須恵器横瓶である。口縁部外面に一条の凹線をもっている。体部外面には平行タキが施され、体部内面には同心円当て具痕が残存している。口径は13.5cmを測る。160は須恵器甌である。口縁部は丸く外側に折り返されている。口径は10.7cmを測る。161~165は土師器甕である。体部外面はタテハケ、体部内面にはヘラケズリが施されている。161は小型のものである。口縁部は頸部で外側に折れて直線的に開き、頸部は丸みをもっている。口径は16.6cmを測る。162~165は長胴タイプのものである。口縁部は外反しながら開き、頸部は丸みをもっている。164・165の口縁部内面には強いヨコナデによる凹凸があり、いわゆる「青野型甕」と考えられる。口径は162が20.8cm、163が25.2cm、164が22.55cm、165が17.75cmを測る。166は土師器杯である。口縁部はやや外反し、底部外面はナデが施されている。口径は13.6cmを測る。167は管状土鍾である。長4.9cm、幅1.4cmを測る。W9・10は木皿である。口縁部は内湾しながら短く立ち上がる。口縁部内外面にロクロ目を残している。底部外面はハツリ面を残しているが、爪の痕跡は認められない。刃物による筋状の痕跡が多く認められる。W9は口径26.8cm、器高1.6cm、W10は口径26.25cm、器高1.9cmを測る。W11は木鍾である。長さ18.7cmを測る。

3. 小結

獨立柱建物跡が検出されたものの残念ながら時期は不明である。旧河道はD地区で検出されたものとは位置的にやや異なり、時期も7世紀後半とやや新しいことから、同一の河道が位置を変えたものと考えたい。また、この地区ではわずかながら13世紀以降の土器・陶磁器(141)が出土している。

遺物では漆の付着した須恵器杯A(147)、杯B(153)が出土しており、近辺に工場のようなものも存在した可能性がある。

第7節 E地区の遺構と遺物

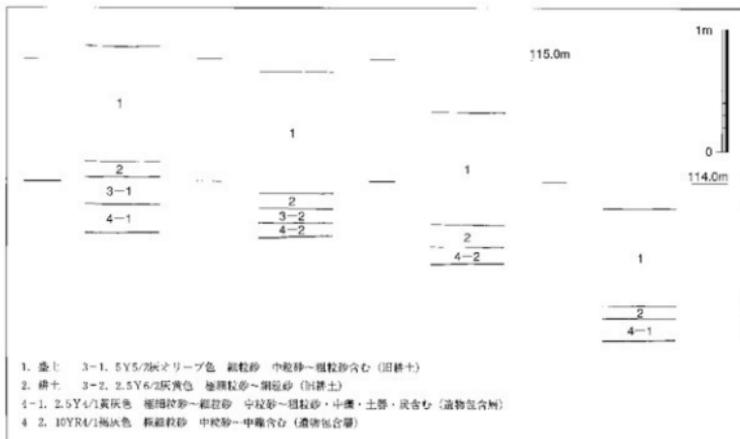
E地区は三原谷と室谷を区切る尾根先端の北東側にあり、三原遺跡調査区内では最も北西にあたる。旧地形復元図(図版3)によれば、三原谷からのびる扇状地性微高地は基本的には北側にのびているが、東半分はやや窪んで谷状地形となっており、主として西側半分に微高地の残存が認められる。E地区はこの微高地のほぼ北端部付近に位置する。また、E地区の西側には室谷からのびる埋没小支谷が北東方向に存在するようである。なお、E地区からの眺望はかなり開けており、現在の柏原町市街地のほぼ全体を南西から見渡せる位置にある。

1. 遺構 (図版30、巻頭写真図版4、写真図版16・17)

調査区内遺構面は水田構築や圃場整備などにより、階段状に削平を受けていたが、一部を除いて遺構の残存状況は比較的良好で、数多くの遺構を検出することができた。ただし、A-2地区と同様に暗渠や水路および、水田の段状削平により遺構が検出できなかった部分も存在する。

遺構面には傾斜があり、調査区内の北隅が最も低く、標高112.1m、最も高いのが調査区南辺の中央部分で、標高114.3mである。したがって、調査区内遺構面の高低差は2.2mで、平均約3.4%の勾配となっている。

基本土層は、北西側の壁で観察(第4図)した。全体に厚さ1m程度の盛土があり、その下に圃場整備後の粘土が厚さ十数cmで存在し、その下層には旧耕土と思われる第3層が南部にのみ厚さ20cm程度で存在する。その下層には第4層である黄灰色～褐灰色の極細粒砂がほぼ全体に堆積しており、この層が遺物包含層となっている。この層の厚みは約10～20cmであり、数cmまでの軟質礫(凝灰質砂岩?)を含んでいる。検出した遺構は古墳時代～奈良時代であるが、包含層を各時期に分層することはできず、全面を包含層下りまで掘削した後、遺構検出を行なったため、すべての遺構は同一面で検出したことになる。なお、遺構面となる地山は黄色系の極細粒砂となっている。



第4図 E地区北西側壁土層断面模式図

検出した遺構の時期は、6世紀代を中心とした古墳時代後期と飛鳥後半～奈良時代の前半を中心とした時期の2時期に大きく分けられる。古墳時代の遺構には竪穴住居跡17棟以上、掘立柱建物跡2棟以上、流路・土塹・柱穴があり、飛鳥・奈良時代の遺構には掘立柱建物跡4棟以上、井戸・流路・溝・土塹・柱穴がある。ほかに中世と思われる溝状遺構が2条検出された。古墳時代および飛鳥・奈良時代の遺構はかなり密集して検出されたと同時に、遺物の出土量も多い。

以下、時期別に遺構について述べることとする。

①古墳時代の遺構

竪穴住居跡1 (SH-1) (図版31、写真図版18・26・29)

調査区南部中央付近に存在し、西辺がSH-2と重複し切られている。本住居跡の北辺～北東部にかけたの壁は削平により検出することができなかった。本住居は隅丸方形で、規模は東西3.7m、南北4.3m、壁の高さは最も残りのよい部分で20cmであった。床面には主柱穴と思しきものを2～3箇所で見出したが、確實と考えられるものは1基に限られる。また、床面で須恵器杯(169・170)および土師器壺・高杯破片ならびに台石(S8)を検出している。須恵器杯はMT-15型式期後半頃と思われる。

南側壁の中央では、造り付け竈の燃焼部・阿袖部を検出した。燃焼部に埋積した土層の中層上面から土師器壺、竈西横から土師器杯を検出した。

竪穴住居跡2 (SH-2) (図版32、写真図版18・26)

SH-1の西側で一部重複して存在する隅丸方形の住居跡で、東部は削平、北壁は近世以降の溝により残存していない。全体に歪な方形を呈し、壁面も残りが悪く、高さも最大10cmであった。平面規模は東西4.4m、南北は推定で4.3mとなろう。床面では数箇の柱穴を検出したが、本住居跡に伴うと考えられる主柱穴は北側の東西方向の2個である。柱芯間距離は2.80mを測る。床面からTK-10型式期と思われる須恵器杯蓋片(172)を検出している。なお、竈は検出していない。

竪穴住居跡3 (SH-3) (図版33、写真図版18・19)

調査区北西壁ぎわ中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居跡である。各壁面が方位とはかなり振れているので、竈が存在する壁を西壁として記述する。住居跡南壁のほとんどは近世以降の溝により切られてしまっているが、南東隅でかろうじて隅を検出することができた。それによると、東西5.1m、南北5.2mの規模となる。壁面の遺存状況はあまり良好でないが、東西壁の南寄りでも最も残りがよく、高さ12cmであった。床面では柱穴および土師器・須恵器を検出し、数多くの土器を図示することができた。また、図示した以外に槌瓶と思われる須恵器片も出土している。須恵器ではTK-10型式期からMT-85型式あたりの時期と思われる。床面で見出した柱穴のうち、主柱穴と判断できたものは3本で、南東隅の1本は不明となっている。柱芯での柱間隔は東西2.38m、南北2.52mである。なお、北東部分で周壁溝らしき溝を検出したが、全周しないなどの理由により、断定は避けたい。また、本住居跡はSB-2や中世の溝SD-5と重複している。

竈は西壁のほぼ中央で燃焼部および阿袖部を検出した。竈はやや外側に寄りすぎている観がある。また支脚と思われる、上方が平らで棒状の自然石を検出した。燃焼部に溜まった土中からは、土師器壺片がわずかに出土している。

竪穴住居跡4 (SH-4) (図版34、写真図版20)

調査区中央部の南寄りで見出した隅丸方形の竪穴住居跡で、北壁はSH-7と重複し切られている。本住居跡の遺存状況は比較的良好で、壁は15cm程度の高さで残存し、住居跡の埋土に多量の炭化材を含

んでいた。しかし、柱材と思われるようなものではなく、屋根部材などが落ち込んだようなものとは認められなかった。また、遺物は須恵器の杯などを中心に南半部で多く検出され、特に西壁中央部では甕や杯などが集中して検出された。これらの土器は床面に直接おいてあったものがそのまま埋まった状況ではなく、埋没の過程で入れられたと判断できるような状況であった。須恵器が普及時代はTK-47型式期後半からTK-10型式期と判断される。

南壁の東部では火を受けている部分が見受けられ、袖部と思われる部分も1箇所検出していることから、竈と考えている。明確ではないが、検出した片方の軸は竈の東軸の可能性が高い。なお、床面北東部で火熱を受け、赤変している部分が存在する。

3箇所です柱と考えられる柱穴を検出した。柱芯間で東西1.95m、南北2.46mを測るが、やや重なり合っている。住居跡の規模は東西4.2m、南北3.8m以上であるが、柱穴の位置から判断すると推定4.9mの南北長になるものと思われる。

竈穴住居跡5 (SH-5) (図版35、写真図版21)

SH-4の南東で検出した竈穴住居跡で、大型のSH-6の中にすっぽりとおさまるが、方向を異にし、SH-6よりも新しく構築されている。本住居跡も方位とは約45°振れているため、周壁溝が検出されなかった壁を北壁として記述する。残存状況はやや良好で、周壁溝も3辺で認められた。南北方向にやや長い隅丸方形を呈し、南北6m、東西5mの規模である。壁高は約15cm遺存していた。主柱穴は4本検出したが、住居跡中央よりやや南に寄っている。南北方向の柱芯間では2.91mと2.70m、東西方向では2.22・2.07mを測る。住居跡中央部分のやや北寄りには約1.3m×1.1mの範囲に炭泥じりの焼土面が検出されたことから、屋内炉跡と考えられ、竈は検出されなかった。本住居跡はSH-6の床面をさらに約10cm掘り窪めている。

埋土から須恵器杯類・甕・高杯脚部、土師器甕・高杯脚部などが多数出土しているが、細片が多い。須恵器ではMT-15型式期あたりからTK-217型式期頃までの破片があり、細片ではTK-23・47型式も認められる。

竈穴住居跡6 (SH-6) (図版35、写真図版21・29)

SH-5に重複し先行する大型の方形住居跡である。北壁および東西壁はほぼ確定できたが、南壁については歪な形状を示し、不確定な部分が多い。現状では、東西8.7m、南北7.7mの規模である。住居跡の遺存状況は悪く、検出面からわずか7cmの高さしか残っておらず、竈も検出されなかった。ただし、焼けた粘土が付着した土師器甕の破片が出土していることから、竈の存在を彷彿させ、削平により消滅した可能性がある。主柱穴は3箇所検出できた。柱芯間は東西4.44m、南北3.26mを測り、住居の中央よりもやや東に寄っている。

本住居跡からの出土遺物はわずかであり、埋土から須恵器蓋のつまみ片のほか、MT-15型式～TK-10型式頃の杯身片や土師器細片が出土したのみである。また、南西の主柱穴から土師器甕の上半部(217)が出土している。

なお、SH-5にもかかるかたちで東壁際に土壘5 (SK-5)が存在するが、出土須恵器(218・219)の時期により、本住居跡に伴うものの可能性が高い。

竈穴住居跡7 (SH-7) (図版36、写真図版17)

調査区のほぼ中央にあり、SH-4・17と重複し、それらを切るかたちで存在する隅丸方形の大型竈穴住居跡である。水田構築の際に北側が大きく削平され、ほぼ全体の3分の1程度が遺存しているにす

がない。規模は東西8m、南北は4.3m以上であり、壁の高さは検出面から12cmを測る。主柱穴は東西南方向のものを3箇所で見出した。柱芯間は2.55m、2.30mである。竈は検出していない。

埋土からMT-13型式の須恵器杯蓋(220)のほか杯や甕などの細片、古墳時代の土師器破片が出土している。

竈穴住居跡8 (SH-8) (図版37、写真図版21・22)

調査区の南東端近くに位置し、北西側壁がSH-16と重複し切られているが、北東側壁は水田構築時の削平からかろうじて免れている。今回検出した竈穴住居跡のなかでは最も保存状態がよく、検出面から床面までの高さが約50cmを測る。SH-16と重複する壁を北壁として記述すると、住居跡は東西7.4m、南北6.5mの規模となる。床面から柱穴を9箇所で見出したが、主柱穴は4本で、掘形も67cmと深いものが多い。柱芯間は東西4.28・4.18m、南北3.68・3.60mを測る。

北壁の中央部に竈が作られており、上部はSH-16の削平を受けていたが、竈上部で留まっており、竈煙道部以外はほぼ空容を確認できた。ただし、袖部については調査時に住居跡埋土とともにその大部分を掘削してしまった。竈は住居跡床面を深さ5cm程度掘り窪めたのち、軟質礫を含んだ、10YR7/2にぶい黄棕色の細粒砂を約10cmの厚さで敷き、その上に本体を構築している。したがって、竈燃焼部底部は床面よりも5cm程度高くなっている。なお、燃焼部の埋土から、炭化材のブロックが検出された。

本住居跡の埋土から数多くの須恵器・土師器片が出土しているが、須恵器はTK-10型式期～MT-85型式併行期のものである。

竈穴住居跡9 (SH-9) (図版38)

調査区の南東端で一部を検出し、大部分は調査区外にあたるが、工事により破壊されている。SH-8とはほぼ同一方向の隅丸方形竈穴住居跡と思われ、北壁と西壁の一部が残存していた。東西4.8m以上、南北2.1m以上で、西壁では高さ約20cm遺存していた。床面から柱材と考えられる炭化材が出土しており、火災住居の可能性もある。調査範囲内では柱穴や竈は検出されなかった。埋土からTK-10型式期と思われる須恵器蓋(239)が出土している。

竈穴住居跡10 (SH-10) (図版39、写真図版22)

調査区南東隅近くで検出した隅丸方形の竈穴住居跡である。上部の削平が著しい場所に存在するため、壁面が明瞭に残っている部分は多くなく、また、ごく一部のみ調査区外にかかる。検出面から床面までの深さは5cmしかなく、周囲や床面には重機のキャタピラー圧痕が残っていた。住居跡の方向はSH-8・9・16などとほぼ同一であり、南北7.2m、東西6.6mを測る。床面には多くの柱穴と小溝を検出した。小溝のうち、「L」字形のものは間仕切りのための施設である可能性が考えられるが、小溝を覆うかたちで焼土が検出されているため、検討を要する。内部および周囲に杭状の穴が検出された。主柱穴は4本と考えられるが、西側のみ3本柱列も別に存在する。4本の場合の柱芯間は南北4.18・4.03m、東西3.55・3.08mで、西側の3本柱列を採用すると、南北柱間が2.00・1.88mで、東西は3.90・3.73mとなる。この住居跡の竈は検出されなかったが、北側壁中央付近の焼土が竈の存在を示す可能性がある。

住居跡内からTK-10型式期～MT-85型式併行期の須恵器(241～243)のほか、壺・甕小片や土師器破片も出土しており、柱穴からは須恵器杯片が検出された。

竈穴住居跡11 (SH-11) (図版40、写真図版23・24・29)

調査区中央のやや東寄りで見出された方形の竈穴住居跡で、やや歪であるが、北側と東側に屋内高床部をもつと判断した。北側高床部は1.2m程度と幅がひろく、東側は0.6m程度と狭い。なお、本住居跡

と重複するようなかたちで南西側にずれて存在する、1辺5.5m程度の方形竪穴住居跡状の浅い落ち込みがあり、確定はできないものの、竪穴住居跡の可能性が高いことから、SH-11-2としておく。

SH-11の検出面から高床部までの深さは10cm、高床部と床面の高さの差も10cmである。規模は東西4.3m、南北4.8mで、その内側に東西3.6m、南北3.5mの床面がある。主柱穴は4本と思われるが、3箇所のみ検出した。柱芯間で東西1.95m、南北1.80mを測る。床面の北東部に寄っている。

西壁のやや北寄りに竈が造り付けられており、遺存状況は良好であった。竈は重複して2基検出され、下層竈を埋めた上に、粘土を貼り付けて上層の竈が構築されているが、下層竈の中心よりもやや北にずれている。灰層などの堆積状況から、下層竈の使用期間の方が長いように思われる。上層竈では焚口で板石(S1)、両袖で立石(S2・3)が検出された。板石は両袖の立石に渡ってあったものが割れて落ち込んだもので、これらは焚口の天井部分および両袖部分を補強する機能をもつものであったと考えられる。用いられている板石は、鉄平石と地元で呼ばれている石で、両袖石は流紋岩とみられる。両袖を石で補強する例は、袖内塗り込み、袖外を問わずいくつかの類例があるが、焚口天井部の補強に石を用いる方法は近隣では見かけないようであり、中部地方などで類例が多く認められる。板石を産出する当地域での自然発生的構造であるのか、遠く離れた地域からの伝播としてとらえるのか意見の分かれるところであろう。竈燃焼部の中央からは石製支脚(S4)が斜めに立った状態で検出され、凝灰質砂岩と思われる自然石を加工せずに用いている。この上に掛け口が存在していたことがわかり、その位置は燃焼部中央よりも約20cm奥側にあたる。電煙道部は削平により遺存していなかったが、燃焼部最奥から急に立ち上がったのち、ふたたび傾斜角度を緩めて煙道部にいたる。なお、燃焼部に堆積していた層から土師器破片が検出されている。

住居跡埋土からMT-85型式併行期～TK-43型式期の須恵器杯などや土師器壺・高杯などが出土し、竈左(南)袖の南からも同時期の須恵器蓋(246)が出土している。また、竈北側の高床部上から床面にかけて土師器壺2点(255・256)とMT-85型式併行期の須恵器杯(250)などが原位置と思われる状態で出土したほか、床面から台石2点(S5・6)を検出した。

SH-11-2は南北5.6m、東西5.4mの規模で、検出面からの深さは5cmとわずかである。周壁溝が存在するようであるが、確定できない。西壁に沿って柱穴を2本検出した。柱芯間は3.39mで、主柱穴の可能性が高い。本住居跡とSH-11の前後関係は、SH-11の竈補強石の高さがSH-11-2の床面よりも高いことから、本住居跡が先であったと判断されるが、遺物が出土していないためその時期は不明である。

竪穴住居跡12(SH-12)(図版40、写真図版23)

SH-11の北東側に重複して存在する、方形と思われる竪穴住居跡である。SH-11-2とも重複している。住居跡と判断したのは南東隅で焼土を検出したためである。1m×0.8mとひろい範囲に炭を含んだ焼土面が平面的にひろがることと、5cmとわずかながら壁状に直線的な落ち込みを検出したことによる。東西4.5m、南北3.2m以上の規模で、埋土から遺物は検出されなかった。

竪穴住居跡13(SH-13)(図版38、写真図版24)

SH-12の東側に位置する隅丸方形の竪穴住居跡である。東側が近世以降の水路によって大きく削平を受けているのと同時に、西側も上部が削平され、周壁溝のみ遺存していた。周壁溝も柱穴により分断されているところが多い。平面規模は南北3.7m、東西1.8m以上である。主柱穴と思しき柱穴を1箇所のみ検出でき、周壁溝の南西隅から須恵器杯(263)が出土した。竈は検出できなかった。

竪穴住居跡14 (SH-14) (図版41、写真図版25)

調査区北部で検出した方形竪穴住居跡で、削平や土壌と重複しているため、北壁全体および東西壁の北端が不明となっている。しかし、4本の主柱穴を検出できたため、南北の規模を推定することができる。それによれば、南北4.8mと推定でき、東西は5.2mの規模である。壁高は南壁で約15cm遺存していた。柱芯間は南北2.14・2.06m、東西2.44・2.34mで、壁から1.4m内側に平均して設置されている。周壁溝が南東部分でのみ検出できたが、全周していたかは不明である。住居跡床面は北側では削平を受け、周壁溝が途切れるあたりから北側では、床面が存在しない部分が多い。

南壁中央のやや西寄りに竈が存在し、西側袖を検出できた。燃焼部の位置に柱穴が重複しているため燃焼部の詳細は不明である。竈の構築には他の大半の住居跡と同様、地山の粘質土を使用している。住居跡北壁際中央で焼上面を検出した。

南西隅の主柱穴柱痕内からTK-47~MT-15型式の須恵器蓋(264)のほか、床面から土師器甕(265)や把手、台石(S7)が出土している。東側周壁溝の上や住居跡埋土から須恵器杯B(266)や杯Aが出土しているが、すぐ北側の掘立柱建物跡に関連するものと思われる。

竪穴住居跡15 (SH-15) (図版42、写真図版25)

調査区北端部に位置する方形竪穴住居跡で、北壁は削平により遺存していない。床面中央に4本の主柱穴を検出した。これらは壁から約1.3m内側にあり、壁からの距離はほぼ同じである。柱芯間は南北1.80・1.56m、東西1.68・1.56mを測る。住居跡の規模は東西4.4m、南北は現存4.1mであるが、推定4.3mになると思われ、ほぼ正方形を呈するようである。壁は南側が最も良好に遺存しており、検出面からの高さは16cmであった。南壁にのみ周壁溝状の細い溝を検出したが、断定できない。また、南壁中央で火を受けた部分がみられ、竈が存在していたものと考えているが、検出できなかった。竈と思われる部分の内側には細い溝が存在していた。

住居跡埋土中から須恵器蓋のほか土師器杯・壺・甕の破片が出土しているが、細片のため詳細な時期は不明である。

竪穴住居跡16 (SH-16) (図版43・44、写真図版21・25・29)

調査区南東部、SH-8・9の西側に存在し、それらと方向を同一にする大型方形竪穴住居跡である。南側はSH-8と重複し新しく作られている。北側もSH-17と一部重複している可能性が高いが、前後関係は不明である。

南北8.6m、東西8.4mの規模で、壁から約1.8m内側で、主柱穴を4本検出した。壁から柱列までの間隔は各壁ともほぼ平均している。柱芯間は南北4.71・4.83m、東西4.59・4.29mを測る。住居跡は検出面から床面まで12cmで、他の数多くの柱穴等や近世以降の水田暗渠とも重複しており、遺存状況は良好とはいえない。部分的に周壁溝らしき溝を検出している。竈は検出されなかったが、北壁付近の中央やや東寄り焼上面が存在した。焼上面北端は北壁から約60cm離れており、位置的に竈の燃焼部と考えてもよいようである。また、焼土の東側で土師器甕、西側で礫が集中して検出されていることから首肯されよう。

床面から出土した遺物には、TK-43~TK-209型式期の須恵器杯(269)・高杯(270)や土師器甕(282)があり、北西隅主柱穴の柱痕から同時期の須恵器蓋(277)、南東隅主柱穴から須恵器壺片、他の柱穴のうち、P-80の柱痕から須恵器壺(279)・杯(278)、P-83から須恵器の蓋と思われる破片2点(280・281)および住居跡埋土からMT-85型式併行期~TK-43型式期の須恵器杯身(268)・蓋(267)

のほか、奈良時代の須恵器杯A(273)・蓋(271・272)などが出土している。

なお、SH-16の西側で検出した方形住居跡とも思われる遺構があるが、調査時には堅穴住居跡とは判断できなかった。ごくわずかにSH-16と重複している部分が認められるようであるが、先後関係は不明である。東西6.6m、南北3m以上で、北西端はSH-7に切られ、北部は水田構築により大きく削平されている。検出面から床面までの深さは西壁で約20cmあるが、そのほかでは5cm以下である。床面から数個の柱穴を検出したが、主柱穴と認定できるものはなさそうである。また、床面もはつきりとは認定できず、凹凸も多い。床面中央南部で焼上面を検出しているが、奈良時代の須恵器蓋(276)が出土していることから、堅穴住居跡とは関係ないものと思われる。また、東端のP-1025の掘形から須恵器壺の口縁部(283)や土師器焼片、西端のP-77の柱痕から土師器細片が出土しているが、本住居跡に伴うかどうか不明である。以上のことから、堅穴住居跡とは断定する材料には乏しいが、SH-17と呼称して報告する。

掘立柱建物跡5(SB-5)(図版46、写真図版17)

調査区東部に位置し、SH-11・12と重複して存在する。奈良時代のSB-1~4が主軸方向をほぼ揃えるのに対し、SB-5・6は方向をかなり異にしていることと、堅穴住居跡の壁方向に近いことおよび、柱穴から出土したのは古墳時代の遺物のみで、奈良時代の遺物が出土していないことにより、古墳時代の遺構と判断した。

南および東の柱列を検出したのみであるが、東西4間、南北3間が確認できた。主軸方向はN67°Eで、東西柱列での総柱芯間は6.94m、南北柱列での総柱芯間は4.22mを測る。東西柱列の各柱芯間は1.70~1.78mで平均1.75m、南北柱列では1.22~1.57mで中央柱間が狭い。したがって、建物の桁方向は東西と考えられる。柱穴の直径は36~50cmで、楕円形のものも存在する。柱痕は直径16~28cmである。本建物跡の方向はSH-5・8・10・13・15の壁方向に一致もしくは近いことが注意される。

柱穴p2からは古墳時代の須恵器杯蓋(316)と土師器焼片が出土し、TK-47~MT-15型式期と思われる。また、p1からも古墳時代の須恵器杯・土師器壺などの細片が出土し、p3からは土師器焼片が出土している。奈良時代の出土遺物は全く認められず、その他の柱穴では遺物は出土しなかった。柱穴出土土器からみると、SH-11構築以前であったことが判断できる。

掘立柱建物跡6(SB-6)(図版47、写真図版17・25・29)

調査区内北部のSH-14の西に接するかたちで存在する、N35°Eに主軸方向をもつ4間×2間と考えられる掘立柱建物跡である。内部に柱穴が存在することから、総柱の可能性が高い。主軸である桁方向の南側柱列での総柱芯間は5.12m、北側では4.66mを測り、北側が狭い。梁方向の西側での総柱芯間は3.32m、東側は3.00mで、東側が狭い。桁方向側柱での各柱芯間は1.00~1.47mで平均1.25m、梁方向側では1.43~1.68mで桁柱間が狭い。柱穴の直径は30~50cm程度でほぼ円形である。柱痕は直径10~28cmである。本建物跡の方向はSH-1・3・4・6・7・11・12の壁方向に一致もしくは近い。

柱穴p1から古墳時代の須恵器杯身片が出土したが、詳細な時期は不明である。p2では柱痕内に板石が集中し、p3では柱根が遺存していた。その他の柱穴では遺物は出土しなかった。

その他の柱穴(図版30)

調査区内では非常に多くの柱穴を検出したが、住居跡や建物跡以外の柱穴で、古墳時代の土器が出土しているものがある。ここでは掘立柱建物跡として組み合わなかったものを述べる。

柱痕および柱穴上面から出土しているのは、P-14・18・27・30~32(366)・37・39~42・44~46・

49 (368)・52・55-57・59 (掘形からも出土)・60-62・64-67・79・84・86・87・95・102・1004・1015 (370)・1028・1030で、P-59では掘形からも出土している。

一方、柱穴掘形から古墳時代の土器が出土しているのは、P-1005 (362)・1006 (363)・1008・1009・1011・1012・1017 (365)・1020・1021・1026・1027・1031・1032・1034・1035 (367)である。

これらからの出土土器のうち、MT-15型式期前後の土器は、18・31・42・44・62・65・1005・1011・1017・1030・1032から出土し、MT-85型式併行期～TK43型式期前後の土器は32・37・49・52・57・59・66・67・1004・1008・1031から、TK-209型式期前後の土器は30・39・60・61・79・95・1015・1026・1034・1035において出土している。なお、P-71の掘形から土師器甕 (364) が出土しているが、奈良時代の製埴土器や土師器の細片も出土しており、時期が下がる可能性がある。

流路1 (SR-1) (図版30・44、写真図版27)

調査区北西隅で検出した流路の一部分である。その大半は調査区外にひろがっている。図版3の等高線図によると、流路はE地区の北西側に存在するようで、北東方向に流れるものであり、調査区内ではおそらく入江状の屈曲部の一部が検出されたものと考えられる。長さ14.8m、幅4.9mにわたって検出し、肩は平面弧状を呈している。流路内には、石組の堤が構築されており、幅0.8m、長さ3.1mにわたって検出できた。北西端ではその幅を1.6mとひろげ、調査区端を越えてさらに続くが、南東部では東肩に接さず途切れている。東部で断ち割ったところ、特に丁夫もなく平積みされ、それほど丁寧に構築されたものではなさそうである。ただし、北西端では多重積みされ、堅固なつくりとなっている。水流の方向にはほぼ直交することから、堰と考えられる。石組の隙間から古墳時代の須恵器杯片 (288・290) が出土し、流路の東肩では古墳時代と奈良時代の土器が溜まっていた。須恵器では杯身 (284～289・293・294)、杯蓋 (295)、甕 (291・292) のほか、紡錘車 (296)・長頸壺・提瓶・高杯があり、土師器では焼片が少量出土した。この流路と堰は古墳時代後期には存在し、奈良時代にも存続していたことが窺える。

土壙1 (SK-1) (図版45、写真図版18)

調査区南端部中央で検出した平面三角形に近い形状の土壙で、長軸2.7m、短軸2.1mの規模で、深さは約30cmを測り、断面は皿状を呈し、底はほぼ水平である。埋土中から須恵器杯身 (297～301) および土師器甕 (302・303) が出土している。TK-10型式期からTK-217型式期まで認められるが、大きな破片が出土しているのはTK-10型式期と思われる。

土壙4 (SK-4) (図版30、写真図版18)

SK-1の北側に存在する垂なり形状の土壙で、2基が重なり合ったものようである。北端は攪乱により切られている。東西2.4m、南北1.8m、深さは約20cmで、底はやや丸い。須恵器細片と土師器甕の口縁部 (308) が出土している。

土壙5 (SK-5) (図版35、写真図版21)

SH-6に伴う貯蔵穴とも判断される楕円形土壙である。暗渠により半分が壊されているが、長軸1.2m、短軸0.7m程度で、深さは検出面から約15cmを測る。土壙の東壁に接して須恵器杯 (218・219) が出土しており、MT-85型式併行期頃。土師器杯も出土している。

土壙6 (SK-6) (図版45、写真図版17)

調査区北東部でSH-14と一部重なるかたちで検出した溝状の土壙である。東西の長さ5.9m、南北の幅は中央で2.3m、西端で3.6m、深さは約50cmであるが、底の形状は歪になっている。土壙埋土中より須恵器杯 (304～306) が出土している。TK-217型式期と思われるが、SH-14出土土師器甕の詳細

な時期が不明であることから、先後関係は不明である。この土壌が埋まったのちP-1015・1035が掘り込まれており、P-1015内からは須恵器杯底部(370)、P-1035は位置不明だが、掘形から369の須恵器杯身が出土しており、ともにTK-217型式期と思われる。

土壌7 (SK-7) (図版30、写真図版17)

SK-6の北側に存在する小さな土壌で、円形と長方形の土壌が重なり合ったような形状を示す。南北の長軸1.1m、短軸0.9mで、深さは15cm。須恵器壺の口縁部(307)が出土している。

溝2 (SD-2) (図版30)

SH-5・6の南西隅でそれらに切られる形で存在する重なり合った溝状の溝である。長さ4.2mにわたって検出し、幅は0.5~1.6m、深さは約10cmと浅い。TK-47型式期と思われる須恵器杯蓋(360)や須恵器壺口縁部(361)や微量の土師器が出土している。

溝4 (SD-4) (図版30、写真図版18)

SH-4の南西側に位置する溝であるが、土壌と呼ぶべきかもしれない。長さ2.6m、中央での幅0.8m、深さ20cmで、埋土は2.5Y5/3黄褐色のシルト質極細粒砂である。須恵器壺片と土師器が出土している。

②飛鳥・奈良時代の遺構

掘立柱建物跡1 (SB-1) (図版48、写真図版26)

調査区南西部、SH-1・2と重複して存在する南北3間、東西2間の掘立柱建物跡で、桁方向はN6°Eにとる。南側には扉と思われる2間のSA-1を付属施設とする。

桁方向の総柱芯間は、東側で5.90m、西側で5.85mを測り、ほとんど同じである。梁方向の北側では3.39m、南側では3.54mで、北側がやや狭い。桁方向側柱での各柱芯間は1.47~2.22mで平均1.93m、梁方向側では1.62~1.80mで平均1.74mと梁間が狭い。柱穴の直径は30~60cm程度で円形と楕円形がある。柱痕は直径20~30cm程度である。

南東隅の柱穴p1の柱痕から奈良時代の須恵器、掘形から古墳時代後期の須恵器壺片が出土し、西側柱列のp2・3の柱痕からは土師器片が出土しているが、いずれも図化不可能な細片であった。

SA-1は当初庇と考えていたが、SB-1との間が1.89m・2.16mと東西で揃っていないことから、扉と判断した。各柱芯間は1.62・1.92mで、総柱芯間は3.54mを測る。中央のp1柱痕から飛鳥時代と思われる杯Gの細片が出土している。なお、南側に溝状遺構が存在するが、時期・機能は不明である。

掘立柱建物跡2 (SB-2) (図版49、写真図版16)

調査区北西部に位置し、SH-3と重複して存在する、南北3間、東西2間の掘立柱建物跡で、桁方向はN21°Eである。東西両側柱の北から2番目は、水田に伴う水路により破壊されている。

桁方向の総柱芯間は、東側で6.30m、西側で6.36mを測り、ほぼ同じである。梁方向の北側では4.00m、南側では4.10mで、こちらもほぼ同じとなっている。南側中央の柱穴は内側に入り込んでいる。桁方向側柱での各柱芯間は2.12・2.17m、梁方向側では1.95~2.09mで、平均2.03mと梁間がやや狭い。柱穴の直径は40~50cm程度で、重なものも存在するが、ほぼ円形である。柱痕は直径20cm程度である。本建物跡の方向は、本地区の飛鳥・奈良時代建物の中では最も東に振れている。

南東隅のp1から飛鳥IV期と思われる須恵器杯(309)、南西隅のp2柱痕から須恵器細片、p3柱痕からは土師器細片と製塩土器、p4柱痕からは須恵器杯蓋(310)のほか土師器細片と製塩土器、掘形からは土師器片数十点と製塩土器、p5柱痕から須恵器杯蓋(311)、p6柱痕からは須恵器壺口縁部(312)と製塩土器・土師器片が約20点出土している。

掘立柱建物跡 3 (S B-3) (図版50、写真図版16)

調査区南西部に位置し、S B-1の西隣に存在する掘立柱建物跡で、南北3間、東西2間と思われるが、東部は水田に伴う水路の掘削により失われている。桁方向はN16°Eであり、S B-4とはほぼ同一方向となっている。西側には塙と思われる3個の柱列(S A-2)がほぼ平行に走っている。建物跡部分は西側も含めて、浅い溜り状を呈し、奈良時代の土器が出土している。

建物跡の桁方向の総柱芯間は西側で6.33mを測る。梁方向の南側では4.08mである。桁方向側柱での各柱芯間は2.03~2.25mで平均2.11m、梁方向側では1.95~2.04mで梁間がやや狭い。柱穴の直径は35~40cm程度のほぼ円形で、柱痕は直径20~25cmである。

S A-2は建物とは約1.1mの距離をおいて西側に存在する。北端は建物の北側柱列と揃っているが、南側柱列まではのびていないようである。各柱芯間は1.93・2.08mで、総柱芯間は3.98mを測る。

P-2柱痕からは製塩土器片および須恵器片、P-4の柱痕・掘形両方から製塩土器片、P-5柱痕からは須恵器杯片と土師器細片が出土している。いずれも奈良時代と思われる。S A-2では、P-6の柱痕から須恵器焼口縁部(315)のほか、須恵器杯や製塩土器片が出土し、P-3柱痕からは須恵器杯蓋が出土している。なお、本建物跡とは直接関係ないかも知れないが、P-1の柱痕からは飛鳥時代末~奈良時代前半と思われる須恵器杯A(313)とともに須恵器高杯脚部(314)が出土している。

掘立柱建物跡 4 (S B-4) (図版51、写真図版17・25)

調査区北端付近に位置し、S H-14・15と一部重複する。北側柱列は確認できず、東西側柱列で位置ずれが認められるが、南北4間、東西3間の規模と思われる。桁方向はN14°Eである。

現状での桁方向の総柱芯間は、東側で5.46m、西側で4.96mを測り、梁方向の南側では3.40m、ちなみに北側では3.78mである。桁方向側柱での各柱芯間は1.14~1.59mで平均1.32m、梁方向側では1.00~1.36mで平均1.13mと梁間が狭い。柱穴の直径は30~40cm程度でほぼ円形である。柱痕は直径17~22cmである。一部の柱穴から土師器細片が出土したが、時期は不明である。

その他の柱穴 (図版30、写真図版29)

調査区内では古墳時代の柱穴以外にも非常に多くの柱穴を検出したが、建物跡以外の柱穴で、奈良時代の土器が出土しているものがある。今回判断した以外にも掘立柱建物跡が存在していたと思われる。

飛鳥~奈良時代の土器が出土している柱穴のうち、柱痕から出土しているのは、P-7・9・10・13・15・16(371・372)・17・20(369)・23・28・47・51(374)・70(375)・72(373)・89(379)・91・98・101・110(380)・1001で、須恵器の杯・甕類、土師器杯・甕類のほか、製塩土器が認められる。また、P-1001では柱痕から須恵器杯、掘形から製塩土器・土師器が出土し、P-70では掘形から古墳時代の須恵器甕も出土している。一方、P-51では須恵器杯Bのほかにも中世の土鍋も出土しているが、すぐ西側に中世溝が存在すること他に中世に属する柱穴が認められないことおよび、柱痕からの出土であることから、流れ込みと判断したい。

掘形から出土しているのは、P-1018・1022(377~378)・1023(376)・1036で、須恵器杯類・土師器甕・製塩土器などがある。

これらの出土土器は飛鳥時代~奈良時代中頃の所産と思われる。

土壌(井戸) 3 (S K-3) (図版52、写真図版28)

調査区中央西寄り検出した平面円形の土壌で、調査の過程で井戸と判断した。検出面での規模は、長軸1.47m、短軸1.24mの楕円形に近く、検出面からの深さは1.2mを測る。掘削は地山の砂礫汚水層に

達しており、底面はほぼ水平で、一辺85cm程度の隅丸方形を呈する。埋土上面から約50cmの深さまで「U」字状に角・円礫および須恵器・土師器が非常に密に詰まっており、埋土下半では灰色の柔らかめの土が堆積し、木製品を含んでいた。なお、井戸枠は検出されなかった。

出土土器には墨書を含む須恵器杯蓋(317~321)をはじめ、後碗を含む須恵器杯A・B(322~338)、須恵器壺甕類(339~342)、土師器甕類と製塩土器(343~346)のほか、須恵器高杯などが非常に多く出土している。平城宮Ⅲを中心とした時期と判断される。木製品では、釣瓶として使用されていたであろう四方軋びの箱(W12~W14)のほか、独楽状木製品(W15)や松明(W16~W17)・棒(W18)がある。

土壇2(SK-2)(図版30)

SK-(井戸)3の北側に位置する、方形と思われる土壇で、水田構築によって北半分が削平されて残っていない。検出面からの現状では、一辺85cm程度、深さは10cm程度で、底面はほぼ平らである。

埋土中より奈良時代の須恵器杯Bや土師器甕の細片が出土している。

溝1(SD-1)(図版53、写真図版16・27)

調査区西端に位置し、西側は2条に分かれて調査区外に続いている溝状の遺構で、長さ5.9mにわたって検出した。検出面での幅は、東側で約1.7m、西側では約0.8mを測り、東側の深さは約25cm、西側では約18cmである。溝が2条になる東側で、1.2×0.8mの範囲に炭片とともに土器が集中して埋土上層から出土した。埋土上層は2.5Y4/1.4黄灰色の極細粒砂~細粒砂で、下層は2.5Y5/1黄灰色の極細粒砂であった。遺物の出土状況から、溝よりも廃棄土壇に近い機能を考えるべきかもしれない。また、この溝が堀立柱建物跡の東西方向に合っていることも注意を要すると思われる。

出土した土器には、平城宮Ⅱ~Ⅲと思われる須恵器杯類(347~352)や製塩土器(353~359)のほか、須恵器や土師器の葉片などがある。

③中世の遺構

溝3(SD-3)(図版30、写真図版17)

流路1が埋まった後に存在する溝状遺構で、北西方向にのびるが、徐々に浅くなって消滅している。幅60cm、長さ約5mにわたって検出した。最も深い東端での深さは約50cmで、北西流すると同時に溝上面も徐々に低くなっている。埋土から奈良時代の須恵器杯・葉片のほか、中世葉片も出土している。

溝5(SD-5)(図版53、写真図版16・18)

調査区西方、SH-3と一部重複して存在する、幅約60cm、深さ15cm程度の南北方向の溝状遺構で、長さは4.2mである。北端は2条に分かれるが、水田構築によって削平されている。溝底に接するかたちで、ほぼ全体に多くの角礫が入っている。南端では土壇状にひろがるが、そこでも礫が認められる。これらの礫の機能は不明である。礫中から神出産と思われる須恵器葉片が出土している。

2. 遺物

①遺構出土の遺物

SH-1出土遺物(図版70-168~171、図版73-S8、写真図版48・56)

168は須恵器杯蓋で、口縁部は凹面をなすが、天井部と口縁部境の外側の段は認められない。ロクロ回転は左方向である。須恵器杯身(169~171)は口径11.8~12.8cmで、ロクロ回転は右方向である。170以外の立ち上がり部は内上方に長くのび、端部に面をもち、器壁が厚いことが特徴である。杯身ではMT-15型式の特徴を示すが、蓋は新しい傾向を示す。なお、169の底部外面にヘラ記号を有する。

S 8 は上面が平坦な流紋岩の板石で、形状から台石と思われ、34.5×31.5cm、厚さは11cmである。

S H-2 出土土器 (図版70-172、写真図版48)

172は須恵器杯蓋の細片で、口縁部は凹面をなすが、天井部と口縁部境の外側の段は認められない。

S H-3 出土土器 (図版70-173-186、写真図版48)

173・174・186は土師器蓋で、174の口縁端部は上方に若干ひきのばされている。175-181の須恵器杯蓋は口径13.9-15.3cmで、175-177のように口縁端部が面をなすものと、178・179・181のようにその面が内側に幅ひろいものおよび、180のように端部が丸いものがある。また、天井部と口縁部境の外側に段を有する175・177・178・181と凹線状を呈する179・180、境目が不明瞭な176がある。176以外は右方向のロクロ回転で、178の天井部内面には同心円の当て具痕が認められる。なお、181以外は床面出土である。須恵器杯身では、182のように立ち上がり部が内上方に長く直線的のびて体部が深いものから、185のように湾曲しながら内上方のび、体部が浅いものまで認められる。いずれも立ち上がり端部に明瞭な面は認められない。183の底部内面には同心円の当て具痕が認められる。口径は12.0-13.2cmで、182・185が床面出土である。183は器壁が非常に薄いつくりであり、181とセットである可能性がある。

杯蓋・身ともにTK-10型式期を中心としているが、MT-15型式に近い182からMT-85型式に近い185や、MT-85型式と思われる180も存在する。176はやや特殊な形態で、詳細な時期は特定できない。

S H-4 出土土器 (図版70-71-187-209、写真図版49-51)

187-196の須恵器杯蓋には、口径が12.8cmと最も小さい193から14.4cmと最も大きい190まであり、TK-47型式期から195・196のようにTK-10型式期のものまで認められるが、中心はMT-15型式期である。ただし、190や191のように器壁が厚く判断しにくいものも存在する。ロクロ回転方向では、187・191・193・194が右回転で、TK-47型式期もしくはそれに近いものほとんどに認められ、その他は左回転である。また、190・192の天井部内面には同心円の当て具痕が残り、190ではナデが加えられている。なお、192と196は胎土および焼成において類似性が認められる。

197-204の杯身でも、口径が11.0cmと最も小さい197から13.8cmと最も大きい203まで認められ、199などのように典型的なTK-47型式期のものから203のTK-10型式期のものが存在するが、中心はMT-15型式期であろう。ロクロ回転方向は197・200-202が左回転、199・203・204は右回転であるが、ここでは型式期差による回転方向の違いは認められないようである。200と201には底部内面に同心円状当て具痕が残り、胎土・焼成および器壁が薄いといった特徴に共通性がある。また、204も同様の特徴を示し、202も類似している。しかも、立ち上がり部が高いものの、端部は丸くおさめており、この特徴はMT-15-TK-10型式期の移行期に兵庫丹波地域において目立つ現象かもしれない。

S H-4 出土須恵器には、ほかに高杯脚部(205)・甕(206・209)があり、土師器では、207の焼口縁部、208の甕がある。

S H-5 出土土器 (図版71-210-216、写真図版51)

210-213の須恵器杯は埋土出土のもので、MT-15-TK-10型式期であり、210は立ち上がり部が長くのびているが、器壁が薄く、端部は丸い。212・213の天井部内面には、同心円の当て具痕が残り、213の外面には平行のタタキ痕が残っている。216の甕口縁部も埋土出土で、同時期と思われる。

214・215はS H-5・6での表採土器で、ともにTK-209-TK-217型式期と思われる。

S H-6 出土土器 (図版71-217-219、写真図版51・52)

217の土師器甕は南西主柱穴から出土した土師器甕で、口径は18.2cmを測る。外面ハケ、内面ヘラ削

りの薄手でシャープなつくりとなっている。218・219はSK-5出土の須恵器杯で、218はほぼ定形。口径12.5cm、MT-85型式併行期であろう。219の蓋はTK-10型式期と思われる、口径13.8cmを測る。

SH-7 出土土器 (図版71-220、写真図版52)

220の須恵器杯蓋は口径14.7cmで、口縁部に面をもつ。MT-15型式期であろう。

SH-8 出土土器 (図版71-221~238、写真図版51・52)

221はつまみ付で、須恵器高杯蓋の可能性が高い。222~228の埋土出土須恵器杯蓋は、口径13.5(227)~15.8(226・228)cmで、TK-10~MT-85型式併行期頃におさまるであろう。一方、229~231の埋土出土や232のP-36出土の杯身はMT-85~TK-43型式期と思われる。口径は12.2(231)~14.1(232)cmを測る。短頸壺(233)の口縁部は長く、肩部にヘラ記号がある。ほかに施口縁部(234)と高杯脚部(235)がある。土師器では小型の壺(236)と甕(237・238)があり、いずれも埋土出土である。

SH-9 出土土器 (図版71-239・240、写真図版51・52)

239・240の杯蓋は床面出土で、口径15.0cmを測り、TK-10型式期である。

SH-10 出土土器 (図版72-241~245、写真図版52・54)

241は埋土、242は床面直上出土の杯蓋で、MT-15~TK-10型式期である。243の杯身も床面直上出土で、口径14.1cm、内面は使用によると思われる摩滅が認められる。MT-85型式併行期。244・245は柱穴出土の杯身で、TK-217型式期頃と思われる。

SH-11 出土遺物 (図版72-246~262、図版73-S1~S6、写真図版53~56)

SH-11とSH-12出土を識別できなかったものには、251・253の2点がある。

須恵器のうち、杯蓋(246)は竈南、杯身(247・250)は床面から出土している。いずれもMT-85型式併行期頃である。また、埋土出土の248・249も同時期である。246の内面は摩滅しており、使用によるものと思われる。249は薄いつくりとなっている。251~253は埋土出土で新しい傾向を示す。

土師器甕は8点図示した。254~256が床面、259~262は竈内出土である。体部最大径は15.4(262)~25.7(255)cmである。254・255は同一個体の可能性がある。長胴甕(256)は口径16.3cm、器高31.3cm、体部最大径22.5cmを測る。屋内高床部から出土した土師器椀(258)は、口径12.5cmである。

S1は竈焚き口の天井部、S2・3は焚き口側面に使用されていた補強石である。S1は現存長60.6cm、幅32.1cm、厚さ6.5~7cmの流紋岩の板石で、いわゆる「鉄平石」である。一見すると花崗岩に近い。重量は18.2kg。焚き口側の下面は赤変し、その奥は煤付着により黒色化している。S2・3も流紋岩の割り石で、焚き口側は黒色化している。S4は竈支脚に利用されていた、長さ21.5cmの三角柱状の流紋岩である。S5・6はともに流紋岩の板石で、出土位置や形状から台石と考えている。

SH-13 出土土器 (図版72-263、写真図版56)

周壁溝から出土した杯身(263)は、TK-47型式期の可能性が高い。

SH-14 出土遺物 (図版72-264~266、図版73-S7、写真図版53・56)

264は南西隅支柱穴の柱痕からの出土で、端部は丸いがTK-47~MT-15型式期と思われる。口径は13.5cmと大きめである。266は周壁溝上からの出土で、飛鳥終末から平城初期と思われる。265は床面出土の土師器甕で、口径12.1cm、胴部最大径17.8cmである。

S7は流紋岩の板石で、床面から出土しており、台石と考えられる。長さ25.7cm、厚さ8.5cmである。

SH-16・17 出土土器 (図版74-267~283、写真図版56・57)

SH-16に直接伴うと考えられる土器は、269・270・277・282の4点である。269の杯身は床面出土で、

内面が摩滅しており、使用によるものと思われる。高杯(270)も床面出土で、透孔が認められる。277は北西隅の主柱穴柱直出土で、天井部外面に1条のヘラ記号が認められる。これらの須恵器はTK-43~TK-209型式期と思われる。282の土師器甕は床面出土である。267・268・274・275の須恵器は埋土出土で、TK-10型式期頃からTK-217型式期までばらつきがある。甕上あるいは柱穴出土のものには271~273の奈良時代後半と思われる須恵器がある。273の皿は口径13.8cm、器高2.4cmを測る。276も同時期と思われるが、SH-17の焼上から出土している。

SH-16・17とは直接関係ないが、住居跡内に存在する柱穴から須恵器が出土している。P-80からは須恵器の杯身(278)と壺口縁部が出土しており、MT-85型式併行期と思われる。P-83からは須恵器の蓋と思われる破片が2点(280・281)出土しているが、時期は不明である。P-1025掘形からは須恵器甕(283)が出土しており、MT-15~TK-10型式期と思われる。

SR-1 出土土器 (図版74-284~296、写真図版57~59)

古墳時代の須恵器杯ではTK-47型式期(284)からTK-209~TK-217型式期(289)まで認められるが、285~287のようにTK-10型式期頃が多い。一方、石組出土の288はTK-43~TK-209型式期、290はTK-47~MT-15型式期である。甕(291)はTK-43~TK-209型式期、292は内面に車輪文の当て具を残す甕の破片である。奈良時代の杯類(293~295)は、平城宮Ⅲ・Ⅳ頃と思われる。296は須恵器の紡錘車で、下面の最大径は4.5cm、上面では4.2cm、断面形は中央がやや膨らむ台形に近い形状を呈し、最大厚1.1cmで、重量は27.6gを測る。孔径は5.5mmである。所属時期は不明である。

SK-1 出土土器 (図版74-297~303、写真図版58・59)

297~301のうち、300の底部内面には同心円の当て具が残る。TK-10型式期が中心である。ほかに土師器甕2点(302・303)が出土している。

SK-4 出土土器 (図版74-308、写真図版61)

口径14.0cmの土師器甕である。

SK-6 出土土器 (図版74-304~306、写真図版61)

口径10.7cmの杯蓋(304)、口径10.0cmの杯身(305)および306の杯身細片が出土している。

SK-7 出土土器 (図版74-307、写真図版61)

口径25.3cmの須恵器壺口縁部である。TK-209型式期頃の可能性がある。

SB-2 出土土器 (図版75-309~312、写真図版61)

いずれも小片~細片であるが、309は口径13.0cmを測る。いずれも飛鳥Ⅳ期頃のものと思われる。

SB-3 出土土器 (図版75-313・314、写真図版61)

313の杯Aは口径12.4cm、器高3.5cmで、飛鳥末から奈良時代前半と思われる。314は壺の可能性あり。

SA-2 出土土器 (図版75-315、写真図版61)

口径16.2cmの須恵器壺口縁部である。詳細な時期は不明であるが、飛鳥・奈良時代と思われる。

SB-5 出土土器 (図版75-316、写真図版61)

口径12.6cmの古墳時代須恵器壺で、TK-47~MT-15型式期である。

SK-3 出土遺物 (図版75-76-317~346、W12~W18、写真図版59~61)

須恵器杯蓋(317~321)は奈良時代前半あたりに位置づけできるとと思われる。317の天井部外面には墨書があり、「大」と読み取れる。杯A(322~328)のうち、径高指数最大は33(328)、最小は25(325)で、多くは26~29となっており、平城宮Ⅰ~Ⅲを中心としていると思われる。杯B(330~336)の径高

指数は27~31で、平城宮Ⅲ頃と思われる。また、338の稜輪も平城宮Ⅲ頃であろう。なお、337の皿に近い形態の杯Bは、325の杯とともに焼成不良により内面が赤色を呈している。甕(339)や葉蓋形の340も杯類と同時期で大過なからう。なお、時期の特定ができないが、342は口径22.3cm、器高43.0cm、胴部最大径40.4cmの大形甕で、内面の青海波文は一部が途切れる特殊なものである。

土師器では瓶と思われる343や鍋(346)のほか、製塩土器(344・345)がある。

木製品のうち、四方転びの箱(W12~W14)は底板と短辺板の各1枚が欠失しているが、復元すると、内法下端で18×15cm程度、上端で21×16cm程度、深さは10cm程度となろう。長辺・短辺の組み合わせは、長辺の端部中央を切り欠いて短辺の中央をはめ込み、長辺・短辺両側から木釘を打ち込む。長辺・短辺板はともに外側へ約2cmはみ出る。W15は形状から独楽の未製品と思われるが確定できない。現状では、直径6.9cm、高さ6.4cmを測る。ほかに先端が焼け焦げた松明(W16・W17)や櫛(W18)がある。

SD-1 出土土器 (図版77-347~359、写真図版62・63)

平城宮Ⅱ~Ⅲ頃と思われる、杯蓋(347~349)・杯身(350~352)のほか、製塩土器(353~359)が多い。製塩土器は砲弾形で、歪みが多く、口径は13.8(353・355)~19.0(358)cmとばらつきが多い。

SD-2 出土土器 (図版77-360・361、写真図版62)

高杯の蓋と思われる360は、口径10.8cmと小さく、TK-47型式期と思われる。

柱穴出土土器 (図版77-362~380、写真図版62・63)

柱穴から出土している土器には、古墳時代の須恵器杯類(362・365~367)・高杯(368)、土師器碗(363)・壺(364)、飛鳥~奈良時代中期頃の須恵器杯類(370~380)がある。363は古墳時代後期の製塩土器の可能性もある。369の大型筒状須恵器は白色軟質で、瓶の可能性もある。377・378の杯Aは同一個体である。

② 包含層出土の遺物

古墳時代の土器 (図版78-381~391・407・408、写真図版63・64)

381~385の蓋はTK-10~TK-217型式期に属し、383は壺蓋の可能性が高く、天井部外面に「×」形のヘラ記号を記す。杯身もTK-10型式期(387)とTK-209ないしTK-217型式期(388・389)に属する。389の底部内面に同心円の当て具痕が残る。高杯(390・391)は同一個体ではないが、ともに3方向の透かし孔をもち、TK-47型式期である。こね鉢には多数孔の407と単孔の408がある。

飛鳥・奈良時代の土器 (図版78-392~406・409、写真図版63・64)

須恵器杯類(392~404)では、TK-217型式期(396・397)から奈良時代中頃まで認められる。392・393は内面が平滑になっており、転用碗の可能性もある。397は蓋の可能性もある。405は稜輪で、底部内面は平滑になっており、使用によるものと思われる。409は随によく似ているが、穿孔がない。

その他の遺物 (図版78-410・411・S9、写真図版63・64)

410の緑釉陶器皿は須恵質だがやや軟質で、釉の残存悪く、外面は細かいヘラ削りである。411は連弁文青磁碗で、銀い錆を有する。口径は14.4cmを測るが、細片である。S9は定角式の磨製石斧で、砂岩性と思われる。刃部片方を欠損するが、長さ9.1cm、刃部幅5.0cm、厚さ2.3cmで、重量は142.7g。

3. 小結

今回のF地区の調査によって、古墳時代の集落の中心を確認することができた。これは丹波地域全体の集落史を考えるうえでも意義深い発見であろう。また、飛鳥・奈良時代の遺構についても、獨立柱建物跡・井戸などを検出し、改めて集落跡がひろがることが確認できた。検討は第4章にゆずる。

第8節 E-2地区の遺構と遺物

E-2地区は三原谷中の北部、やや西寄りの位置にあり、E地区の西側に隣接する。

1. 遺構

圃場整備時の削平やそれ以前の耕地造成により遺構の残存している範囲は非常に狭く、残存状況も非常によくない。遺構は耕土直下で検出された。

遺構は土坑(SK-1~5)のほか、ピットが30基程度検出されたのみである。ピットから出土した遺物はほとんどなく、P-22より須恵器杯Aが1点出土しているのみである。土坑については後述する。SK-1以外はSK-3で須恵器杯身(TK-217型式期)・土師器甕、SK-4で須恵器甕、SK-5で7世紀後半の須恵器杯B蓋が出土している。

土坑(SK-1) (図版54)

調査区の南部で検出された大型の土坑である。平面は不整形で、長2.04m、幅1.84m、深さ25cmを測る。底部の薄いシルト層の上には炭層が平らにひろがっており、この場で焚火が行なわれたと思われる。埋土からは焼土、炭とともに比較的多量の奈良時代の土器、鉄器、燃え残りの木片、骨片などが出土している。

2. 遺物

多量の土器を出土したSK-1を除けば、出土した遺物は非常に少ない。

SK-1出土遺物 (図版78-412~421、F20、写真図版65、第5図)

焼土・炭などとともに比較的多量の須恵器、土師器と鉄器、焼け残りの木片、骨片が出土している。須恵器は奈良時代の杯A・杯B・杯B蓋、古墳時代の杯身・杯蓋、土師器は杯、鉢、甕が出土している。土師器甕については良好な個体がなかったため図化を行っていない。

412~414は須恵器杯Aである。底部外面は回転ヘラ切りで、412・414は粗いナデが施されている。412は口径12.0cm、器高3.95cm、413は口径12.2cm、器高3.7cm、414は口径11.3cm、器高3.75cmを測る。415~417は須恵器杯Bである。底部外面は回転ヘラ切りで、416・417は粗いナデが施されている。415は口径15.15cm、器高3.7cm、416は口径14.6cm、器高4.1cm、417は口径14.9cm、器高3.95cmを測る。418は須恵器杯B蓋である。やや笠形の天井部で、口縁部の屈曲は強くない。口径16.4cm、器高2.9cmを測る。419・420は土師器杯である。419は体部外面に手持ちヘラケズリ、底部外面にナデが施されている。口径18.8cm、器高3.7cmを測る。420は表面が摩滅している。口径16.8cm、器高3.7cmを測る。421は土師器鉢である。平底の底部から体部は内湾して立ち上がる。内外面とも丁寧なナデが施されている。口径18.7cm、器高4.7cmを測る。F20は用途不明の鉄製品である。細い板状の鉄製品で片方に向かって幅を減じている。刀子の柄の部分の可能性が高い。幅1.4cm、厚0.5cmを測る。



第5図 SK-1出土骨

包含層出土遺物（図版78-422）

422は須恵器杯B蓋である。やや笠形の天井部で、口縁部の屈曲は強くない。口径16.0cm、器高4.2cmを測る。

3. 小結

遺構の残存状況は非常に悪く、土坑、柱穴がわずかに検出されたのみである。出土した遺物からみてこの地区の遺跡の存続時期は7世紀前半から8世紀前半頃までである。SK-1からは8世紀前葉頃の遺物が比較的多く出土し、この場所で焚き火が行なわれたことを示している。

第9節 F地区の遺構と遺物

F地区は三原谷中の東北部に位置する。全面調査は水路部分のごく狭い範囲のみであることと、水路部分や耕作地造成による削平で、遺跡の状況を知ることは非常に難しい。ただし、隣接する確認トレンチでは多くの地点で遺構・遺物が検出されている（第1章第1節）。特に南部の75トレンチ周辺で比較的遺構が多く検出され、奈良時代と13・14世紀頃の遺跡が存在する可能性が高い。

1. 遺構

1区（図版8）

調査地東部で南北方向の溝1条、土坑、ピットを検出した。西半部では圃場整備以前にすでに耕作によって削平されており、遺構は認められなかった。

2区（図版9）

調査地北部と南部でピットを検出した。柱穴は直径20cm前後の小さなもので、建物は復元できない。

3区（図版9）

遺構は検出されなかった。

4区（図版10）

調査区北半で東西方向の溝3条、南北方向の溝1条を検出した。いずれも削平が激しく残存状況はよくない。

5区（図版10）

調査区南部で東西方向の溝1条を検出した。

2. 遺物

4・5区からわずかに奈良時代の土器片が出土したのみである。

3. 小結

検出された遺構は非常にわずかで、遺物も奈良時代の土器がわずかに出土しているのみである。調査面積が狭く、遺構面の残存状況が悪いこともあるが、F地区の中では確認調査で遺構の多く検出された75トレンチ周辺の北側に位置し、縁辺部であることを示しているものと思われる。

第10節 畑田遺跡の遺構と遺物

畑田遺跡は、東美集落北方の谷から流れ出す奥村川が運んだ扇状地性流出物が厚く堆積した微高地上に立地する。今回の調査区周辺は、その扇端付近に当たり、奥村川が柏原川へ合流する地点の南側に位置する。柏原川は、この扇状地性の微高地に流路を阻まれ、その外縁を大きく蛇行して北流していく。

1. 遺構 (図版55、巻頭写真図版5、写真図版30~32)

検出した遺構は、柱穴・溝である。柱穴は遺物を有するものだけで、213基を数える。埋土の違いから、時期幅をもって営まれたものと推測され、出土遺物から、中心となる時期は14~15世紀と考えられる。柱穴の多くはその性格が不明であるが、おそらく建物を構成していたのであろう。明確な建物跡を復元することはできなかったが、少なくとも柱列と認識できるものがあり、横列(SA-1~3)として報告した。溝は大小合わせて7条検出したが、集落内での機能を限定することはできなかった。

基本層序は、図版55の第1層が水田耕土、第2層は北部に限られる遺物包含層で、10YR4/4褐色の細粒砂~極細粒砂。径5cm前後と2~3mm大の礫が混じり、マンガンを多く含む。第3層は10YR5/2灰褐色の細粒砂~極細粒砂で、径2~3mm大の礫が混じり、炭や近世遺物を含む。第4層は10YR4/2灰褐色のシルト混じり細粒砂~極細粒砂で、礫・炭マンガンを含み、南端の上部ではマンガンを非常に多く含む。第5層は10YR5/4にぶい黄褐色のシルト質極細粒砂でマンガンを含み、遺構面となる地山である。

①横列 (図版56、写真図版31・32)

SA-1

調査区北西隅に位置する。軸方向はN63°Wで、5本柱の構造物である。調査区外へのびる可能性も残る。全長は芯々距離で5.9m、柱穴の規模は楕円直径20~30cm、深さは最大で40cmで、柱間距離は平均1.48mを測る。遺物は、土鍋、土師皿、土師器細片などが出土している。

SA-2

調査区中央に位置し、南西壁際から北東へのびる。軸方向はN65°Eで、5本柱の構造物である。調査区外へのびる可能性も残る。全長は芯々距離で4.6m、柱穴の規模は直径25~45cm、深さは最大40cmで、柱間距離は最長で1.45m、最短で0.9m、平均1.13mを測る。遺物は、丹波焼の碗(423)、磁器碗(424)のほか、土鍋、須恵器碗、土師皿、土師器細片などが出土している。

SA-3

調査区中央に位置し、南西壁際から北東へのびる。軸方向はN72°Eで、5本柱の構造物である。調査区外へのびる可能性も残る。全長は芯々距離で5.35m、柱間距離は最長で1.6m、最短で0.95m、平均1.34mを測る。柱穴の規模は直径40~50cm、深さは最大60cmで、平面隅丸方形を呈するやや大型の掘形である。横列を構成する柱穴のうち、P-145とP-205の2基について断ち割ったところ、掘形は地面に対してほぼ垂直に掘り込まれており、埋土の状況から直径15~20cmほどの柱を作っていたようである。遺物は、土師皿(425)のほか、土鍋、須恵器碗、土師皿、土師器細片などが出土している。

②溝 (図版55、写真図版30・31)

SD-1

北東-南西に走向する溝である。規模は現存長3.7m、最大幅30cm、最も深いところで9cmを測る。埋土は10YR5/4にぶい黄褐色砂~極細砂で、断面形態は皿状を呈する。遺物は土師皿(426)のほか、須

恵器・土師器の細片が出土している。

SD-2

ほぼ直角に屈曲する溝で南西-北東-北西に走向する。削平のため北西端は消失する。南西端では2条に分かれ、調査区外へと続く。屈曲部からは北東へ溝が1条分岐しており、その最端部は削平のため消失する。埋土は10YR5/2灰黄褐色細砂～極細砂で、断面形態は逆台形を呈する。規模は南西端から屈曲部までが現存長5.8m、最大幅180cm、最も深いところで18cmを測る。さらに、屈曲部から分岐する溝の北東端までは4.7m、この部分の最大幅60cm、最も深いところで16cm、屈曲部から北西端までは規模は現存長4.3m、最大幅120cm、最も深いところで20cmを測る。重複関係を明確に押さえられなかったが、区画などのために同時に構築されたものであるかもしれない。遺物は土師皿（428・429）のほか、土師器細片、筒首焼指鉢・葉片、須恵器鉢・椀片および鉄滓が出土している。

SD-3

北東-南西に走向し、南西端は調査区外へと続く溝である。北東端はSD-2に取り付くが、重複関係は明確にできなかった。埋土は炭が少量混じる10YR4/3にぶい黄褐色粗砂を少量含む細砂～極細砂で、断面形態は椀形を呈する。規模は現存長4.5m、最大幅70cm、最も深いところで9cmを測る。遺物は土師器皿・鍋などの細片が出土している。

SD-4

北東-南西に走向し、南西端は調査区外へと続く溝である。北東端は擾乱によって切られているが、全体に削平を受けて北東へ行くほど浅くなる。埋土は10YR4/2灰黄褐色細砂～極細砂で、断面形態は皿状を呈する。規模は現存長3.1m、最大幅40cm、最も深いところで6cmを測る。遺物は須恵器のこね鉢（430）のほか、土師器皿・鍋、青磁碗の細片が出土している。

SD-5

北東-南西に走向する溝である。SD-2を切って検出した。規模は現存長2.5m、最大幅25cm、最も深いところで5cmを測る。埋土は炭を少量含む、10YR6/2灰黄褐色細砂～極細砂で、断面形態は皿状を呈する。遺物はまったく検出されなかった。

SD-6

北東-南西方向にSD-4とはほぼ平行に走向する溝で、南西端は調査区外へと続く。北東へ行くほど幅はひろくなるが、後世の削平を受けて徐々に浅くなり消失する。一部は擾乱を受けており検出できていない。埋土は10YR4/2灰黄褐色細砂～極細砂で、断面形態は椀形を呈する。規模は現存長4.5m、最大幅40cm、最大深9cmを測る。遺物は土師皿（427）のほか、土師器鍋片、青磁碗の細片が出土している。

SD-7

北東-南西に走向する溝である。削平のため遺存状況は非常に悪い。規模は現存長1.6m、最大幅25cm、最も深いところで4cmを測る。埋土は10YR6/2灰黄褐色細砂～極細砂で、断面形態は皿状を呈する。若干の土師器が出土したが、細片のため器種等は不明である。

2. 遺物

①遺構出土の遺物

SA-2 出土土器（図版79-423・424、写真図版66）

P-90から出土した423は丹波焼と思われる椀の口縁部片で、14世紀前半頃と考えられる。424は楕

列と重複したP-92出土の青磁碗で、欄列に伴わない。7.5Y4/2灰オリーブ色の釉で、底部外面のみ露胎。

SA-3 出土土器 (図版79-425、写真図版66)

P-212掘形出土の上師器皿で、口径10.6cmを測る。外面口縁部下には強いユビおさえ痕が残る。

SD-1 出土土器 (図版79-426、写真図版66)

口径7.2cmの土師器小皿であるが、器壁は厚い。ユビによる成形であろう。

SD-2 出土土器 (図版79-428・429、写真図版65・66)

428は口径7.7cmの土師器小皿である。429は口径12.0cm、器高2.9cmの土師器皿で、ほぼ平らな底部から直立気味に立ち上がる口縁部をもち、端部は内方に若干曲がっているようである。

SD-4 出土土器 (図版79-430、写真図版66)

須恵器鉢であるが、口縁部内面が大きく凹面をなし、束播系ではないようである。Li径は25.8cm。

SD-6 出土土器 (図版79-427、写真図版66)

底部から屈曲して外反した後やや内湾する口縁部をもつ土師器の皿で、口径9.0cm、器高1.8cmを測る。

柱穴出土土器 (図版79-431～459、写真図版65～67)

図示した各土器の出土柱穴番号は次のとおりである。431・432 (P-5)、433 (P-12)、434 (P-14)、435 (P-22)、436 (P-40)、437 (P-41)、438 (P-45)、439 (P-53)、440 (P-64)、441 (P-71)、442 (P-76)、443 (P-80)、444 (P-116)、445・446 (P-120)、447 (P-122)、448 (P-124)、449・450 (P-147)、451 (P-153)、452 (P-167)、453 (P-179)、454 (P-194)、455・456 (P-202)、457 (P-201)、458 (P-208)、459 (P-209)。

土師器皿には、底部と口縁部の境が漸移的で不明瞭なもの(435・445・449・450・452～454・457・458)、底部から曲折して外反するもの(431・439・440・441・444・455・456)、平らな底部から曲折するだけのもの(432・433・436・437・442・446)の3種があり、しかもそれぞれに大小があるようである。須恵器碗には口縁部内面が凹んでいるもの(443・451)がある。ほかに鉄鑄形の土師器鉢(447)や430と同一種と思われる須恵器鉢(448)、平安時代前期頃と思われる須恵器杯(459)がある。

なお、柱穴掘形から出土しているのは437・442・445・446・459であり、その他は柱穴出土である。

②包含層出土の遺物 (図版79-460～473・F21・F22、写真図版65～67)

460は菊皿で、469・470の皿とともに瀬戸・美濃系の灰釉陶器で、15～16世紀頃のもので、丹波焼壺(464・465)は15世紀後半から16世紀と思われる。土師器小皿のうち、461には煤が付着し、平安時代後期頃の471もある。462の須恵器碗は13世紀前半であろう。また、466の須恵器杯Aや古墳時代の土師器高杯(472)がある。角釘は2点出土している。なお、463は伊壁と思われる破片であるが、同様の破片が柱穴からも多数出土しており、SD-2出土の鉄滓とともに鋳物工場の存在を彷彿させる。

③確認調査出土の遺物 (図版79-474～477、写真図版66・67)

土師器小皿および瓦器碗・土網・束播系須恵器鉢を图示した。476は坪20出土、他は坪6出土である。

3. 小結

調査の結果、北西側にあたる永上郡教育委員会調査区で確認された室町時代の遺構が今回調査区にもひろがっていることが確認できた。今回の調査・報告では掘立柱建物跡を確認できなかったが、柱穴の集中状況や方向性から、14～15世紀を中心とした時期に、複数の小規模建物が建て替えながら存在していたことは容易に判断できるであろう。

第4章 ま と め

第1節 三原遺跡E地区竪穴住居跡の検討

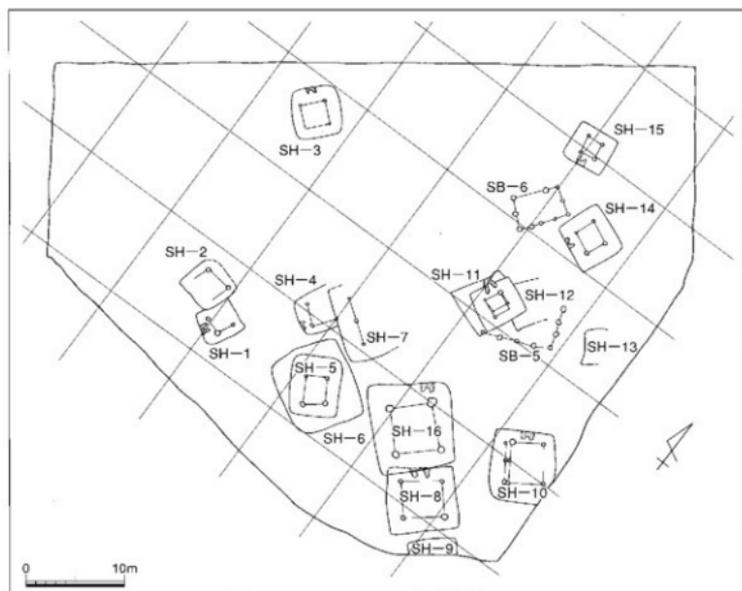
三原遺跡E地区では、今回の調査で17棟以上の古墳時代竪穴住居跡を検出した。それらの所属時期については、埋土からTK-47~TK-217型式期の須恵器が出土しており、概ね古墳時代後期(6~7世紀前半)に比定できる。遺構の所属時期については、通常、埋土出土土器が示す時期を降らないことは明白であるが、それを遡ることは充分考えられる。しかし、E地区では他の遺構や包含層からも当該時期以前の遺物は出土していないため、竪穴住居跡が営まれた時期を限定することは首肯できるであろう。

ただし、それぞれの竪穴住居跡の所属時期については、埋土出土土器により単純に決定することができない。そこで、本地区の各竪穴住居跡における土器出土状況や住居跡の重複関係などについて検討を加え、各竪穴住居跡の時期を限定してゆきたい。なお、竪穴住居の用語については、「竪穴建物」と呼称する向きもあるが、本遺跡では特に工房などの機能をもつものは検出されなかった。したがって、ここでは主として居住のためという機能を考えているため、機能をひろめた用語である「建物」よりも、限定的な機能を与えた名称である「住居」という用語を使用することとする。

まず、住居の床面や甍内から出土した土器は、住居が営まれた時期の、ある一時点を示していることは明らかであろう。ただし、住居が営まれていた時期に使用されていたという前提にもとづく床面出土土器の認定には、誤りが伴うことを含んでおく必要がある。以上のことをふまえたうえで、本地区各竪穴住居跡出土土器をみとめることとする。

SII-1の床面からはMT-15型式期後半の須恵器が出土し、SH-2でも床面からTK-10型式期の須恵器が出土しているが、細片のため、混入の可能性がある。SH-3の床面からはTK-10型式期~MT-85型式併行期の須恵器、SH-6では付属すると想定されるSK-5からMT-85型式併行期の須恵器が出土し、これにより当該時期と考えられる。SH-10の床面からはMT-85型式併行期の須恵器、SH-11では床面および甍ざわからMT-85型式併行期の須恵器が出土している。SII-16の床面からTK-43~TK-209型式期の須恵器が出土し、SH-14では主柱穴柱痕内であるが、TK-47型式期後半の須恵器が出土し、大きな破片であるため、住居跡の時期を示すものと考えられる。一方、SH-4では埋土からTK-47~TK-10型式期の多量の須恵器が出土したが、その出土状況から、廃絶後に入れられたものと判断され、TK-10型式期に廃絶した可能性がある。また、SH-13では周壁溝と思しき溝からTK-47型式期の須恵器が出土しているが、出土位置が柱穴穴を示すことから、他の遺構の可能性が充分考えられるため、留保しておきたい。なお、上記以外の住居跡で、埋土から須恵器が出土したのは、SH-5(TK-217型式期まで)、SII-7(MT-15型式期)、SH-8(TK-10型式期~MT-85型式併行期)、SH-9(TK-10型式期)である。

ところで、重複関係により新旧が判明している住居跡には以下のものがある。SH-2はSH-1より新しく、床面出土土器が示す新旧関係とも一致する。また、SH-16(TK-43~TK-209型式期)はSH-8より新しく、SH-8の埋土出土土器はMT-85型式併行期を示し、遺構の重複関係とも合致する。SII-5はSII-6(MT-85型式併行期)より新しく、SH-11(MT-85型式併行期)はSH-11-2よりも新しい。SH-7はSH-4よりも新しく、SII-4はTK-10型式期以前の可能性がある。以上のことから、埋土出土土器の下限時期が住居跡の時期に近いとみることとも可能であろう。



第6図 三原遺跡E地区竪穴住居跡分布図

以上のことをふまえたうえで住居跡群の変遷をみると、大きく3期に分けることができる。

第Ⅰ期住居跡群は、SH-1・4・14に代表されるように、本地区内の住居跡のうち壁の方向が方位に近いもので、平面形が方形に近く、竈は兩個壁に付設された小規模の住居跡である。TK-47～TK-10型式期におさまり、SH-2・9も本期に属し、時期不明のSH-15も第Ⅰ期の可能性が高い。

第Ⅱ期住居跡群は第Ⅱ期への過渡期状況を少し、理解を助けるため後述する。

第Ⅲ期住居跡群は、TK-43～TK-217型式期までで、壁の方向が方位とは45°程度振れ、北西-南東方向に長い形態を示している。また、竈は北西側壁に付設されている。SH-16・5に代表されるが、SH-7も長方形である公算が高く、当期の可能性もある。大型・小型の2種が認められる。

第Ⅱ期住居跡群は第Ⅰ期～第Ⅲ期の両者の特徴を備えている。すなわち、第Ⅰ期と大きく違う点は、北西方向に竈を付設することであり、第Ⅲ期と異なる点は住居跡平面が正方形であるが、新しい段階には、SH-6のように長方形のものも認められるようである。また、古い段階では小型、新しい段階には大型が出現する。住居跡の方向では、第Ⅰ期と同じものと第Ⅲ期と同一の両者がある。時期はTK-10型式期～MT-85型式併行期で、SH-3・6・8・10・11があり、SH-13も本期であろう。SH-12は不明な点が多いが、第Ⅰ期もしくは第Ⅱ期のいずれかであろう。

なお、最後になったが、SH-11で検出した竈補強石は、調査時点で杉井健氏に御教示いただいたように、中部・九州地方に多く類例が認められるものである。焚口兩個の補強石については、兵庫県内でも多可郡中町思の出遺跡や南但馬の遺跡などに類例が認められるようであるが、焚口上部を覆った例は寡聞である。この技術の系統や、木遺跡でも1例のみ存在する理由については今後の課題である。

第2節 三原遺跡の変遷

三原遺跡の複数箇所の調査で古墳時代～奈良時代・平安時代以降の各時期の遺構が検出された。これらの調査区は三原遺跡全域からすれば限られた範囲であり、全体を窺うことにはならないが、三原遺跡を理解するうえで、時期別に調査の成果を整理しておきたい。

1. 古墳時代 (第7図)

E地区の竪穴住居跡群は、前節で見たように、TK-47～TK-217型式期にわたって間断なく住居が営まれており、三原谷口の北北東方向に張り出した微高地上に存在することから、三原遺跡での古墳時代集落の中心部の一角をなすものと思われる。B地区の竪穴住居跡(SH-1)では柱穴からTK-47型式期の須恵器細片が出上しているが、竪穴住居跡の壁方向が方位にはほぼ合致しており、先に見たE地区の同時期の竪穴住居跡と同傾向を示すことから、時期的にも誤りがなからう。一方、D地区で検出された竪穴住居跡は、詳細な時期が判明する遺物が出土していないため、時期は確定できない。なお、E地区では17棟以上の竪穴住居跡のほか、2棟の掘立柱建物跡、土塼・溝等が検出されており、E-2地区ではTK-217型式期の土塼、A-2地区では時期不明の土塼が存在する。

三原1号墳は横穴式石室を内部主体とする円墳であるが、出土土器から、MT-85型式併行期～TK-43型式期に初葬が行なわれ、TK-217型式期に追葬があったと考えられる。また、A-2地区の箱式石棺墓は詳細時期不明だが、MT-85型式併行期～43型式期の可能性がある。一方、三原古墳群は出土遺物が知られていないため正確な時期が不明であるが、現在判明しているのは横穴式石室を内部主体とする群集墳であることから、第2章第2節でみたように、TK-10型式期を遡ることはないと考えられる。

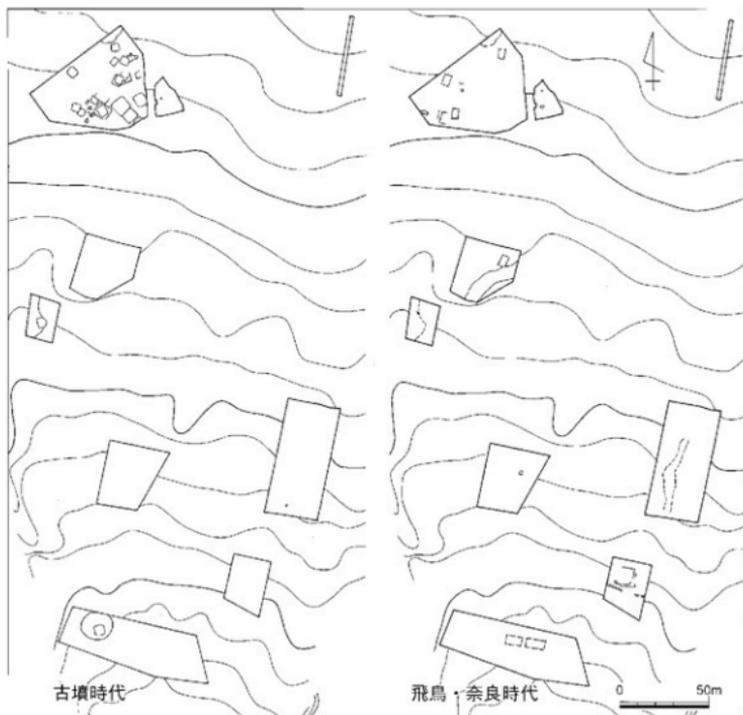
以上のように、三原遺跡の集落と墳墓の時期が重なることから、三原古墳群の被葬者は三原遺跡で集落を営んでいた人々である可能性が非常に高い。また、三原古墳群が営まれる前の段階の墳墓は、時的に木棺直葬墳であり、遺跡の東側尾根上に存在する北中古墳群の可能性がある。

なお、A地区・C地区およびD-2地区では古墳時代の遺構は検出されていない。

2. 飛鳥・奈良時代 (第7図)

三原遺跡では、古墳時代末～飛鳥時代にかけて竪穴住居から掘立柱建物へと変化するが、神戸市西区伊川谷町上脇遺跡においても、同様の変化が認められる(兵庫県教育委員会「上脇遺跡I」2002年)。その時期は三原遺跡と同時期のTK-217型式期頃である。この時期における住居形態の変化は、ひろい範囲におよんだようであり、集落の再編成が行なわれた可能性が窺える。

三原遺跡E地区では、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物跡を4棟検出した。SB-2が飛鳥Ⅳ期、SB-3が飛鳥末～奈良初頭の時期が出上土器から推定できるが、その他の掘立柱建物は詳細時期が不明である。SB-2は個柱の南北方向がN21°E、SB-3はN16°Eであるが、古墳時代のSB-6はN35°Eであることから、時期が新しくなるにしたがって北方向に近くなる可能性がある。したがって、SB-4がN14°Eであり、SB-3に近いことから奈良時代前期、SB-1はN6°Eであることから奈良時代後期の可能性が考えられる。掘立柱建物跡はB地区でも2棟検出され、報告者はうち1棟が奈良時代、もう1棟は平安時代と判断しているが、同一方向の建物で、個柱の通りが合致し、近接して存在することは、2棟が同時期あるいは時期を大きく隔てないことを示すと考えられることから、報告



第7図 三原遺跡の変遷

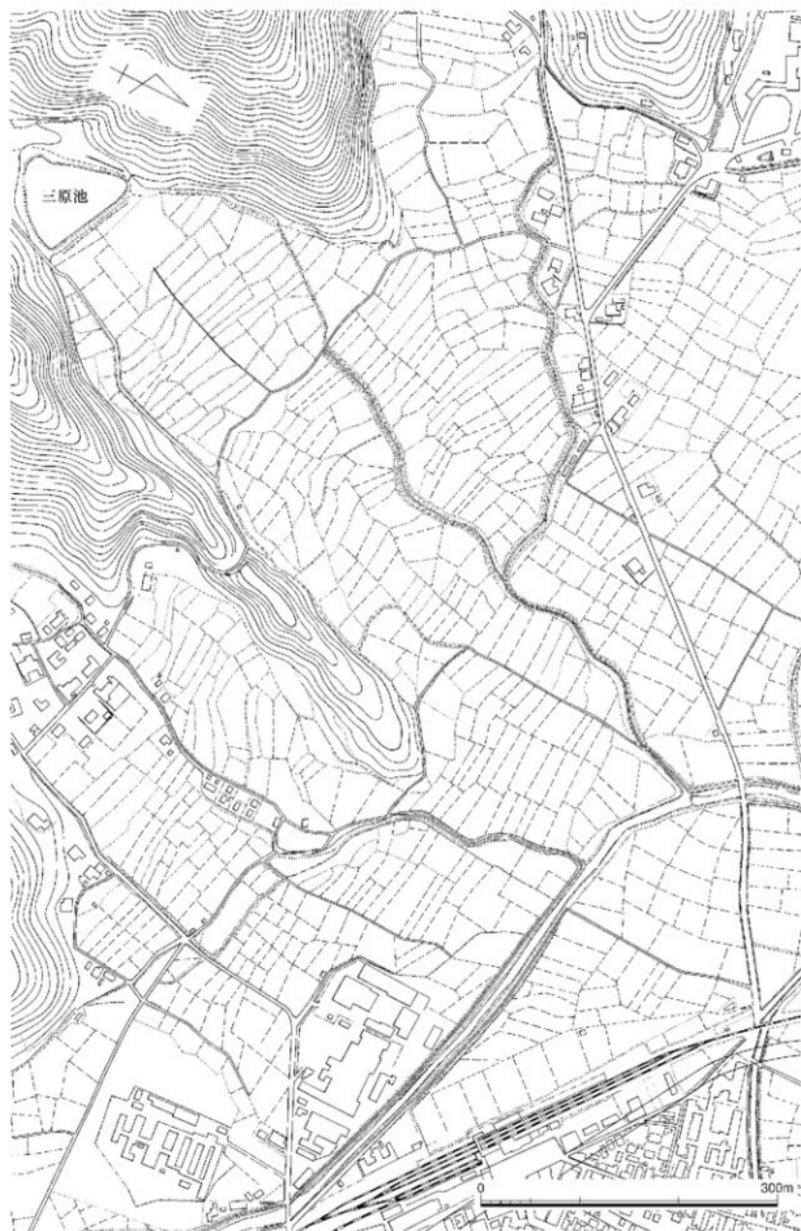
者の判断とは異なるが、S B-1・2ともに奈良時代の建物として判断しておきたい。また、A地区の北部に存在する柱穴群には奈良時代のものがあるようで、「L」字形に並んだ柱列も存在する。仮に建物跡とするならば、南北方向の側柱の方向は $N 1^{\circ} E$ もしくは $N 8^{\circ} E$ であり、E地区で見た掘立柱建物跡の方向でいえば、奈良時代後半と判断することもできよう。A地区では奈良時代後半の土塚（土坑）も存在し、ほかに溝などがある。また、A-2地区のS D-1が奈良時代の可能性があり、D地区のS D-1も飛鳥時代まで存続していた可能性がある。

なお、F地区では明確な遺構は検出されなかったが、奈良時代遺構はF地区にもひろがるようである。

3. 平安時代以降

平安時代以降の遺構は、A-2地区で平安時代末の掘立柱建物跡2棟と井戸・溝が検出されている。その他のB・C・D-2・E地区においても平安時代末～鎌倉時代の柱穴・土塚・溝が検出され、F地区においても同時期の遺構が存在するようであることから、三原谷のほぼ全域に集落等の遺跡がひろがっているものと判断されるが、建物の配置状況や詳細時期が不明なものが多く、現段階では集落の性格等の検討を加えることができない。周辺地域も含めた今後の成果に期待される。

圖 版



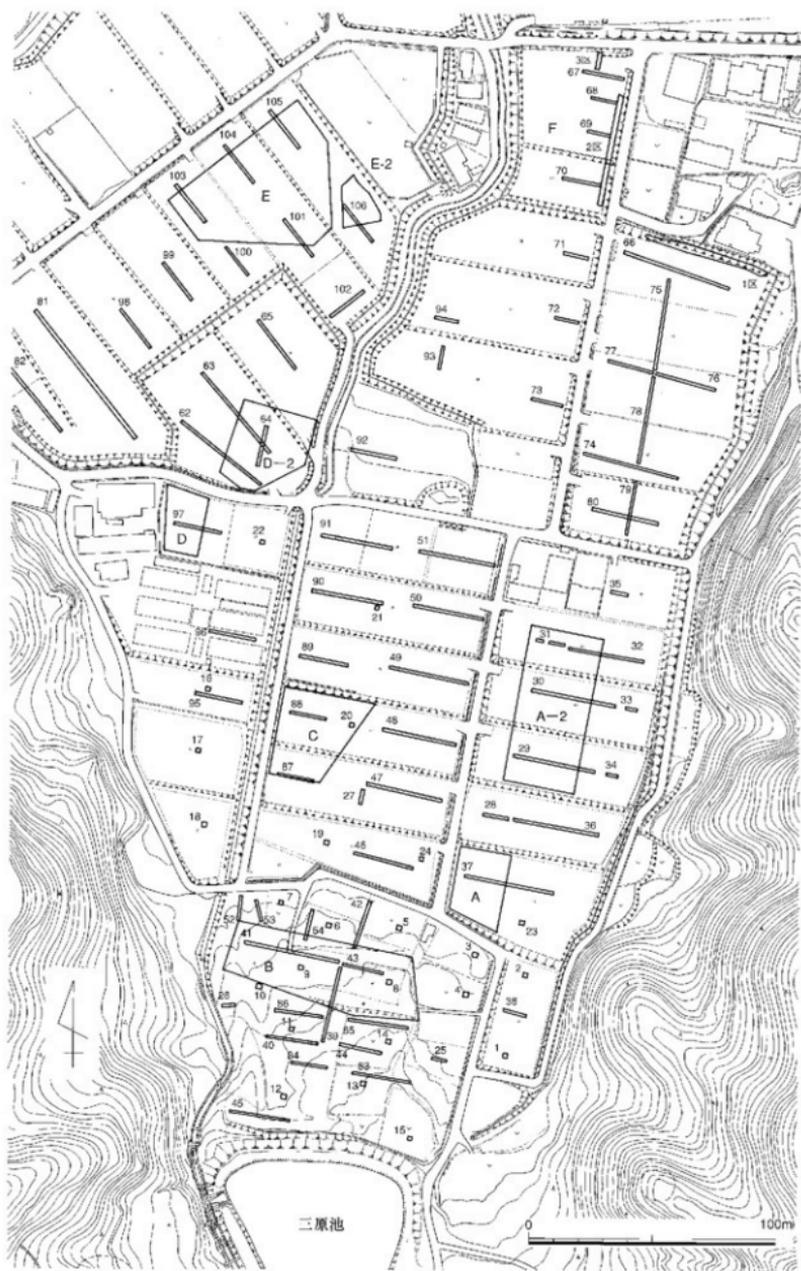
遺跡周辺地形図（圃場整備前）



事業計画線および本発掘調査箇所



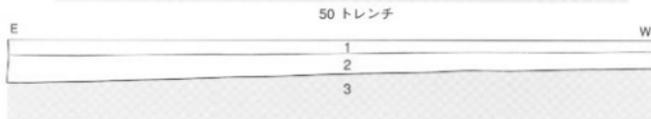
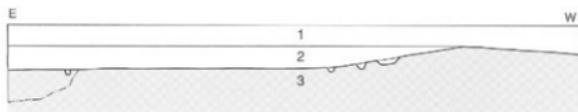
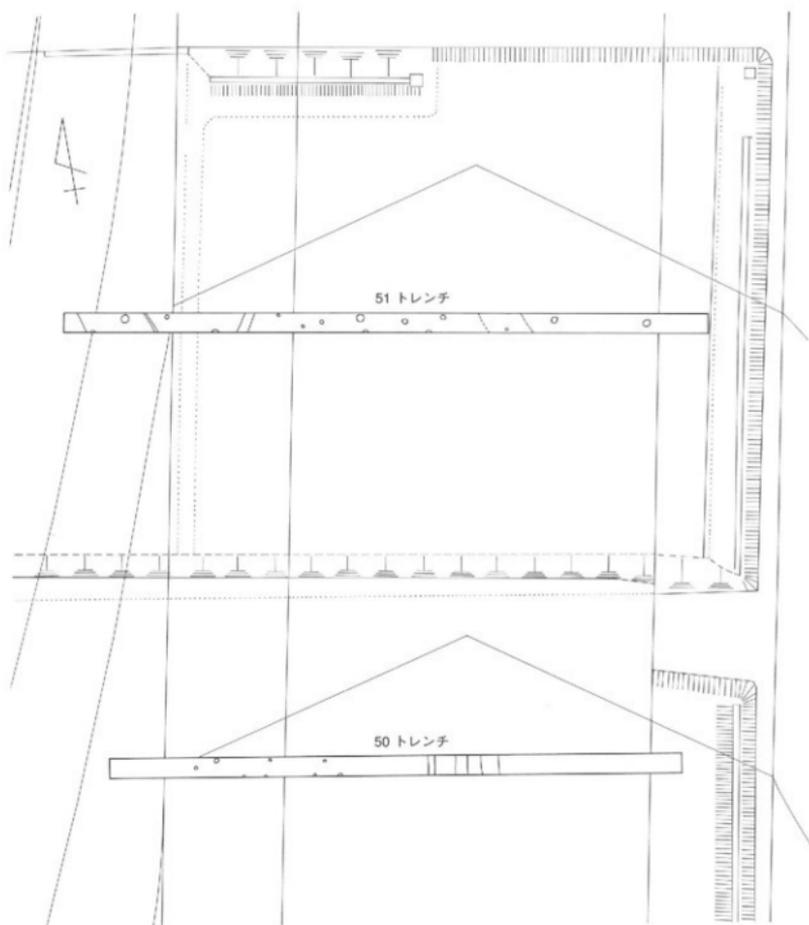
旧地形復元図



確認調査位置図 (地形図は圏場整備後)

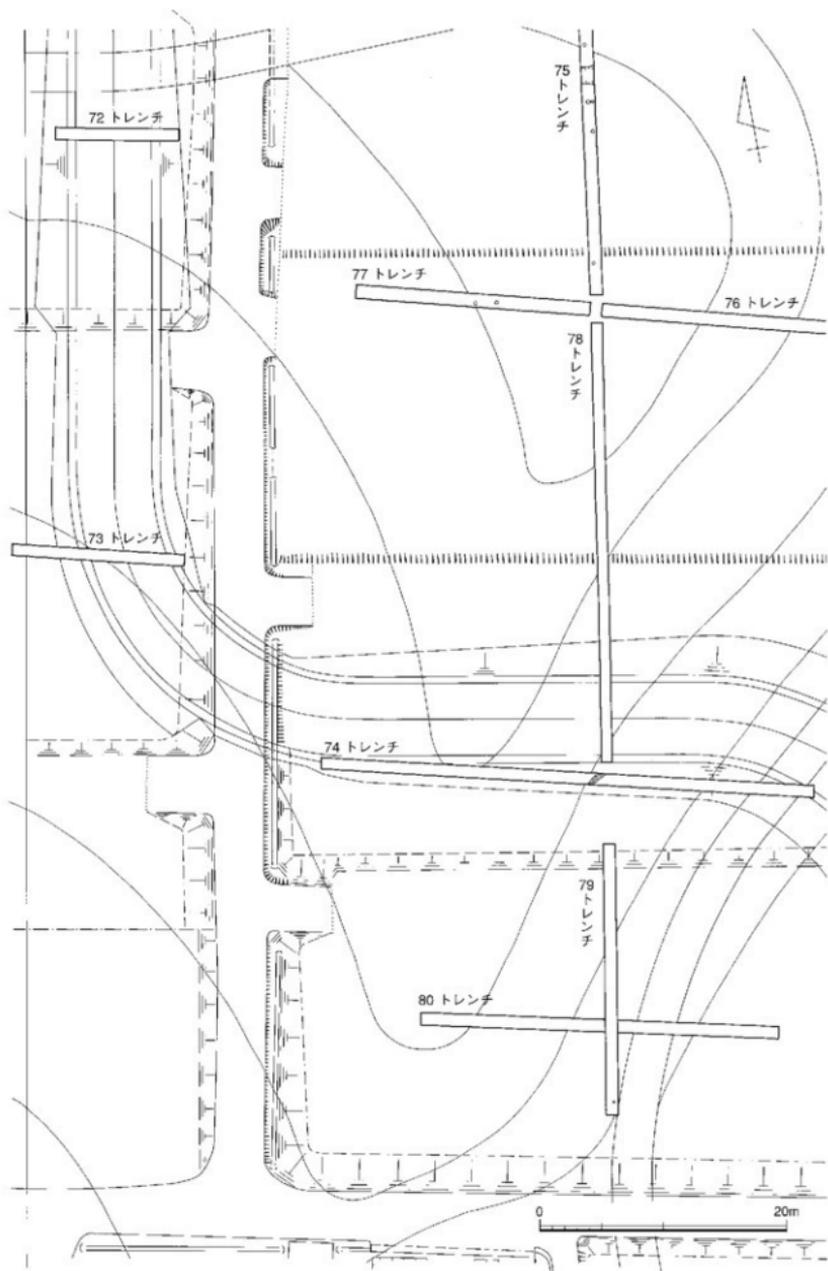


本発掘調査区位置図 (地形図は國場整備前)

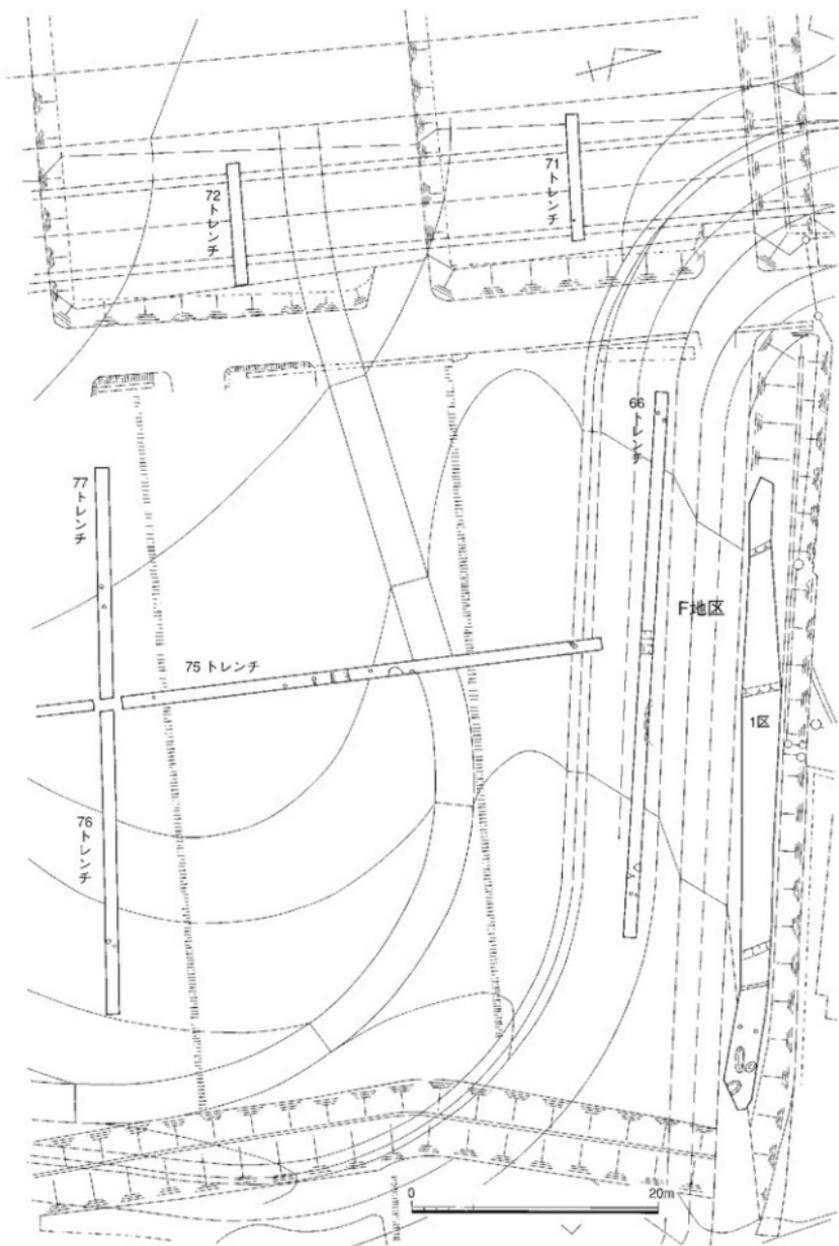


- 1. 耕土
- 2. 整地土
- 3. 地山

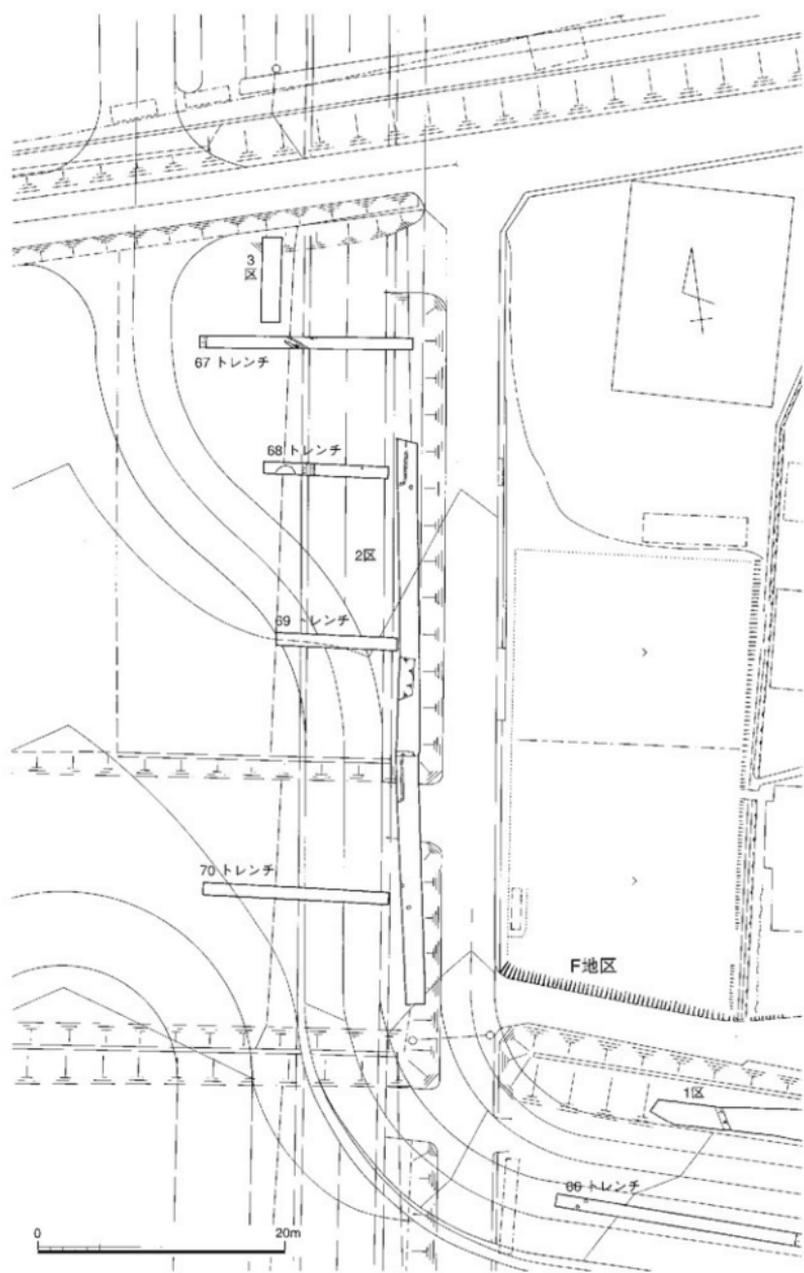
確認調査平面図 1



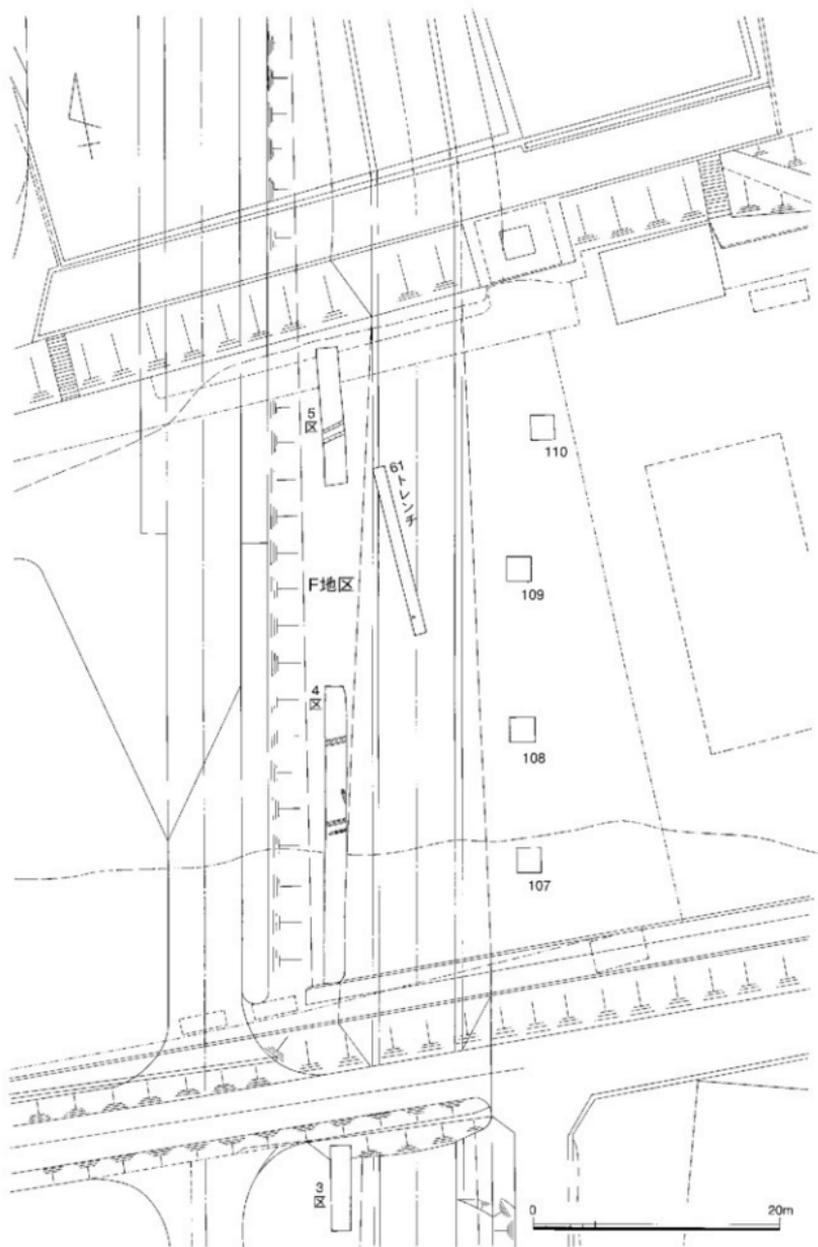
確認調査平面図 2



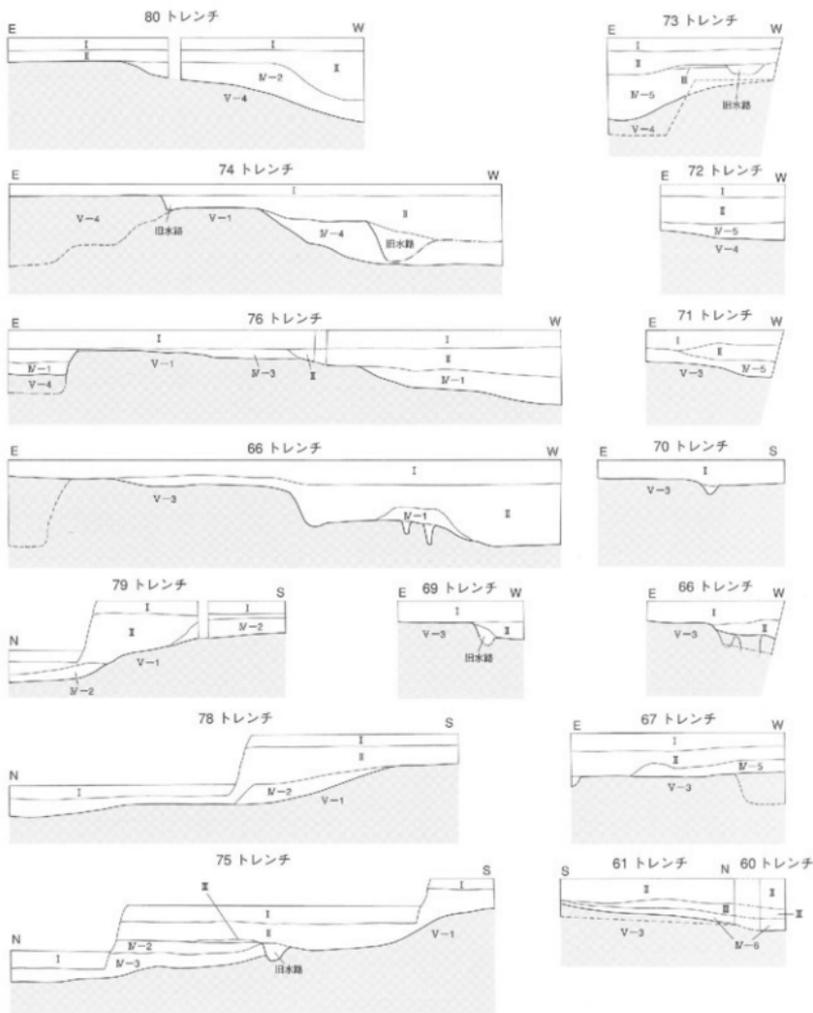
確認調査平面図3 (F地区含む)



確認調査平面図4 (F地区含む)



確認調査平面図5 (F地区含む)



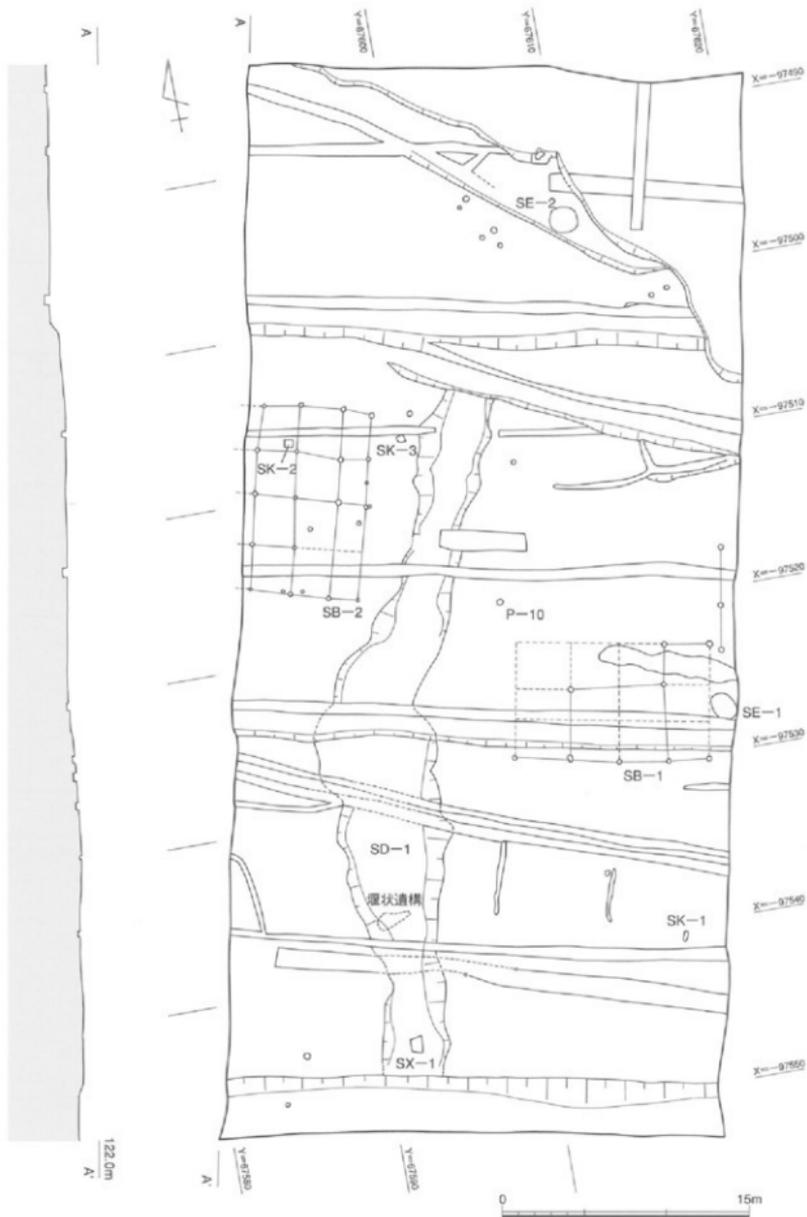
- | | |
|---------------------|----------------------|
| I. 耕土 | V-1. シルト質細砂 (にぶい黄褐色) |
| II. 整地層 | -2. シルト質極細砂 (にぶい黄褐色) |
| III. 旧降土 | -3. シルト質極細砂 (明黄褐色) |
| IV-1. シルト質極細砂 (褐灰色) | -4. 砂礫層 |
| -2. " (灰白色) | |
| -3. " (明黄褐色) | |
| -4. " (にぶい黄褐色) | |
| -5. " (灰黄褐色) | |
| -6. シルト (浅黄色) | |



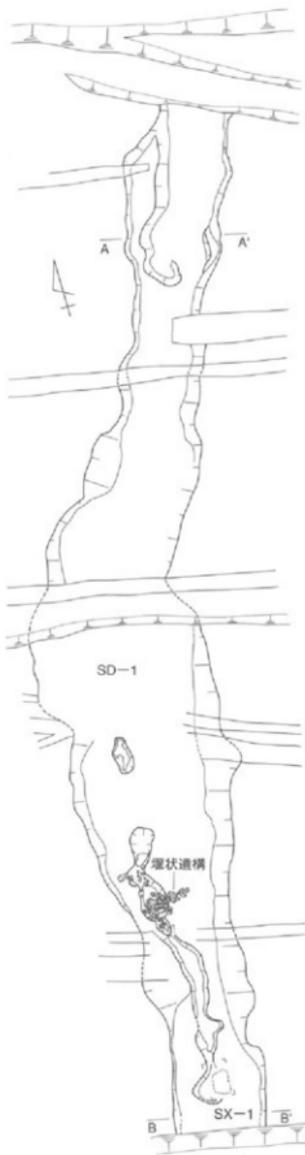
確認調査土層断面図



A地区全体・断面図



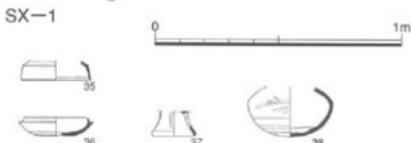
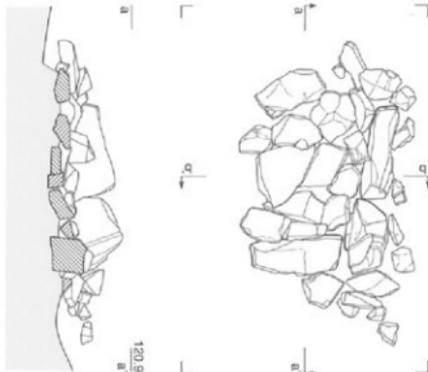
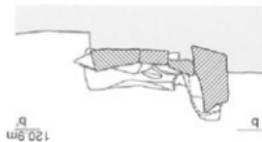
A-2 地区全体図



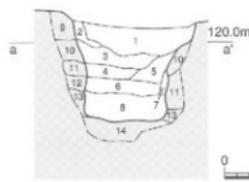
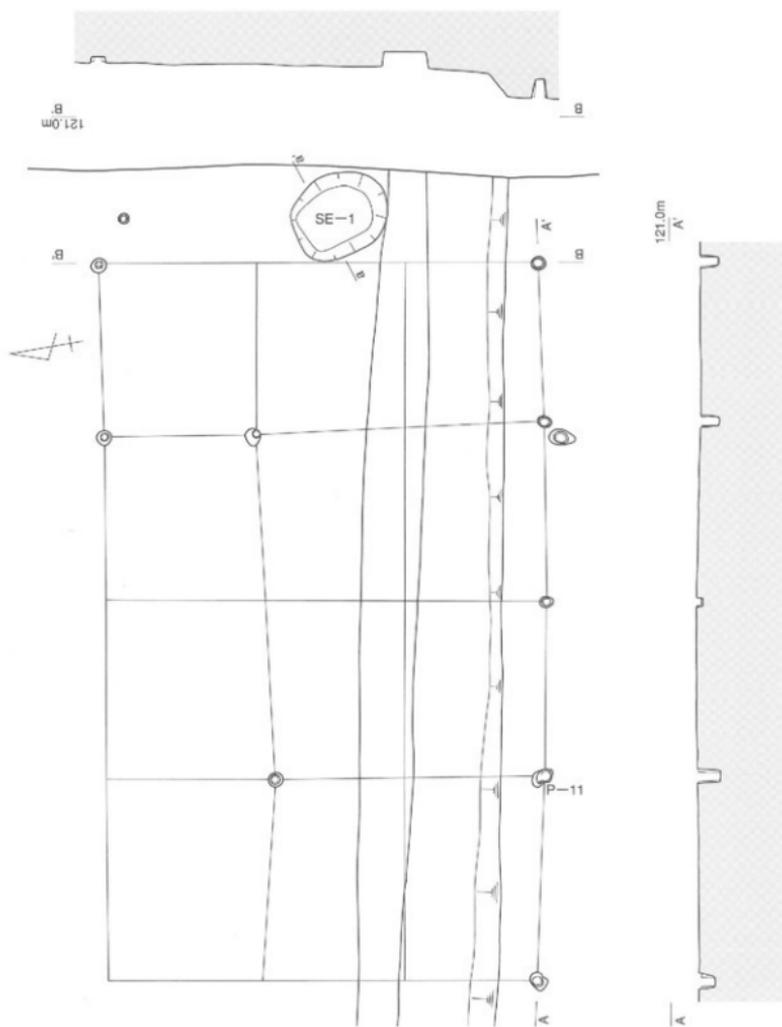
1. 10YR6-2R黄褐色 シルト質極細砂 (鉄分含む)
2. 10YR6-4R黄緑 極細砂～シルト含む粗粒砂



1. 10YR6-1R褐色 シルト質極細砂 (径1cm大ロームブロック含む、有機分若干含む、鉄分含む)
- 1'. 10YR4-2R黄褐色 シルト質極細砂 (径3-4cm大ロームブロック多く含む、有機分やや含む)
2. 2.5Y7-2R黄色 粗粒砂 (径～2mm大礫多く含む)、中粒砂～極細砂
3. 10YR6-6-8R黄褐色 極細砂 (ロームブロック多く含む)
4. 2.5Y7-3R黄色 粗粒砂～極細砂 (径5-6cm大ロームブロック多く含む)
5. 10GY7-1明緑灰色 粗粒砂～極細砂 (粗粒砂含む)
6. 2.5GY6-1オリーブ灰色 粗粒砂～極細砂 (径3-4cm大の礫・粗粒砂多く含む)



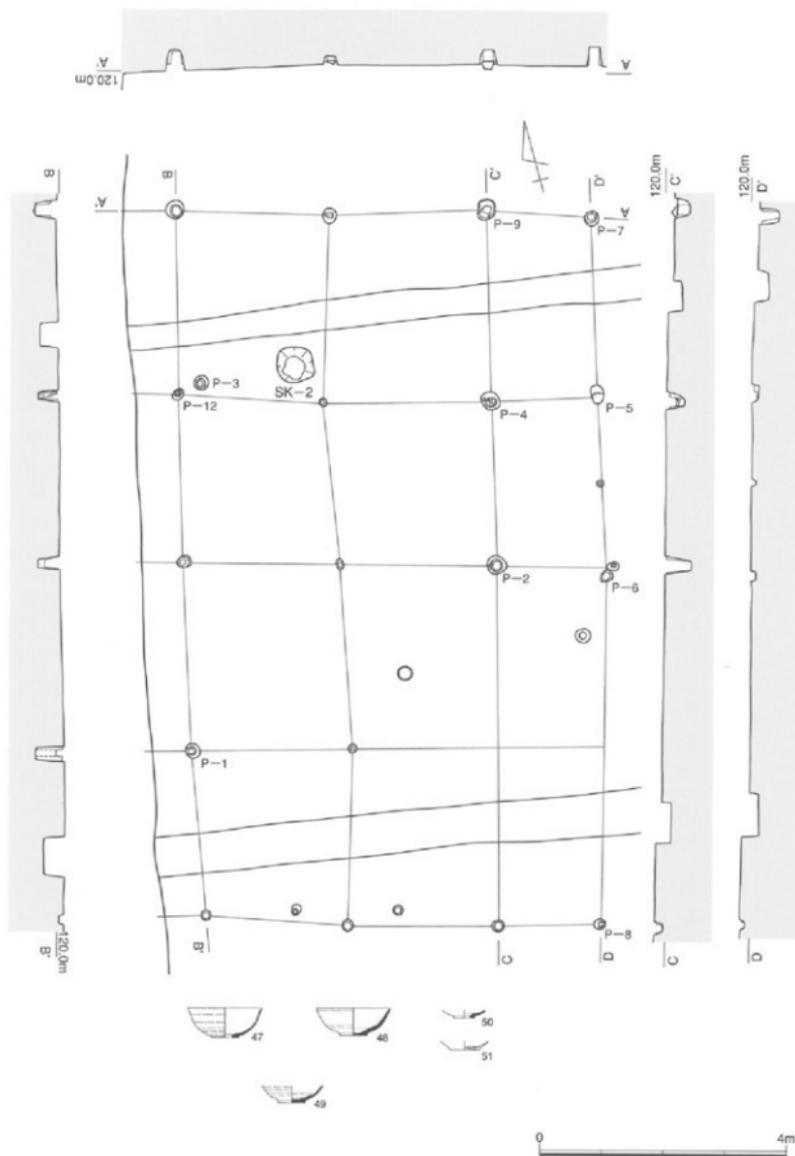
SD-1・SX-1平面・断面図



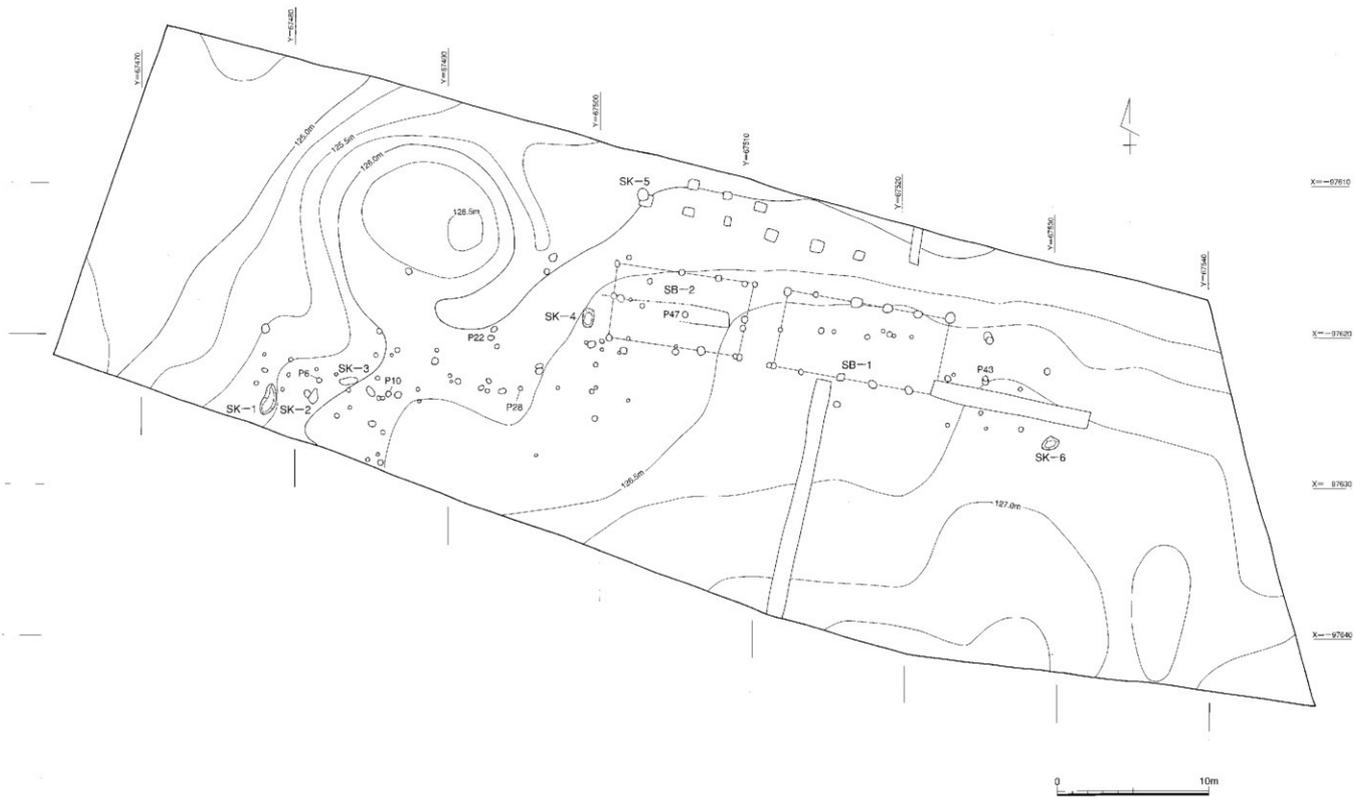
- | | |
|-----------------------------------|------------------------------------|
| 1. 2236/61.203+黄土 灰層砂層 (埋藏物~中層含む) | 8. 10G76/16灰白色 シルト質埋藏砂層 (埋藏物~埋藏含む) |
| 2. 2237/0明黄褐色 灰層砂層 (埋藏物~中層少含む) | 9. 22343+0黄褐色 粘土質砂層 (埋藏物~中層) |
| 3. 22316/0明黄褐色 灰層砂層 (埋藏物~中層少含む) | 10. 2237/0灰白色 灰層砂層 (埋藏物~中層) |
| 4. 2237/0灰白色 灰層砂層 (埋藏物含む) | 11. 22376/0黄褐色 埋藏物~中層 (埋藏物含む) |
| 5. 22316/1高灰白色 シルト質埋藏砂層 (灰多く含む) | 12. 22376-2灰白色 シルト質埋藏砂層 (埋藏物含む) |
| 6. 22316/1高灰白色 埋藏砂層 (埋藏物~埋藏含む) | 13. 10T77/1灰白色 シルト質埋藏砂層 (埋藏物含む) |
| 7. 2237/1灰白色 シルト質埋藏砂層 (埋藏物~埋藏含む) | 14. 10G6/1高灰白色 埋藏物~人層 (埋藏物含む) |



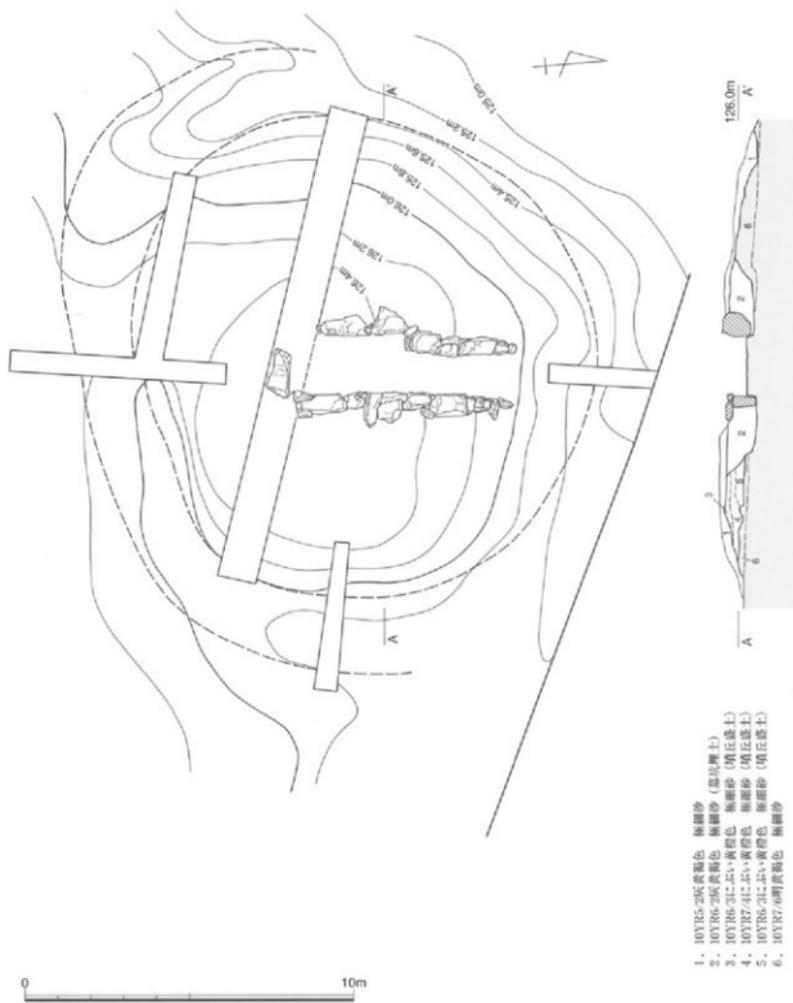
SB-1・SE-1平面・断面図



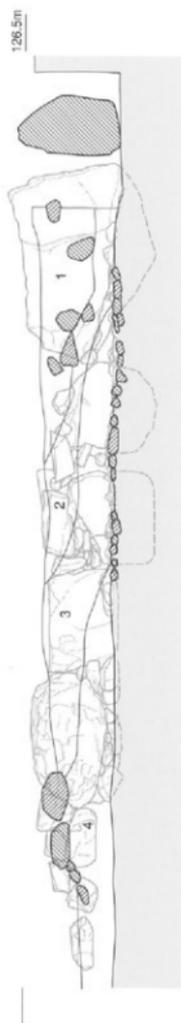
SB-2 平面・断面図



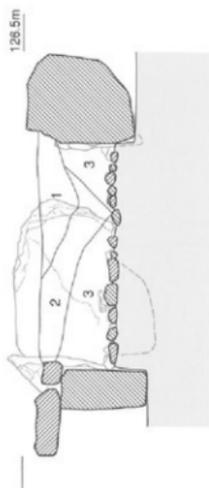
B地区全体平面図



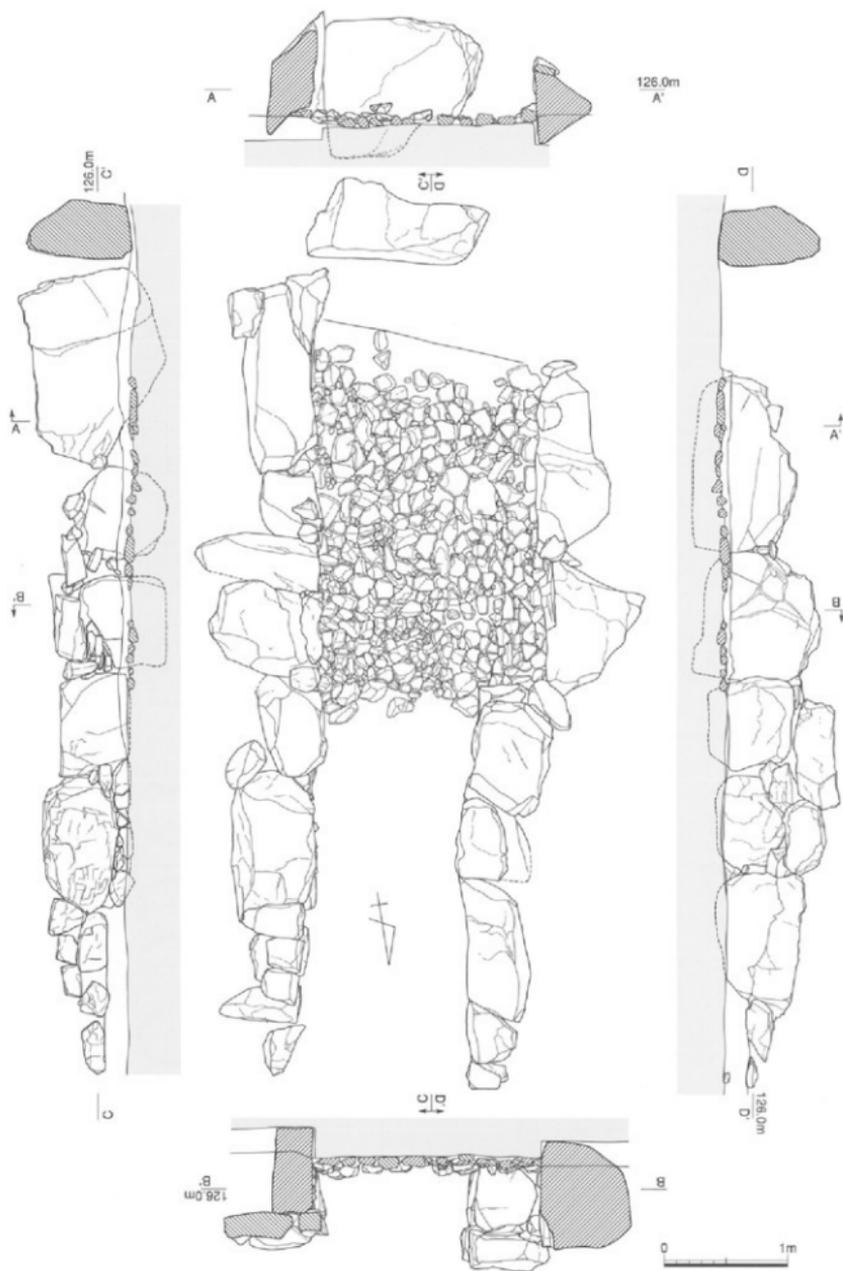
1号墳丘平面・土層断面図



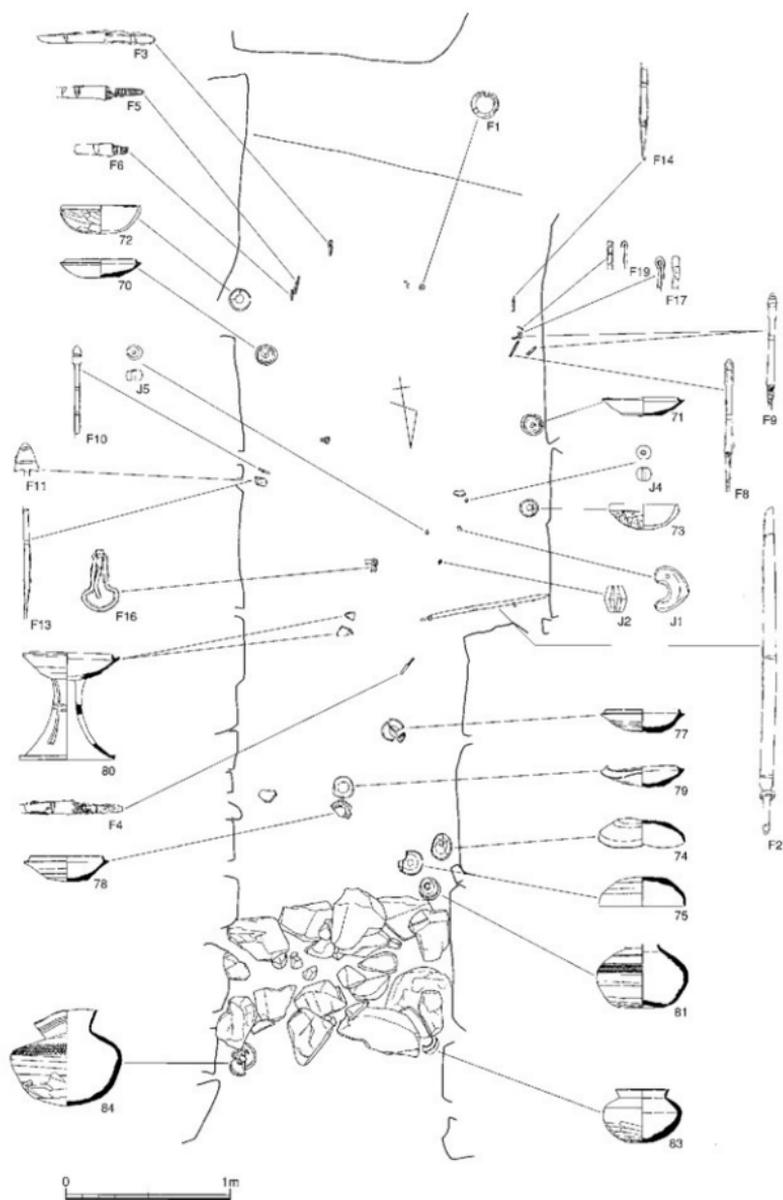
1. 10YR4/1 (灰黄和灰色) 細粒砂 (旧耕土)
2. 10YR4/1 (和灰色) 細粒砂 (大礫混じり)
3. 10YR6/2 (灰黄色) 細粒砂
4. 10YR4/2 (灰色黒色) 細粒砂 (中～大礫混じり)



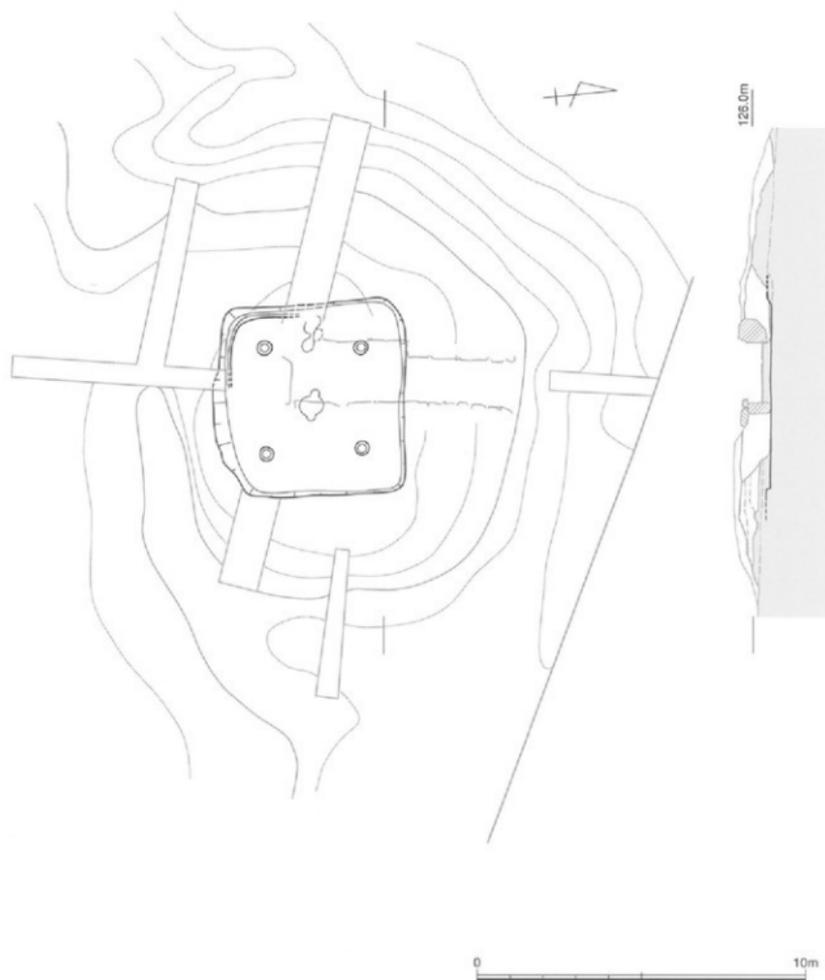
0 2m



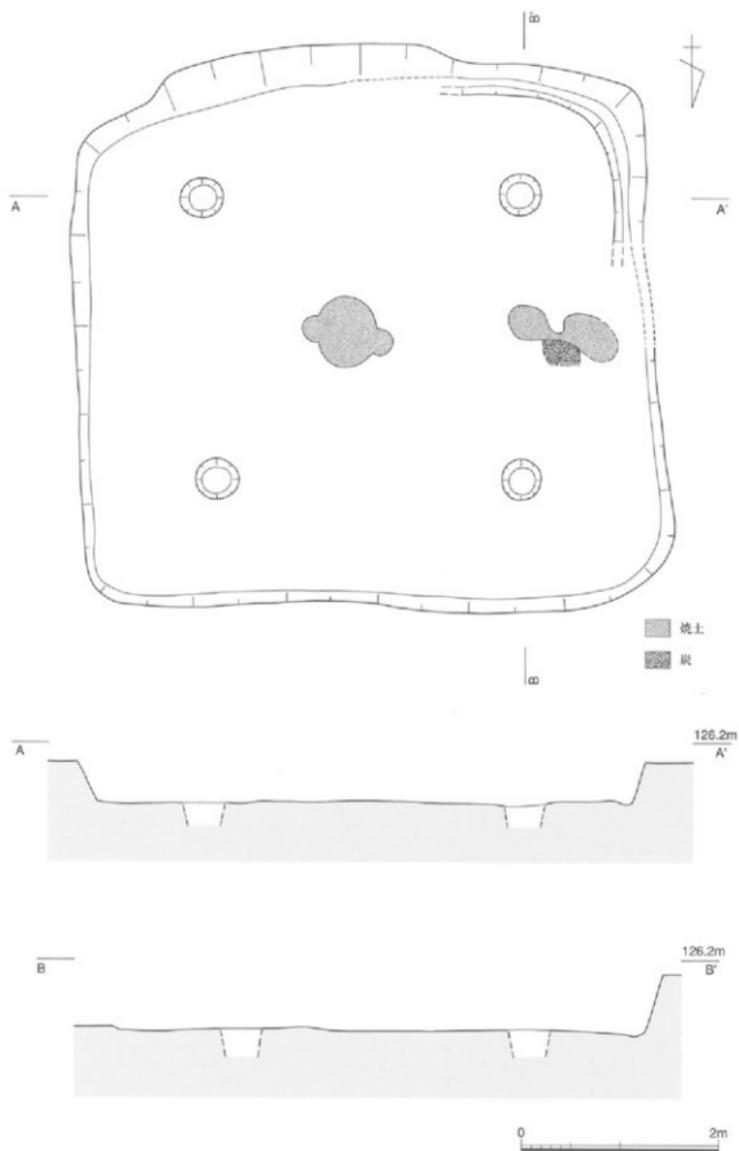
1号填石室实测图



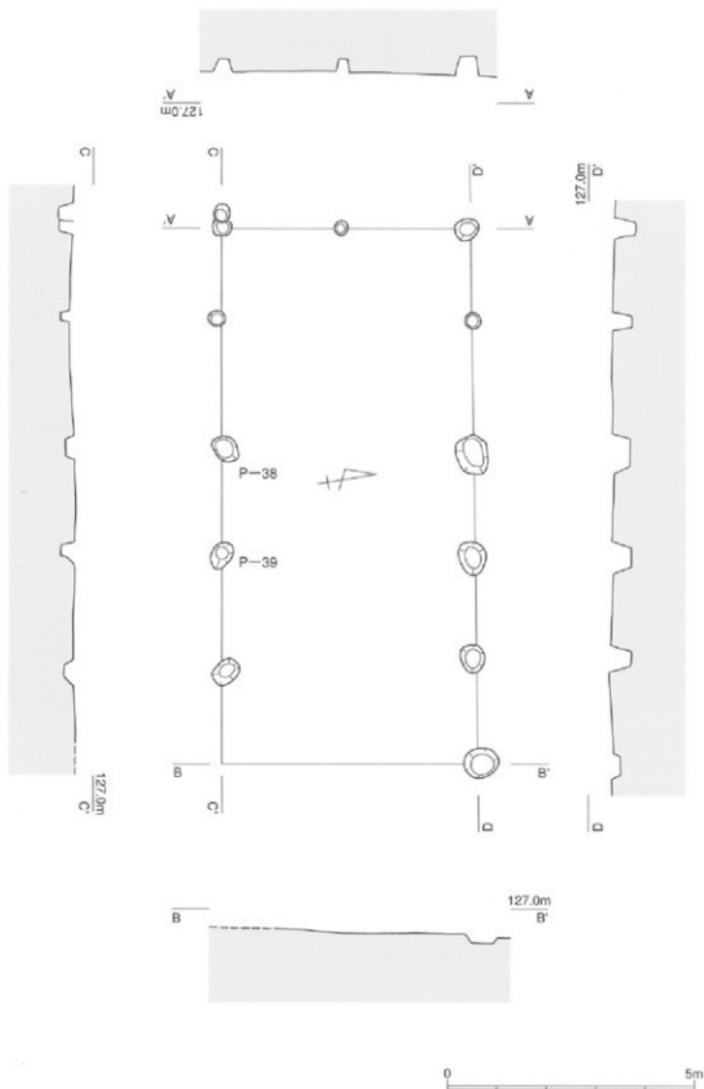
1号墳石室内遺物出土状況図



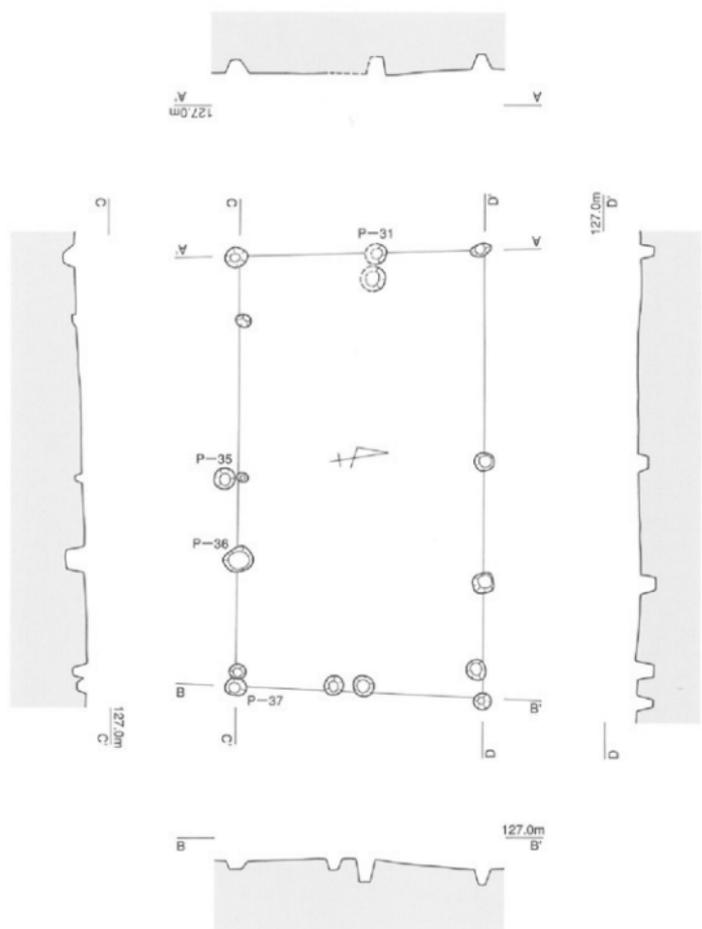
1号墳丘下竪穴住居跡位置図



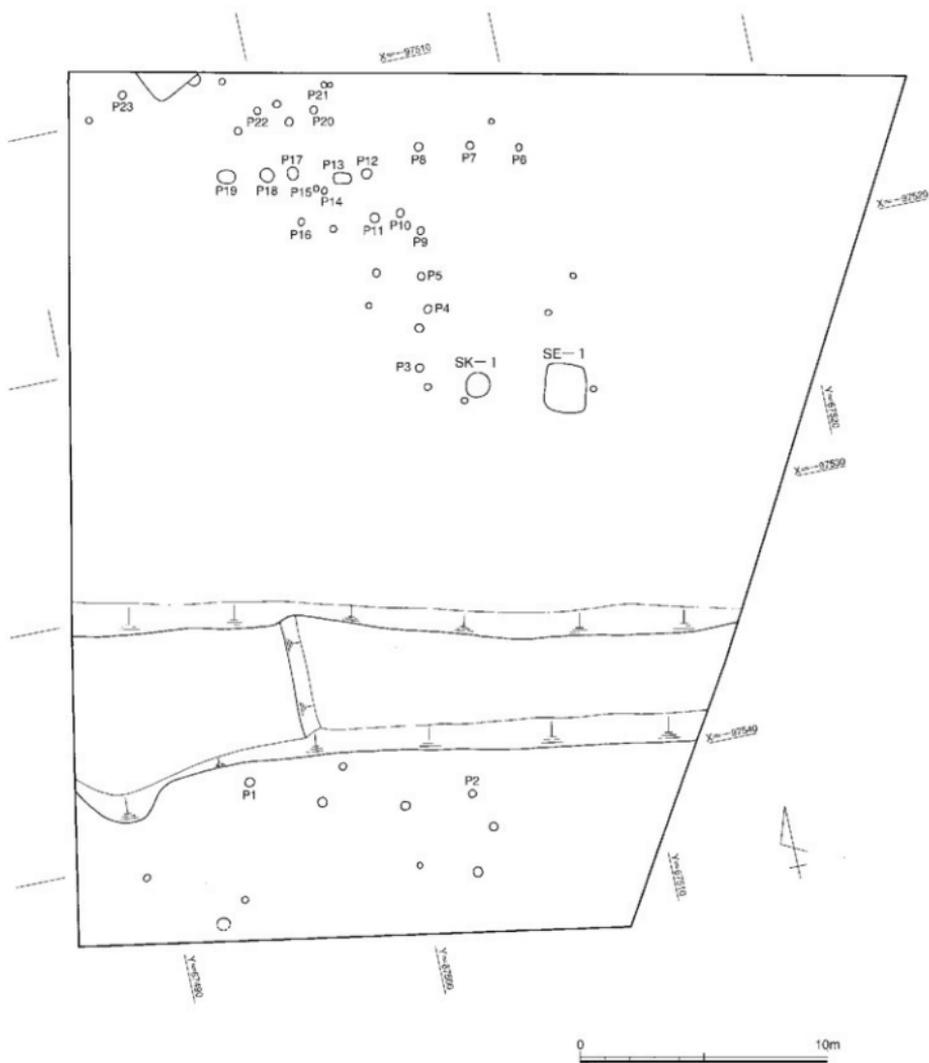
竪穴住居跡 (SH-1) 平面・断面図



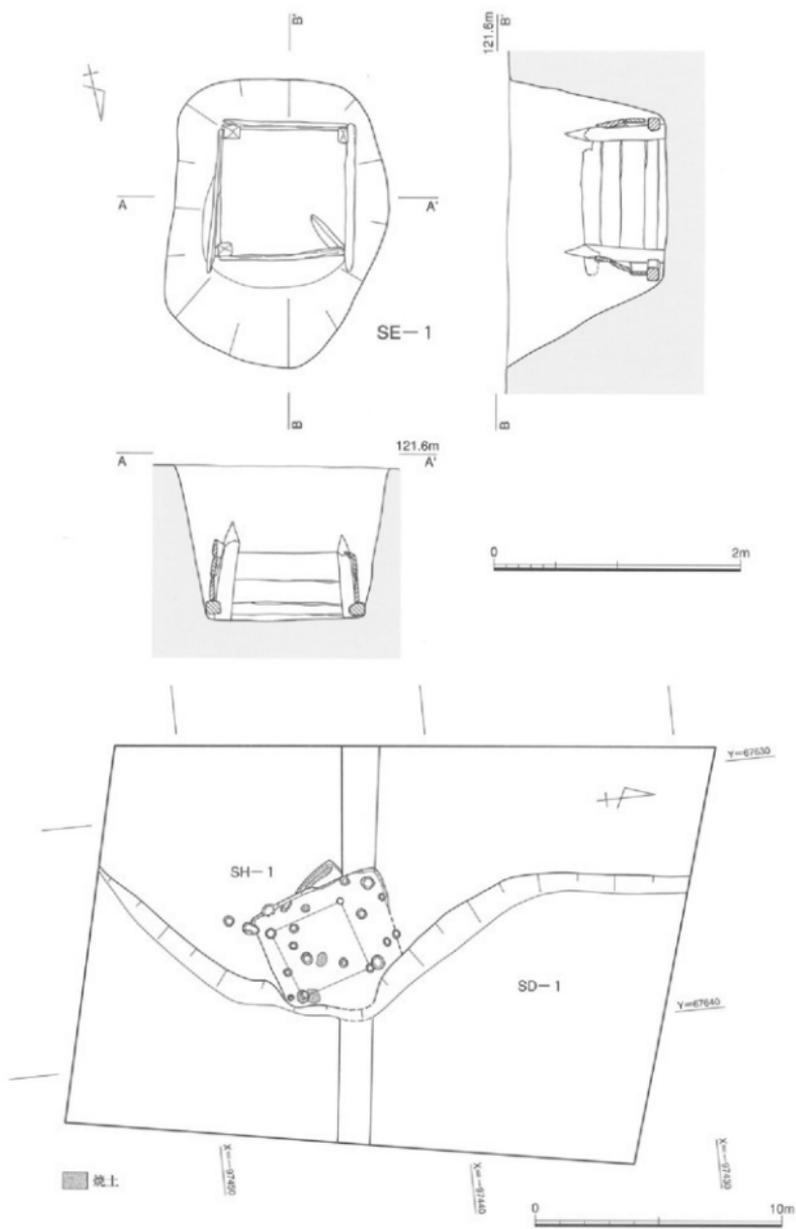
SB-1 平面・断面図



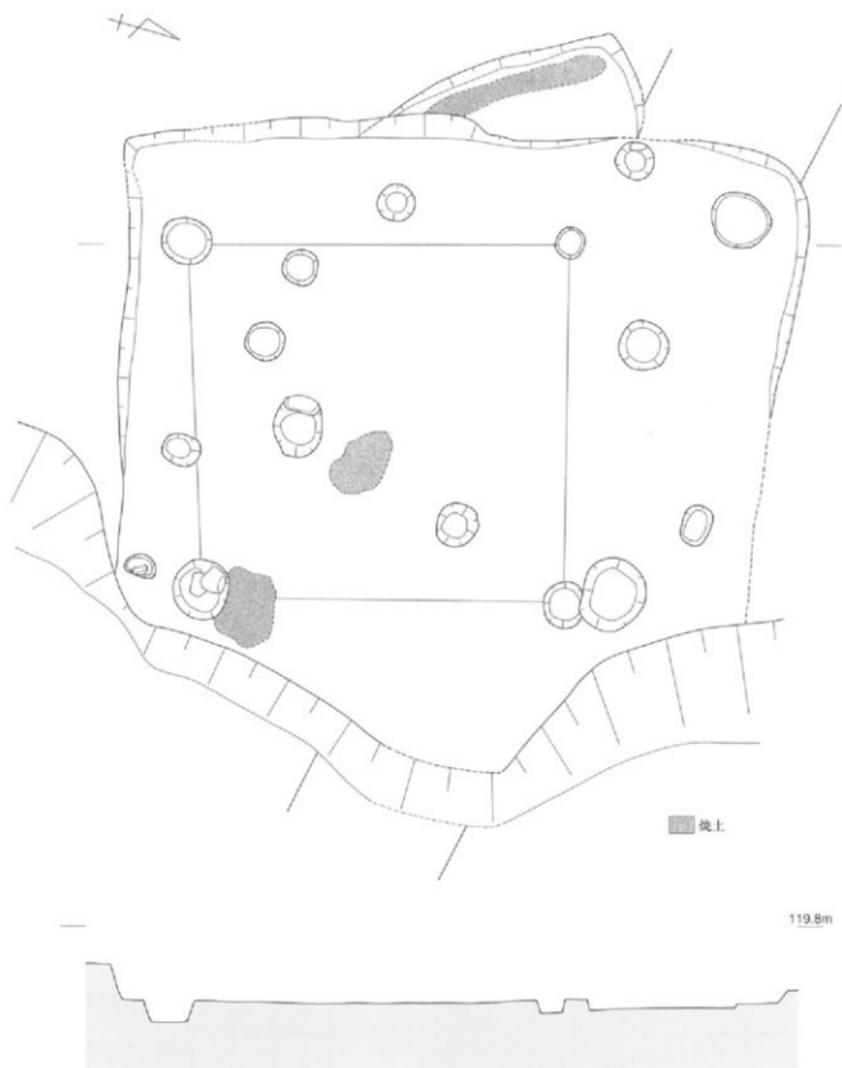
SB-2 平面・断面図



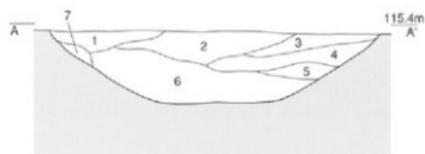
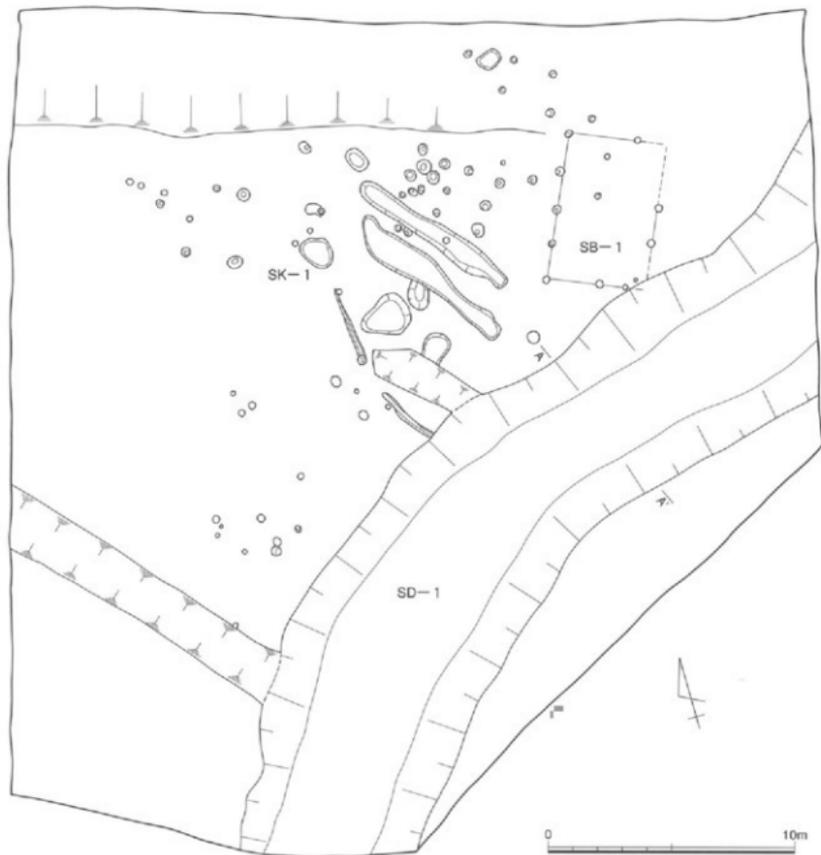
C地区全体平面図



SE-1 実測図・D地区全体平面図



SH-1 平面・断面図

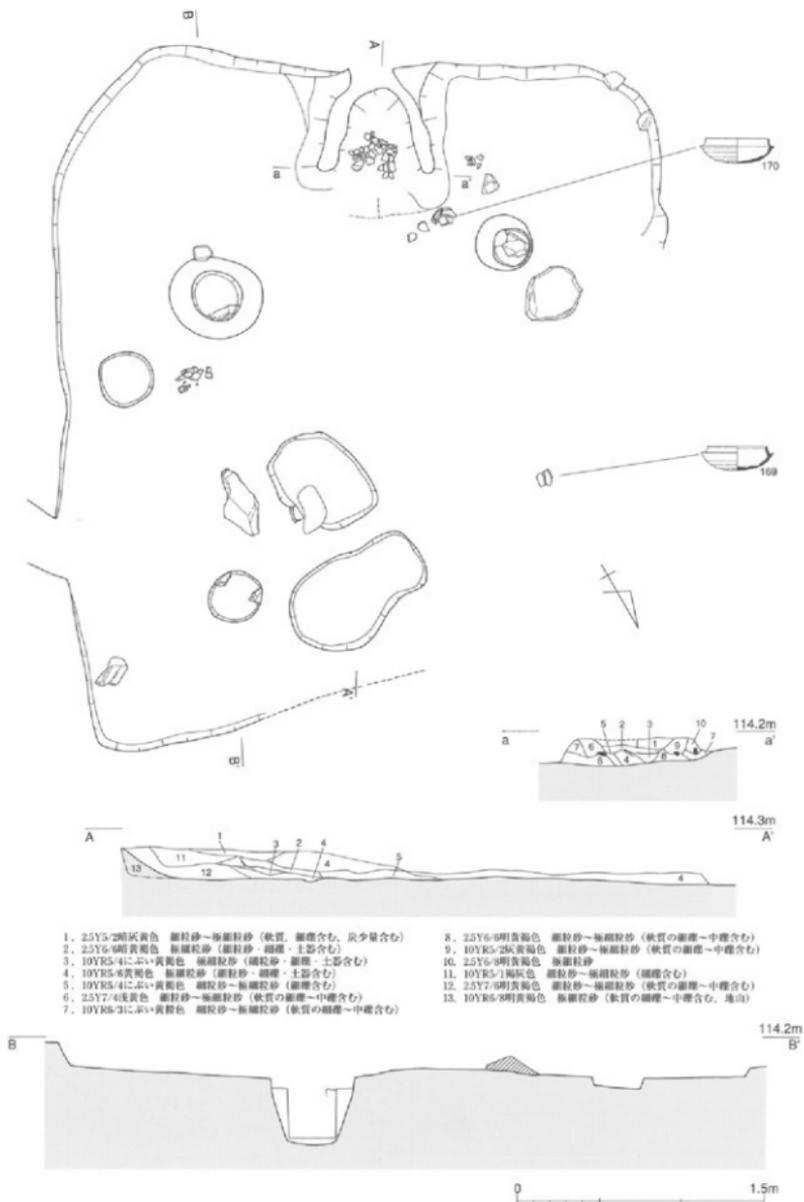


1. 黒褐色 極細砂シルト
(植物遺体含む、ブロックで淡黄灰色細砂含む)
2. 暗灰色 礫混じり中細砂
3. 黄褐色 小礫～大礫
4. 淡黒灰色 細砂～極細砂 (植物遺体含む)
5. 淡青灰色 中礫混じり中細砂
6. 明黄褐色 礫 (人頭大の壺角礫) 酸化第二鉄含む
7. 暗緑灰色 シルト質極細砂

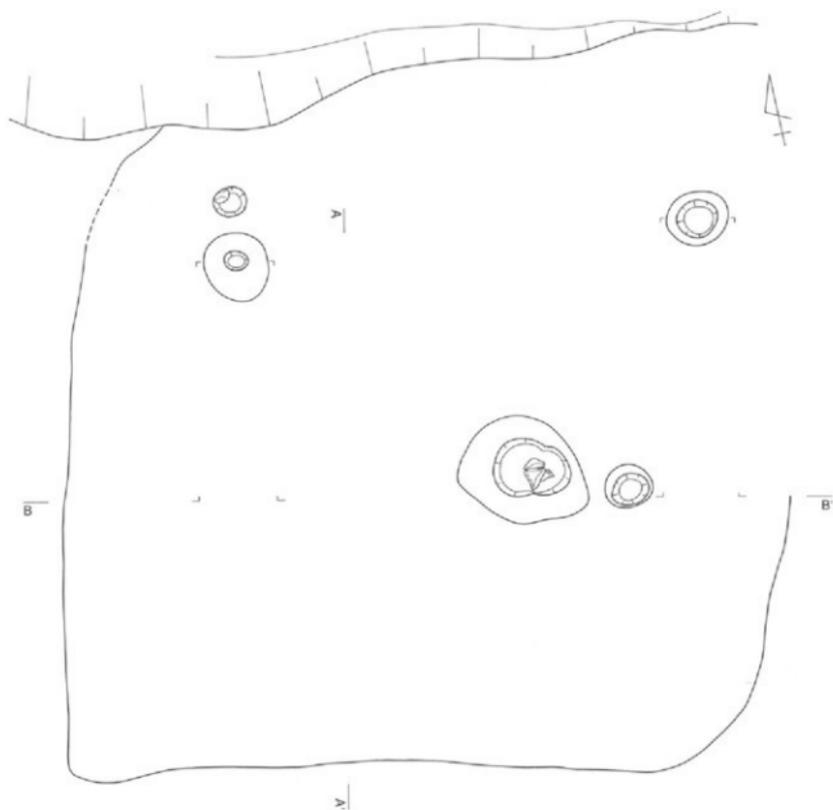
D-2地区全体図・SD-1土層断面図



E地区全体図



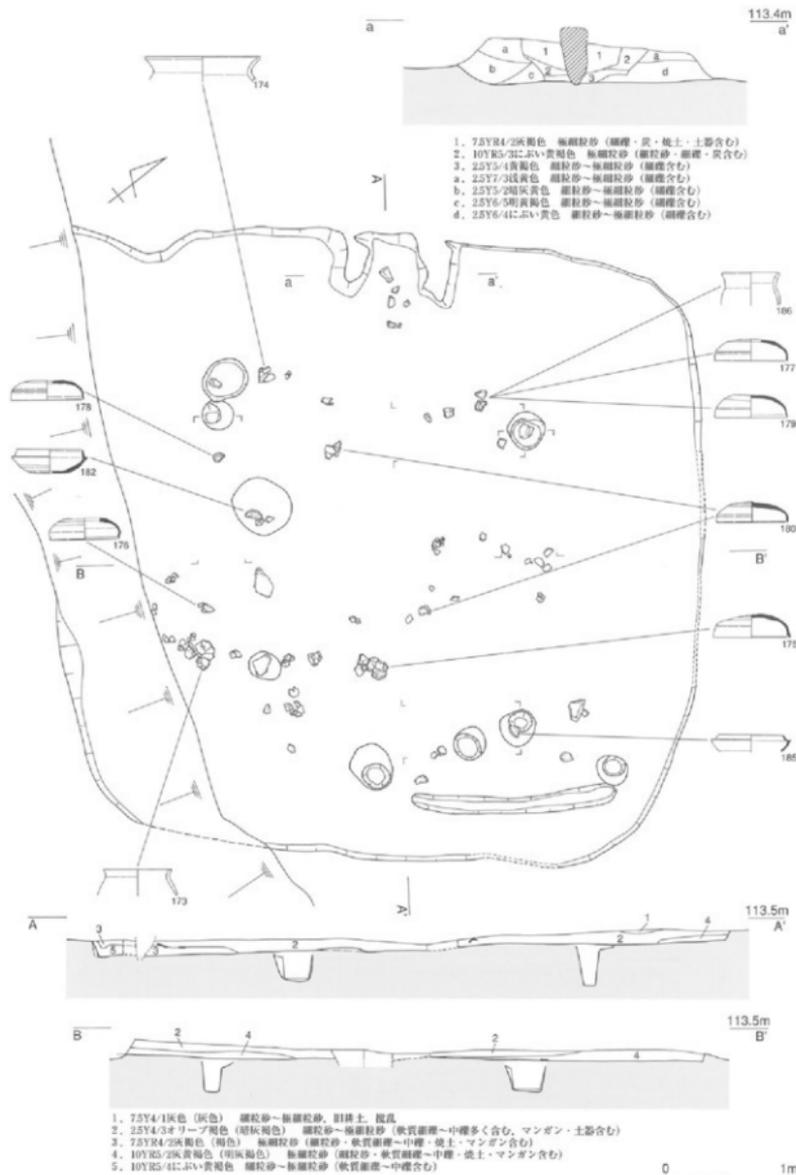
SH-1 平面・断面図



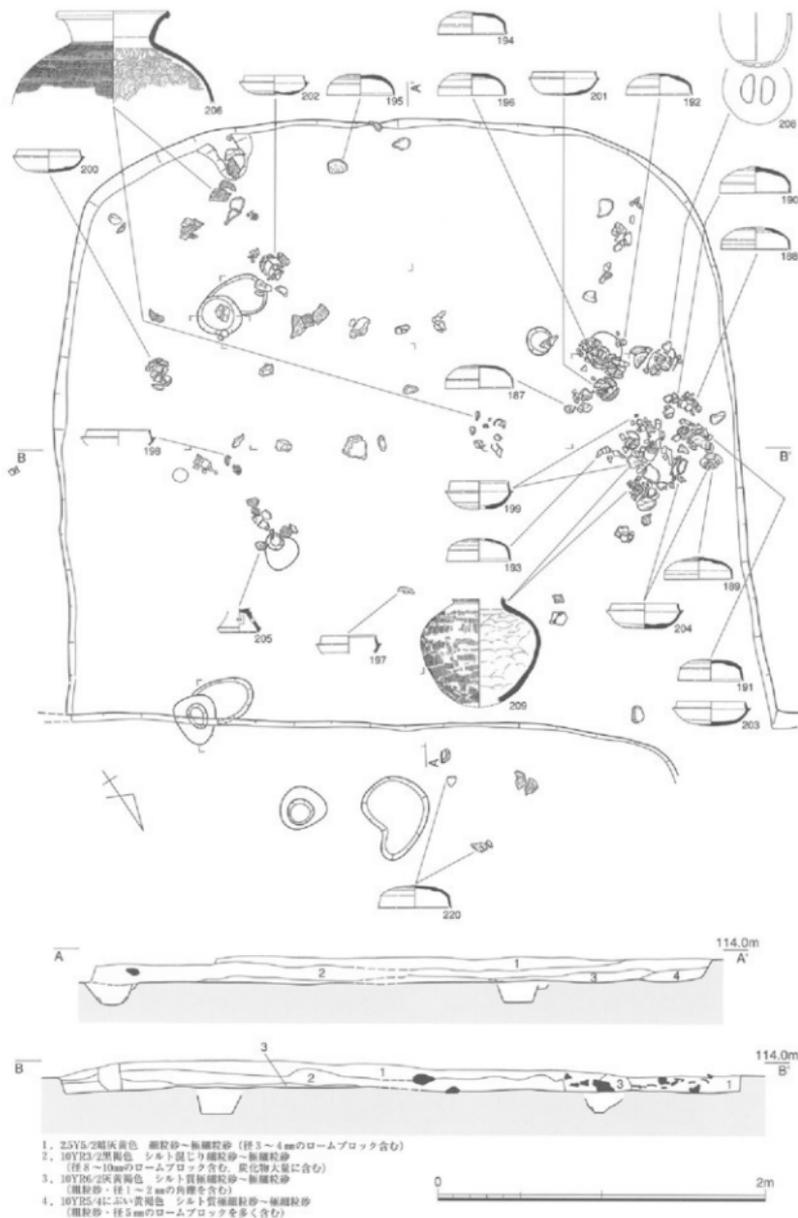
1. 10YR4/2灰黄藍色 細粒砂～極細粒砂（軟質の礫層～中礫・鉄分・マンガン含む）
2. 10YR6/3にふい黄褐色 極細粒砂（礫層・鉄分・マンガン含む）
3. 2.5Y5/2暗灰黄色 細粒砂～極細粒砂（礫層～中礫含む、鉄分・マンガン少量含む）
4. 2.5Y5/2暗灰黄色 細粒砂～極細粒砂（軟質、礫層～中礫・鉄分・マンガン含む）
5. 2.5Y6/2灰黄色 極細粒砂で凝結砂含む（軟質、礫層～中礫含む）

0 1.5m

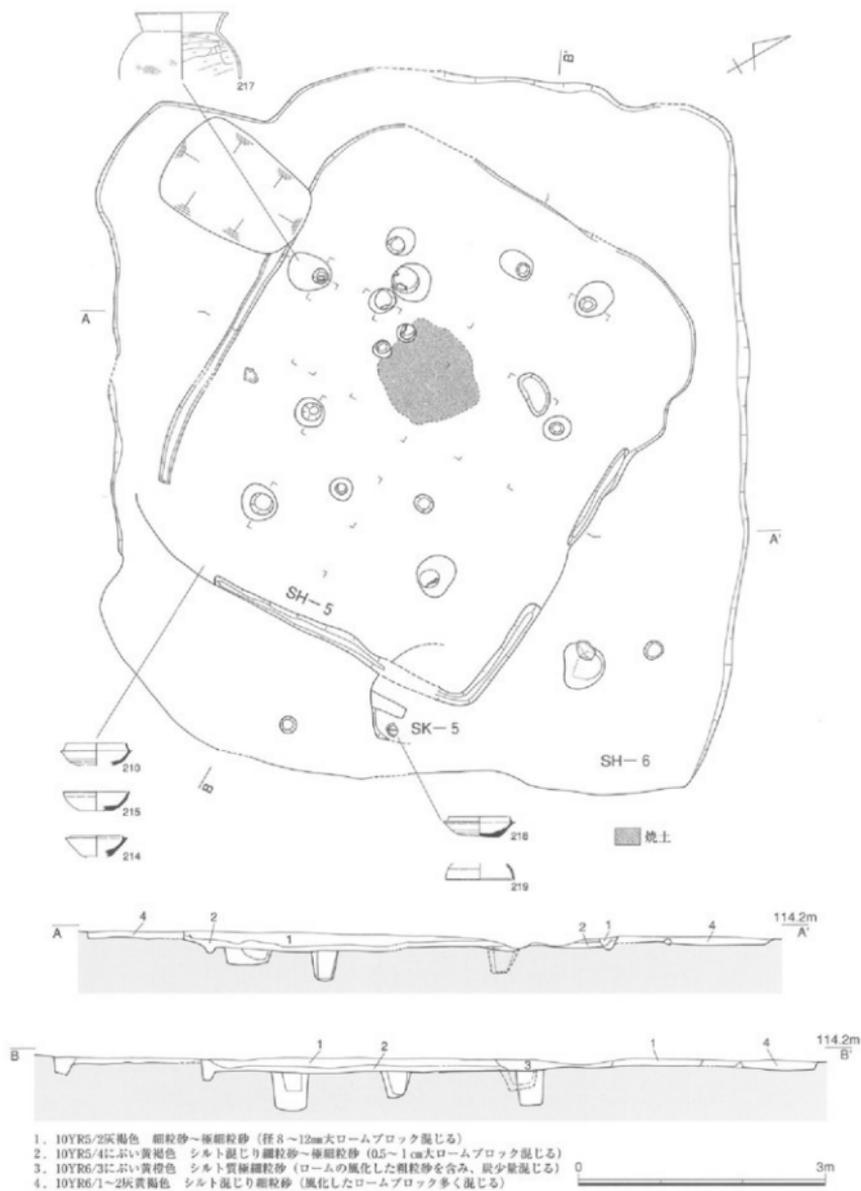
SH-2平面・断面図



SH-3 平面・断面図



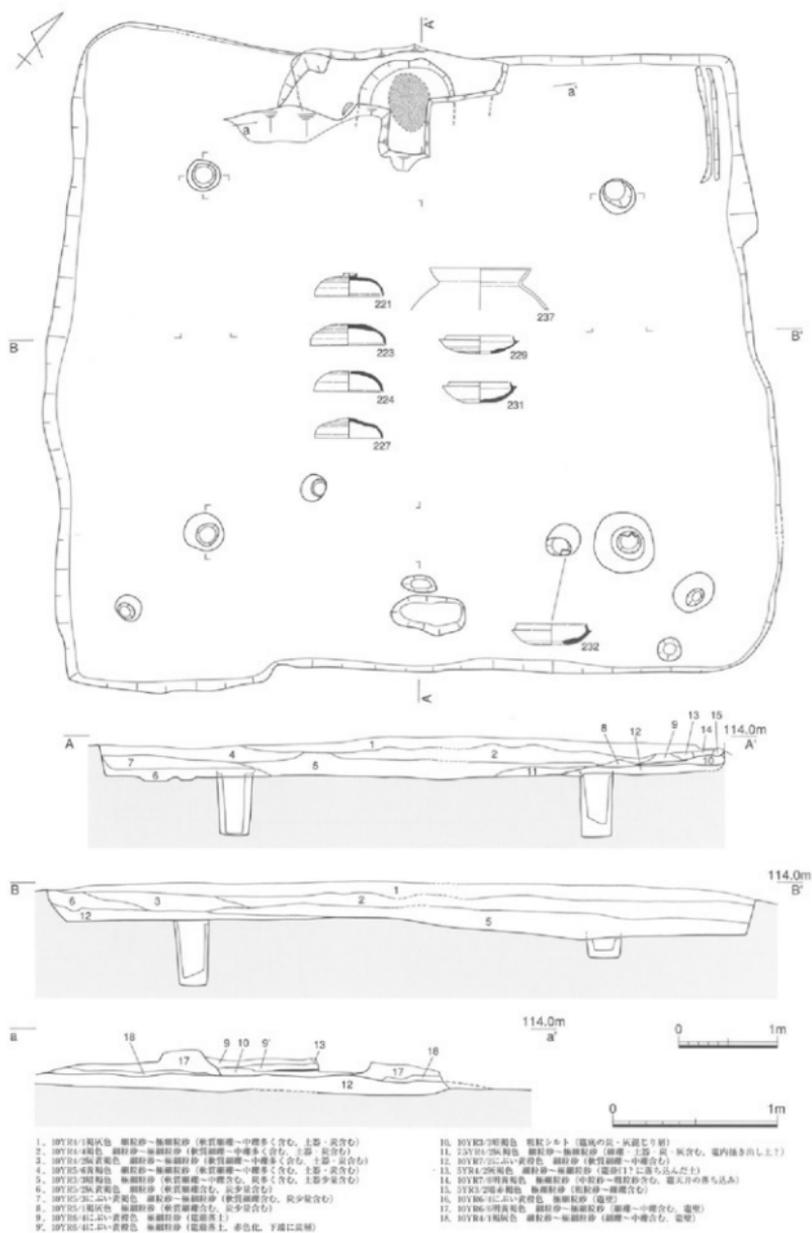
SH-4 平面・断面図



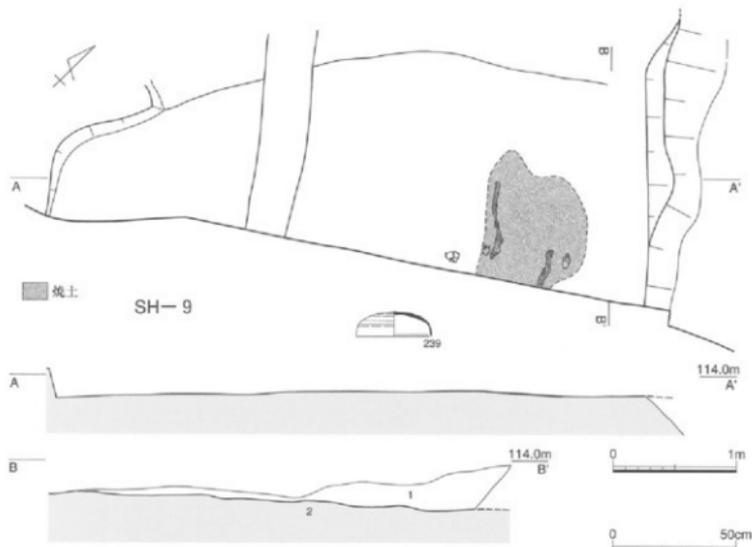
SH-5・6平面・断面図



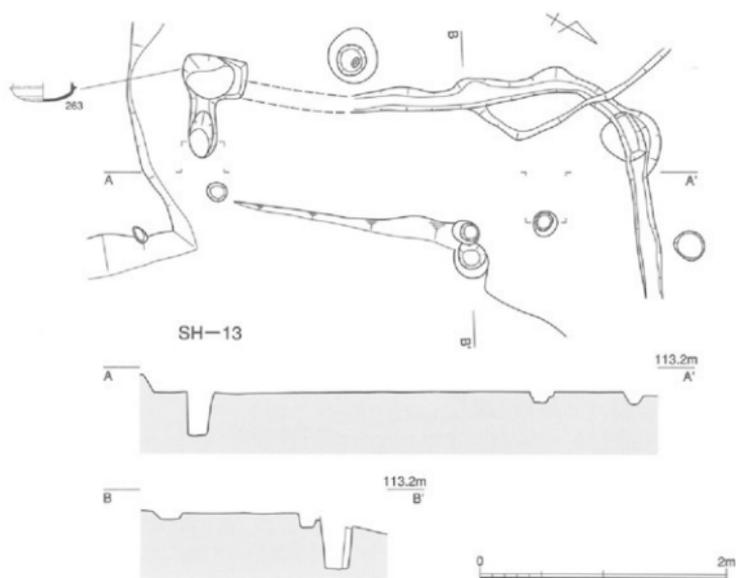
SH-7 平面・断面図



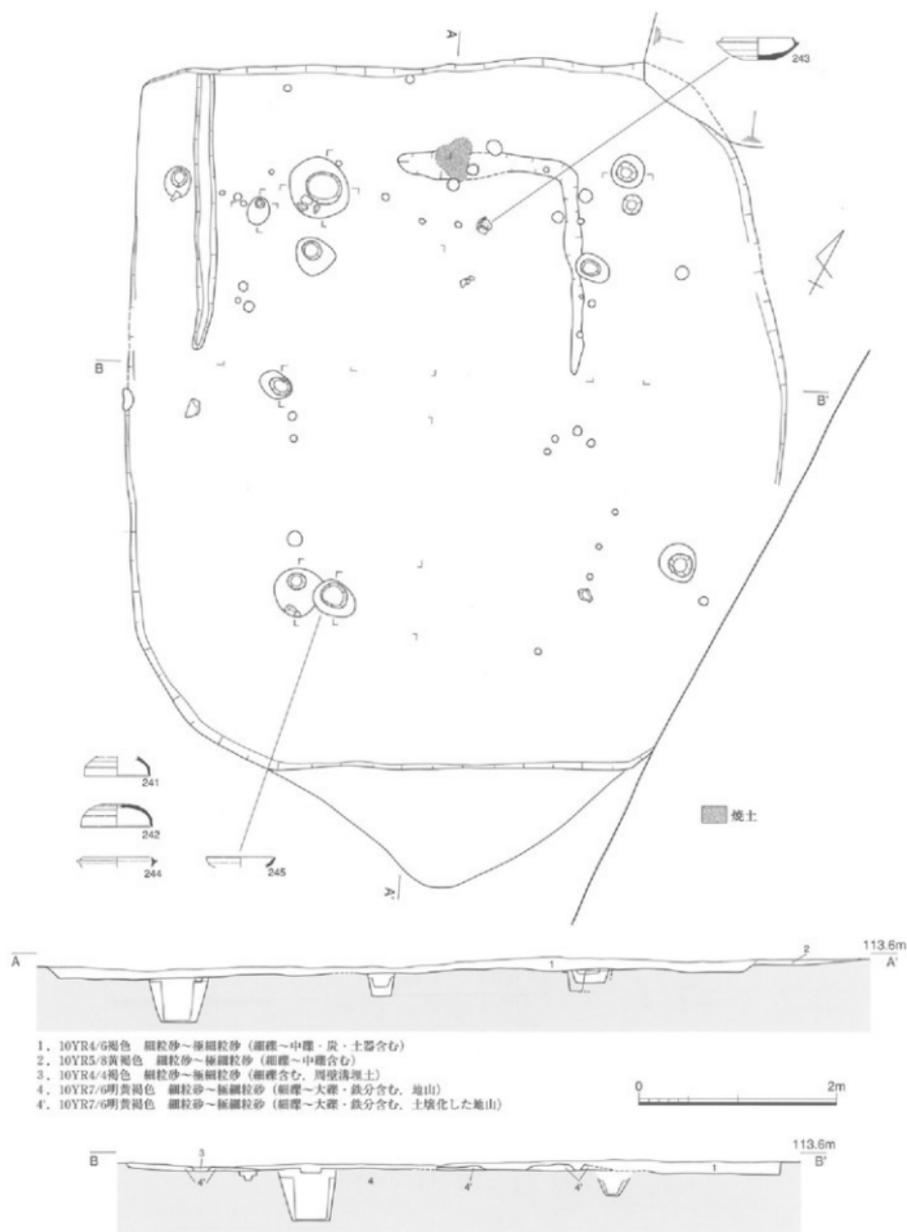
SH-8 平面・断面図



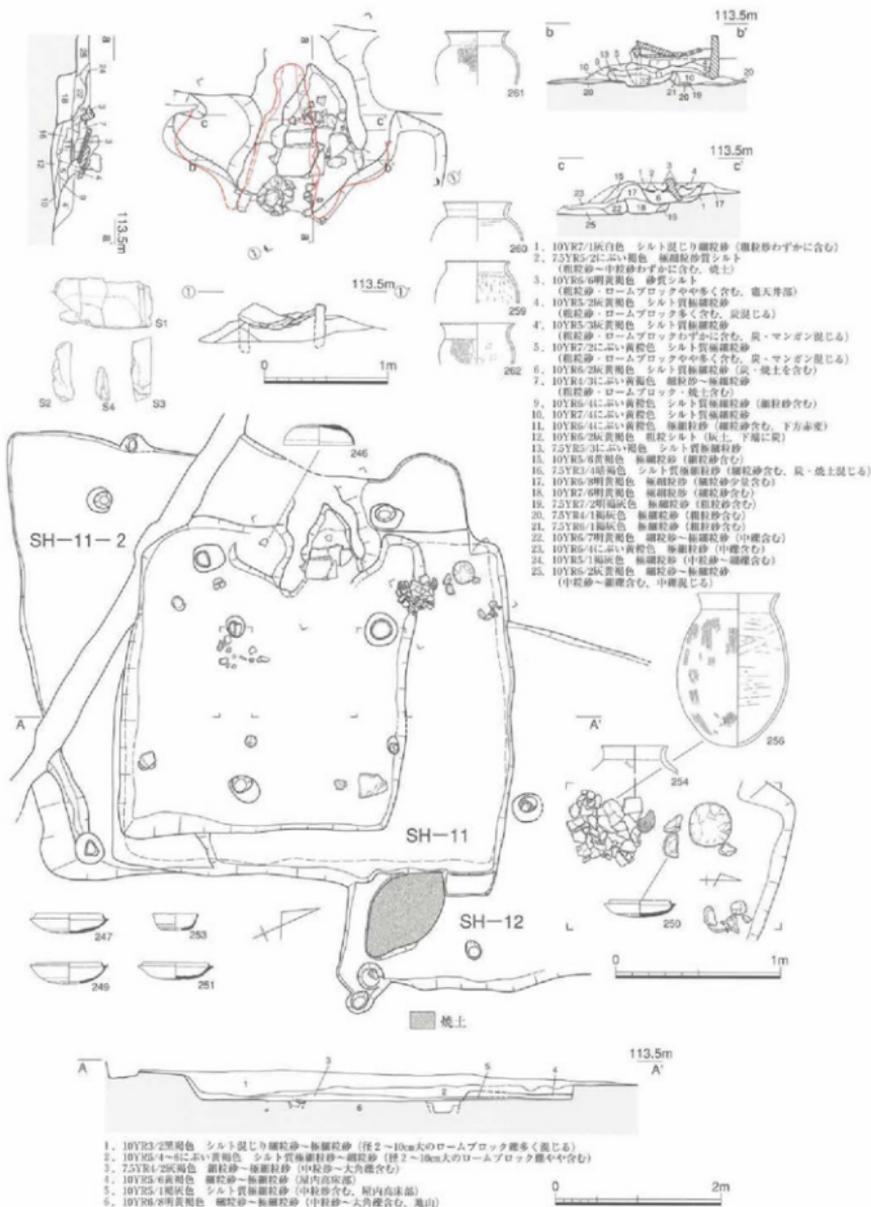
1. 10YR4/6褐色 細粒砂～極細粒砂（軟質細礫～中礫・炭・土器多く含む）
 2. 10YR6/8明黄褐色 細粒砂～極細粒砂（軟質細礫～中礫含む、龜山）



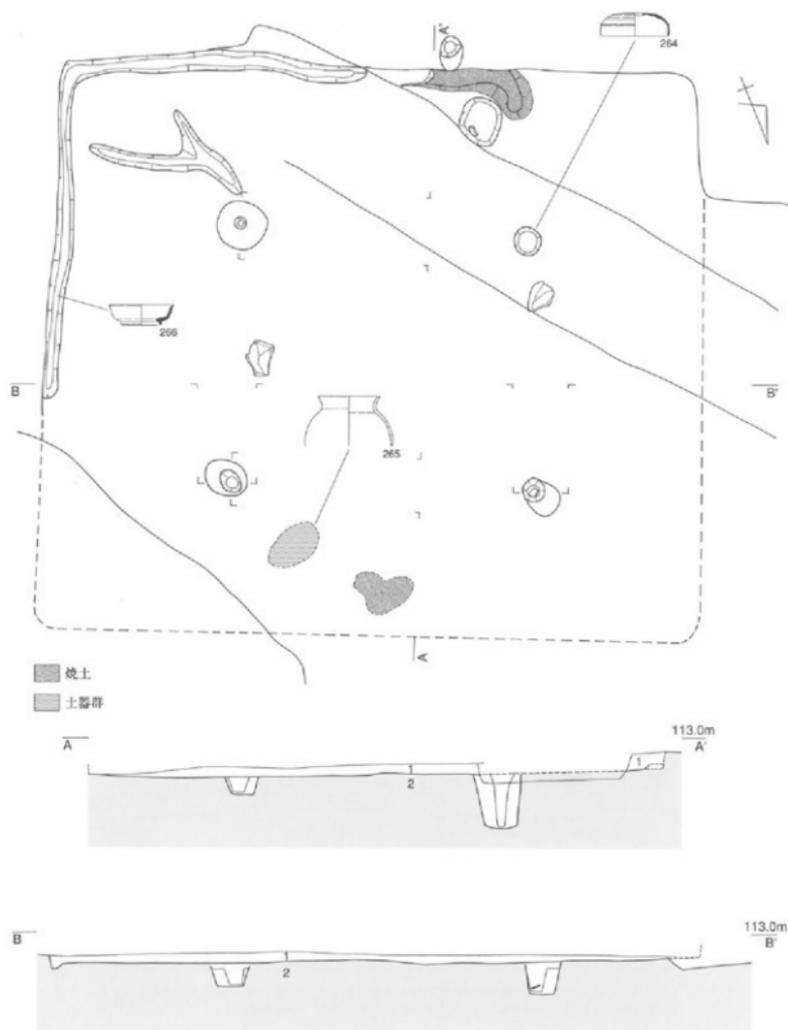
SH-9・13平面・断面図



SH-10平面・断面図

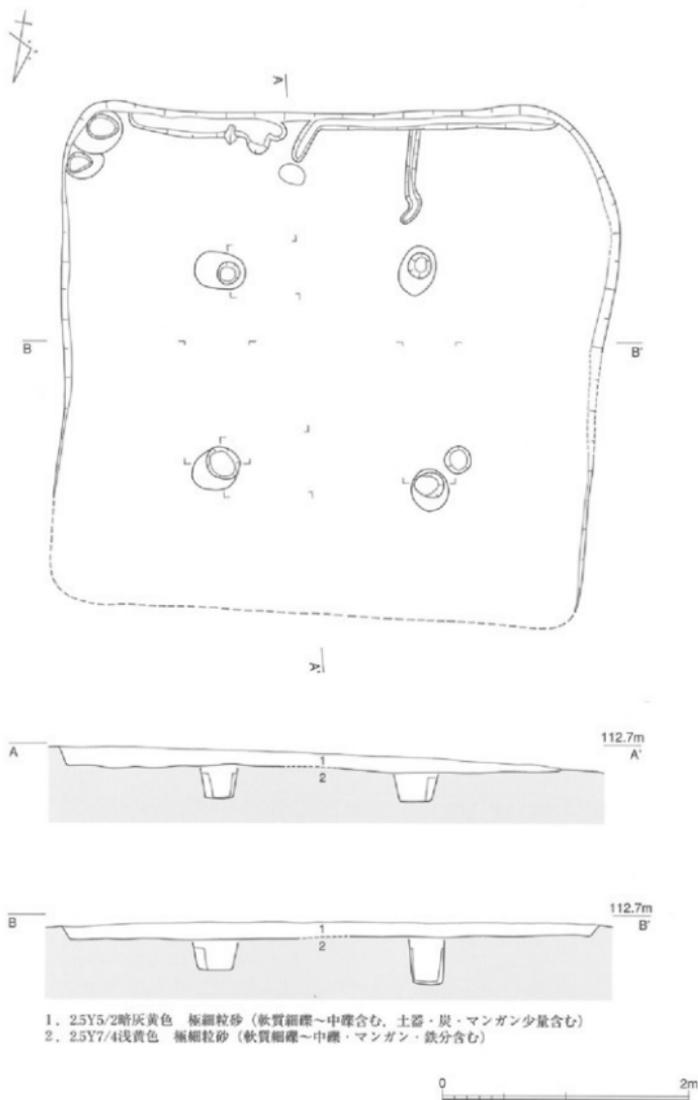


SH-11・12平面・断面図

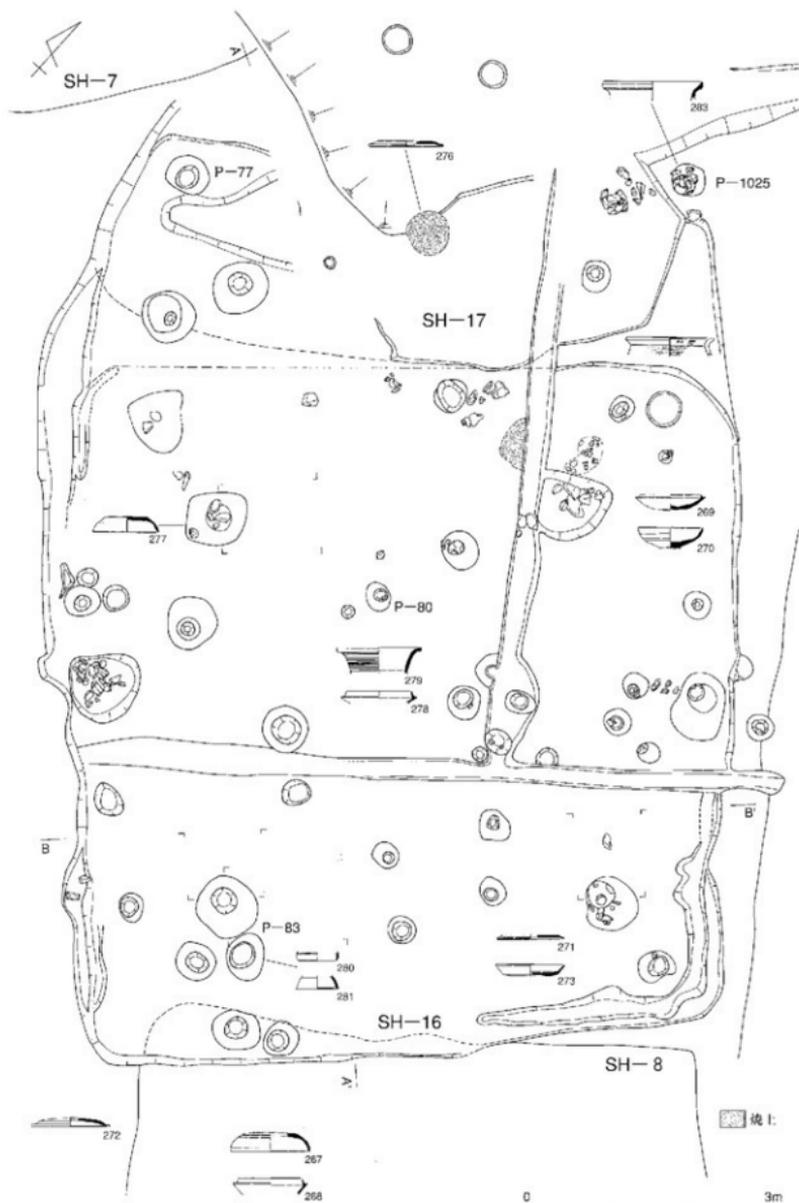


1. 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細粒砂 (細礫含む、炭・土器少量含む、鉄分・マンガン含む)
2. 2.5Y7/4 浅黄色 粗粒シルト～極細粒砂 (細礫～軟質中礫・鉄分・マンガン含む、地山)

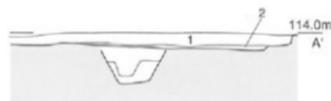
0 2m



SH-15平面・断面図



SH-16・17平面図

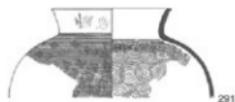
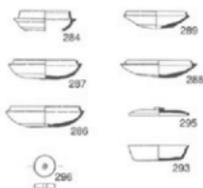


A-A' 土層断面

1. 10YR6/3にぶい黄褐色 極細粒砂 (10YR8/8黄褐色がブロック状に混じる)
2. 10YR5/3にぶい黄褐色 極細粒砂 (10YR8/8黄褐色がブロック状に混じる)
3. 10YR6/6-7/8-8/6明黄褐色 極細粒砂 (3種の色がブロック状に混在する)
4. 10YR5/3にぶい黄褐色 細粒砂～極細粒砂 (土器片混じる。柱穴埋土)
5. 10YR6/6-7/8-8/6明黄褐色 極細粒砂 (3種の色がブロック状に混在する)
6. 10YR4/2灰黄褐色 細粒砂～極細粒砂 (溝埋土の土壌化?)
7. 10YR6/1褐色 極細粒砂
(10YR5/4黄褐色の粘質極細粒砂をブロック状に含む)
8. 10YR6/1褐色 細粒砂 (細粒混じる。土器片を含む)
9. 7.5YR6/3にぶい褐色 細粒砂～極細粒砂
(10YR8/8黄褐色のシルト質極細粒砂がブロック状に混じる。土器片を含む)
10. 10YR6/3にぶい黄褐色 極細粒砂
(10YR8/8黄褐色のシルト質極細粒砂がブロック状に混じる。細礫を含む)
11. 10YR5/1褐色 細粒砂
(細礫。10YR8/8黄褐色のシルト質極細粒砂がブロック状に混じる。細礫を含む)

B-B' 土層断面

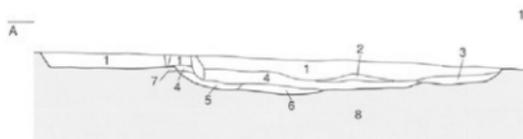
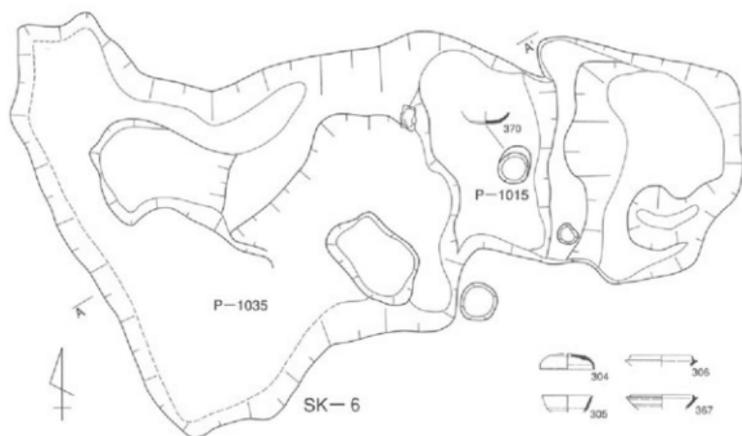
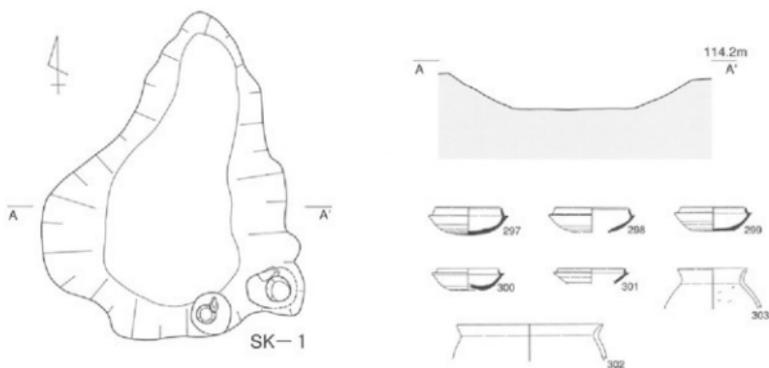
1. N4/灰色 細粒砂～極細粒砂 (柱穴埋土)
2. 10YR4/1褐色 細粒砂～中粒砂
(径2～3cmの中礫含む)
3. 7.5Y3/1オリーブ褐色 中粒砂～粗粒砂
4. 2.5Y4/1黄灰色 中粒砂～粗粒砂
(径2cmの礫あり。炭混じる)
5. 7.5YR5/6明褐色 細粒砂～中粒砂
(径1～3cmの礫含む。亀山)



SR-1 内石組



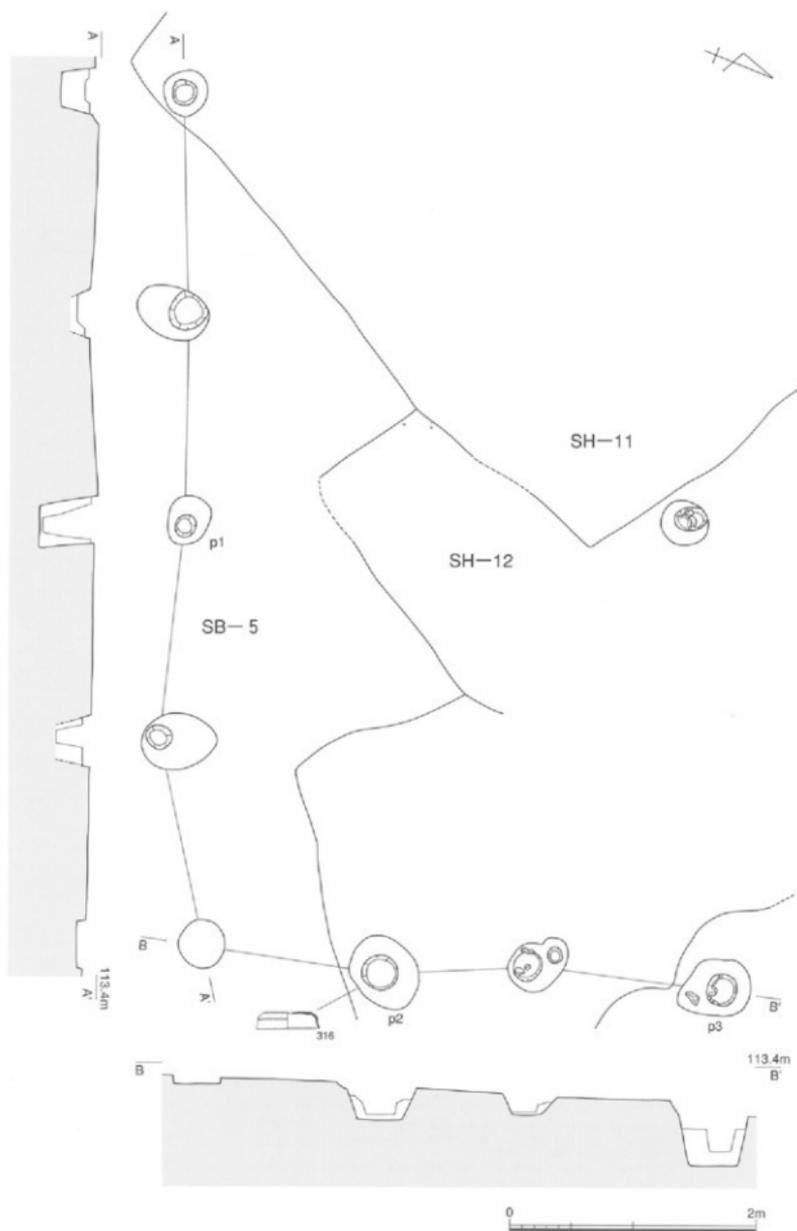
SH-16断面・SR-1内石組実測図



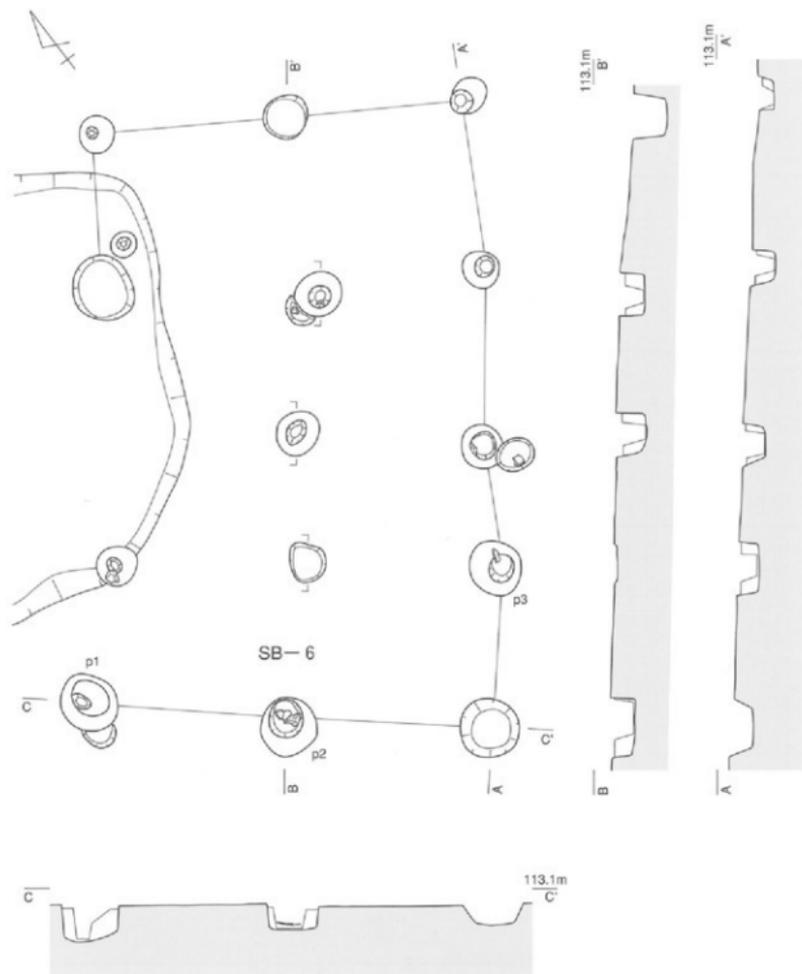
1. 10YR5/1暗灰色 細粒砂～極細粒砂 (軟質の細礫～中礫・マンガン・鉄分・炭含む)
2. 10YR4/1暗灰色 細粒砂～極細粒砂 (軟質の細礫～中礫・マンガン・鉄分含む)
3. 5Y6/1灰色 極細粒砂 (中粒砂～中礫含む)
4. 2.5Y5/2暗灰黄色 細粒砂～極細粒砂 (軟質の細礫～中礫・マンガン・鉄分含む)
5. 7.5Y6/1灰色 粗粒シルト～極細粒砂 (中粒砂含む)
6. 2.5Y6/2灰黄色 細粒砂～極細粒砂 (軟質の細礫～中礫・マンガン・鉄分・炭含む)
7. 雜層。Matrixは10YR5.5/1暗灰色で細粒砂～極細粒砂 (軟質人骨礫・マンガン・鉄分含む、地山)
8. 10YR7/8黄棕色 極細粒砂 (中粒砂～中礫含む、地山)



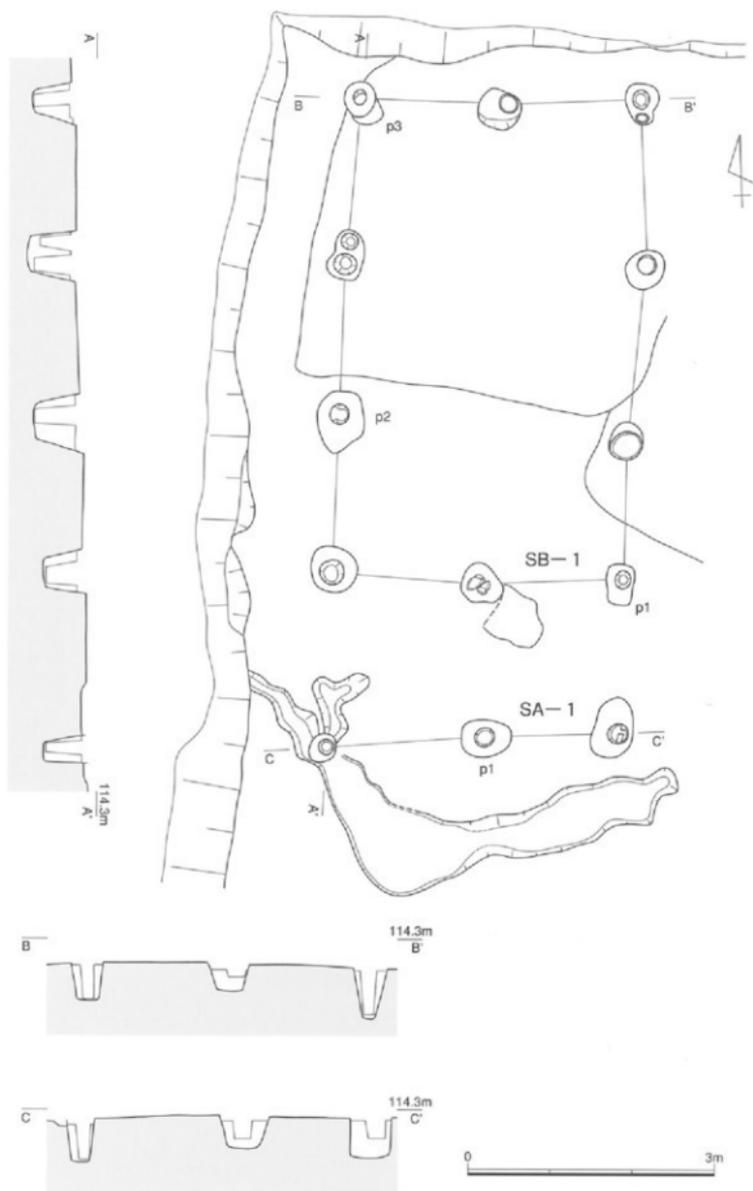
SK-1・6平面・断面図



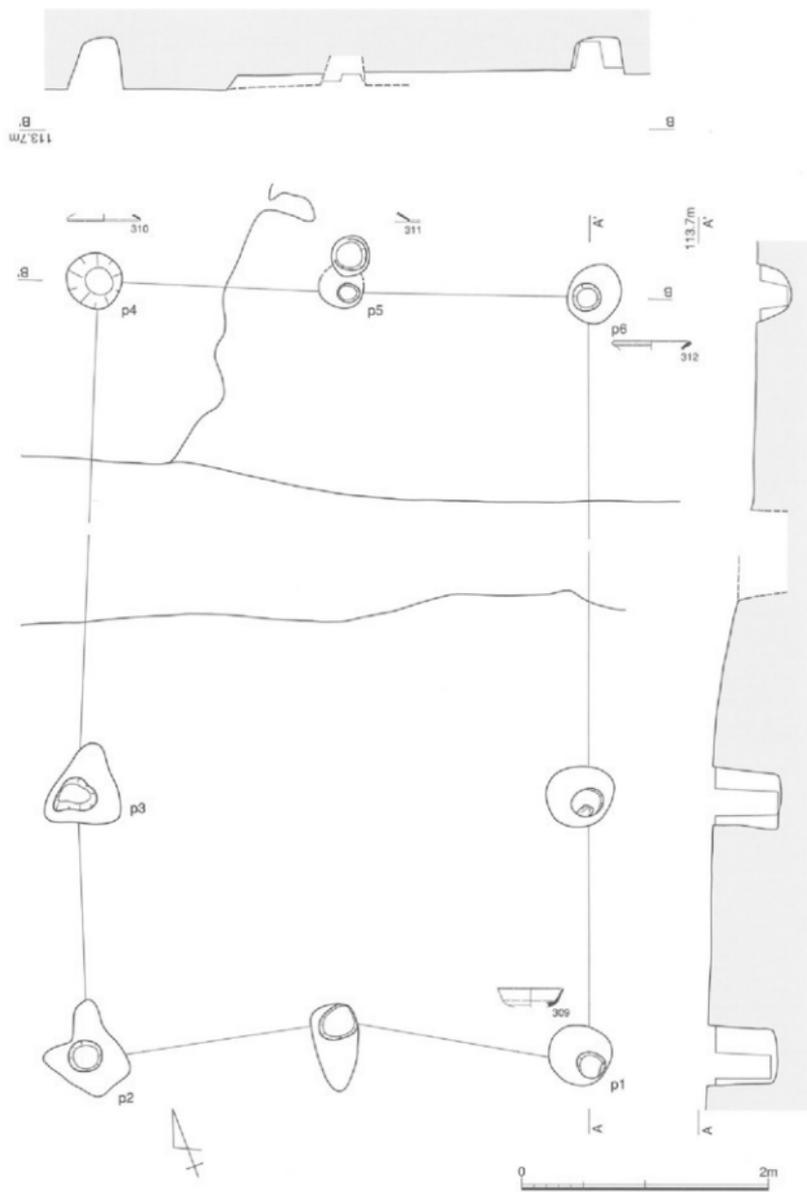
SB-5平面・断面図



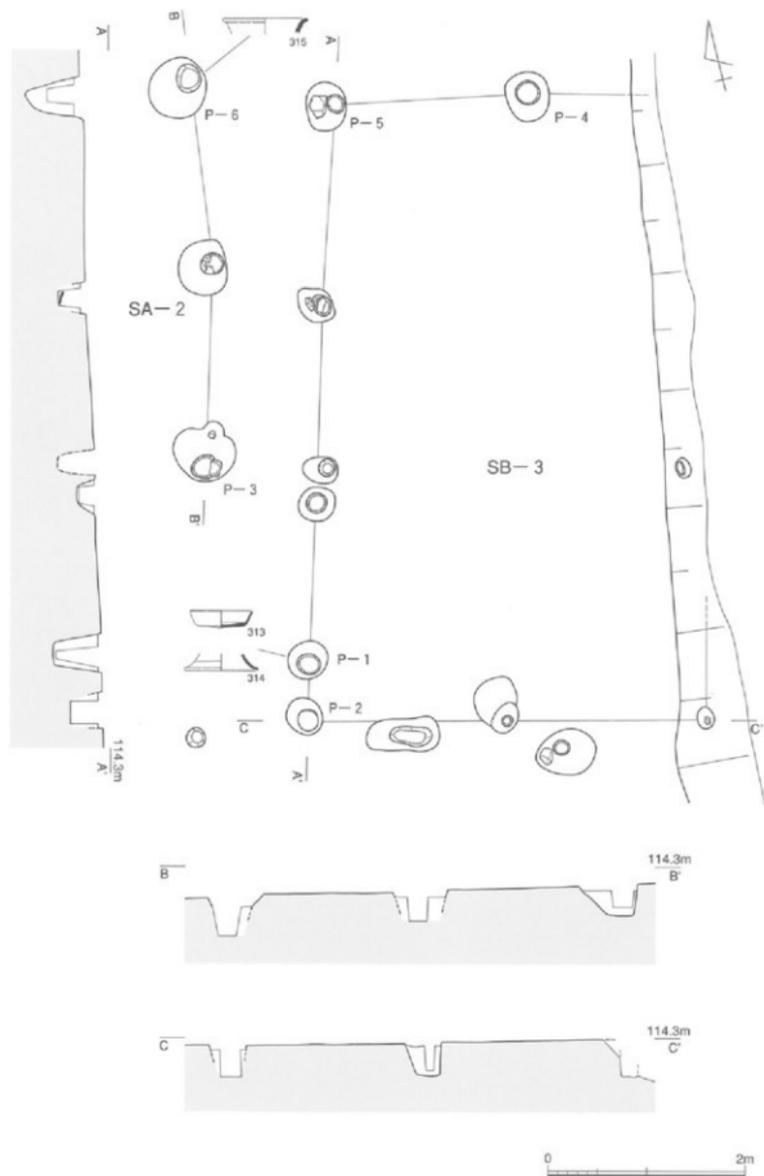
SB-6平面・断面図



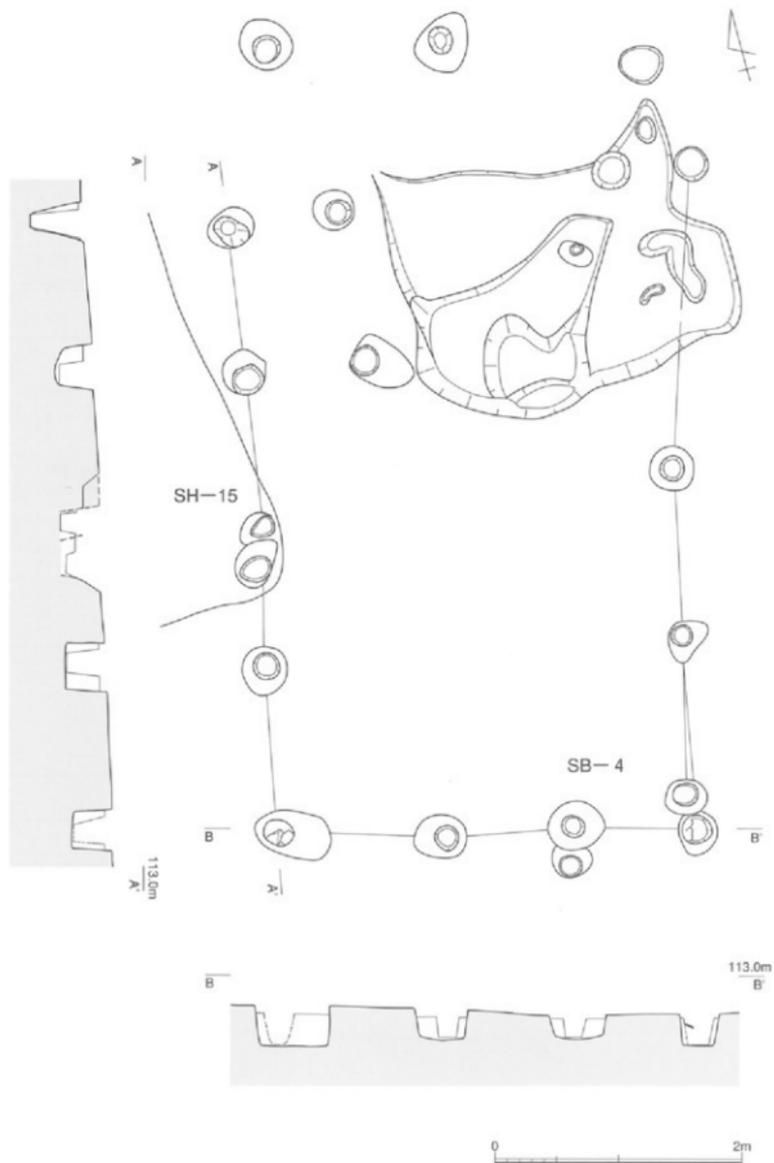
SB-1・SA-1平面・断面図



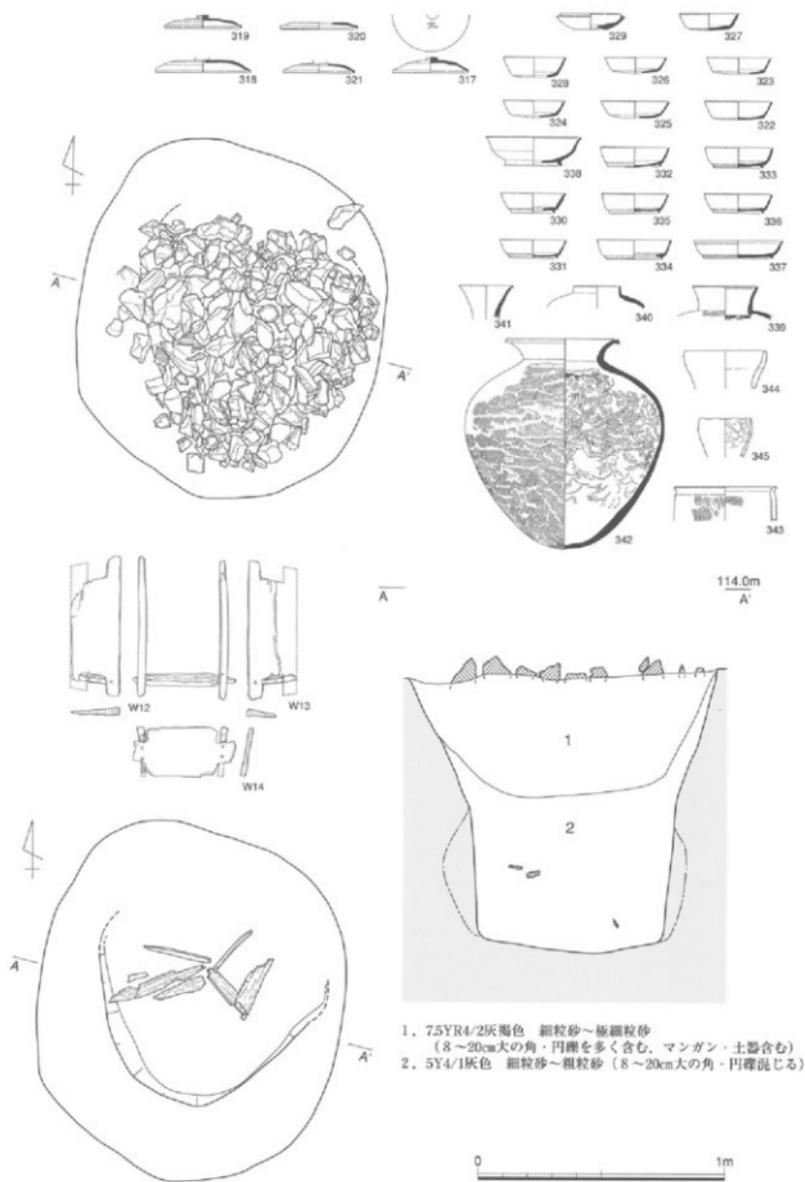
SB-2 平面・断面図



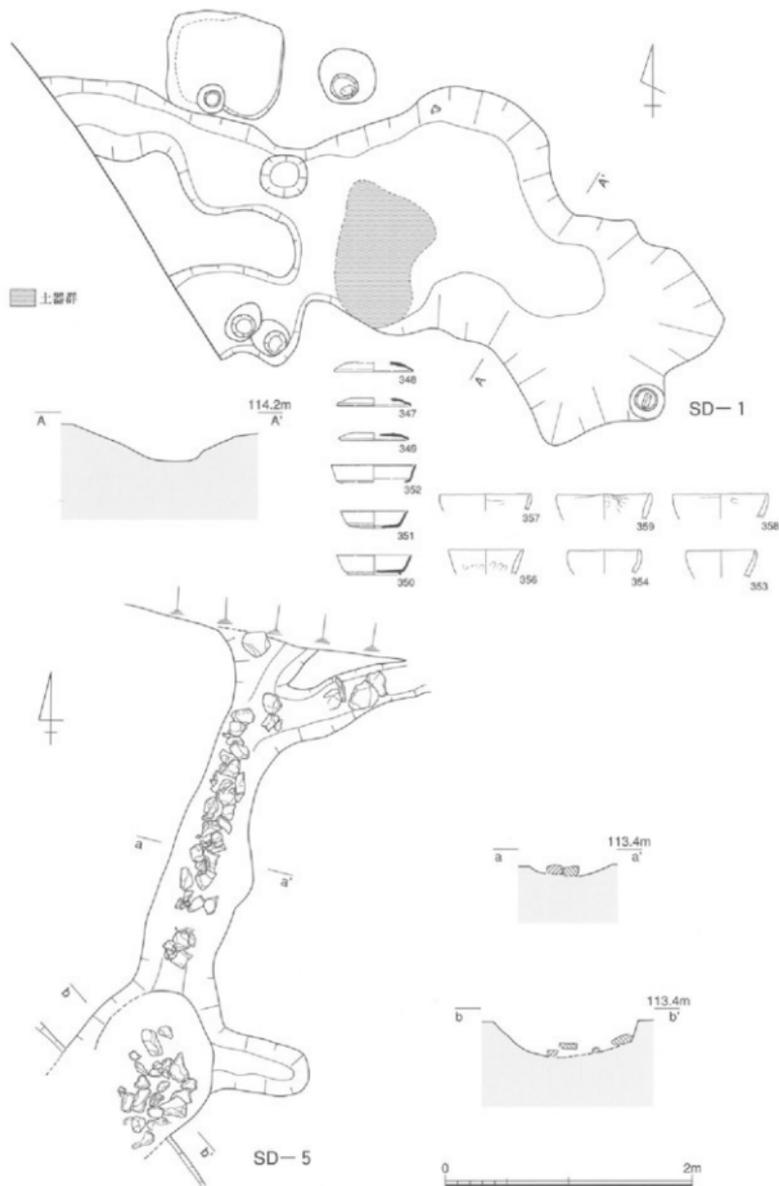
SB-3・SA-2平面・断面図



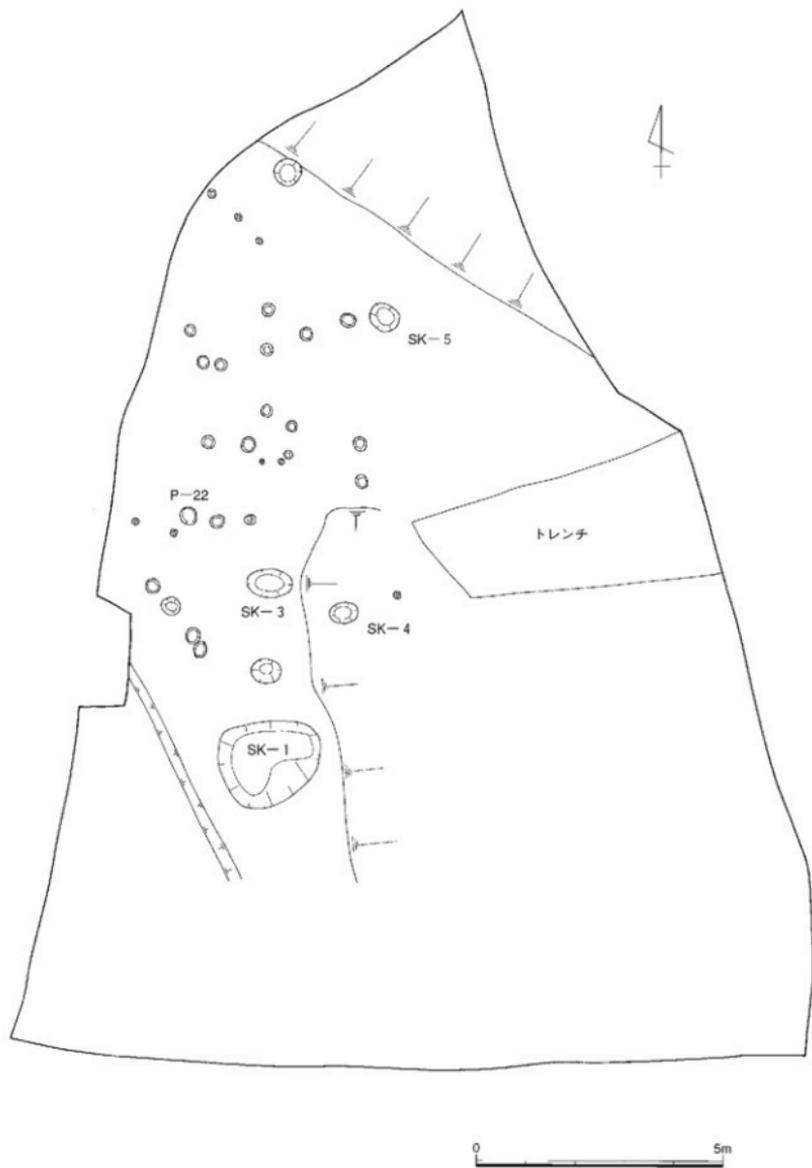
S B-4 平面・断面図



SK-3 平面・断面図



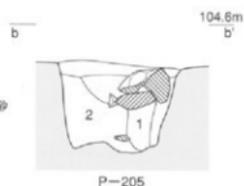
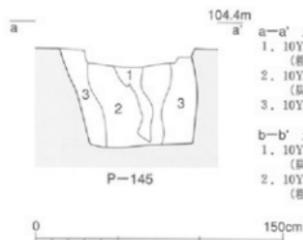
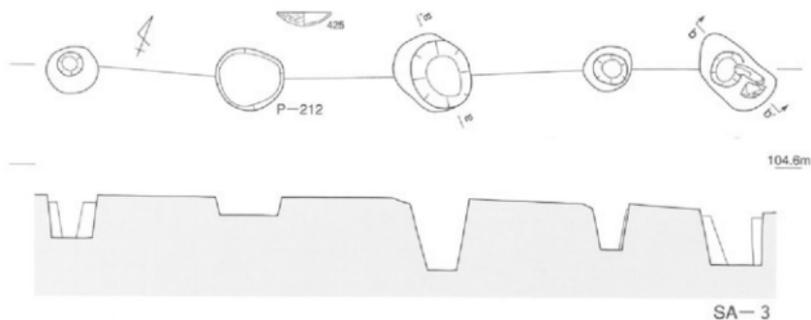
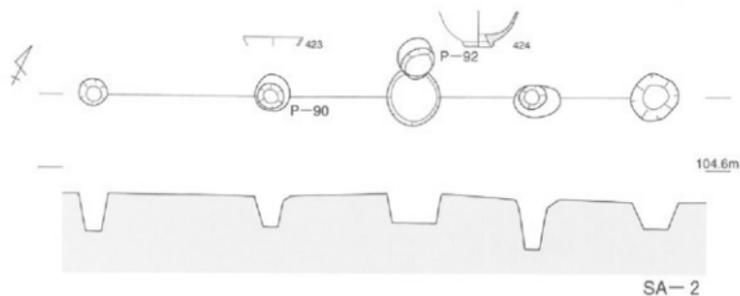
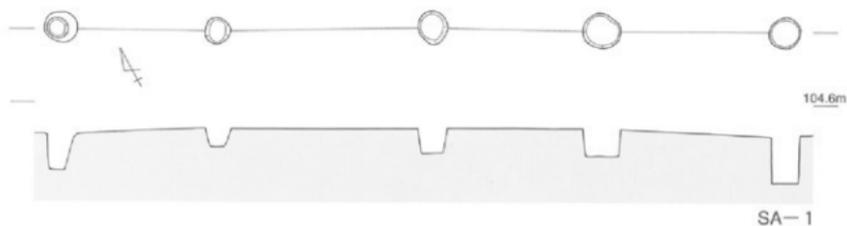
SD-1・5平面・断面図



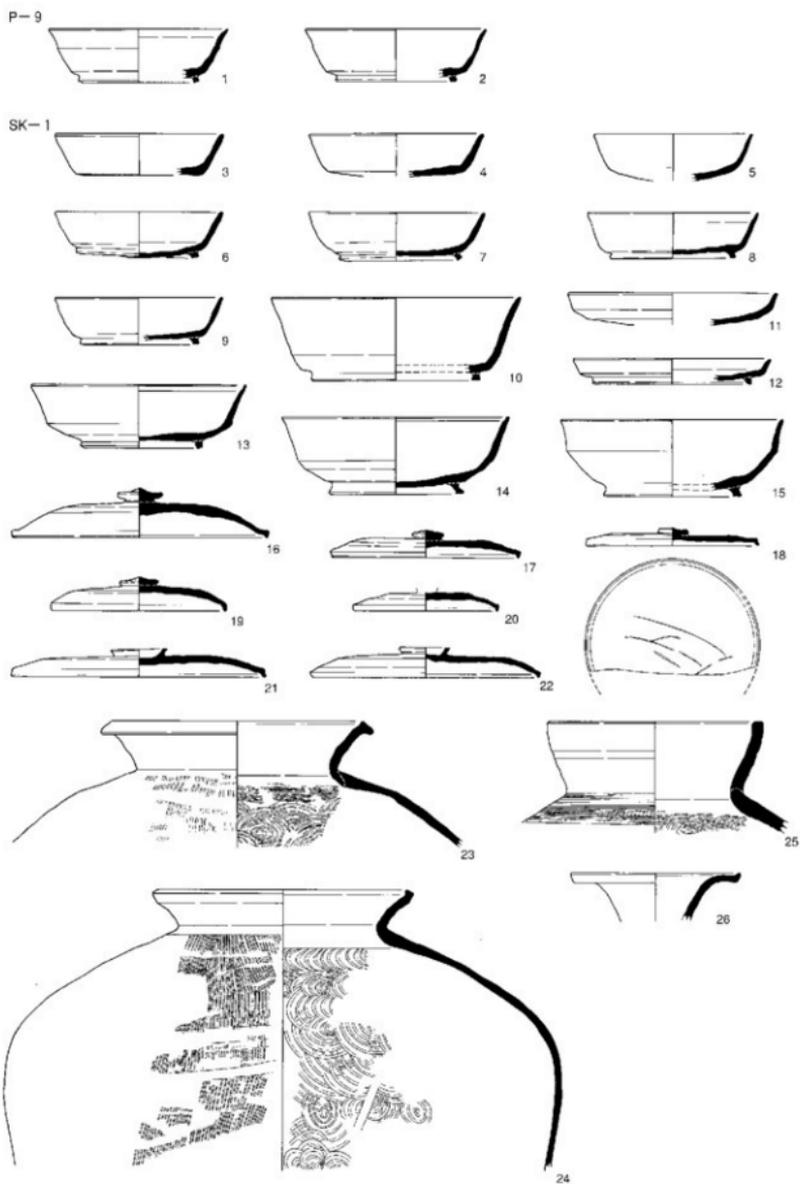
E-2地区全体平面図



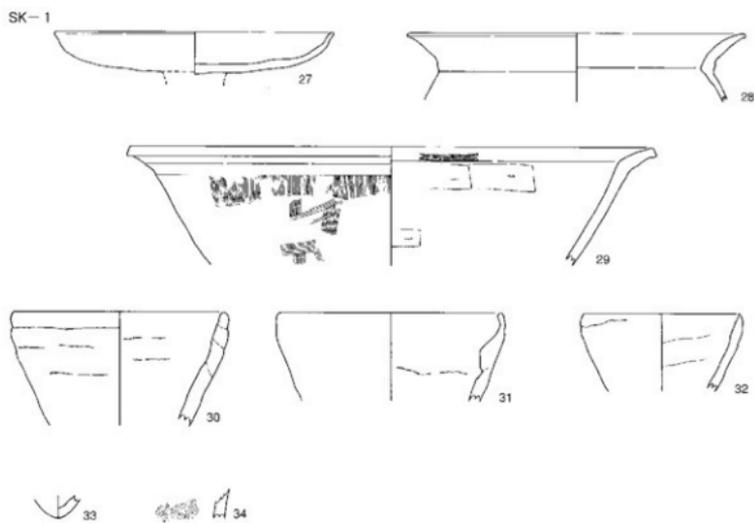
畑田遺跡全体図



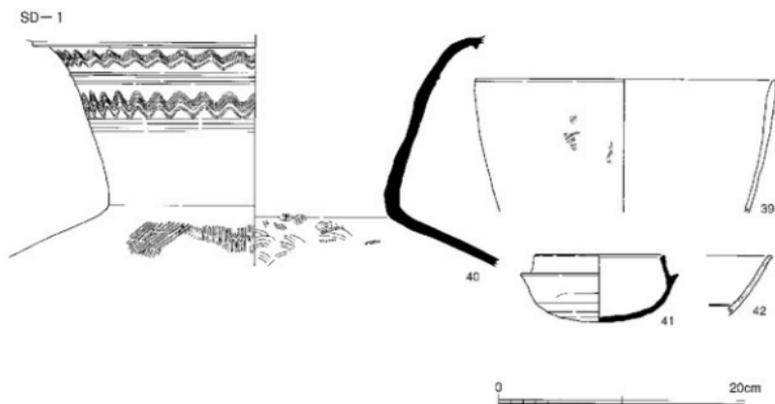
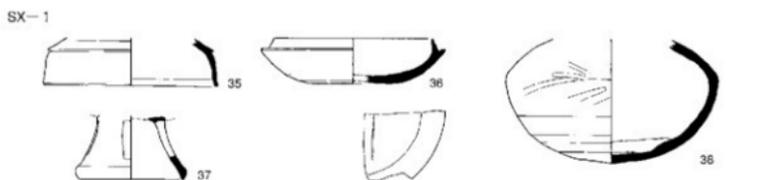
SA-1～3平面・断面図



A地区柱穴・SK-1出土土器(1)

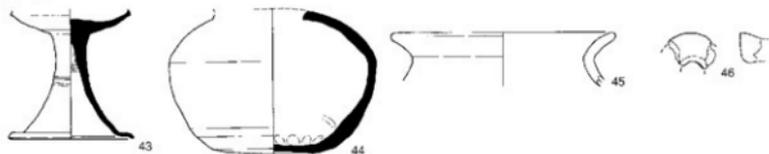


A-2地区

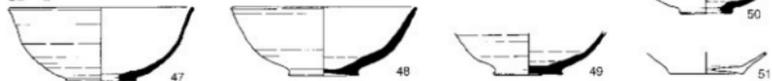


A地区SK-1出土土器(2)、A-2地区出土土器(1)

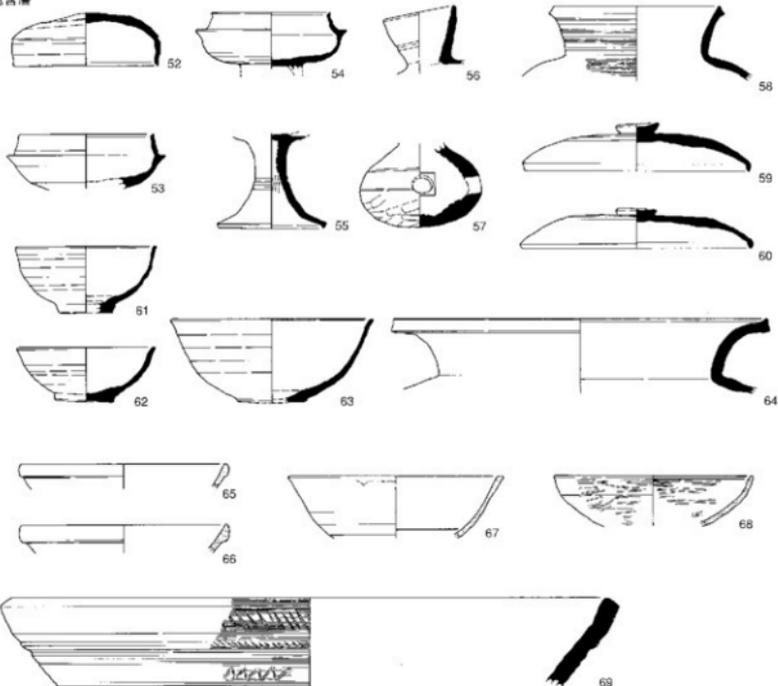
SD-1



SB-2

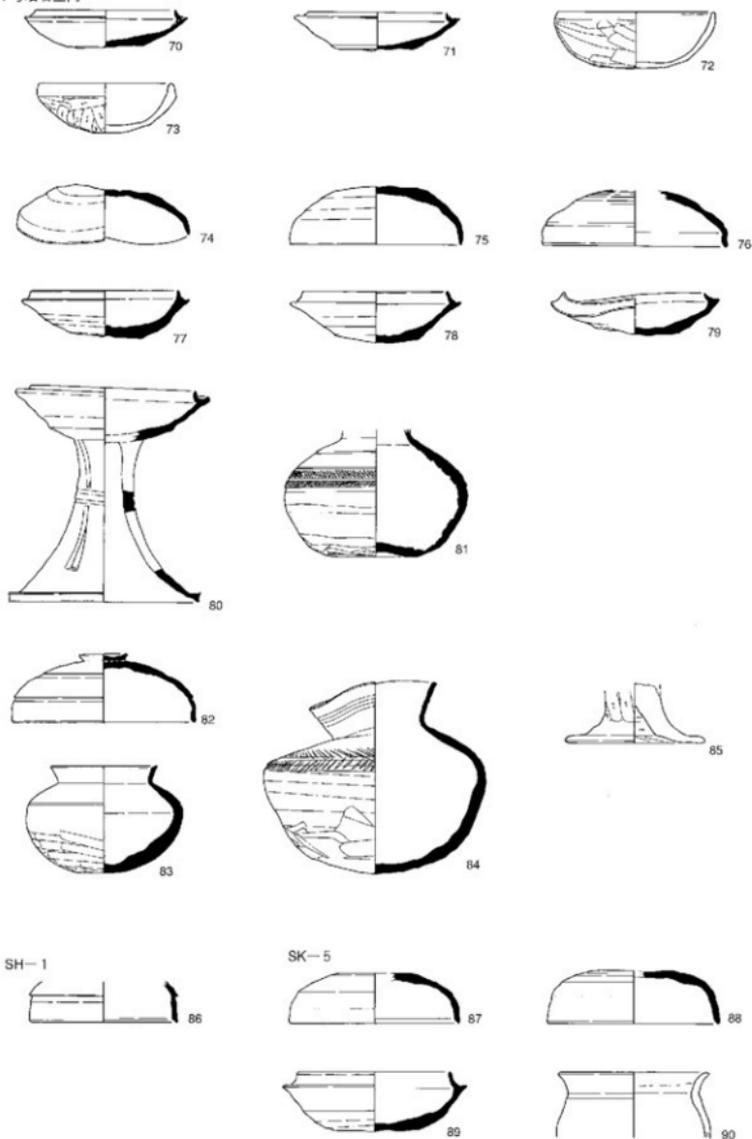


包含層

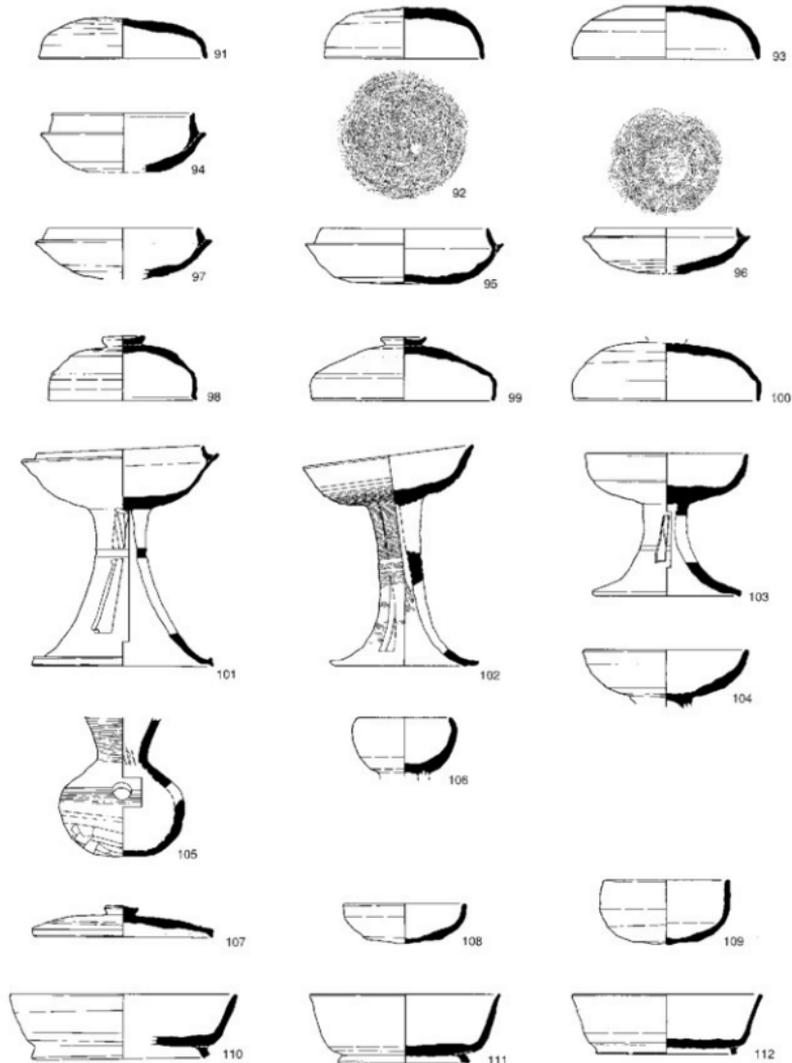


A-2 地区出土土器 (2)

1号墳石室内



0 20cm

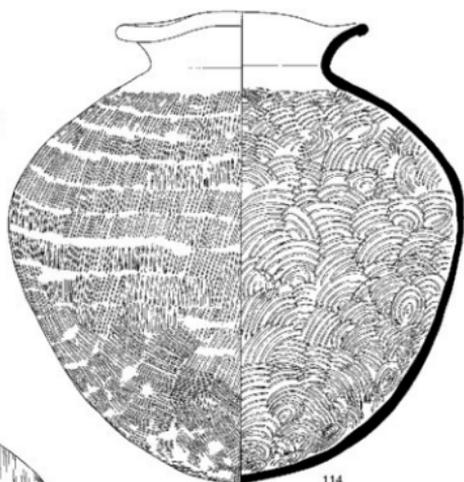


0 20cm

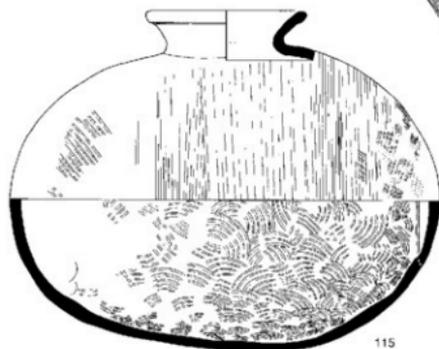
1号墳填丘周辺



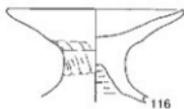
113



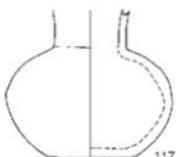
114



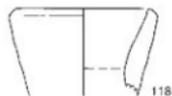
115



116



117



118

柱穴



119



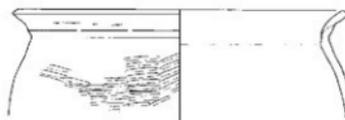
120



121

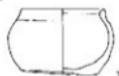


122



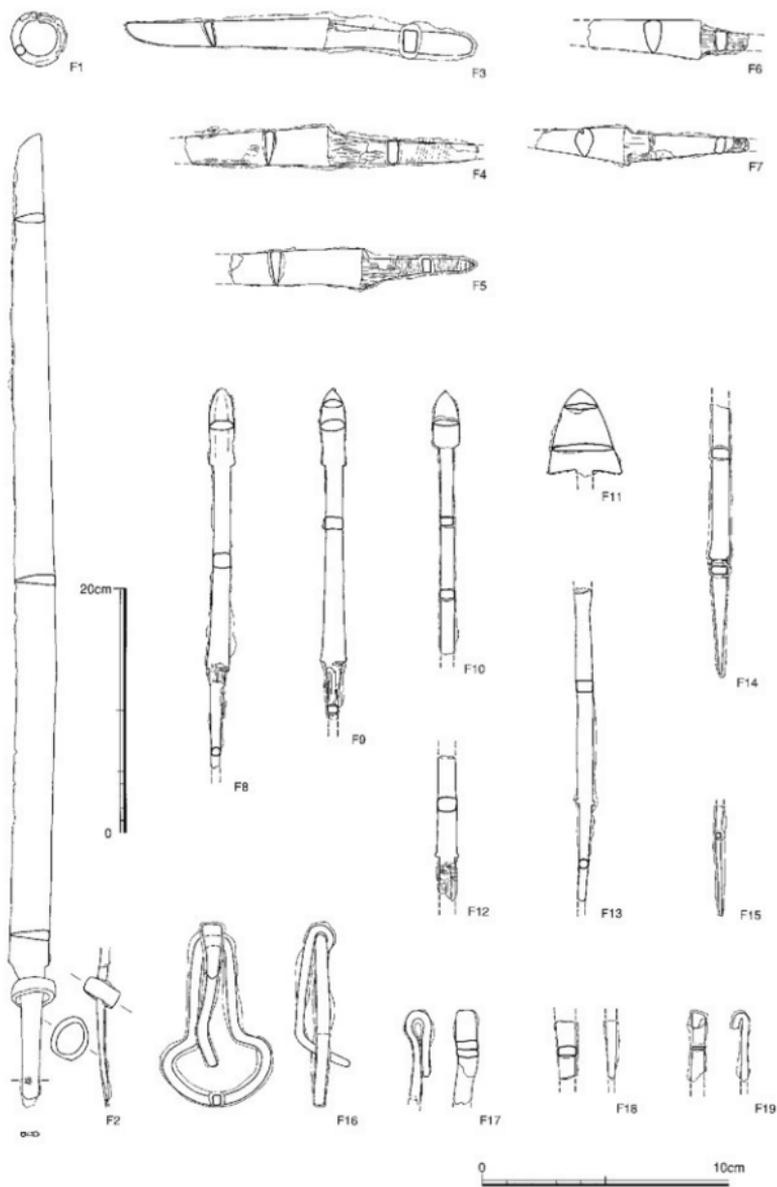
123

SK-3

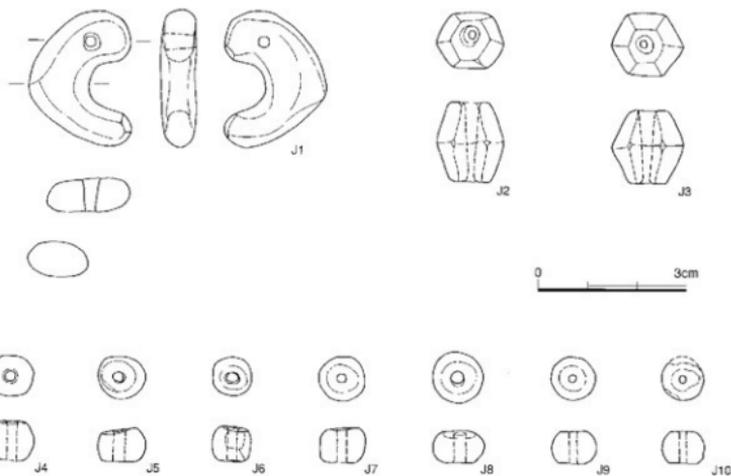


130





1号墳石室内出土鉄器

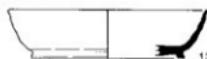


柱穴

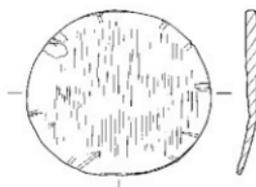
SE-1



131



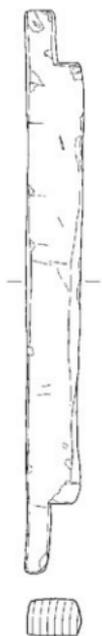
132



W1



W2



W3



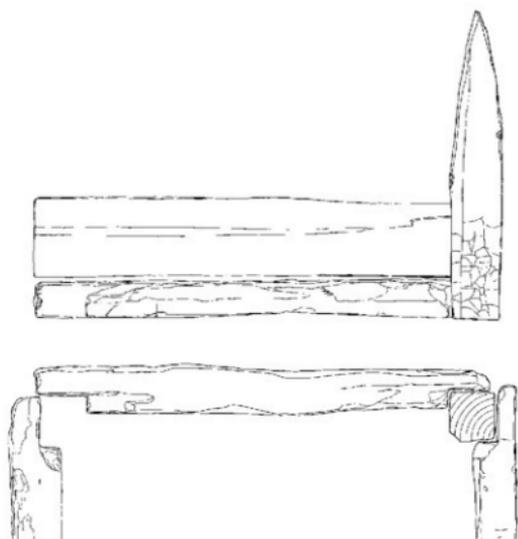
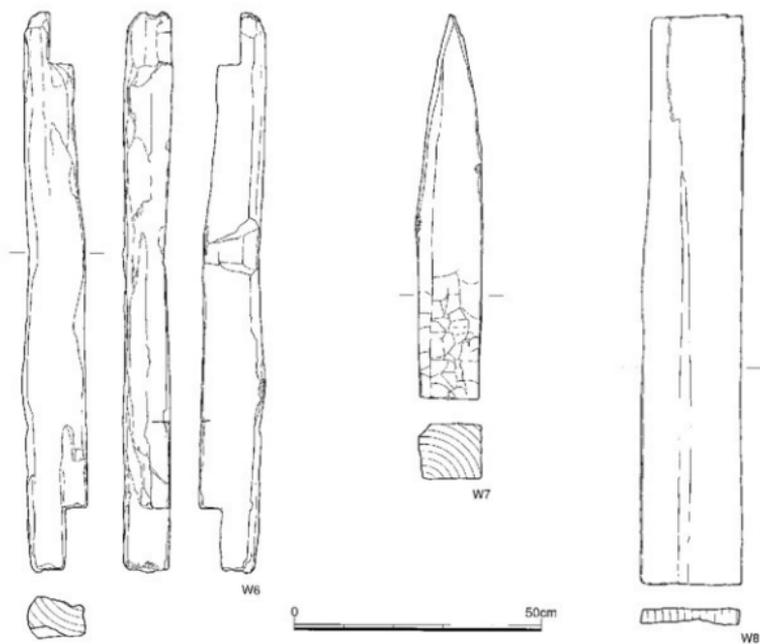
W4



W5



柱穴・SE-1出土遺物(1)



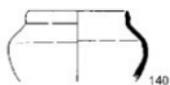
SE-1出土遺物(2)

SH-1



D地区

SD-1

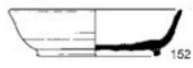
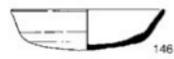


SK-1



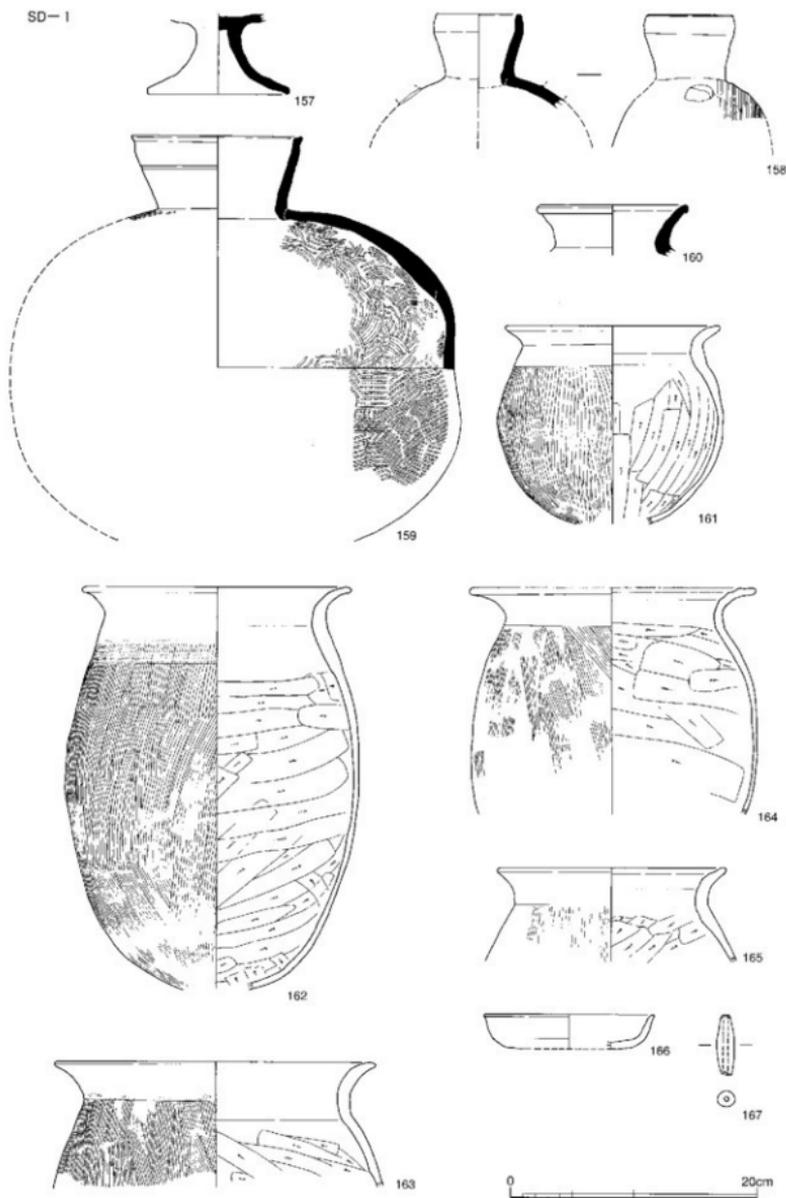
D-2地区

SD-1

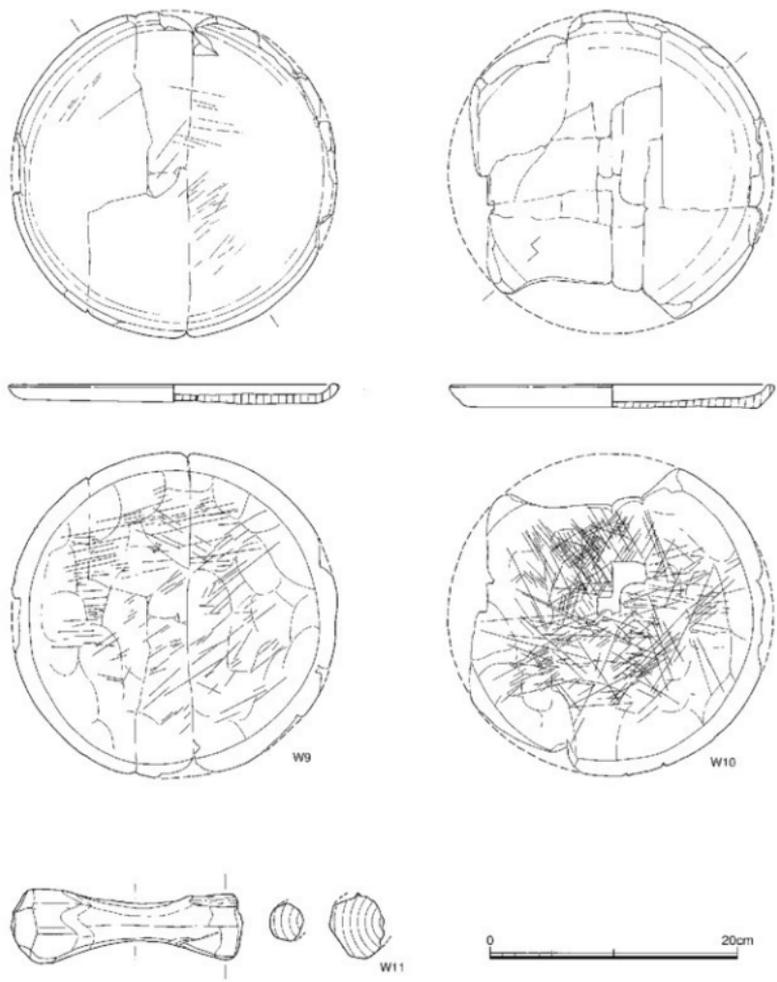


0 20cm

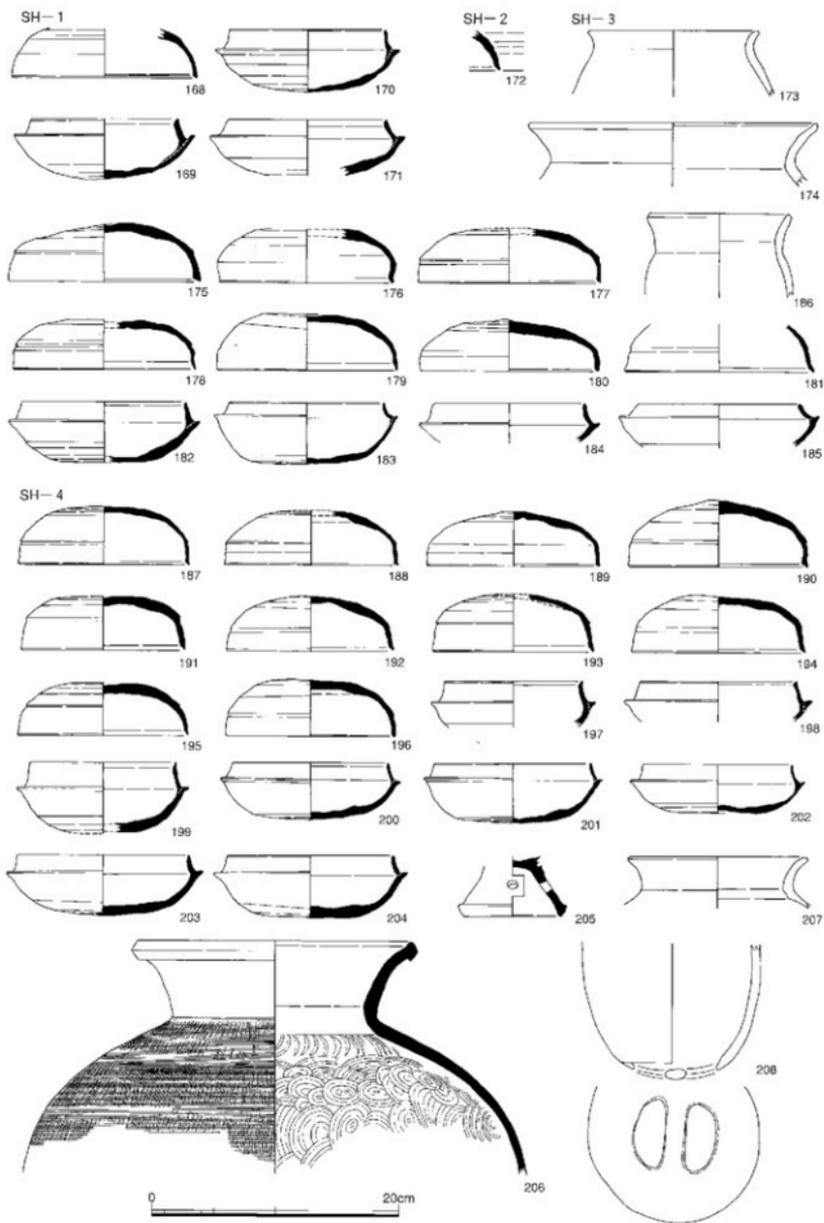
D地区SH-1・SD-1出土土器、
D-2地区SK-1・SD-1出土土器(1)



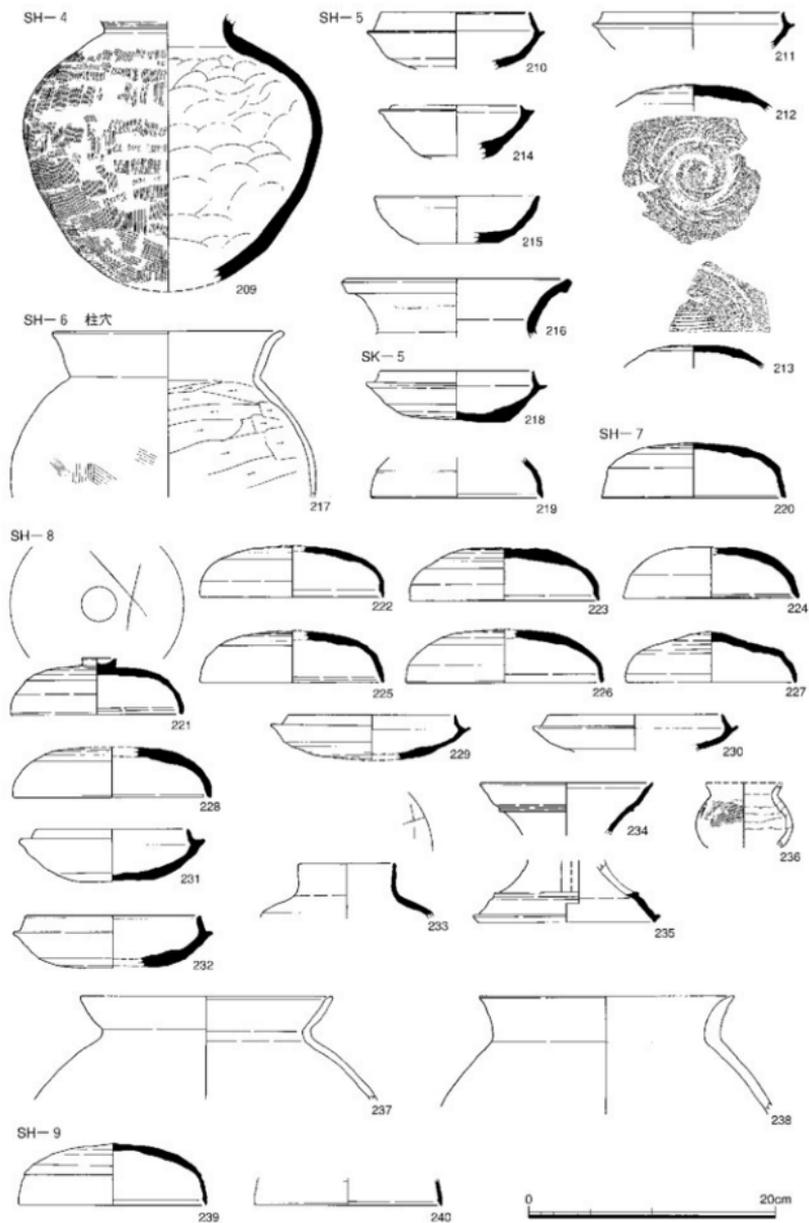
D-2地区SD-1出土土器(2)



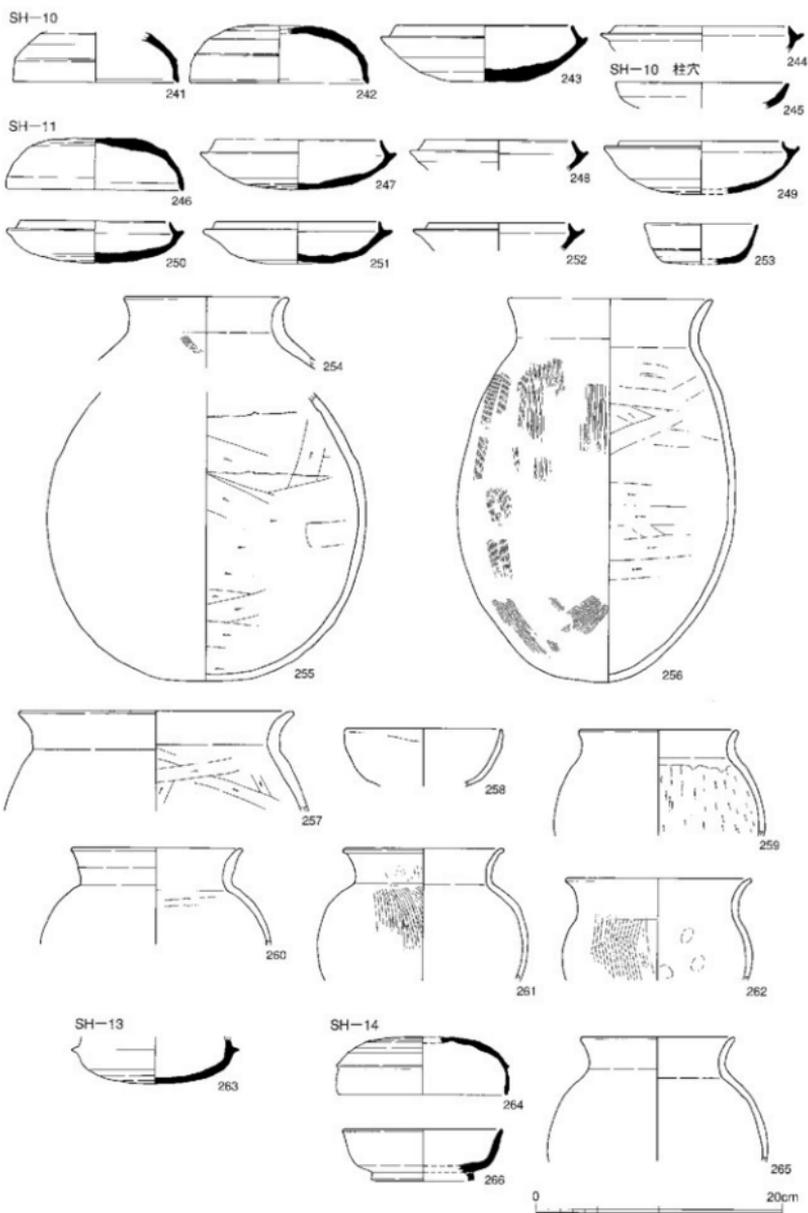
D-2 地区 S D-1 出土木製品



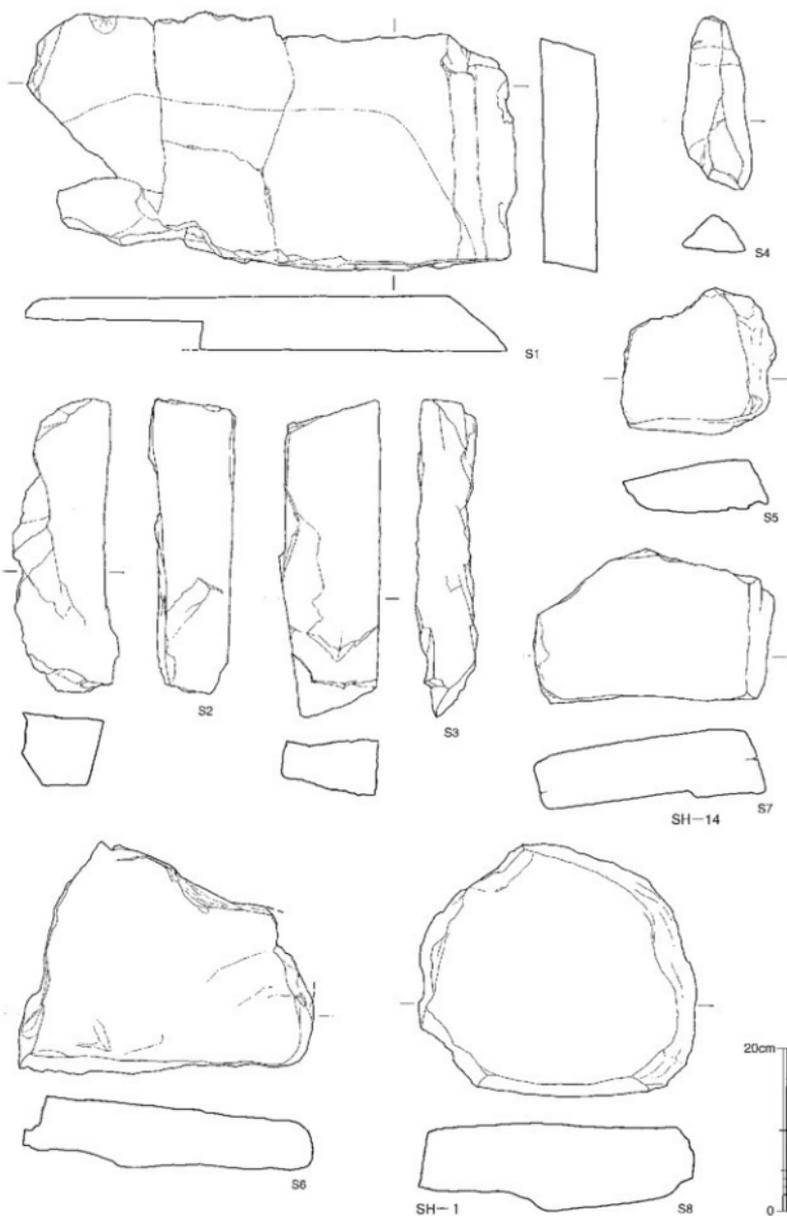
壑穴住居跡出土土器 (1)



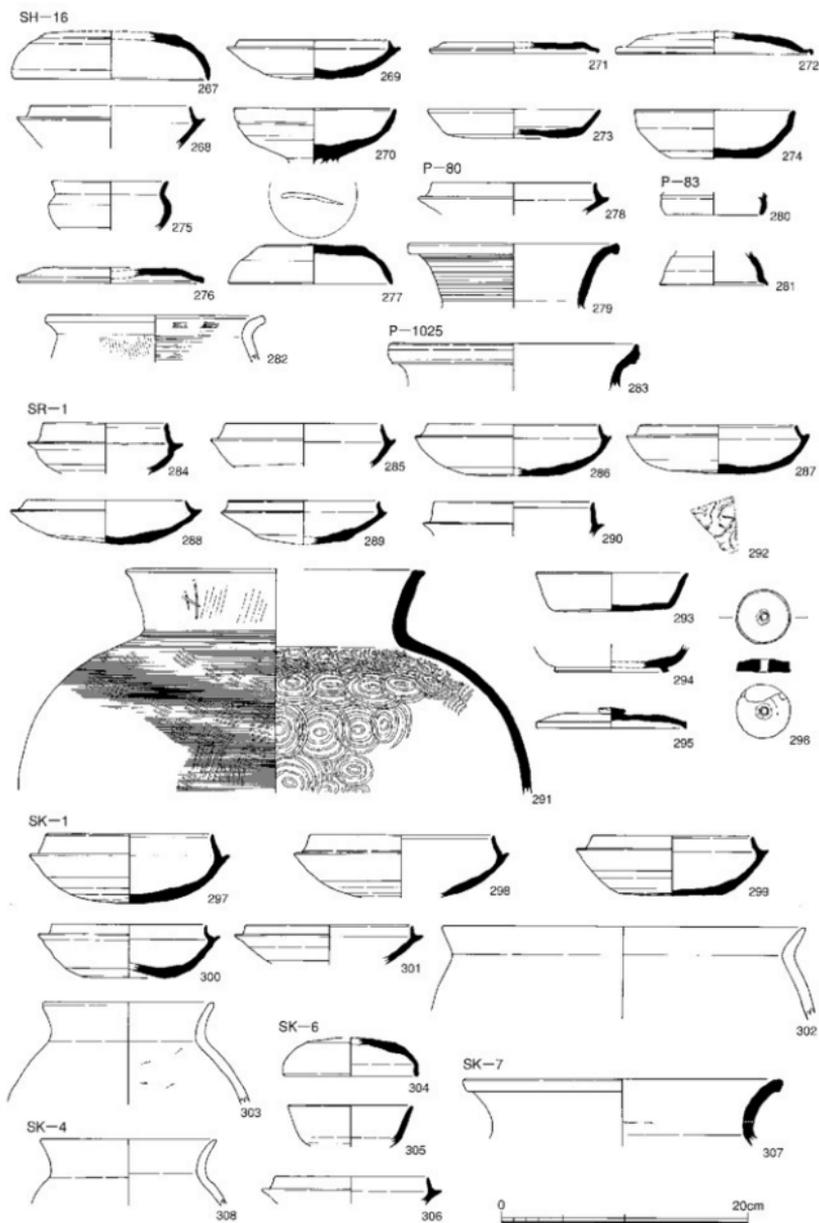
竪穴住居跡出土土器 (2)



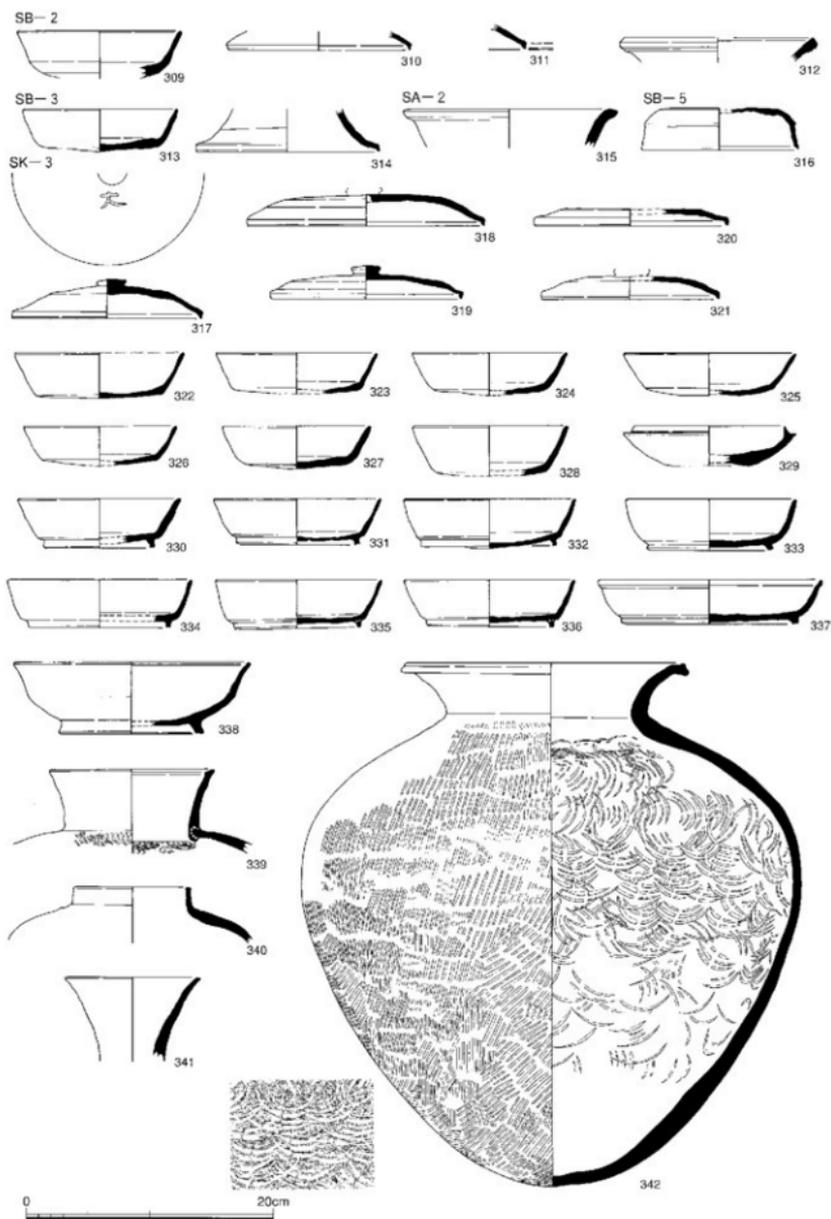
豎穴住居跡出土土器 (3)



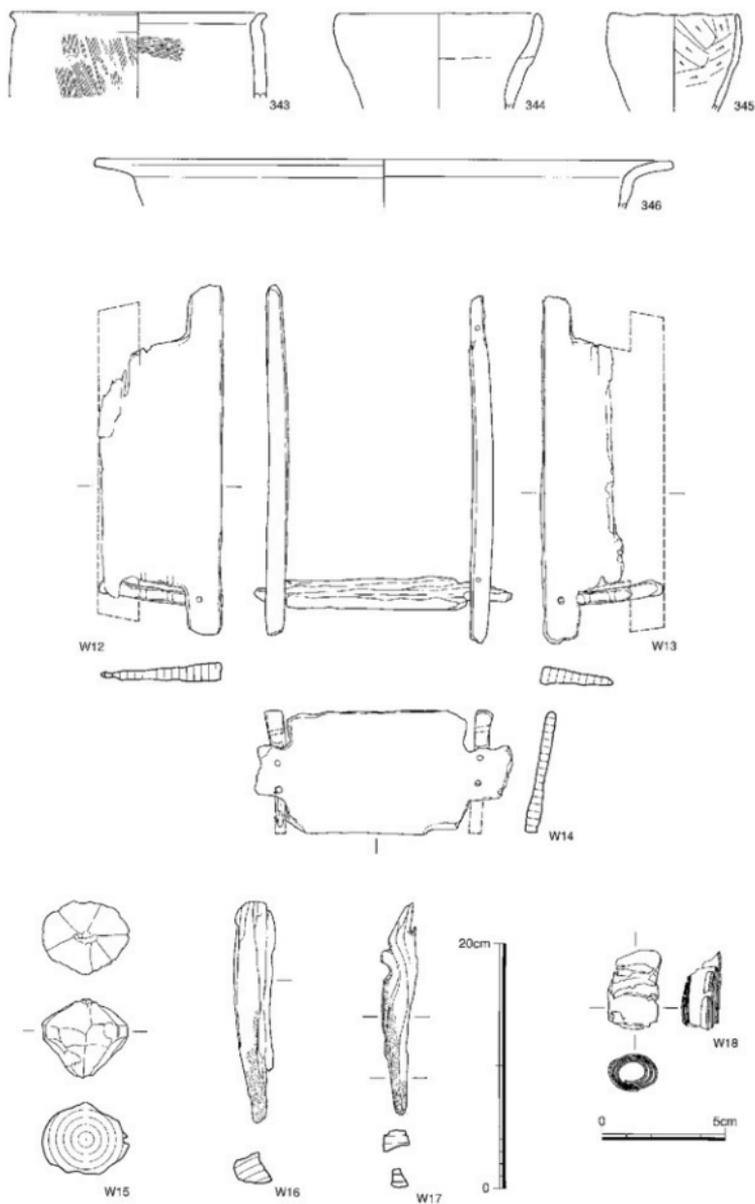
雙穴住居跡出土石製品



竪穴住居跡出土土器(4)、SR-1・土壇出土土器

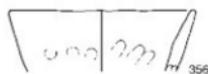
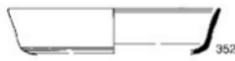


据立柱建物跡等・SK-3出土土器(1)

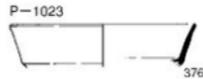
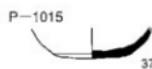
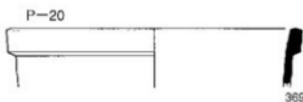
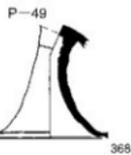
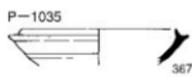
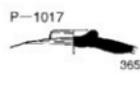
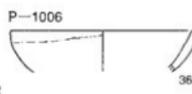
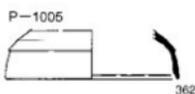


SK-3出土土器(2)・木製品

SD-1

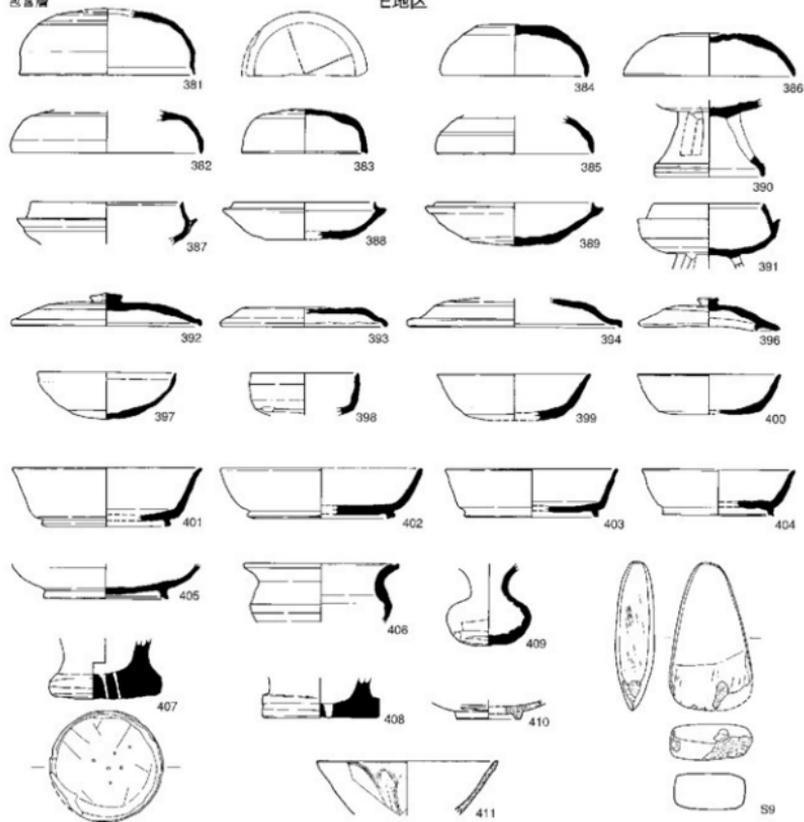


SD-2



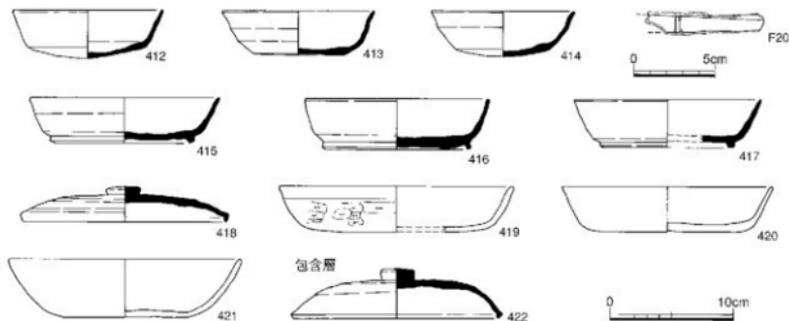
包含層

E地区

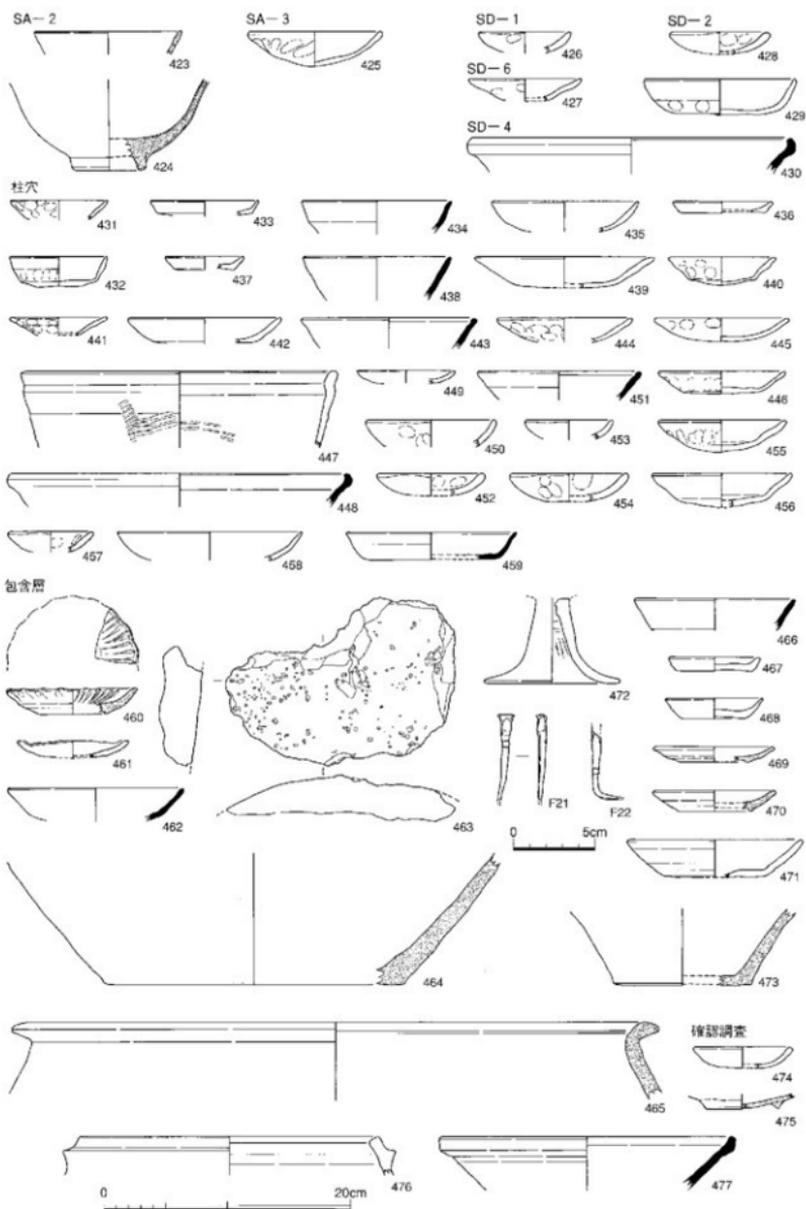


SK-1

E-2 地区



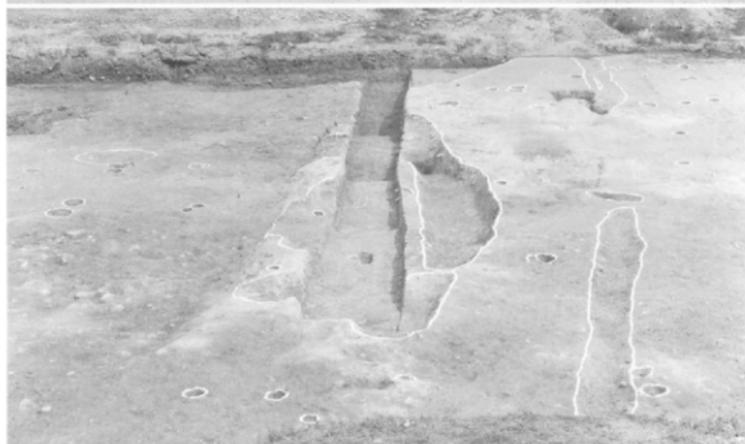
E 地区包含層、E-2 地区 SK-1 等出土遺物



写真図版



①北半部全景（西から）



②SK-1・2（西から）



③SK-2埋土土層断面（西から）



④SK-1埋土土層断面（西から）



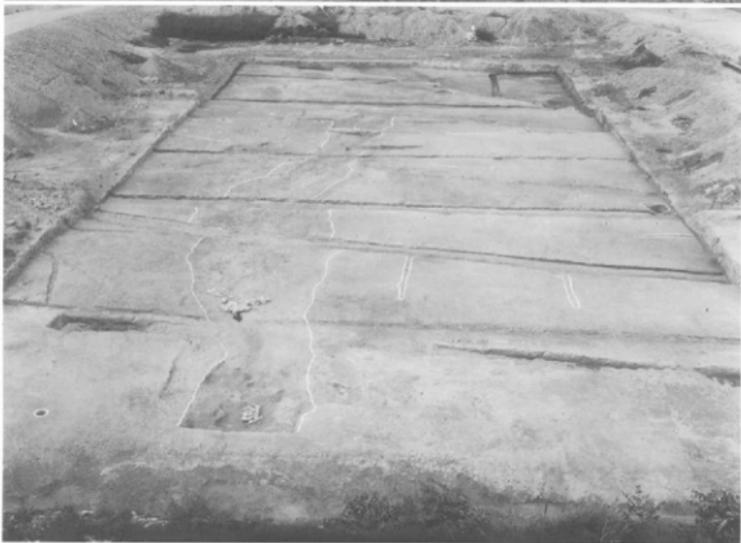
⑤SK-4埋土土層断面（南から）



⑥SK-3埋土土層断面（西から）



①全景（北から）



②全景（南から）



③SD-1埋土土層断面
（南から）



①SB-1 全景 (北から)



②SE-1 全景
(南東から)



③SB-2 全景 (東から)



①SX-1 全景 (西から)



②SX-1 全景 (北から)



③SD-1 内の環状遺構
(南から)



①全景1 (東から)



②全景2 (拡大・東から)



③SB-1・2全景
(西から)



① 1号墳石室全景
(北上から)



② 1号墳石室全景
(東上から)



③ 1号墳石室全景
(南から)



① 1号墳玄室内遺物
出土状況（東から）



② 1号墳玄室内遺物出土状況（西から）



③ 1号墳玄室内遺物出土状況（東から）



④ 1号墳玄室内遺物出土状況（東から）



⑤ 1号墳羨道内遺物出土状況（北から）



① 1号墳石室(北上から)



② 1号墳石室全景
(北から)



③ 1号墳墳丘および石室
(北から)



① 1号墳全景（北から）



② 1号墳墳丘西半
土層断面（北から）



③ 1号墳墳丘東半
土層断面（北から）



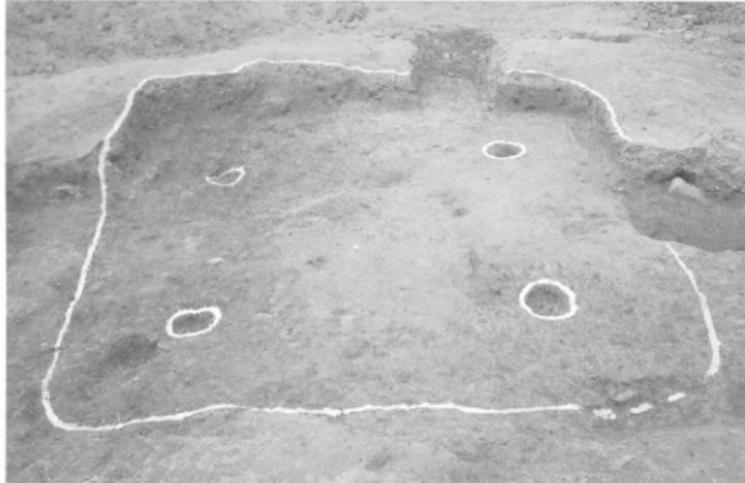
①1号墳玄室埋土
土層断面(北から)



②1号墳石室東壁
(西から)



③1号墳石室西壁
(東から)



①古墳下層の竪穴住居跡
(北から)



②1号墳(攪乱底の集積石)
(東から)



③1号墳墳丘東側
土層断面(北から)



① 1号墳増丘西側
土層断面（南から）



② 1号墳増丘南側
土層断面（東から）



③ 1号墳増丘北側
土層断面（東から）



①全景（南から）



②SE-1（北から）



③SE-1 埋土土層断面（北から）



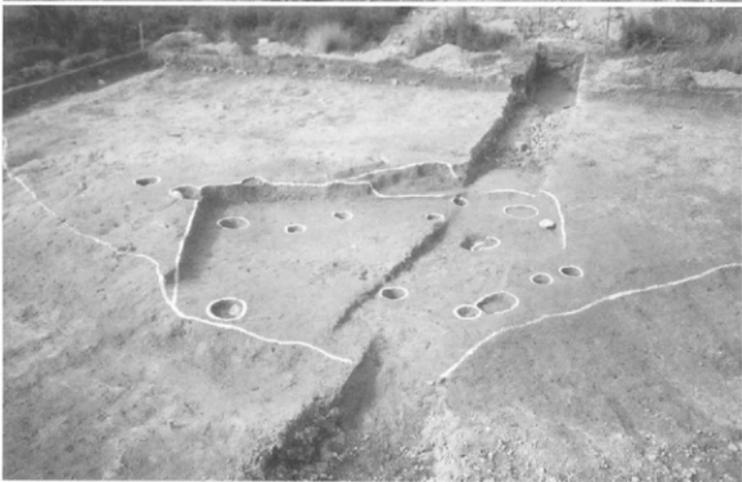
④SK-1 埋土土層断面（北から）



①SH-1 (東から)



②SH-1 (東から)



③SH-1 (東から)



①全景（東から）



②SB-1（北から）



③SD-1 埋土土層断面
（南西から）



①南東部全景（西から）



②北西部全景（南西から）



③南西部の遺構
（南西から）



①北西半全景(北東から)



②南東半全景(北東から)



③南半全景(東から)



①SH-1・2、SK-1
(北東から)



②SH-1 竈 (北東から)



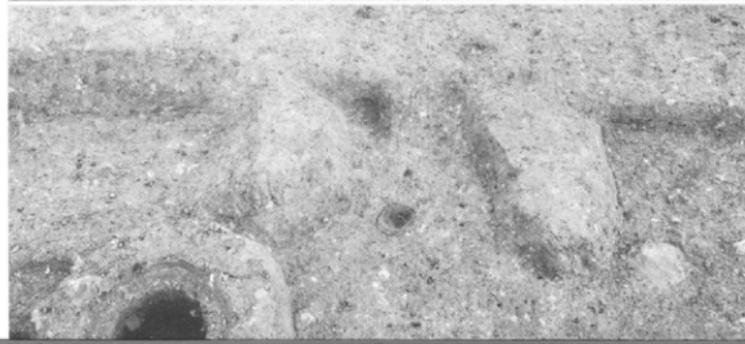
③SH-3 (南東から)



①SH-3 遺物出土状況
(南東から)



②SH-3 遺物出土細部
(南東から)



③SH-3 竈 (南東から)



①SH-4 遺物出土状況
(北東から)



②SH-4 遺物出土細部
(南東から)



③SH-4 (北東から)



①SH-5・6 (北東から)



②SH-8・16 (東から)



③SH-8 埋土土層断面
(南東から)



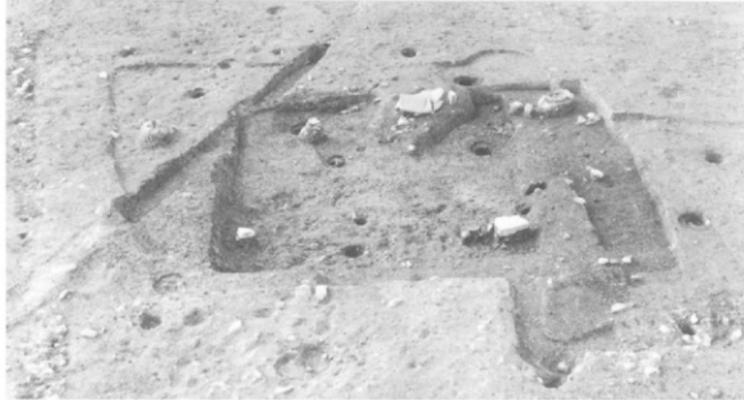
①SH-8 電検出状況
(南東から)



②SH-8 竈 (南東から)



③SH-10 (北西から)



①SH-11・12 (南東から)



②SH-11竈焚口補強石
(南東から)



③SH-11竈内遺物
出土状況 (南東から)



①SH-11竈（南東から）



②SH-11下層竈
（南東から）



③SH-13付近
（北東から）



①SH-14・15、SB-4・6
(北から)



②SH-14竈 (北から)



③SH-16・17 (北西から)



①SB-1、SA-1
(北から)



②SB-2 (北から)



③南西部遺構群
(北東から)



①SR-1 石組 (南東から)



②SR-1 東岸土器出土状況 (西から)



③SR-1 石組断面 (北西から)



④SD-1 土器出土状況
(東から)



①SK-3 上層礫出土状況
(北から)



②SK-3 断ち割り断面
(北から)



③SK-3 木製品出土状況
(北東から)



①SH-1 竈内下層土器出土状況（北東から）



②SH-6 南西主柱穴内土器出土状況（北から）



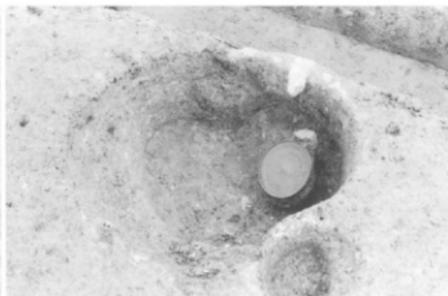
③SH-11 竈焚口補強石（南東から）



④SB-6 内p3 柱根（西から）



⑤P-1025 土器出土状況（南から）



⑥P-16 土器出土状況（北西から）



⑦調査状況（北から）



⑧積雪状況（北から）



①全景1 (南東から)



②全景2 (北西から)



③中央部 (北西から)



①SA-2・3 (北東から)



②SA-3 付近
(北西から)



③柱穴群南部(南東から)



①A-2 地区調査前全景（北西から）



②A-2 地区SB-2 内P-12断ち割り断面（南西から）



③A-2 地区SE-2（北西から）



④A-2 地区SD-1 土器出土状況（北から）



⑤畑田遺跡調査前全景（南西から）



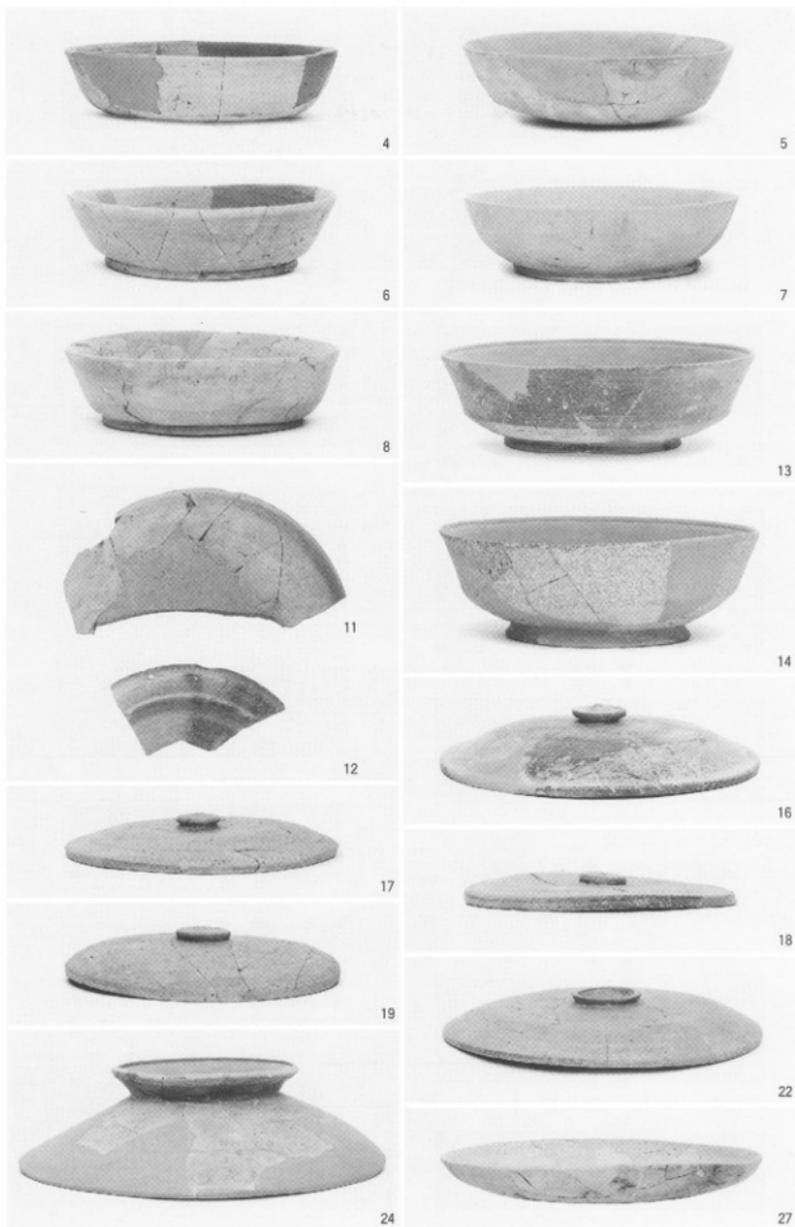
⑥畑田遺跡SA-3 内P-205断ち割り断面（南西から）



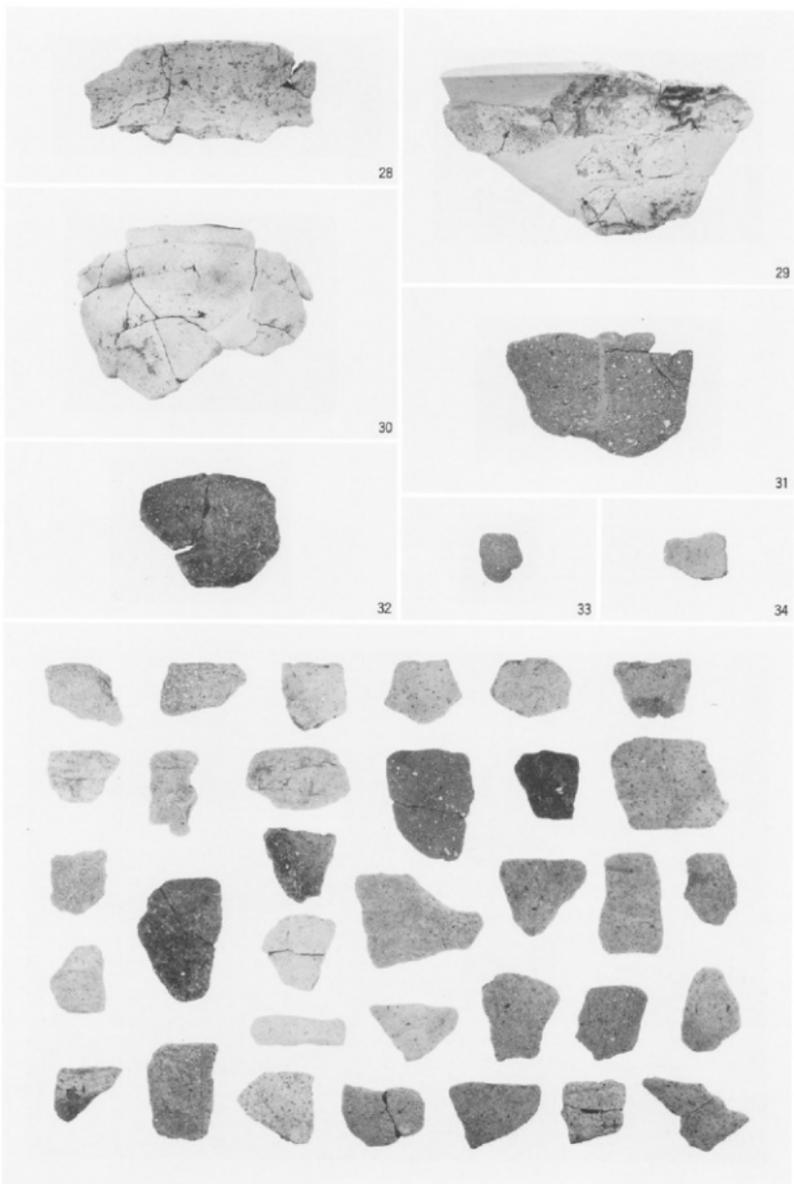
⑦畑田遺跡SA-3 内P-145断ち割り断面（北東から）



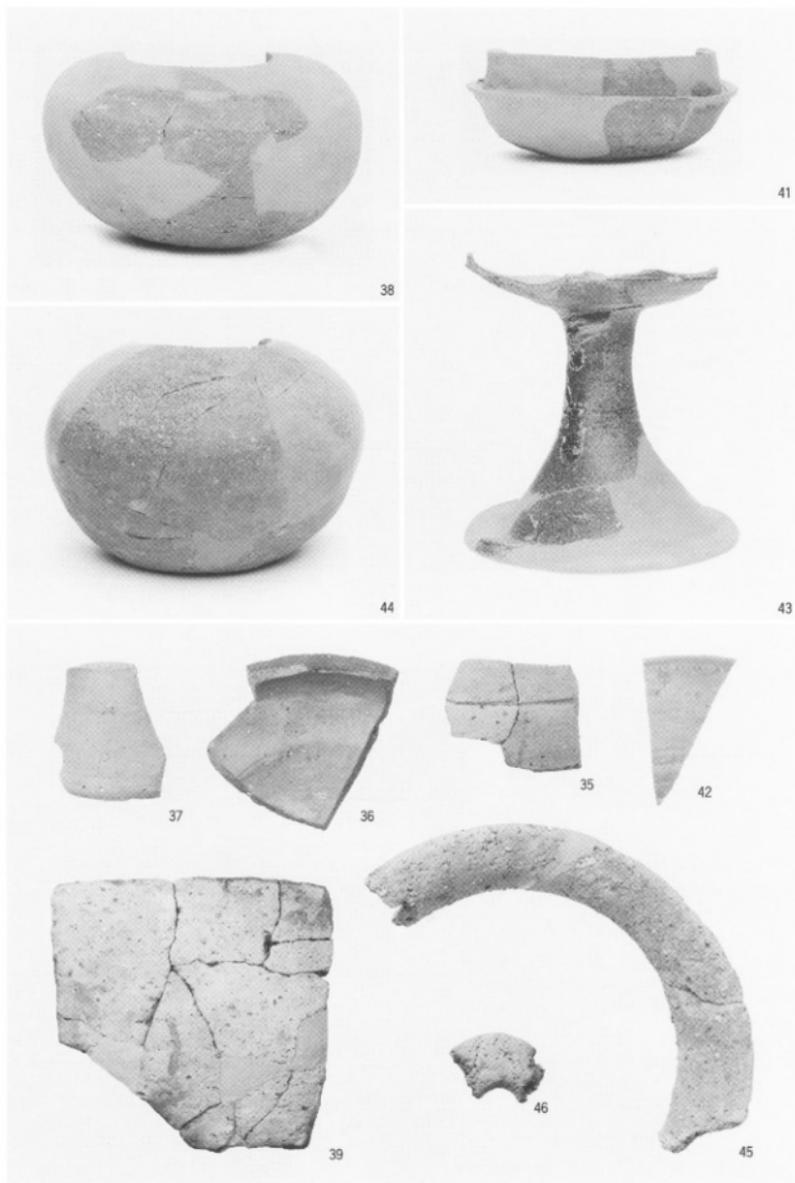
⑧畑田遺跡P-53土器出土状況（南東から）



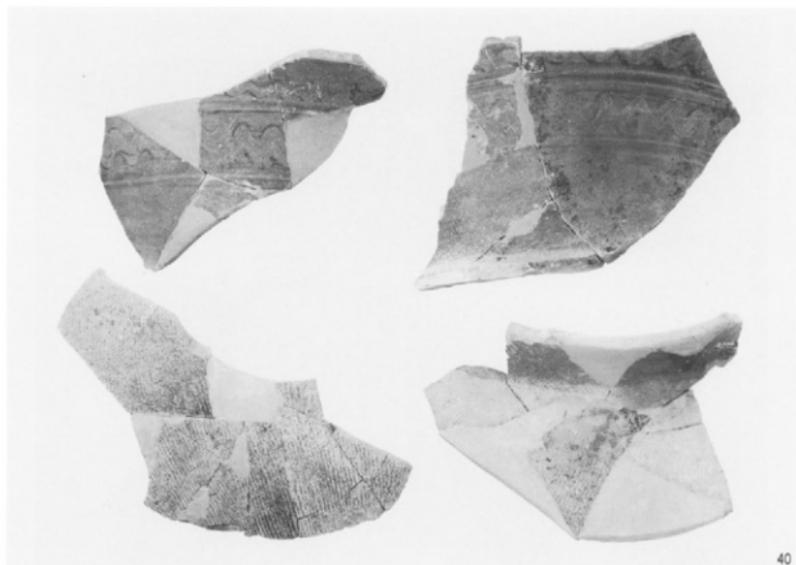
SK-1 出土土器 (1)



SK-1 出土土器 (2)

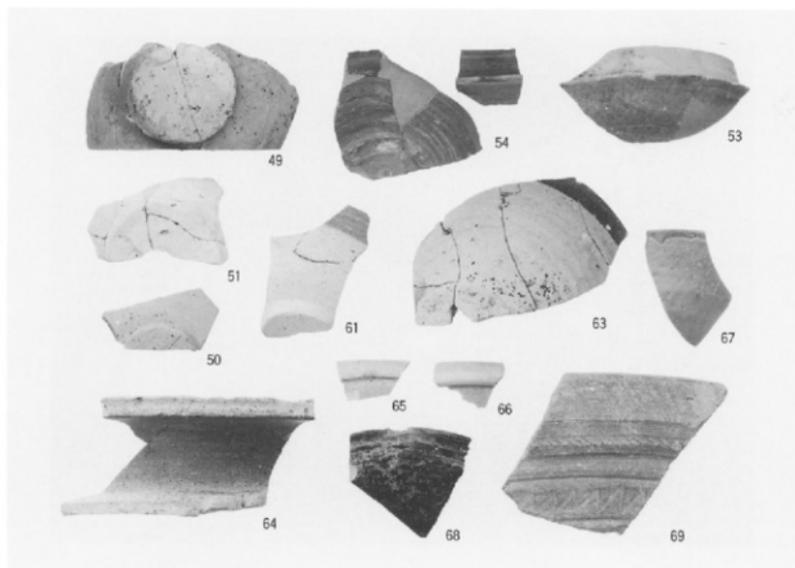


SX-1・SD-1出土土器



40

SD-1 出土甕



SB-2・包含層他出土土器



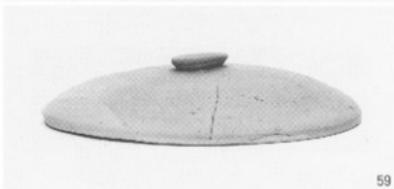
52



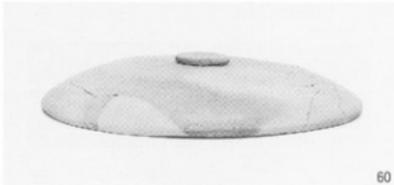
58



55



59



60



56



62



47



57



48



70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80

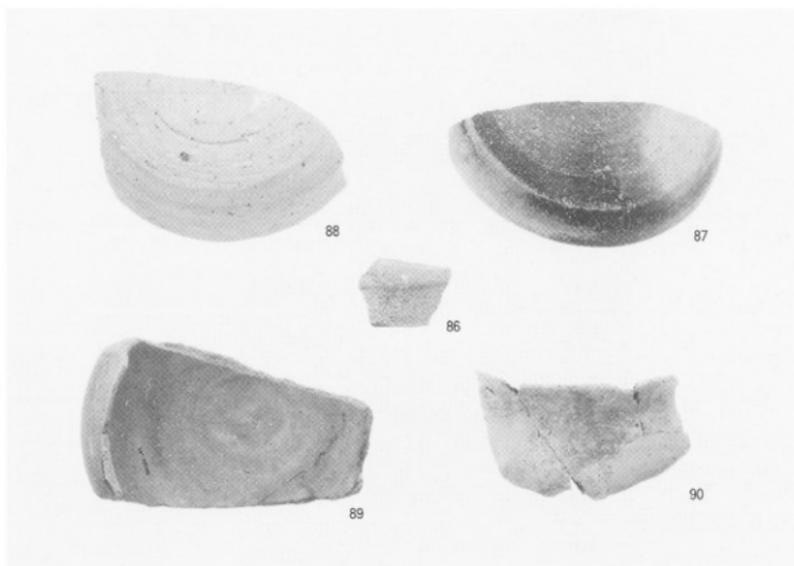


81

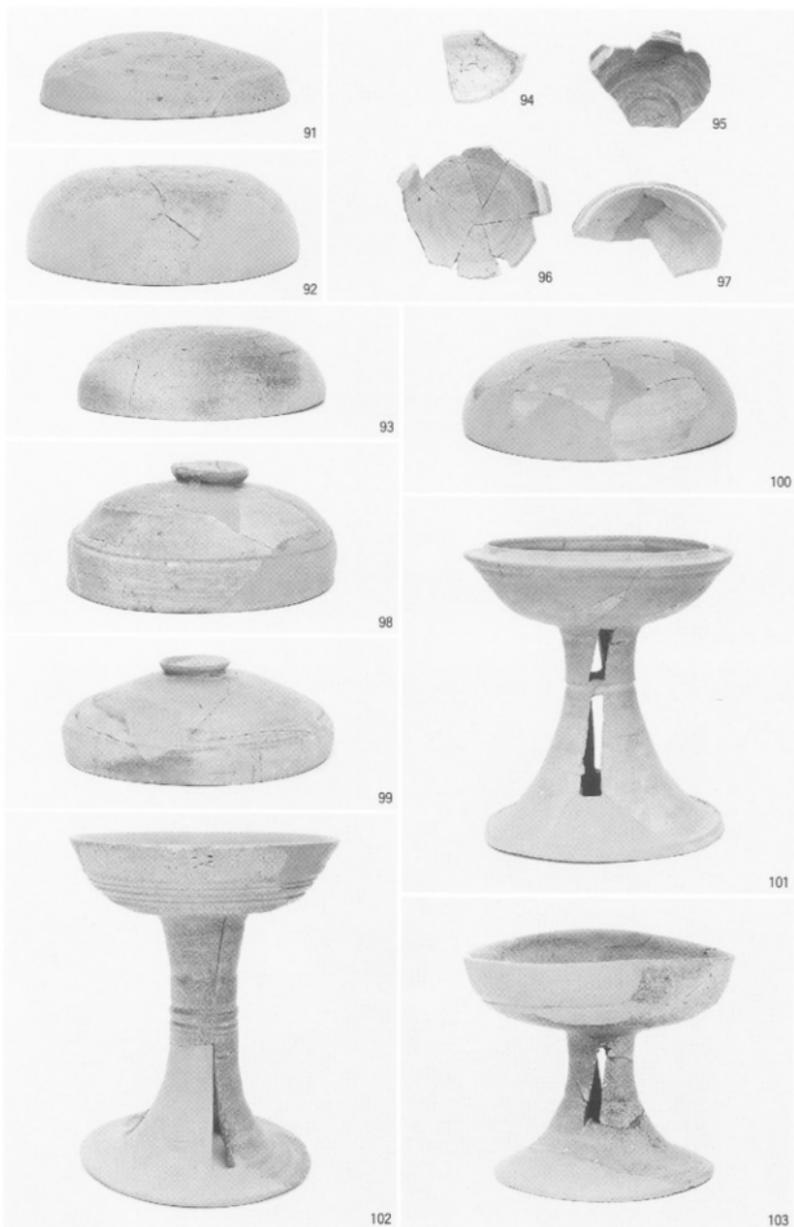
1号墳石室内出土土器



1号墳石室閉塞部分出土土器



SH-1・SK-5出土土器



1号墳丘陵周辺出土土器(1)

102

103



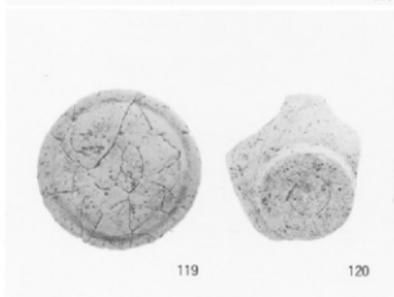
1号墳填丘周辺出土土器(2)



116



117



119

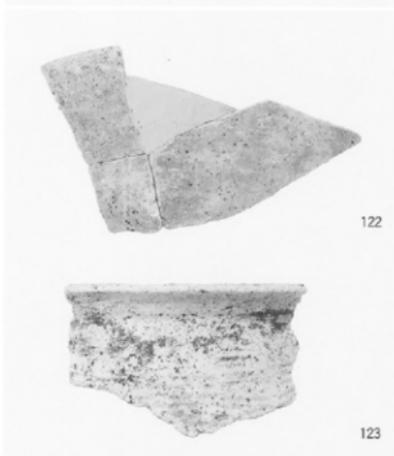
120



121

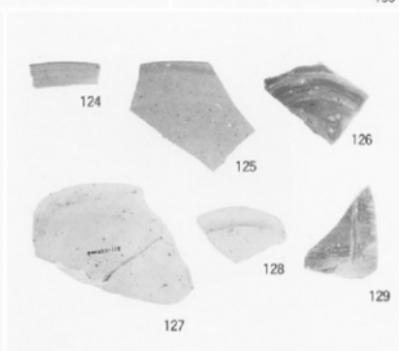


130



122

123



124

125

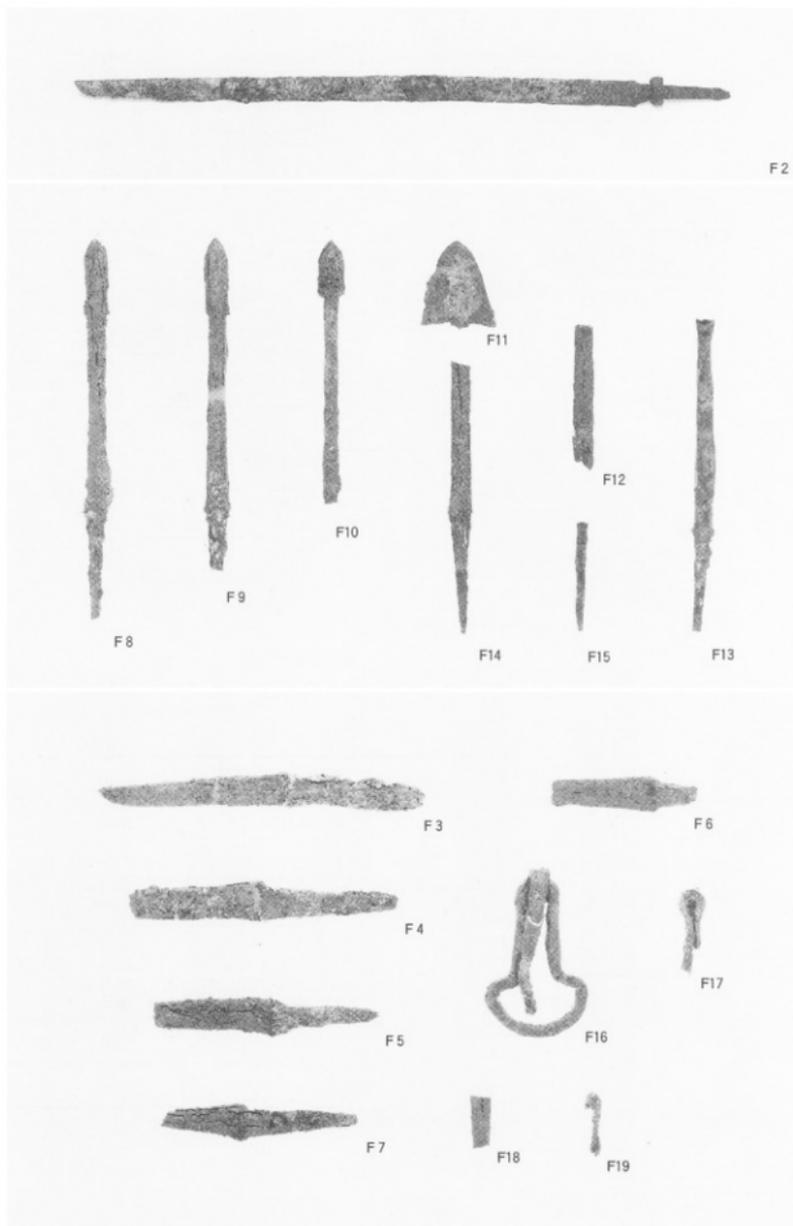
126

128

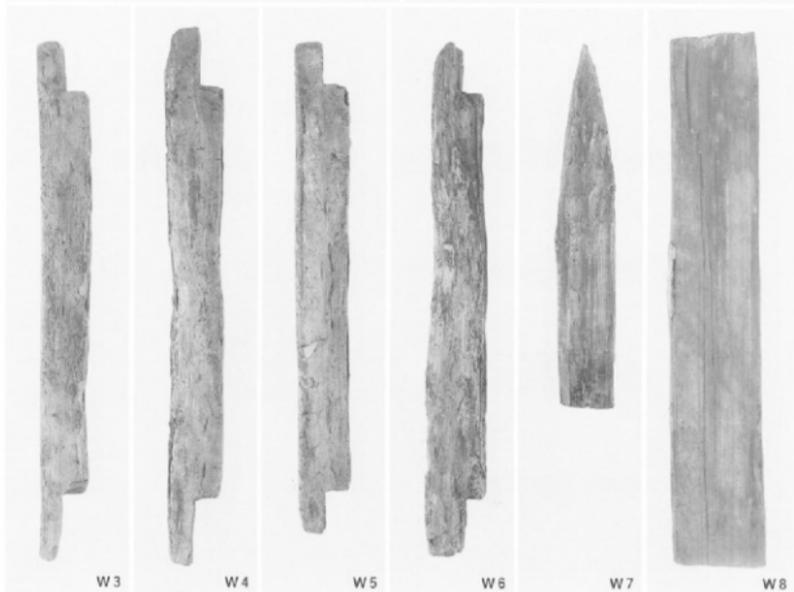
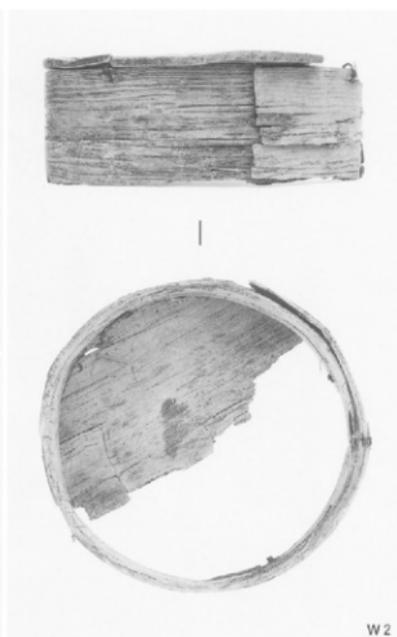
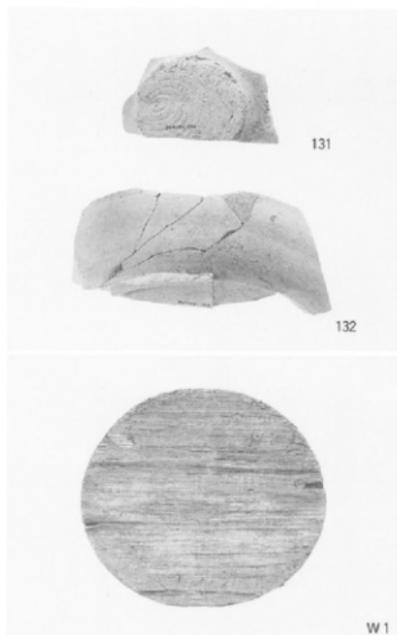
129

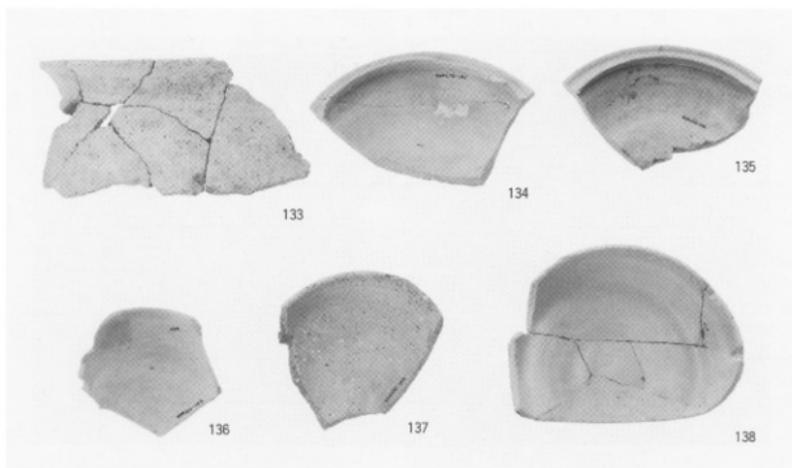
127

1号墳墳丘周辺出土土器(3)、柱穴・土坑出土土器

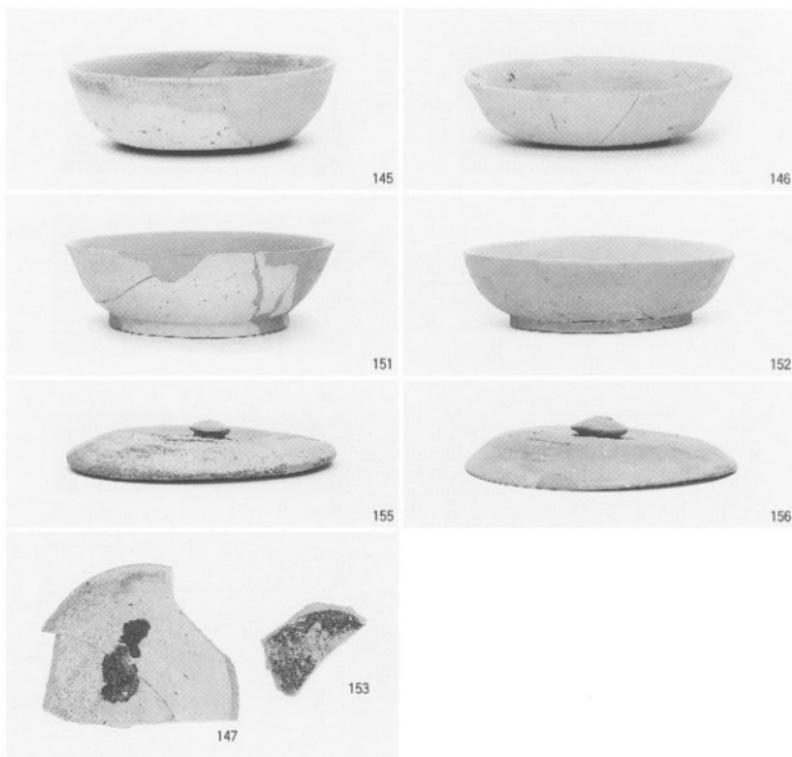


1号墳石室内出土鉄器





D地区SH-1・SD-1出土土器



SD-1出土土器(1)



158



159



161



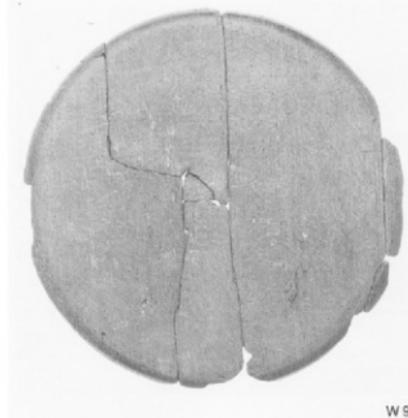
163



162



164



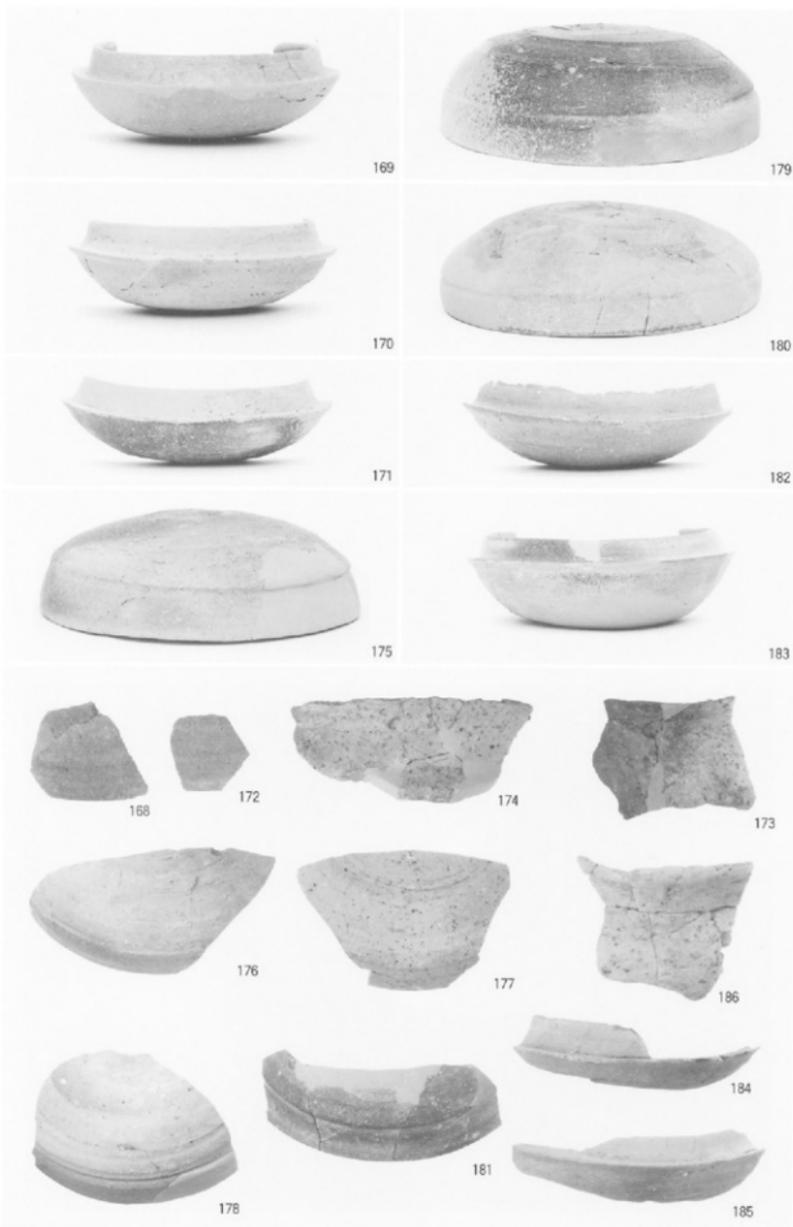
W9

W10



W11

SD-1 出土木製品





187



193



189



194



190



195



191



196

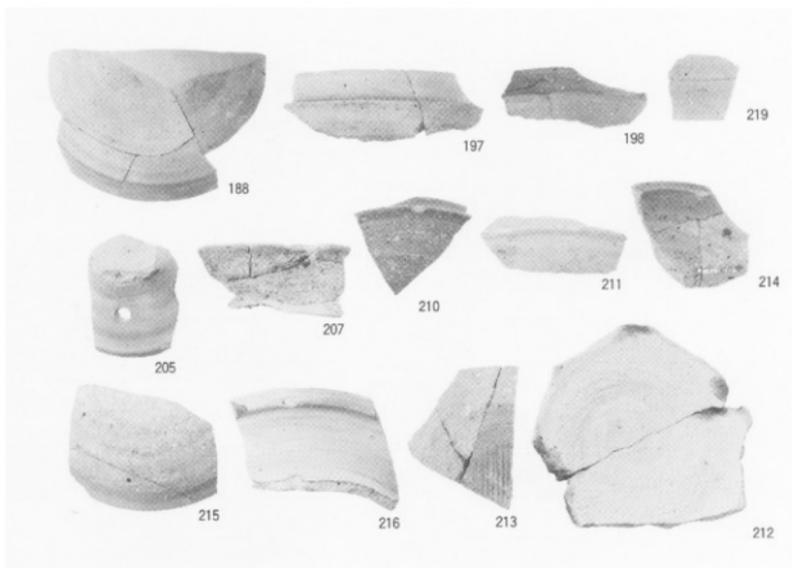


192

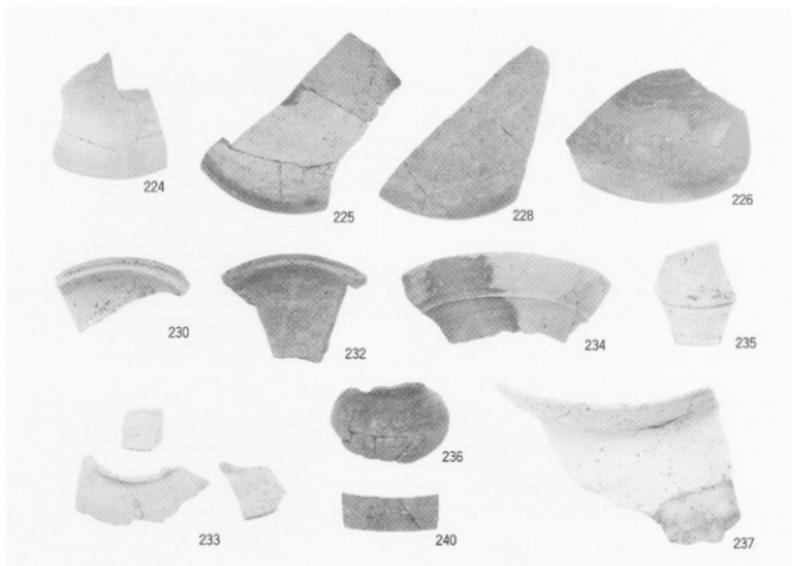


199



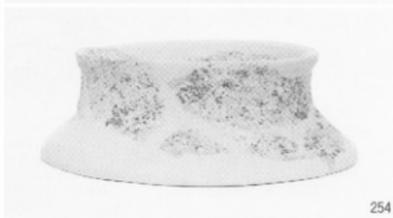


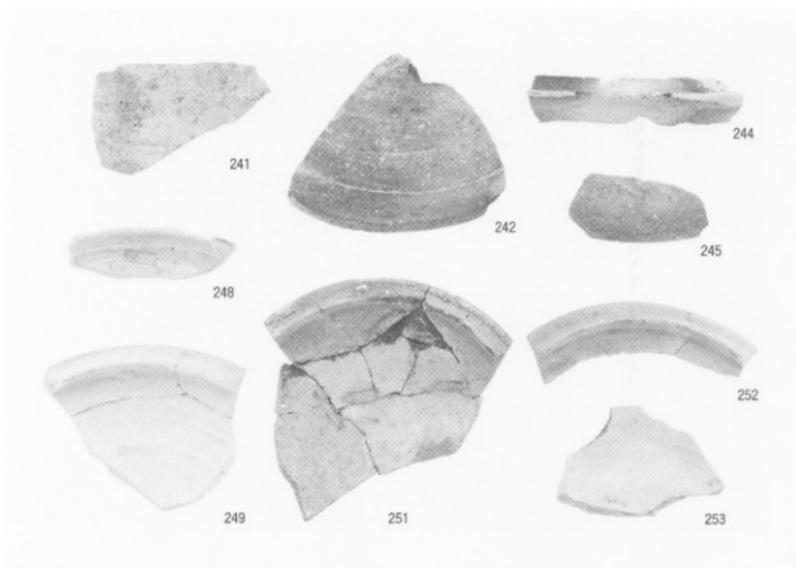
SH-4 ~ 6 出土土器



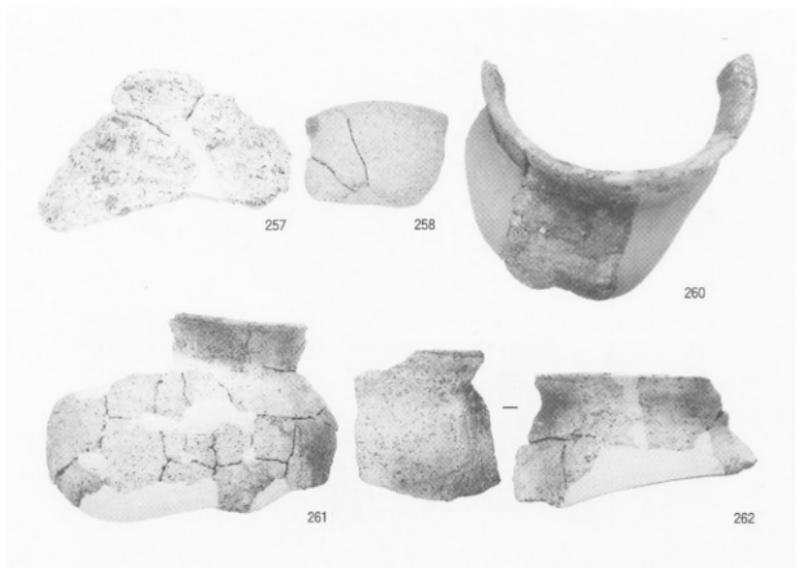
SH-8・9 出土土器



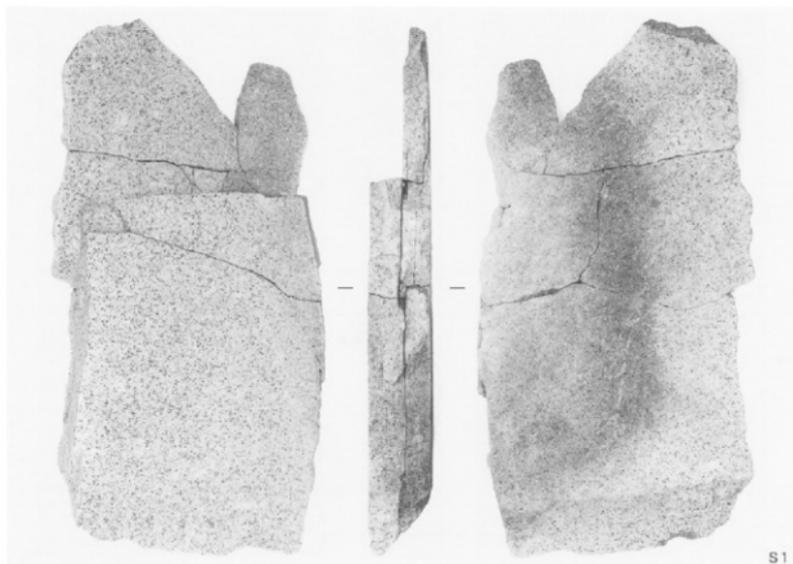




SH-10・11出土土器

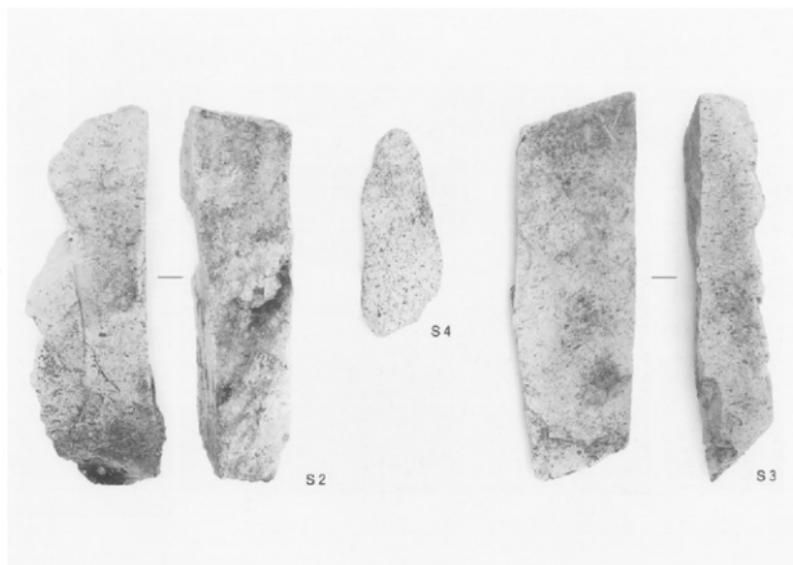


SH-11出土土器



S1

SH-11出土竈補強石

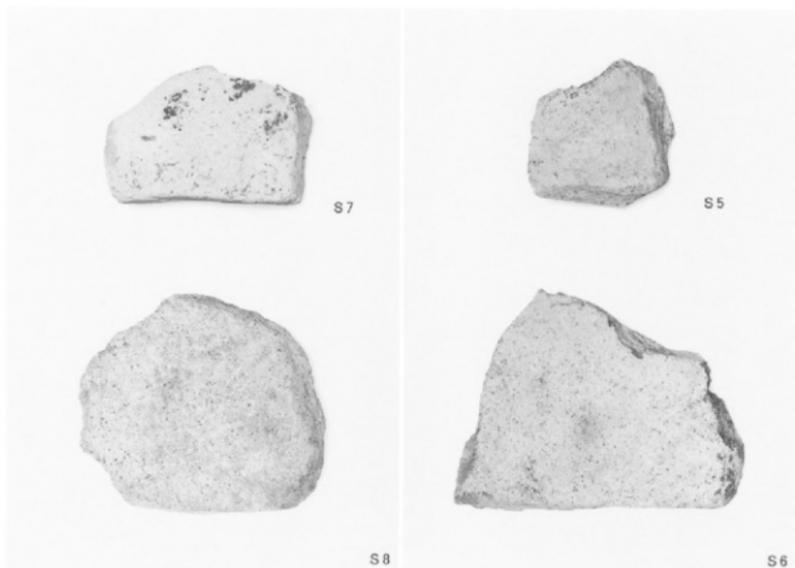


S4

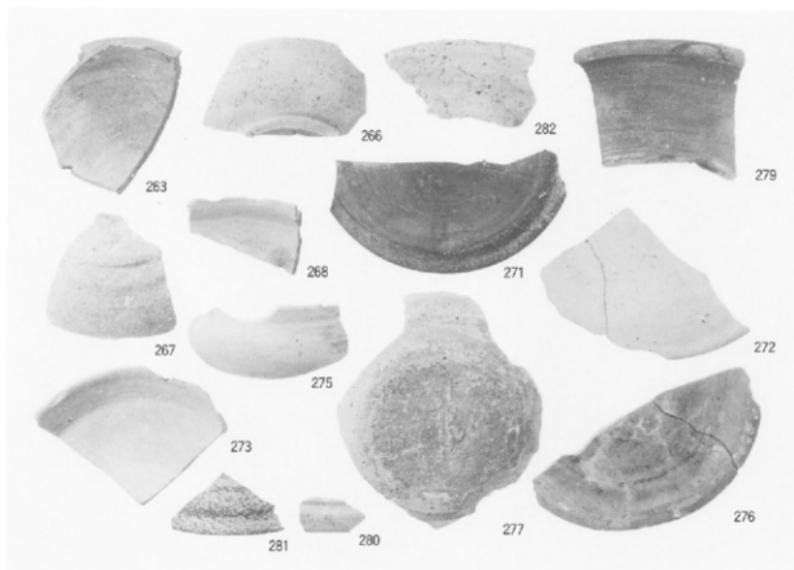
S2

S3

SH-11出土竈補強石・支脚石



SH-1・11・14出土石製品



SH-13・14・16、柱穴出土土器



269



286



270



287



274



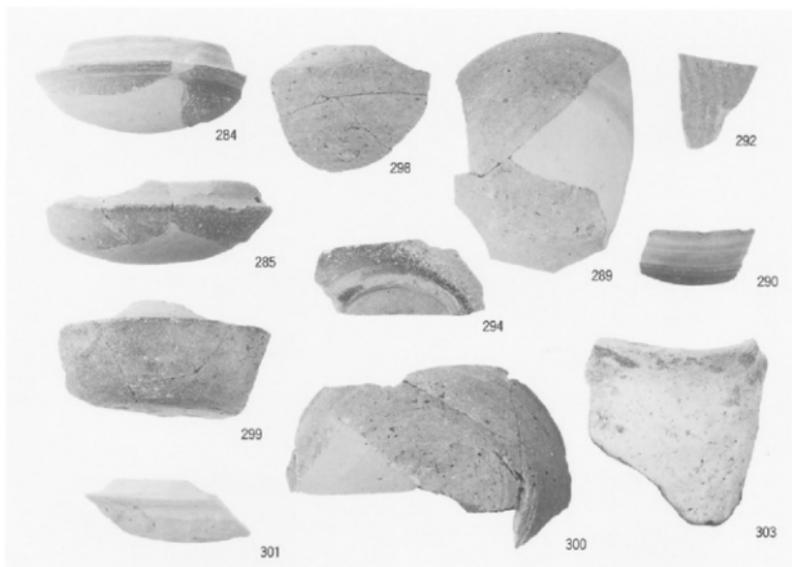
288

SH-16・SR-1 出土土器

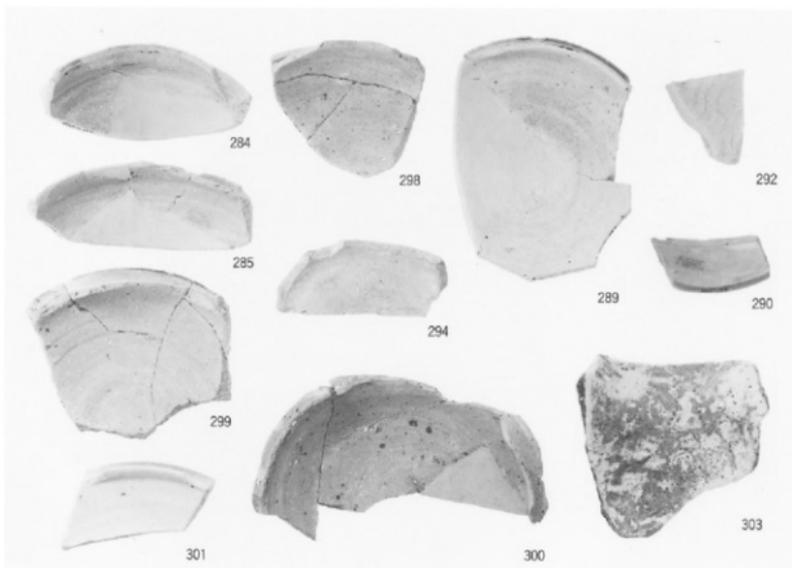


291

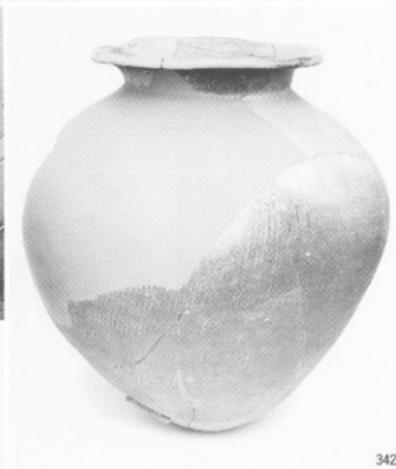
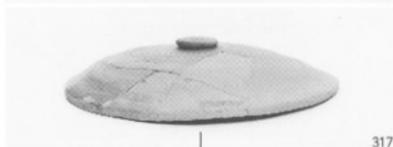
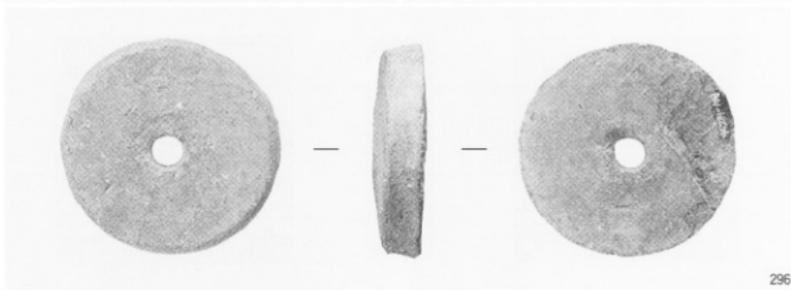
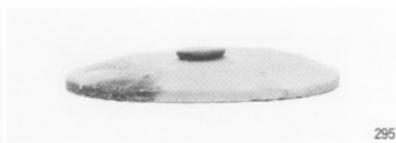
SR-1 出土壺

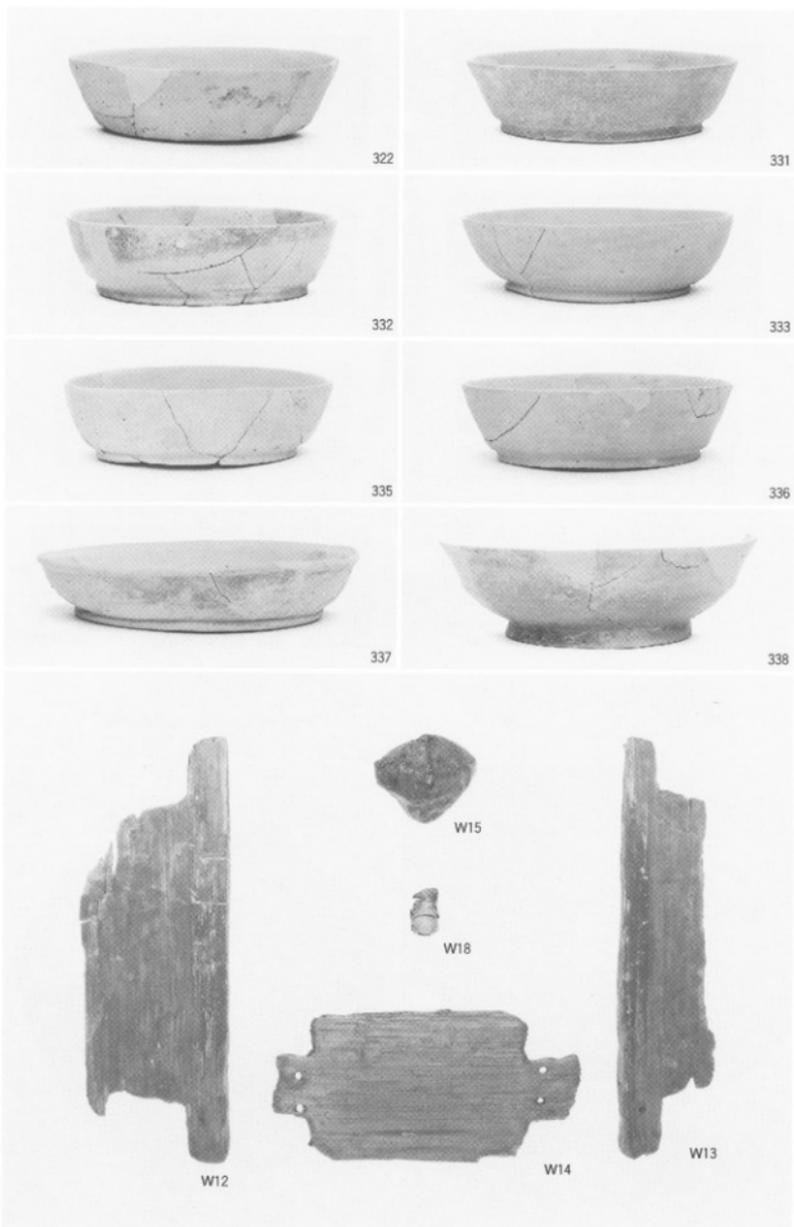


SR-1・SK-1 出土土器 (外面)

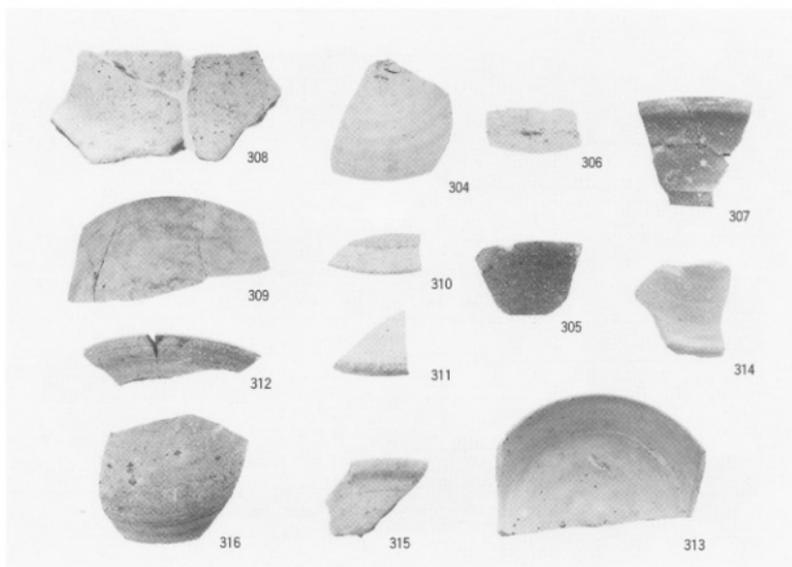


SR-1・SK-1 出土土器 (内面)

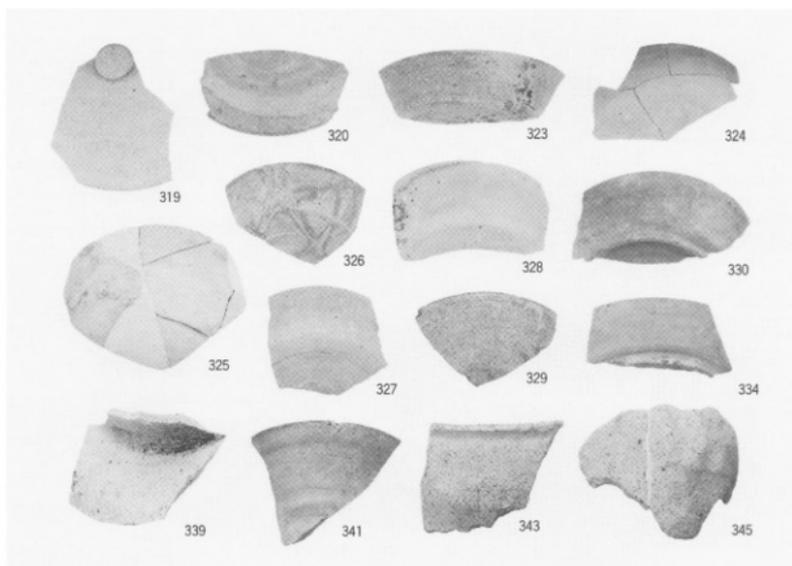




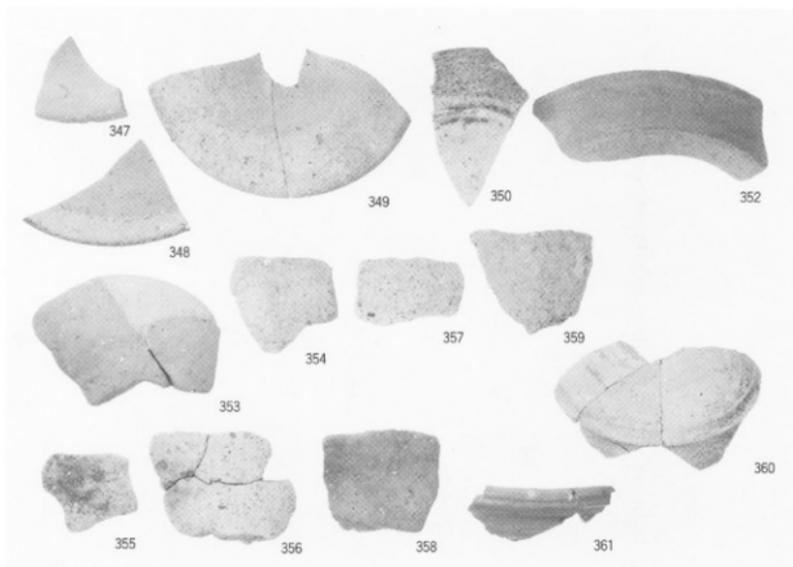
SK-3 出土遺物



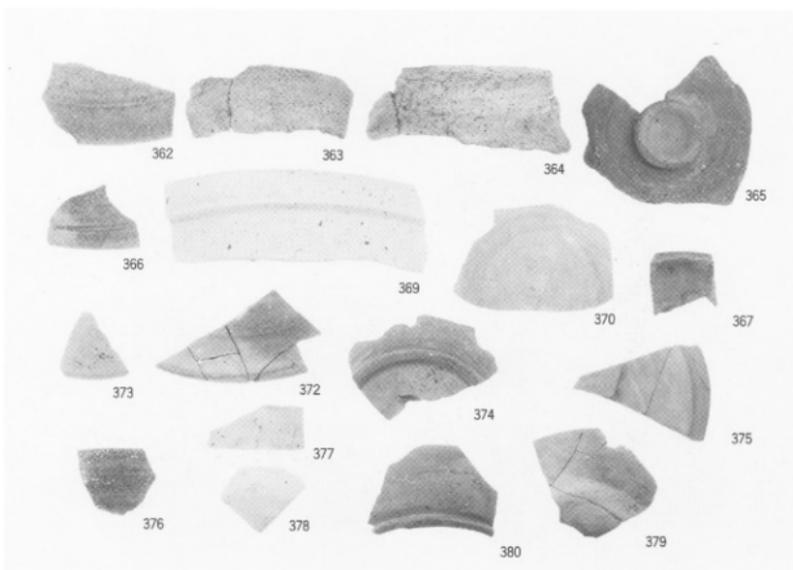
SK-4・6・7、SB-2・3・5、SA-2出土土器



SK-3出土土器



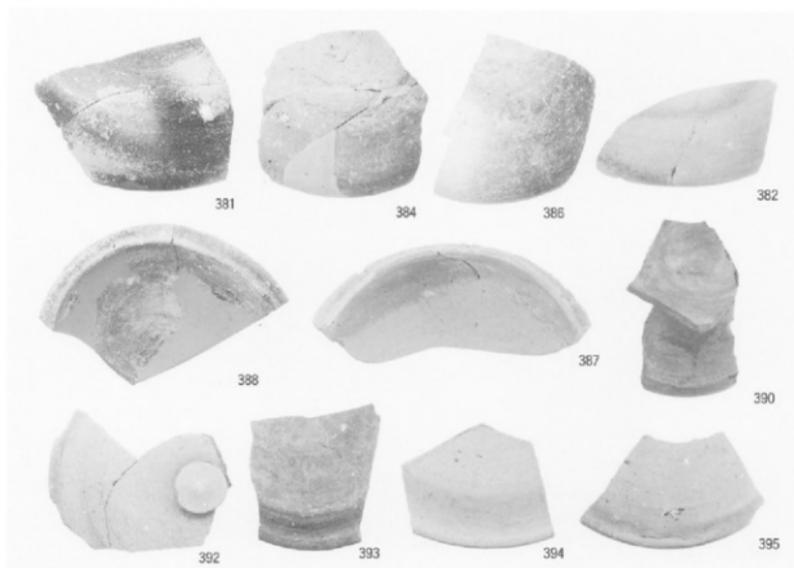
SD-1・2出土土器



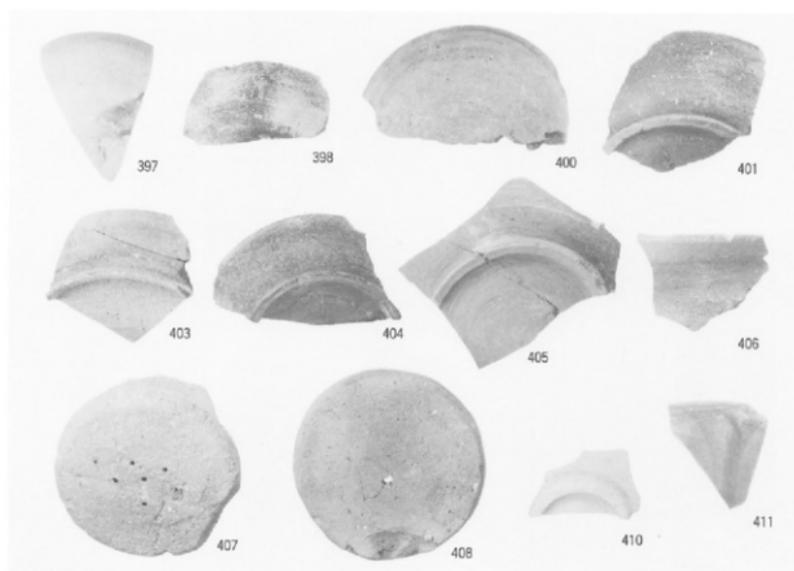
柱穴出土土器



SD-1・柱穴・包含層出土遺物



包含層出土土器 (1)



包含層出土土器 (2)



412



418



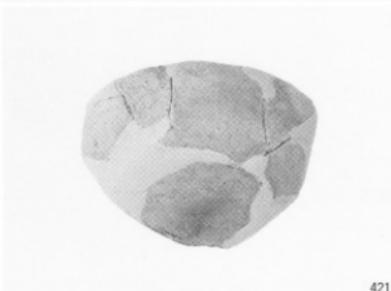
413



419



415



421



416



F20

E-2地区SK-1出土遺物



429



440



446

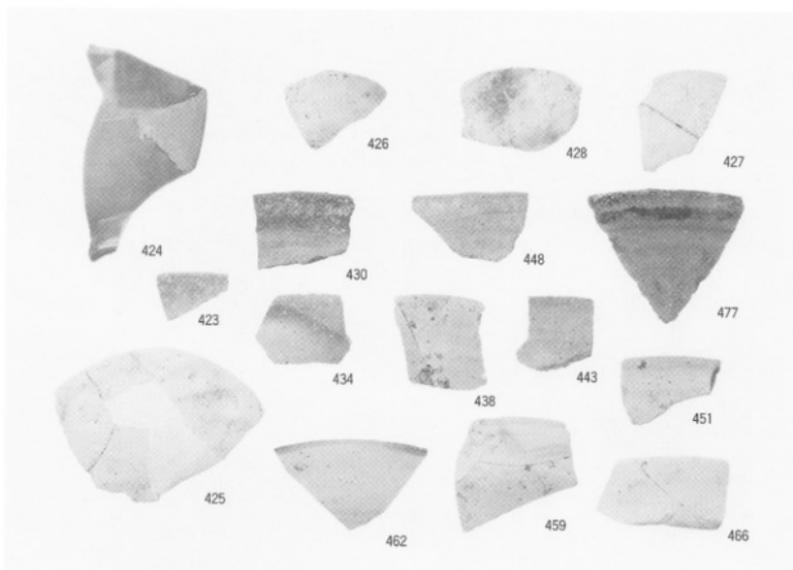


467

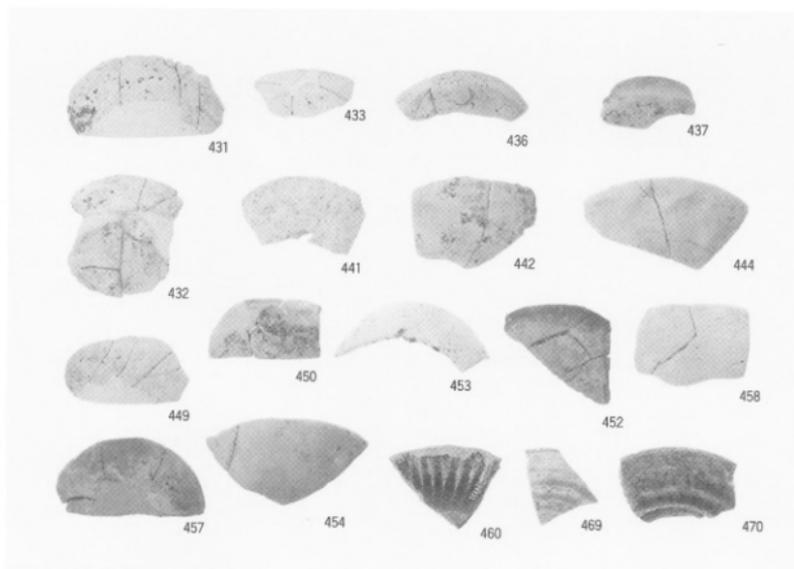


468

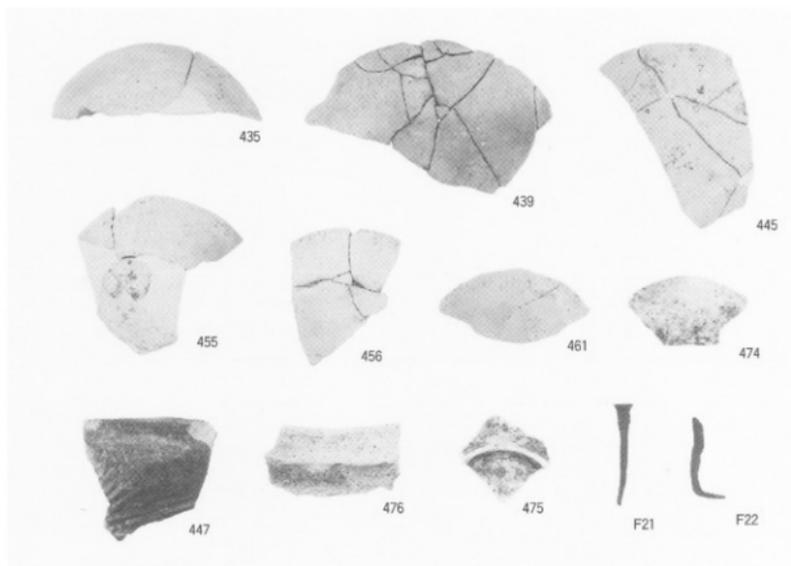
畑田遺跡溝・柱穴・包含層出土土器



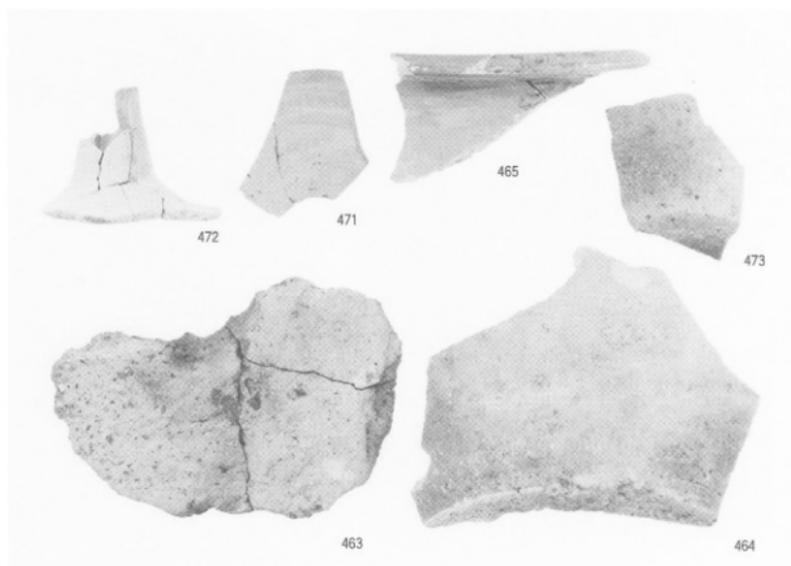
柵列・柱穴・包含層出土土器



柱穴・包含層出土土器



柱穴・包含層等出土遺物



包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みはら いせき ・ はたけだ いせき							
書名	三原遺跡・畑田遺跡							
副書名	丹波の森公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第269冊							
編著者名	岸本一宏・池田征弘・松岡千寿・高木芳史							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒山町2丁目1番5号 TEL. 078-531-7011							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL. 078-341-7711							
発行年月日	2004年(平成16年)3月19日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
三原遺跡 <small>みはらいせき</small>	兵庫県 水上市郡 柏原町 柏原 字三原	28641	920373・930229	35度	135度	本文に詳述	確認調査 1,797㎡	丹波の森 公園整備
			940061・940216					
			940275・940276					
			940312・940232					
			940276・940275					
			940219・940312					
畑田遺跡 <small>はたけだいせき</small>	水上市郡 柏原町 柏原 字畑田	950231		35度	135度	確認調査 確認調査	1995.09.18 104㎡	
			950266					
			950282					
				7分	4分	～09.20	全面調査	全面調査
				1秒	36秒	1995.09.28 ～11.15	516㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
三原	古墳 集落跡	古墳時代～ 奈良時代 中世	横穴式石室・箱式石棺・ 竪穴住居跡・流路・溝・ 掘立柱建物跡・土壇・ 井戸・柱穴		須恵器・土師器・ 製塩土器・陶磁 器・石器・金属 器・木器・玉類		埋没古墳	
畑田	集落跡	中世	横列・溝・柱穴		土師器・須恵器・ 陶磁器・鉄釘			

兵庫県文化財調査報告 第269冊

－丹波の森公苑整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書－
三原遺跡・畑田遺跡

2004年(平成16年)3月19日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印刷 福田印刷工業株式会社

〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号
